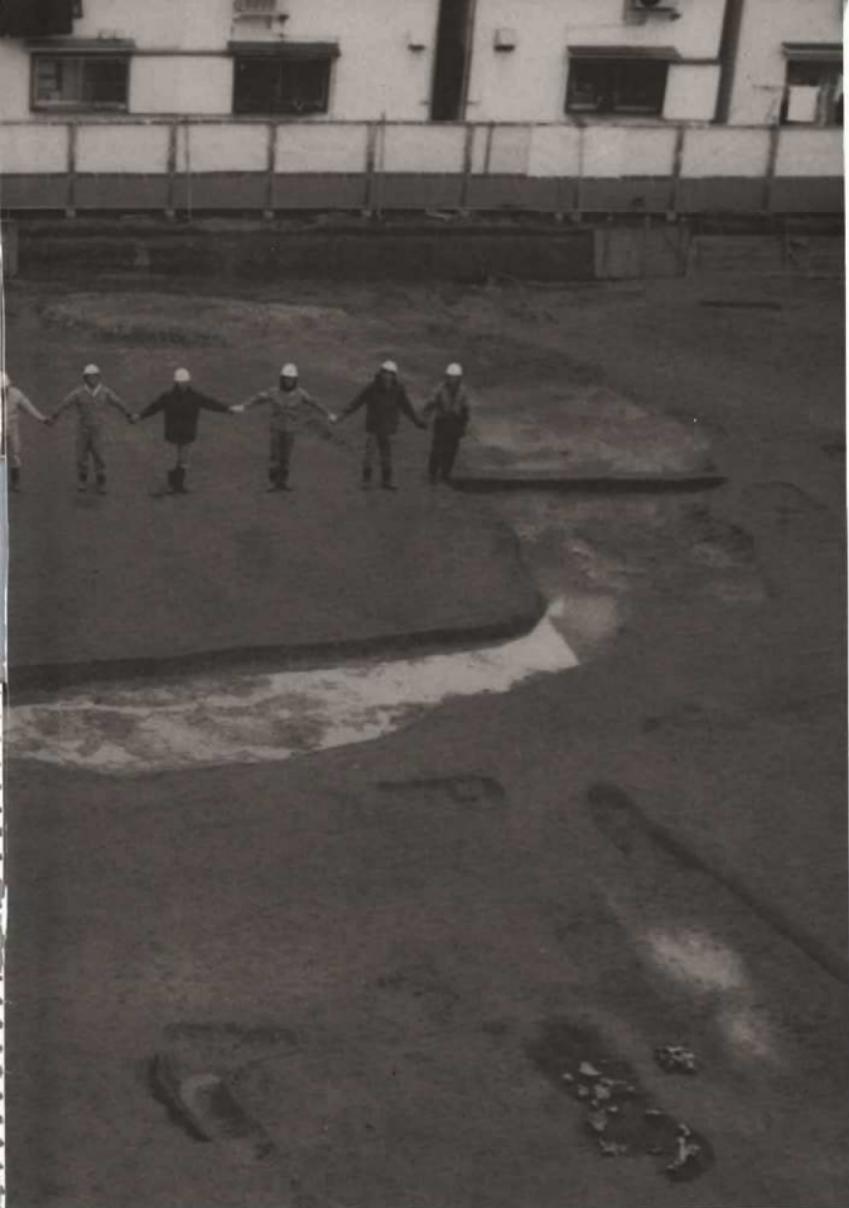


兵庫県教育委員会





兵庫県文化財調査報告第150冊

尼崎市

ひがし む こ

東武庫遺跡

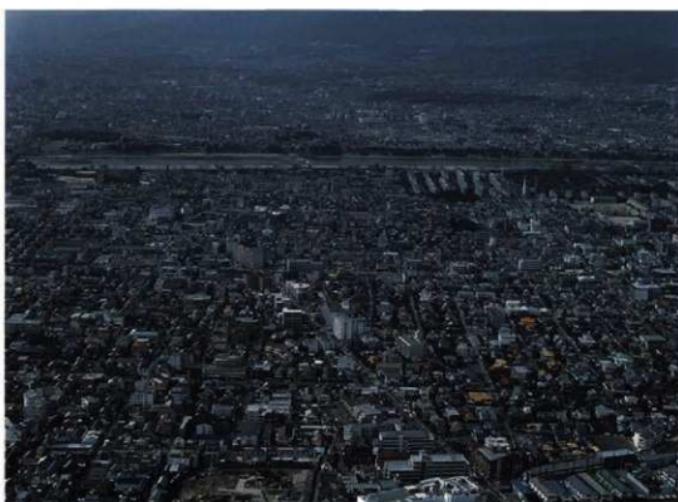
尼崎武庫元町団地建設に伴う

1995. 3

兵庫県教育委員会



東武庫道跡遠景（南から）



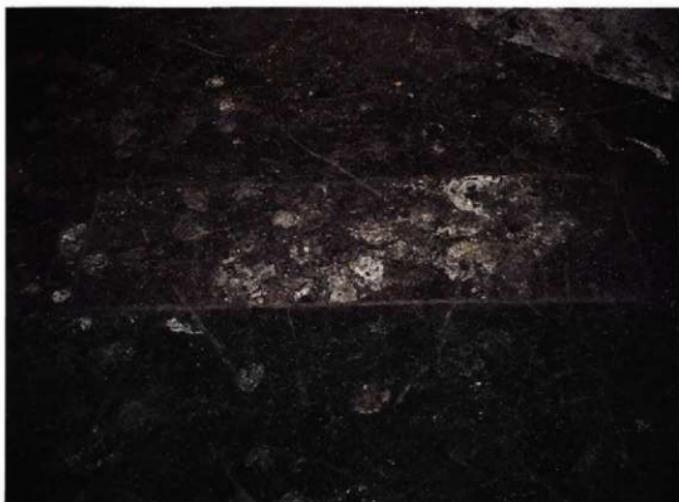
東武庫道跡遠景（東から）



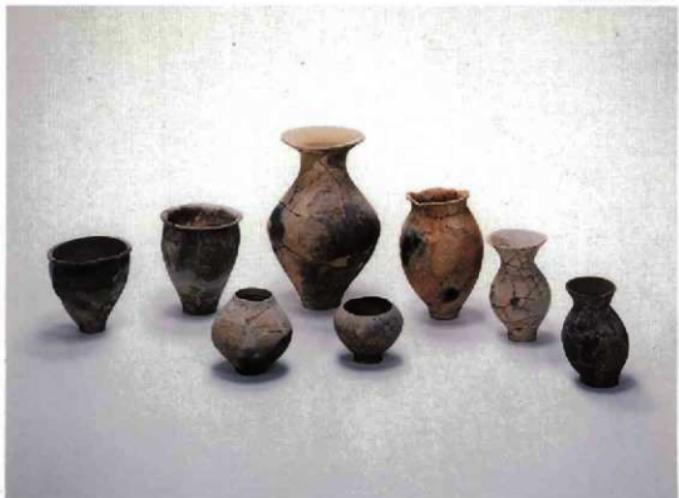
全景



2号墓擬朝鮮系無文土器出土狀況



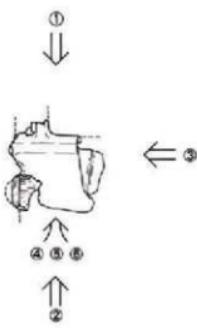
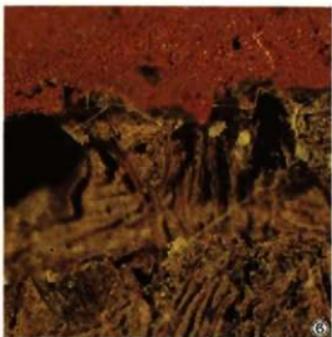
1号墓主体部檢出狀況



出土土器



堅拂



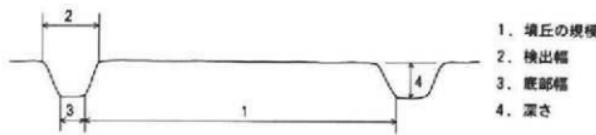
例　言

1. 本書は尼崎市武庫元町1丁目8-1に所在する東武庫遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、尼崎武庫元町団地建設事業に伴い、兵庫県住宅供給公社の委託により兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成3年度に尼崎市教育委員会（第1次確認調査）が、平成4年10月に兵庫県教育委員会（第2次確認調査）が確認調査を実施し、全面調査を平成4年1月～3月（I区）と同年5月～7月（II区）の2次にわたって実施した。
なお、第2次確認調査の遺跡調査番号は920291・I区全面調査の遺跡調査番号は920352・II区全面調査の遺跡調査番号は930022である。
4. 現地での調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所平田博幸が確認調査を、同山田清朝、藤田淳、所崎明雄、中村弘が全面調査を担当した。
5. 全面調査については御安西工業と請負契約を結び、実施した。
6. 調査は尼崎市1級基準点とともに国土地標を求める、これを基準とした。
7. 遺構の実測・写真撮影は調査員および調査補助員が行った。空中写真撮影については、I区全面調査は御野瀬エンジニアリングに、II区全面調査は㈱パスコに委託した。
8. 整理作業は、平成6年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
9. 遺物写真撮影については㈱吉田カメラ問合会に委託した。
10. 脂肪酸分析については㈱ズーザン研究所、土器の胎土分析については奈良教育大学三辻利一教授に、樹種同定については島地謙京都大学名誉教授に依頼し、それぞれ玉稿をいただいた。また土器の胎土分析については、三辻先生の了解のもと京都大学清水芳裕助教授にも、同じ資料について分析をしていただいた。この結果は本文中（第5章第1節）に引用している。また地形分析については、立命館大学高橋学助教授に現地にて御教示いただき、その内容を本文中に引用させていただいた。
11. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに統一している。
12. 本書の編集は山田が行い、山田・藤田・所崎・中村が執筆した。
13. 本書に用いた方位は、座標北を示し、磁北はこれより $0^{\circ} 39' 48''$ 西へ振っている。また標高は東京湾平均海水準を基準とした。
14. 本報告にかかる遺物は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
15. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、下記の方々から御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。（順不同・敬称略）

東 蘭（徳島大学）、青木勘時（天理市教育委員会）、石野博信（徳島文理大学）、大庭重信（大阪大学）、岡田努（尼崎市教育委員会）、小山田宏一（大阪府立弥生文化博物館）、片岡宏二（小郡市教育委員会）、川上洋一（奈良県立橿原考古学研究所）、喜谷美宣（神戸市立博物館）、草場将一（茨城県立教育委員会）、久保恵里子（岡山県古代吉備文化財センター）、工堀普通（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館）、田中清美（大阪市文化財協会）、酒井龍一（奈良大学）、高橋学（立命館大学）、高橋謙（ノートルダム清心女子大学）、武末純一（福岡大学）、中島達也（小郡市教育委員会）、中園聰（九州大学）、西谷正（九州大学）、二宮忠司（福岡市教育委員会）、永島暉臣慎（大阪市文化財協会）、瀬宜田桂男（大阪府立弥生文化博物館）、横爪康至（尼崎市田能資料館）、濱野俊一（茨木市教育委員会）、速水信也（小郡市教育委員会）、平井泰男（岡山県古代吉備文化財センター）、平松良雄（奈良県立橿原考古学研究所）、福井英治（尼崎市教育委員会）、福岡澄男（大阪文化財センター）、福永伸哉（大阪大学）、益田日吉（尼崎市教育委員会）、正岡龍夫（岡山県古代吉備文化財センター）、丸山 雄（神戸市教育委員会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、山岸良二（東邦大学附属東邦中高等学校）、山田元基（大牟田市教育委員会）、柳田康雄（福岡県教育庁）、吉井秀夫（立命館大学）、吉田 広（京都大学）、安 在（東国大学校）、金 正完（国立扶桑博物館）、洪 錦（釜山直轄市立博物館）、申 敬澈（慶星大学校）、全 玉年（釜山大学校博物館）、趙 現鐘（国立光州博物館）

凡 例

1. 周溝墓の規模についての呼称は、以下のとおりである。



2. 墓丘の主軸方向については、主体部を検出したものについてはその方向を、未検出のものについては周溝が長い方向とした。
3. 方位は、報告文の記載上簡略化を図るため、主軸方向が南北方向に近いものは東西南北で表し、大きく異なる場合に限り、8分割方位で表している。
4. 遺物は報告書記載順に通しの番号をついている。ただし、石器にはSを、木製品にはWをそれぞれ番号の先頭に付け、土器と区別している。

目 次

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地理的位置	（山 田）	1
第2節 遺跡の歴史的位置	（所 島）	7

第2章 調査に至る経緯

第1節 はじめに	（山 田）	11
第2節 確認調査	（山 田）	12
第3節 全面調査	（山 田）	12
第4節 整理作業	（山 田）	15

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

1. 基本層序と遺構の検出	（中 村）	17
2. 概略	（山 田）	23

第2節 周溝墓

1. 1号墓	（山 田・中 村）	26
2. 2号墓	（山 田・中 村）	31
3. 3号墓	（山 田・中 村）	38
4. 4号墓	（山 田・中 村）	41
5. 5号墓	（山 田・中 村）	49
6. 6号墓	（山 田・中 村）	52
7. 7号墓	（山 田・中 村）	56
8. 8号墓	（山 田・中 村）	60
9. 9号墓	（山 田・中 村）	61
10. 10号墓	（山 田・中 村）	64
11. 11号墓	（山 田）	68
12. 12号墓	（山 田）	71
13. 13号墓	（山 田）	73
14. 14号墓	（山 田）	77
15. 15号墓	（山 田）	79

16. 16号墓	83
17. 17号墓	86
18. 18号墓	88
19. 19号墓	89
20. 20号墓	91
21. 21号墓	93
22. 22号墓	94
第3節 溝	96
第4節 土壌	100

第4章 自然科学的分析の結果

第1節 東武庫遺跡出土弥生土器の蛍光X線分析	105
第2節 東武庫遺跡出土木棺の樹種	109
第3節 東武庫遺跡から出土した 木棺墓に残存する脂肪酸の分析	113

第5章 遺物のまとめ

第1節 弥生土器	141
第2節 振朝鮮系無文土器	153
第3節 石器	167
第4節 壁掛	173

第6章 遺構のまとめ

第1節 周溝墓	175
第2節 埋葬施設	193
第7章 総括	205

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置（Ⅰ）	第 30 図 2号墓周溝断面·····	31
第 2 図 遺跡の位置（Ⅱ）·····	第 31 図 2号墓·····	32
第 3 図 西浜平野の位置·····	第 32 図 2号墓主体部·····	33
第 4 図 西浜平野の微地形·····	第 33 図 竪櫛の名称·····	34
第 5 図 遺跡周辺の埋没微地形·····	第 34 図 竪櫛·····	34
第 6 図 遺跡周辺微地形断面略図·····	第 35 図 周溝内土器出土状況·····	35
第 7 図 遺跡周辺主要遺跡·····	第 36 図 土壙 1 土器出土状況·····	36
第 8 図 調査位置（Ⅰ）·····	第 37 図 2号墓出土土器·····	37
第 9 図 調査位置（Ⅱ）·····	第 38 図 3号墓の位置·····	38
第 10 図 調査風景·····	第 39 図 3号墓·····	39
第 11 図 現地説明会風景·····	第 40 図 3号墓周溝断面·····	40
第 12 図 土器の検討会·····	第 41 図 3号墓出土土器·····	40
第 13 図 調査区バネルダイヤグラム·····	第 42 図 4号墓の位置·····	41
第 14 図 土層概念図·····	第 43 図 4号墓·····	42
第 15 図 土層断面図·····	第 44 図 1号主体部·····	43
第 16 図 包含層出土土器（1）·····	第 45 図 2号主体部棺材·····	44
第 17 図 包含層出土土器（2）·····	第 46 図 2号主体部·····	45
第 18 図 包含層出土土器（3）·····	第 47 図 3号主体部·····	46
第 19 図 平面図·····	第 48 図 東周溝土器出土状況·····	47
第 20 図 I区周溝墓群·····	第 49 図 4号墓出土土器·····	48
第 21 図 II区周溝墓群·····	第 50 図 5号墓の位置·····	49
第 22 図 1号墓の位置·····	第 51 図 5号墓·····	50
第 23 図 1号墓周溝断面·····	第 52 図 5号墓周溝断面·····	50
第 24 図 1号墓·····	第 53 図 土器棺墓·····	51
第 25 図 1号墓主体部·····	第 54 図 土器棺·····	52
第 26 図 1号墓 棺材·····	第 55 図 6号墓の位置·····	53
第 27 図 周溝内土器出土状況·····	第 56 図 6号墓周溝断面·····	53
第 28 図 1号墓出土土器·····	第 57 図 6号墓·····	54
第 29 図 2号墓の位置·····	第 58 図 6号墓主体部·····	55

第59図	6号墓出土土器	56	第92図	14号墓	78
第60図	7号墓の位置	57	第93図	15号墓の位置	79
第61図	7号墓周溝断面	57	第94図	15号墓	80
第62図	7号墓	57	第95図	15号墓周溝断面	81
第63図	7号墓主体部	58	第96図	15号墓出土土器	82
第64図	7号墓棺材	59	第97図	噴砂	82
第65図	8号墓の位置	60	第98図	16号墓の位置	83
第66図	8号墓周溝断面	60	第99図	16号墓周溝断面	83
第67図	8号墓	61	第100図	16号墓	84
第68図	9号墓の位置	62	第101図	16号墓出土土器	85
第69図	10号墓との切り合い	62	第102図	17号墓の位置	86
第70図	9号墓周溝断面	62	第103図	17号墓周溝断面	86
第71図	9号墓	63	第104図	17号墓	87
第72図	9号墓出土土器	64	第105図	17号墓出土土器	88
第73図	10号墓の位置	64	第106図	18号墓の位置	88
第74図	10号墓	65	第107図	18号墓周溝断面	88
第75図	10号墓周溝断面	66	第108図	18号墓	89
第76図	10号墓出土土器	67	第109図	19号墓の位置	90
第77図	11号墓の位置	68	第110図	19号墓	90
第78図	11号墓周溝断面	68	第111図	19号墓周溝断面	91
第79図	11号墓	69	第112図	19号墓出土土器	91
第80図	11号墓主体部	70	第113図	20号墓の位置	91
第81図	11号墓出土土器	71	第114図	20号墓	92
第82図	12号墓の位置	71	第115図	20号墓周溝断面	92
第83図	12号墓	72	第116図	21号墓の位置	93
第84図	12号墓周溝断面	72	第117図	21号墓	93
第85図	13号墓の位置	73	第118図	21号墓周溝断面	94
第86図	13号墓	74	第119図	21号墓出土土器	94
第87図	13号墓 土壙1	75	第120図	22号墓の位置	94
第88図	13号墓周溝断面	75	第121図	22号墓	95
第89図	土壙2・土壙3断面	75	第122図	22号墓周溝断面	95
第90図	13号墓出土土器	76	第123図	22号墓出土土器	96
第91図	14号墓の位置	77	第124図	S D01出土土器	97

第125図	S D02出土土器（1）	98	第146図	試料中に残存する 脂肪のステロール組成(1)…133
第126図	S D02出土土器（2）	99	第147図	試料中に残存する 脂肪のステロール組成(2)…134
第127図	S D03出土土器	100	第148図	試料中に残存する 脂肪のステロール組成(3)…135
第128図	S K02出土土器	101	第149図	試料中に残存する 脂肪のステロール組成(4)…136
第129図	S K03	102	第150図	試料中に残存する 脂肪のステロール組成(5)…137
第130図	S K03出土土器	103		
第131図	S K04出土土器	104	第151図	試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成樹状構造図…138
第132図	クラスター分析の結果	106	第152図	試料中に残存する脂肪の脂肪 組成による種特異性相関…139
第133図	東武庫遺跡出土弥生土器 のR b - S r分布図	107	第153図	I区主要遺物出土位置 ……142
第134図	上ノ島遺跡出土弥生土器 のR b - S r分布図	107	第154図	II区主要遺物出土位置 ……143
第135図	顯微鏡写真	111	第155図	壺形土器の変遷 ……144
第136図	試料サンプル位置	115	第156図	土器胎土顯微鏡写真…149
第137図	試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成（1）	124	第157図	西摂平野の主要な 前期弥生遺跡…151
第138図	試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成（2）	125	第158図	形態比較図 ……155
第139図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（3）	126	第159図	関係土器黒斑位置図 ……157
第140図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（4）	127	第160図	関係土器平面図 ……158
第141図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（5）	128	第161図	松菊里式土器 ……160
第142図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（6）	129	第162図	松菊里式系土器 出土地分布図…163
第143図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（7）	130	第163図	松菊里式系土器実測図 ……164
第144図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（8）	131	第164図	出土石器（1） ……169
第145図	試料中に残存する脂肪の 脂肪の脂肪酸組成（9）	132	第165図	出土石器（2） ……170
			第166図	出土石器（3） ……171
			第167図	出土石器（4） ……172
			第168図	東武庫遺跡出土複復元案 ……173

第169図 弥生時代前期の櫛	173	第177図 木棺規模（掘り方）	195
第170図 周溝墓の築造過程（1）	177	第178図 木棺規模（棺内内法）	195
第171図 周溝墓の築造過程（2）	178	第179図 主体部の方位	196
第172図 周溝墓の築造過程（3）	179	第180図 組合せ式箱形木棺の形態	197
第173図 周溝墓群の主軸方向	181	第181図 木棺形態の変遷	198
第174図 周溝墓群の構造	183	第182図 埋葬施設分布図	199
第175図 墳丘の復元	187	第183図 東武庫遺跡の形成過程	207
第176図 藏内およびその周辺の 主要初期周溝墓の分布	190		

表 目 次

第1表 周辺主要遺跡一覧表	7	第8表 前期弥生土器編年対象表	147
第2表 土層注記	19	第9表 編年細分表	154
第3表 分析値	108	第10表 松葉里式系土器出土遺跡地名表	163
第4表 東武庫遺跡出土木棺の 樹種同定一覧	109	第11表 出土石器一覧表	168
第5表 兵庫県の遺跡出土棺材 の樹種と件数	110	第12表 棚出土地名表	174
第6表 土壤試料の残存脂肪酸抽出量	116	第13表 周溝墓群の形成過程	175
第7表 試料中に分布するステロールと シトステロールの割合	120	第14表 主体部一覧表	193
		第15表 木棺一覧表	194
		第16表 木棺形態の変遷	198
		第17表 木棺形態の	
		第18表 グループ別比率と変化	200

図 版 目 次

巻首図版 1	卷首図版 3
東武庫遺跡遠景（上－南から）	2号墓擬朝鮮系無文土器出土状況（上）
東武庫遺跡遠景（下－東から）	1号墓主体部検出状況（下）
巻首図版 2	卷首図版 4
全景	出土土器（上） 堪縫（下）
巻首図版 5	卷首図版 5
	出土遺物 堪縫
図版 1 東武庫遺跡	図版 4 I 区
1. 遠景	1. 全景（北から） 2. 全景（南西から）
図版 2 I 区	図版 5 1号墓
1. 全景（北から）	1. 全景（北西から）
図版 3 I 区	2. 周溝内土器出土状況
1. 全景（南から） 2. 全景（北から）	

図版6 1号墓

1. 主体部確認状況
2. 主体部 検査出状況
3. 主体部 小口板
4. 主体部 小口穴断面

図版7 2号墓

1. 全景(北から)
2. 土壌1土器出土状況

図版8 2号墓

1. 主体部 確認状況
2. 主体部 検査出状況
3. 主体部 墓壙検出状況

図版9 4号墓

1. 全景(西から)
2. 2号主体部(西から)

図版10 4号墓

1. 1号主体部(北から)
2. 1号主体部(西から)
3. 1号主体部土器出土状況
4. 東周溝内土器出土状況

図版11 3号墓

1. 全景(南西から)
2. 北周溝断面(東から)

図版12 5号墓

1. 全景(南から)
2. 主体部(南から)

図版13 6号墓

1. 全景(東から)
2. 主体部(東から)
3. 土壌1(南から)

図版14 7号墓

1. 全景(北から)
2. 主体部(東から)

図版16 7号墓

1. 主体部 小口穴確認状況
2. 主体部 小口穴検出状況
3. 主体部 小口穴

図版17 8号墓

1. 全景(東から)

図版18 9号墓

1. 全景(北西から)

図版19 10号墓

1. 全景(南から)

図版20 II区

1. 全景(南から)

図版21 II区

1. 全景(南から) 2. 全景(東から)

図版22 II区

1. 全景(北東から) 2. 全景(北西から)

図版23 11号墓

1. 全景(東から) 2. 主体部(南から)

図版24 11号墓

1. 南周溝内土器出土状況

2. 南周溝断面(北から)

3. 東周溝断面(東から)

図版25 12号墓

1. 全景(西から) 2. 南周溝断面

図版26 13号墓

1. 全景(北から) 2. 土壌1(北から)

図版27 15号墓

1. 全景(南東から)

2. 北周溝内土器出土状況

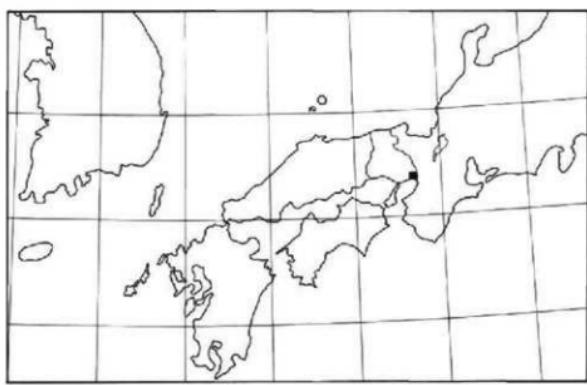
図版28 15号墓

1. 北周溝断面(東から)

2. 南周溝断面(東から)

3. 西周溝断面から(南から)

図版29 14号墓	図版38 遺物
1. 全景（北から）	6号墓出土遺物 9号墓出土遺物
2. 土壇 I（北西から）	10号墓出土遺物
図版30 16号墓	図版39 遺物
1. 全景（西から）	11号墓出土遺物 13号墓出土遺物
図版31 17号墓・18号墓	15号墓出土遺物
1. 17号墓全景（北から）	図版40 遺物
2. 18号墓全景（東から）	16号墓出土遺物 21号墓出土遺物
図版32 19号墓・20号墓	S D02出土遺物
1. 19号墓全景（北西から）	図版41 遺物
2. 20号墓全景（南から）	22号墓出土遺物 17号墓出土遺物
図版33 21号墓・22号墓	S K04出土遺物 S D03出土遺物
1. 21号墓全景（北西から）	図版42 遺物
2. 22号墓全景（西から）	S K02出土遺物 S K03出土遺物
図版34 S K03	図版43 遺物
1. 全景（南から）	包含層出土遺物 棺材
図版35 遺物	図版44 遺物
1号墓出土遺物 2号墓出土遺物	石器（1）
図版36 遺物	図版45 遺物
2号墓出土遺物 3号墓出土遺物	石器（2）
4号墓出土遺物	図版46 遺物
図版37 遺物	石器（3）
4号墓出土遺物 5号墓出土遺物	図版47 遺物
6号墓出土遺物	石器（4）



第1図 遺跡の位置（1）

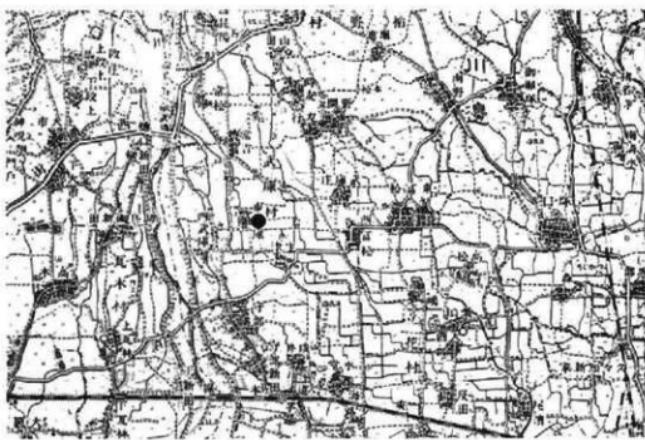
第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地理的位置

1. 地理的位置

遺跡の所在する尼崎市は、兵庫県の南東部に位置する。西側は武庫川を境に西宮市と、北側は伊丹市と、東側は猪名川を境に大阪市・豊中市とそれぞれ接しており、南側は大阪湾に面している。そして、兵庫県にありながら西宮市・宝塚市・伊丹市・川西市とともに大阪の衛星都市群を形成しており、一帯は西摂地方と呼ばれている。

東武庫遺跡は、尼崎市の北西部に位置する。武庫川の東約1km、阪急神戸線武庫之荘駅の北西約500mにあたる。当地は、現在は住宅地となっている。しかし、大正5年陸地測量部作製の1/50000測量図（第2図）をみると、当時は東武庫集落の南東部に広がる水田域であったことがわかる。戦後まもなく阪急武庫之荘駅北側が阪急電鉄により宅地として開発され、その後、当地を含めたその周辺地域に宅地化が及んできている。そして、調査地は調査直前まで宅地化の波にのまれることなく水田であった。



第2図 遺跡の位置（II）

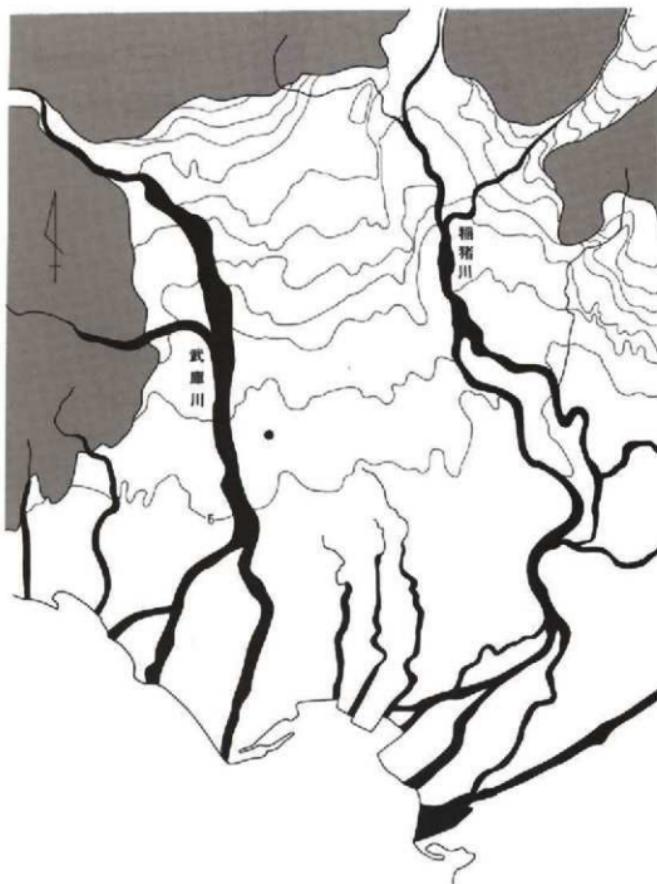
2. 地形的位置

3段階のレベル（第Ⅰスケール～第Ⅲスケール）に分けて検討していくことにする。

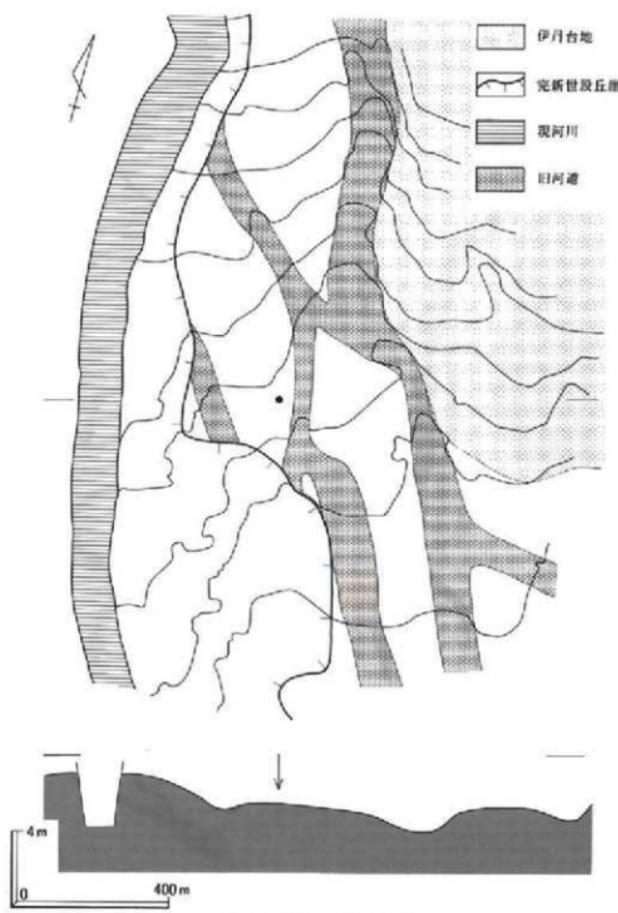
第Ⅰスケール 大阪平野を視野に地形面レベルで捉えるものである。近畿地方を対象に、平地と山地の地形分類図を作製したのが第3図である。これによると、尼崎市域は大阪平野の西侧に位置する。武庫川と猪名川の冲積作用によって形成された平野で、狭義には西摂平野あるいは



第3図 西摂平野の位置



第4図 西摂平野の地図



第5図 遺跡周辺の埋没地形

は武庫平野（平地）と呼称され、尼崎市はこの西摂平野の臨海部を占めている。このため、当市域には山地・丘陵地がない点がひとつの特徴となっている。

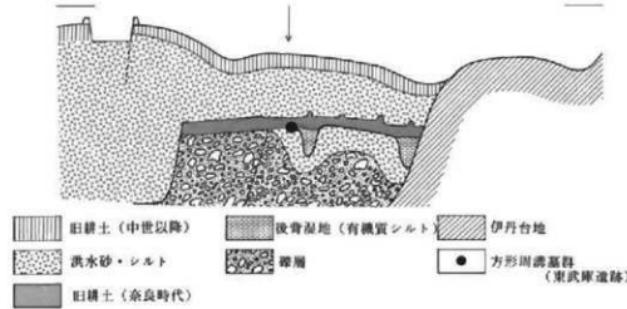
第Ⅱスケール 西摂平野を視野に地形面レベルで位置付けるものである。当該地域を対象に5mコンター図を作製したのが第4図である。これによると、尼崎市域は阪急電鉄神戸線つまり標高5mラインを境に、その北側は伊丹台地に、南側は沖積地となっている。伊丹台地は約3万年前には形成されており、その後海退に伴い段丘化し、武庫川と猪名川による冲積作用が盛んになり、舌状に張り出す伊丹台地の縫凹部を埋める形で冲積平野が形成されていった。

ところで東武庫遺跡は、武庫川によって形成された沖積地に立地する。標高は約6mである。伊丹台地が武庫川の冲積作用によって埋没はじめると同時に位置し、現地表面において伊丹台地から沖積平野に変換する地点の南西側約500mにあたる。

第Ⅲスケール 東武庫遺跡を中心とした約1kmの範囲を埋没地形で位置付けるものである。尼崎市昭和29年発行の1/2500地形図をもとに1mコンター図を作製し、さらに昭和29年米軍撮影の空中写真等をもとに復元した旧河道を合成したのが第5図である。当該図及び調査区内基本土層（第12図）から判断して東武庫遺跡は、武庫川の形成した完新世段丘1面・埋没扁状地帯・埋没自然堤防（埋没高地）上に立地していることが理解できる。またこの微高地は、その主軸方向を、北西-南東方向にとっている。さらに、調査区内の土層観察の結果、南壁と北壁に後背湿地を示す層が認められることから、埋没高地でも当微高地の南東側の後背湿地へ落ちかかった位置にあたることがわかる。

〔参考文献〕 渡辺久雄「尼崎平野の形成」『尼崎市史』第1巻 1966

藤田和雄・笠間太郎「宝塚の自然とその成立」『宝塚市史』第1巻 1975



第6図 遺跡周辺微地形断面図



第7図 遺跡周辺主要遺跡

第2節 遺跡の歴史的位置

尼崎市域における遺跡の分布は、おおむね武庫川（庄下川を含む）下流域、猪名川（灘川を含む）下流域、及び伊丹台地の3つに大別できる⁽¹⁾。この中で、武庫川下流域は農耕に適したグライ土壌が発達しているものの、遺跡の立地は氾濫という自然条件に大きく左右されるようである⁽²⁾。

第1表 主要周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	東武庫遺跡	25	富松城跡	49	中ノ田遺跡	73	茶屋ノ前遺跡
2	宮ノ北遺跡	26	東富松遺跡B	50	南清水古墳	74	茶屋ノ前遺跡
3	上カシケ遺跡	27	車塚古墳	51	福荷遺跡	75	川崎遺跡
4	三良田遺跡	28	坂塚古墳	52	松ヶ内遺跡	76	伊佐具神社遺跡
5	北裏遺跡	29	琵琶塚古墳	53	食満1号墳	77	熊野神社遺跡
6	常松東浦遺跡	30	辰巳台遺跡	54	食満2号墳	78	平田遺跡
7	猫山古墳	31	西貝原遺跡	55	西ノ口遺跡	79	追田遺跡
8	長ノ手遺跡	32	大井戸古墳	56	喜横町遺跡	80	猫田遺跡
9	時友遺跡	33	武庫南部遺跡	57	鎌田遺跡	81	下川田遺跡
10	友行古墳	34	久保田遺跡	58	田能高田遺跡	82	伊居太古墳
11	南城越遺跡	35	栗山・庄下川遺跡	59	猪名川川床遺跡	83	春日遺跡
12	中嶋遺跡	36	上ノ島遺跡	60	四ノ坪遺跡	84	若王寺遺跡
13	武庫中学校遺跡	37	桂木遺跡	61	瀬川川床遺跡	85	二ノ坪遺跡
14	赤田遺跡	38	一本松古墳	62	古宮遺跡	86	下坂部遺跡
15	南吹上遺跡	39	水堂古墳	63	東口遺跡	87	西川遺跡
16	道ノ下遺跡	40	箕塚古墳	64	宮ノ前遺跡	88	猪名庄遺跡
17	東柿ノ木遺跡	41	北畠遺跡	65	南ノ口遺跡	89	金葉寺貝塚
18	南戸板遺跡	42	猪名寺庵寺跡	66	南袖遺跡	90	石ノ戸遺跡
19	浅堀古墳	43	真淨坊遺跡	67	岡院の石棺	91	長洲遺跡
20	武庫庄遺跡	44	寺前遺跡	68	御園古墳	92	小田遺跡
21	庄ノ内遺跡	45	上園橋遺跡	69	池田山古墳	93	辰巳橋遺跡
22	四方田遺跡	46	春日神社遺跡	70	堺口城跡	94	尼崎城跡
23	座頭塚古墳	47	田能遺跡	71	海老字遺跡		
24	東富松遺跡A	48	前畑遺跡	72	メ野遺跡		

このような場所に人の進出が明らかになっているのは、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式からV式にかけての頃からである。猪名川床遺跡(59)、瀬川川床遺跡(61)、若王寺遺跡(84)、上ノ島遺跡(36)、田能遺跡(47)から若干ではあるがこの時期の遺物が弥生時代前期の土器と共に伴っている。これらの縄文時代晩期の土器は遺構に伴って出土したものではないが、磨滅もあまり見られないため、周辺に集落が存在することが推測される¹³⁾。

武庫川下流域の弥生時代前期の遺跡は、主に自然堤防等の微高地に立地しており、本報告の東武庫遺跡(1)のほか、上ノ島遺跡、栗山・庄下川遺跡(35)、北裏遺跡(5)などが知られる。これらの遺跡の中で上ノ島遺跡は第I様式古段階に成立した遺跡である¹⁴⁾。また、本報告の東武庫遺跡では方形周溝墓が多数検出されており、周溝内から第I様式新段階に併行する擬朝鮮系無文土器も出土している。これらの状況は、西摂地域の弥生文化受容の様相を知る上で貴重な資料であると言える。しかし、上ノ島遺跡は前期で一時廃絶し、次に遺跡が営まれるのは後期になってからである¹⁵⁾。また、東武庫遺跡も第II様式の段階には廃絶しており、両遺跡とも廃続して営まれる遺跡ではない。これは、武庫川が氾濫を繰り返し、人々の居住をゆるす安定した場所を提供しなかった状態を示しているようである。

弥生時代中期以降になると、自然堤防上から台地上に立地する遺跡が増えてくる。武庫川下流域の中期の遺跡では、前期から継続して拡大している北裏遺跡で方形周溝遺構、第III様式のころに成立した武庫庄遺跡(20)で方形周溝墓と堅穴住居跡、栗山・庄下川遺跡で方形周溝遺構がそれぞれ検出されている¹⁶⁾。これらの遺跡は、武庫川下流域の拠点的な集落としての位置付けがなされる。

後期になると、猪名川下流域では、田能遺跡以前の沖積地に中ノ田遺跡(49)、四ノ坪遺跡(60)、若王寺遺跡(84)、下坂部遺跡(86)など多くの小規模な遺跡が出現する。しかし、武庫川下流域では、後期に入つて小規模な遺跡が増加していくような傾向はみられない。北裏遺跡で堅穴住居跡が検出された他は、南城越遺跡(11)、道ノ下遺跡(16)、南戸板遺跡(18)、東柿ノ木遺跡(17)、庄ノ内遺跡(21)、四方田遺跡(22)などの散布地が認められるだけである。このことについては、中期の拠点的な集落が洪水等の自然的要因によって解消し、武庫川中流域の丘陵上へ移行していくためであるという指摘がなされている¹⁷⁾。

古墳時代になると、沖積地上に多くの古墳が築造されている。尼崎市の古墳は前期の後半から築造が始まり、主に猪名川下流域に分布するが、大正時代以降の開発により多くの古墳が姿を消している。武庫川下流域で現在確認されている古墳として、古墳時代の海岸線に立地する4世紀後半の水堂古墳(全長80m・前方後円墳-39)や、須恵器片が採集された後期の大井戸古墳(全長60m・前方後円墳)(32)などがある。この他、痕跡あるいは伝承のみ伝えられている古墳として、猪山古墳(7)、友行古墳(10)、浅堀古墳(19)、座頭塚古墳(23)、一本松古墳(38)、車塚古墳(27)、坂塚古墳(28)、琵琶塚古墳(29)がある。

また、猪名川下流域では、御園古墳（全長60m・前方後円墳-68）、池田山古墳（全長70m・前方後円墳-69）、南清水古墳（全長46m・前方後円墳-50）などが塚口古墳群を形成しているほか、尼崎最大の伊居太古墳（全長92m・前方後円墳-82）などがある⁽⁴⁾。

古墳以外の注目すべき遺跡として、製鉄関係の遺物が土師器や須恵器とともに溝内から出土している若王寺遺跡（84）や下坂部遺跡（86）があり、古墳時代末から奈良時代にかけての土師器を梳成した額田窯跡がある。このほか、一網分の土鍋が出土した桂木遺跡（37）や破鏡・石劍・有孔円板などが出土した田能高田遺跡⁽⁵⁾（47）がある。しかし、武庫川下流域の古墳時代の遺跡はそのほとんどが散布地であるため詳細がつかみにくい状況にある。

歴史になると、西摂地方では多くの寺院が建立された。尼崎では法隆寺式伽藍配置をもつ猪名寺廃寺が白鳳時代に建立されている。この猪名寺廃寺との関連が指摘される遺跡として奈良時代の8棟の掘立柱建物跡や二彩土器・瓦類などが出土した中ノ田遺跡（49）がある。また、若王寺遺跡や瀬江字東大寺から奈良時代の瓦が出土しているところから、若王寺廃寺跡や東大寺跡が推定されている。さらに、戸ノ内には天平期に建立された治田寺が現存する。

歴史時代では、寺院関係のほかに、莊園関係の遺跡に見るべきものがある。尼崎の莊園開発は、孝謙天皇の勅施入による東大寺領猪名庄（88）の成立以後、猪名川河口付近の開発を中心として推し進められていく。この後、平安時代に入って律令支配体制が崩れてくると、尼崎の他地域にも多くの莊園が成立していく。庄下川沿いの栗山・生島の地域には淳和天皇の勅旨による生島勤皆田が成立しており、隣接する東大寺領猪名庄との間で土地相論が繰り広げられていた⁽⁶⁾。この生島勤皆田に關係する遺跡として、平安時代の建物跡や皇朝十二銭の承和昌宝が出土した栗山・庄下川遺跡がある⁽⁷⁾。また、奈良時代から鎌倉時代の莊園の御厨の貝塚である金乗寺貝塚（89）が知られている。この金乗寺貝塚からは、多数の土器とともに皇朝十二銭の鰐益神宝・貞觀永宝・延喜通宝などが出土しているし、辰巳橋遺跡（93）からは宋代の青磁・白磁が出土しており、この地域が海上交通の要地として発達していたことを窺い知ることができる。

このほか、東武庫遺跡の第1次調査では、奈良時代後半から平安時代初頭のころの掘立柱建物跡が検出されている。出土遺物の中に磁石や多款の転用鏡などが見られるところから、集落をある程度総括する役務を担った建物ではなかったかと推測されている⁽⁸⁾。

〔註〕

- (1) 岡本静心他『尼崎市史』第1巻 1966
- (2) 森岡秀人「武庫川の水流と洪水」『古代学研究』第94号 1980
- (3) 福井英治他『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982
- (4) 楠爪康至『尼崎市上ノ島遺跡』尼崎市教育委員会 1973

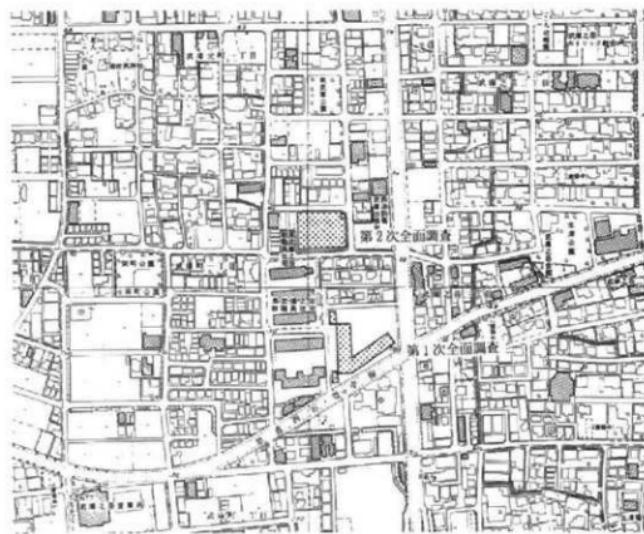
- (5) 大平 茂『尼崎市上ノ島遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第106冊) 兵庫県教育委員会 1992
- (6) 尼崎市教育委員会『尼崎市栗山・庄下川遺跡現地説明会資料』 1994
- (7) 森岡秀人「土器からみた高地性集落会下山遺跡の生活様式」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』 1980
- (8) 全掲 (1)
- (9) 平成4年度兵庫県教育委員会調査
- (10) 近藤義郎編『前方後円墳集成近畿編』 1991
- (11) 尼崎市教育委員会『尼崎市栗山・庄下川遺跡、桂木遺跡』 1974
岡田章一・中村 弘『東武庫遺跡－県公営住宅尼崎武庫之荘団地改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(兵庫県文化財調査報告書第84冊) 兵庫県教育委員会 1991
- 〔参考資料〕
尼崎市教育委員会『尼崎市埋蔵文化財包蔵地等分布地図』 1992

第2章 調査に至る経緯

第1節 はじめに

調査地の約1km西側を流れる武庫川は、以前はかなりの「暴れ川」であった⁽¹⁾との認識が強かった。このため、当地を含めた武庫川下流域は過去において人々の居住には適さない、つまり遺跡は存在しないとの考えが一般的であった。このため、一部の遺跡を除いては、遺跡の存在が知られていなかった。

平成3年度に、尼崎武庫元町団地建設が当地において計画されることとなつたが、上記の理由から、当地も遺跡としては周知されていなかった。しかし、当地の南約150mの地区で実施された県公営住宅尼崎武庫之荘団地改築に伴う発掘調査（第1次全面調査）において、弥生時



第8図 調査位置（1）

代前期から中世にかけての遺跡（東武庫遺跡）の存在が明らかとなった⁽¹⁾。このため、当地まで東武庫遺跡が広がる可能性が考えられ、確認調査から実施することになった。

第2節 確認調査

1. はじめに

確認調査は2次にわたり行われた。第1次は尼崎市教育委員会によるもの（第1次確認調査）であり、第2次は兵庫県教育委員会によるもの（第2次確認調査）である。

2. 第1次確認調査

平成3年度に行われた。調査は、2m×4mのトレンチを計6箇所設定した。この結果、南西隅に設定したトレンチにおいて、溝状の遺構を確認するとともに、その遺構内から弥生時代前期のまとまった土器が出土した。また、その東側のトレンチからも弥生時代前期の土器が出土した。以上のことから、当該地において、弥生時代前期を中心とする遺構の存在が明らかとなった。このため、第1次全面調査で明らかとなった東武庫遺跡が当地まで広がるとの結論に達した。

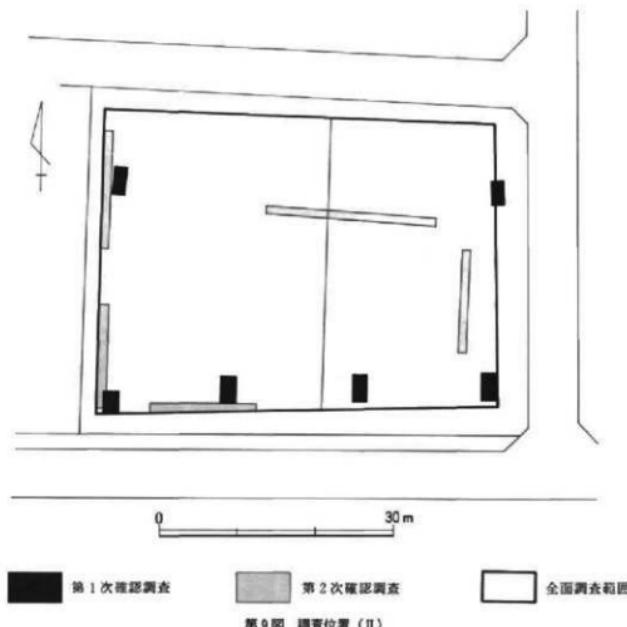
3. 第2次確認調査

平成4年度の10月に実施した。今回の確認調査は、第1次確認調査で当地まで東武庫遺跡が広がることが明らかとなったが、これが尼崎武庫元町団地建設予定地内全域に広がるのかどうかを明確にすることを主たる目的として実施した。

今回の調査は、幅1mのトレンチを5箇所に設定して実施した。調査の結果、各トレンチにおいて溝状の遺構および弥生時代前期の遺物包含層を確認した。このため、弥生時代前期の遺構が尼崎武庫元町団地建設予定地内全域に広がることが明らかとなった。

第3節 全面調査

第1次確認調査、第2次確認調査の結果、計画地域全域を調査することになった。その結果、約1976m²が調査対象となった。ところで、開発計画によると、平成4年度中に調査を完了することが前提となっていた。ところが、確認調査が終了した10月の時点では、計画地域全域が調査対象となったため、本年度中に全域の調査を完了させることは困難な状況にあった。そこで、平成4年度（I区）と平成5年度（II区）の2年度にわけて調査することになった。I区（1168m²）は平成5年1月25日～3月19日、II区（808m²）は平成5年5月1日～7月7日と、そ



第9図 調査位置（II）

それぞれ2ヶ月間を要して調査を行った。またI区とII区の調査終了後に、一般市民を対象に現地説明会を開き、調査成果の公開を行った。

各年度の調査体制は以下のとおりである。

平成4年度の調査体制

- 調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 調査担当 山田清朝・藤田淳・中村弘
- 調査補助員 竹村忠洋（関西大学）・和田早織・斎居加奈子
- 室内作業員 辻本京子

平成5年度の調査体制

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
調査担当 山田清朝・所崎明雄
調査補助員 竹村忠洋・西丸佳子・浜本恵子
室内作業員 辻本京子



第10図 調査風景



第11図 現地説明会風景

第4節 整理作業

整理作業は、平成6年度の1ヶ年度で遺物の接合・復元・実測・トレース・写真撮影、および遺構図の整理・トレース、編集、刊行と全ての作業を行った。また、棺材の保存処理についても、当事務所にて行った。

整理作業体制は以下の通りである。

整理主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
事務担当 整理普及班長 山本三郎
主 査 吉誠雅仁
整理担当 技術職 員 高瀬一嘉
嘱託員 小川美奈・古谷章子・本庭田英子・香川フジ子・西野順子・武内素子・川上緑・高嶋美和・石野照代・吉田優子
保存担当 主 任 藤田淳

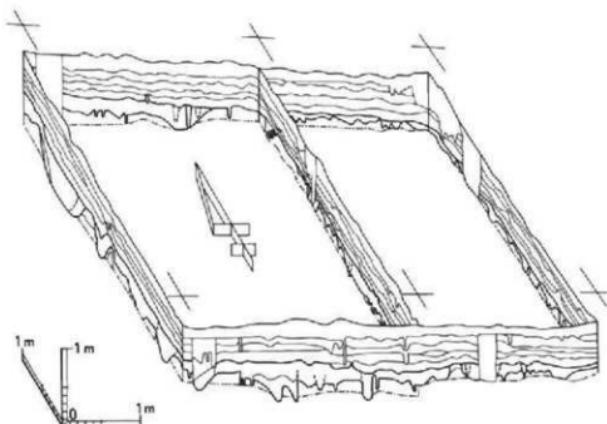
[注]

(1) 森岡秀人「武庫川の水脈と洪水」『古代学研究』94 古代學研究会 1980

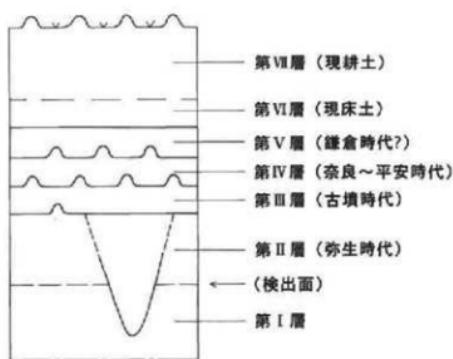
(2) 岡田章一・中村 弘『東武庫遺跡－県公官住宅尼崎武庫之荘団地改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(兵庫県文化財調査報告書第84冊) 兵庫県教育委員会 1991



第12回 土器の検討会



第13図 調査区パネルダイヤグラム



第14図 土層概念図

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

1. 基本層序と遺構の検出

本遺跡内における基本的な層序は、下層から順に第Ⅰ層～第Ⅳ層となる。今回の全面調査は確認調査によって明らかになった第Ⅱ層上面を遺構面とする弥生時代前期から中期初頭の遺構を対象とすることとした。そのため、機械により第Ⅱ層までを掘削し、人力により遺構検出・掘削を行った。しかし、第Ⅱ層は著しい土壤化を受けており検出が困難であるため、部分的に第Ⅰ層上面まで掘削して検出した。よって包含層として取り上げた遺物（第16図～第18図）についても、この第Ⅱ層に掘りこまれた遺構に伴っていたものも含まれる可能性がある。

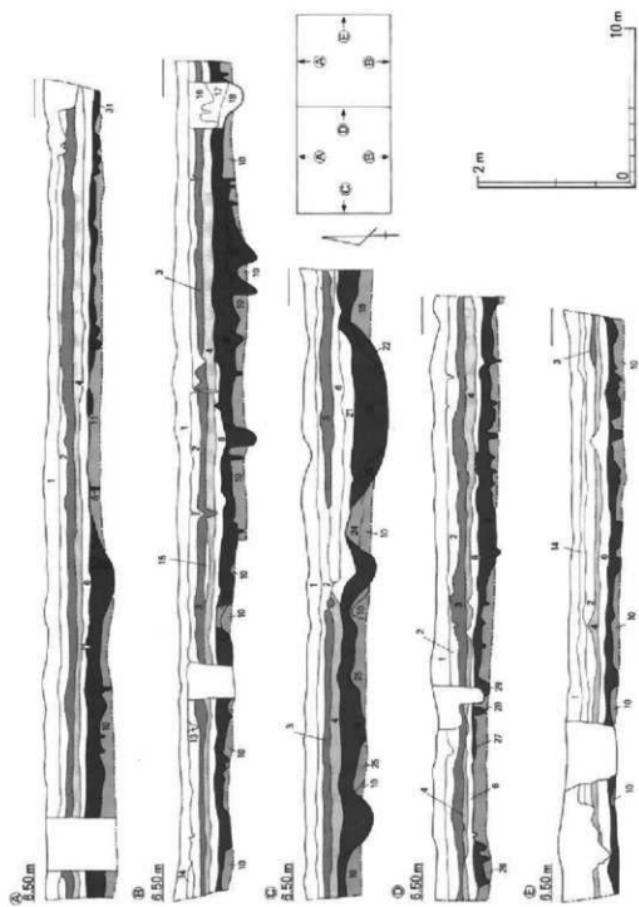
次に、それぞれの層に対する理解について記す。最下層である第Ⅰ層は土壤化していない層で、現存する部分では調査区西部分に認められる径3cmほどの裸層（24層）がもっとも砂粒が粗く、2区南～東ではシルト質極細砂を中心とした層に変わる。レベル的には現状では調査区北～東側がT・P4.5mで最も高いが、この面で検出された弥生時代の遺構の状況から、それ以降の奈良時代から平安時代にかけての築里地割りに伴う削平が行われているのが明らかで、本来はさらに高低差があったものと思われる。周辺地域における縄文海進は埋没した砂堆の状況から、第7図の破線までと考えられることから、この層の堆積は武庫川による沖積作用に起因するものと言える。そしてレベル差にも認められるように、この段階には調査区内に自然堤防と後背湿地が形成されていたことがわかる。

この第Ⅰ層の上には調査区中央部北半の一部を除いてはほとんど調査区全面を覆うほどに第Ⅱ層が堆積している。特に調査区西側では厚く堆積しており、最も厚いところでは約20～30cmを測る。後背湿地から自然堤防にかけて続くこの層は、主にシルト～シルト質極細砂から成っており、水田による著しい土壤化を受けている。この水田による土壤化と方形周溝墓を中心とする遺構の年代差であるが、第Ⅱ層が堆積した後すぐに遺構が築かれ、その後水田化されたものであるのか、または水田化された後に遺構が築かれたものであるのかは明らかにできなかった。

次に調査区南西以外のほぼ全面に第Ⅲ層が安定して堆積する。土壤化を受けており、この段階にも水田化されていたことが覗える。

次に第Ⅳ層が堆積する。調査区西端以外のほぼ全面に認められ、第Ⅲ層と同様に安定した堆積であり、水田により土壤化を受けている。

次に第Ⅴ層が堆積する。調査区東側以外のほぼ全面に認められ、第Ⅲ・Ⅳ層と同様に安定した堆積である。この層は北側において若干土壤化を受けているが、他の地点では土壤化は受け



第15図 土層断面図

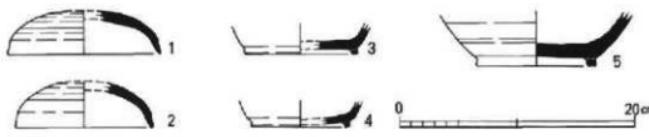
新2表 土壌生記

番号	色調	粒子子	その他の	順序号	色調	粒子	その他の
①耕作土	2.5Y 8/6	褐色	土壤層(±薄) 芦土塊(±厚)	Ⅴ	灰色	6Y 6/1	細砂～粗砂
②黄色	2.5Y 6/1	褐色	シルト質粘土質沙疊じり砂	VI	暗灰色	N 3/	シルト
③鉛灰色	10YR 7/1	褐色	細粒混じシルト質粘土	V	暗灰色	N 3/	シルト
④灰白色	10YR 6/6	褐色	通氣性土	IV	オリーブ色	N 3/1	粗砂～シルト質粘土
⑤明消褪色	10YR 5/1	褐色	通氣性土	III	褐色	N 3/1	粗砂～シルト質粘土
⑥地灰色	N 4/	褐色	細粒沙疊じり粘土質砂	II	灰色	N 4/	粗砂～シルト質粘土
⑦灰色	N 5/	褐色	粘土質シルト	II	灰色	N 4/	粗砂混じシルト質粘土
⑧灰色	N 4/	褐色	通氣性土	II	暗灰色	N 3/	粗砂混じシルト質粘土
⑨灰色	N 4/	褐色	通氣性土	II	灰色	N 4/	シルト質粘土
⑩灰色	N 4/	褐色	粘土～シルト質粘土	I	明オリーブ灰色 2.4G YI 7/1	N 4/	粗砂～シルト質粘土
⑪鉛灰色	2.5Y 4/1	褐色	シルト質粘土～通氣性	II	灰色	N 4/	粗砂混じシルト質粘土
⑫黒褐色	2.5Y 3/1	褐色	中砂～シルト質粘土	II	灰色	N 4/	シルト質粘土～粗砂
⑬オリーブ褐色	2.5Y 4/4	褐色	通氣性土	VI	灰色	N 4/	板細砂～シルト質粘土
⑭オリーブ褐色	2.5Y 4/6	褐色	通氣性土	II	灰色	N 4/	板細砂～粗砂質シルト
⑮暗灰褐色	2.5Y 5/2	褐色	通氣性～粗砂～通氣性	IV	灰色	N 4/	粗砂～シルト
⑯鉛灰色	10YR 6/1	褐色	通氣性土	VI	灰色	N 4/	粗砂～シルト
							SDGS

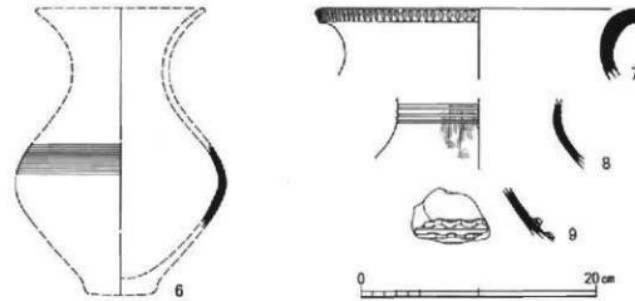
ていない。

次に第VI層、第VII層が堆積し、それぞれ現在の床土、耕作土となっている。

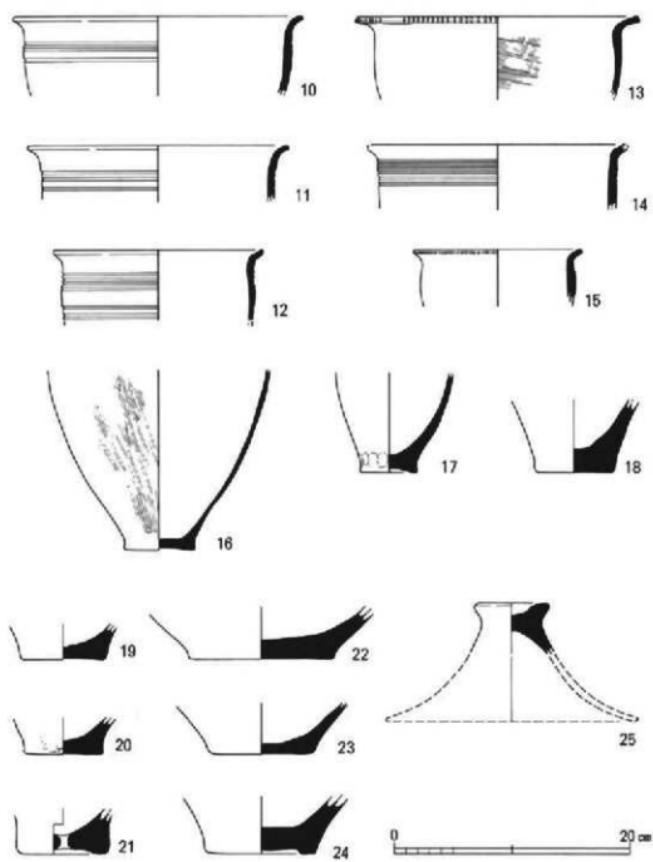
さて、それぞれの層に対する時期であるが、今回の調査では遺構を確認した第II層の上面のみが弥生時代前期～中期初頭に相当すると確認できただけである。しかし、機械や人力による掘削中に出土した遺物（第16～18図）がいくつかあり、それらから各層に対して時期比定を試みる。弥生時代前期～中期初頭より新しい遺物は、古墳時代、奈良時代～平安時代の各時代に相当するものであるが、これらを単純に層に対応させると、第III層が古墳時代、第IV・V層が奈良時代～中世、第VI層・第VII層が現代にそれぞれ対応するものとすることができる。また、第V層は比較的厚く、また中砂～極細砂で比較的粗い砂粒から成っていることから、この時期に広範囲に洪水砂が供給されたことが考えられる。この状況を武庫川が形成した完新世段丘II面を覆う洪水砂とすると、第V層が鎌倉時代以降に相当し、第IV層が奈良～平安時代に比定することができる。また、同流域に立地する上ノ島遺跡の調査成果では1712年の大水害時に供給されたと考えられる黄色細砂が確認されており、この層に第V層が対応するとすれば、時期は全体に新しくなる可能性がある。



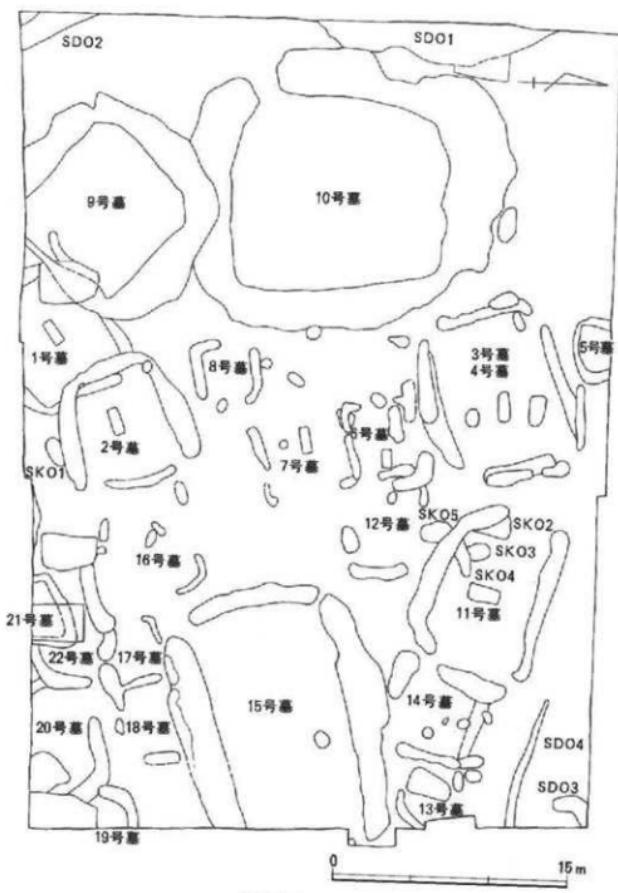
第16図 包含層出土土器（1）



第17図 包含層出土土器（2）



第18圖 包含層出土土器 (3)



第19图 平面图

2. 概略

調査で明らかとなった遺構は、弥生時代前期～中期初頭にかけての時期に限定される。中心となる遺構は方形周溝墓群で、他に溝状遺構と土壙を検出した。検出面は1面である。

方形周溝墓群は、確実なものとしては計22基（1号墓～22号墓）検出した。他に、その可能性も考えられる溝状遺構も認められる（SD01・SD03）。これらの築造時期は弥生時代前期前半から中期初頭にかけて順次築造されたもので、平面的にも周溝墓どうしの切り合いが認められた。最も古い周溝墓は前期前半と考えられる20号墓で、最も新しい周溝墓は中期初頭と考えられる9号墓・11号墓である。

各周溝墓の規模は一定しておらず、かなりのバリエーションが認められる。平面形についてもバリエーションが認められ、8号墓のように正方形に近いものから、10号墓・11号墓・15号墓のように長方形を呈するもの、さらには13号墓・16～22号墓のようにかなり歪んだ形態を呈するものが認められる。なお、各周溝墓とも埴丘の盛土層は残存していなかった。

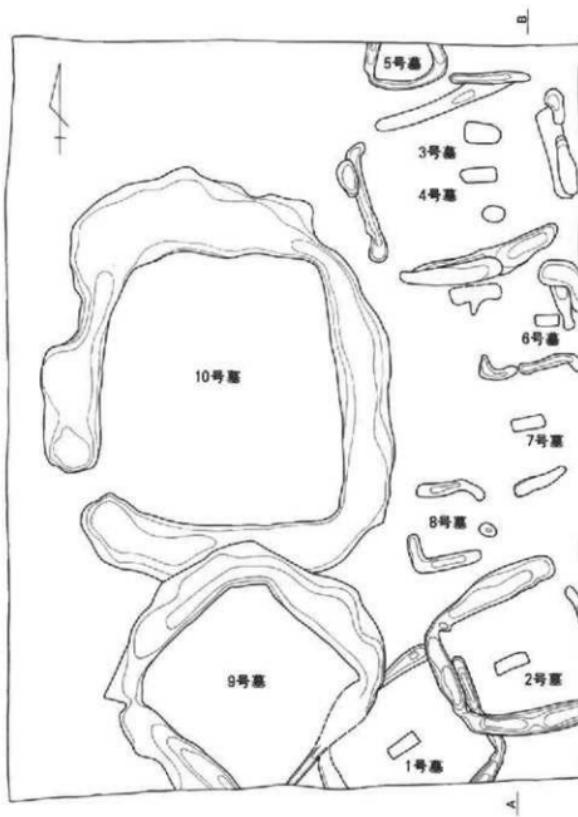
さらに、1号墓・2号墓・4号墓・6号墓・7号墓・11号墓において、埋葬施設を確認することができた。各埋葬施設とも木棺を埋葬主体としている。この他、4号墓で土壙墓の可能性のある土壙（3号主体部）、5号墓で土器棺をそれぞれ検出した。

溝状遺構については、SD01・SD03のように周溝墓の一部となる可能性をもつものと、SD04のようにその可能性が低いものとが認められる。

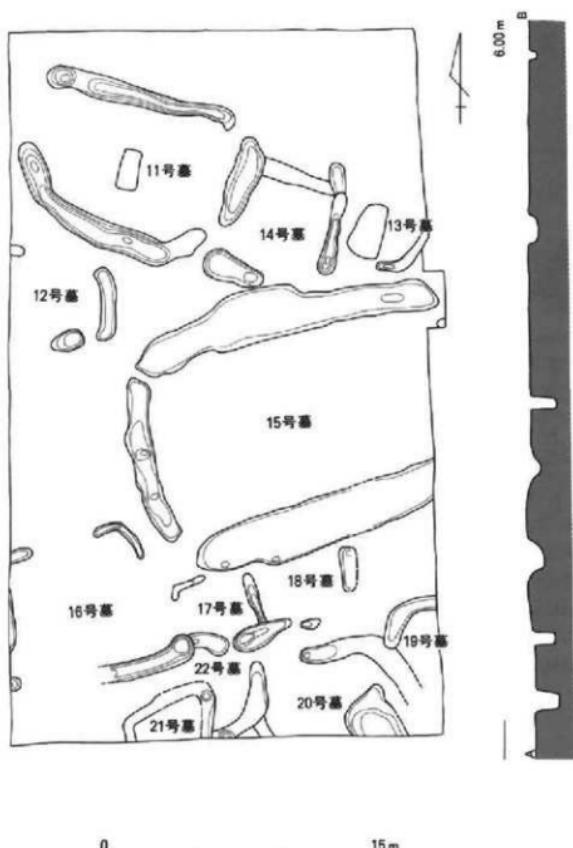
土壙については、直接周溝を伴わないが、SK02・SK05のように土壙墓となる可能性をも含めて周溝墓と有機的な関連をもって存在したと考えられるものと、周溝墓群とは関連が薄いと考えられるものがある。

出土遺物としては、土器と石器そして装身具がある。土器は、周溝墓の周溝内から出土したものが大半を占め、他に溝状遺構・土壙・包含層から出土している。全体的に出土量は少なく、小片のものが多い。これらのなかで、2号墓周溝内より出土した「擬朝鮮系無文土器」は特筆される。胎土分析の結果、在地産の土器と明確な差は認められないが、同周溝墓主体部から出土した赤漆塗の堅櫛とともに、被葬者の性格を考える上で、重要な位置を占めるものと考えられる。

石器は、周溝および土壙（4号墓3号主体部）から出土したものと、包含層から出土したものがある。



第20図 1区周溝墓群



第21图 II区周清墓群

第2節 周溝墓

1. 1号墓



第22図 1号墓の位置

概要 調査区のはば中央、南端部で検出した。I区の調査で検出した周溝墓である。全体を検出することはできず、周溝の一部が南側の調査区外までびる。このため、検出した範囲は全体の約3/4強に限られる。

2号墓の南西、9号墓の南東に位置し、両周溝墓に切られている。

周溝 4辺とも検出したが、他の周溝との切り合い等のため、全容は把握できない。このなかで、北隅において周溝が途切れている。また東隅においては、周溝は途切れていないが、平面的に狭くなり、かつ北東周溝および南東周溝底より浅くなる傾向が認められる。

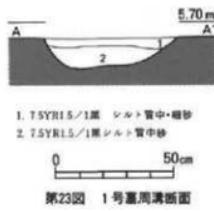
また各周溝間の底部のレベルにおいても差が認められ、最も深い箇所の標高は北東周溝で5.50m、南東周溝で5.30m、北西周溝で5.50m、南西周溝で5.40mを測り、南側ほど低くなる傾向にある。

北東周溝は、1号墓のなかでは最も良好に残存し、墳丘側のラインは比較的直線的である。当周溝は中央部ほど深くなる傾向にある。断面逆台形を呈し、検出幅56cm、底部幅37cmを測り、深さは13cmである。周溝の立ち上がりは、墳丘側ほど傾斜が急な傾向が認められる。埋土は2層からなるが大差なく、黒色シルト質中・細砂が堆積していた。

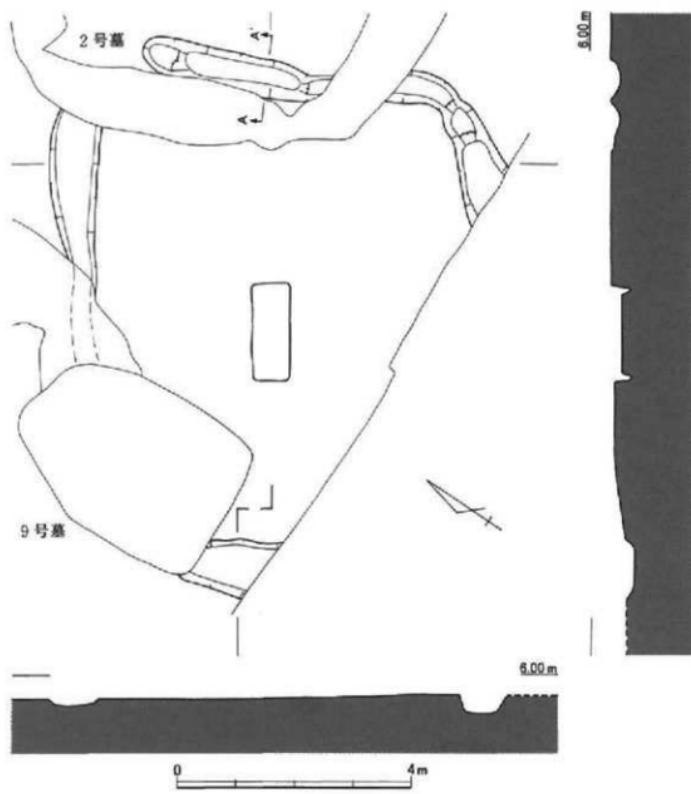
北西周溝は一部しか残存していない。東端部は2号墓西周溝に切られているが、底部のレベルが東端部に向かって急に浅くなる傾向が認められる。墳丘側のラインは直線的であるが、その反対側は緩やかなカーブをなしている。断面逆台形を呈し、検出幅40cm、底部幅30cmを測り、深さは11cmである。

南東周溝も検出できたのは東端の一部に限られる。北西周溝同様、墳丘側のラインは直線的であるが、反対側は緩やかなカーブを描いている。断面逆台形を呈し、検出幅45cm、底部幅35cmを測り、深さは30cmである。

墳丘 主軸方向は、主体部を基準とすると、北東—南西方向

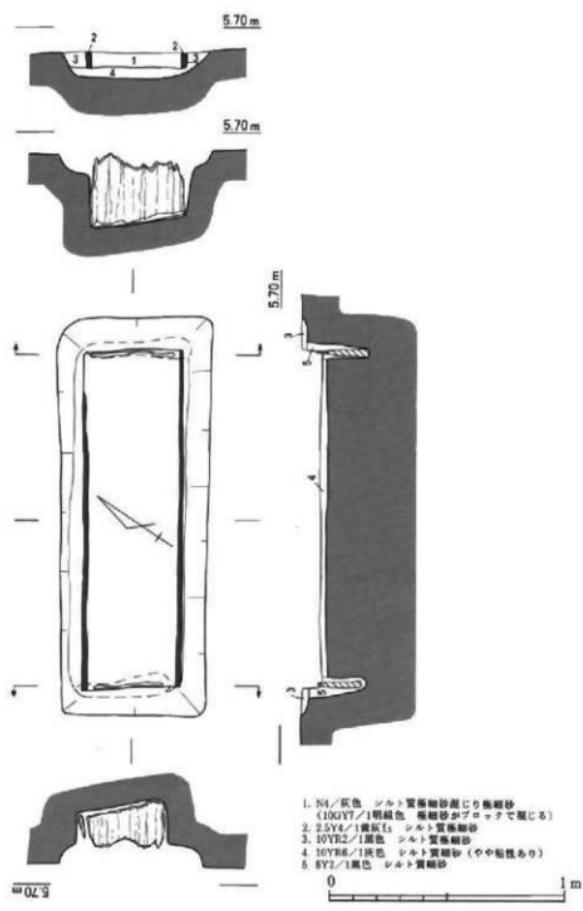


第23図 1号墓周溝断面



第24図 1号墓

を指向し、座標方向より34° 東へ振っている。北東一北西方向で7.8m、その直交方向で6.3mを測り、北東一南西方向に若干長い長方形を呈する。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.60mである。



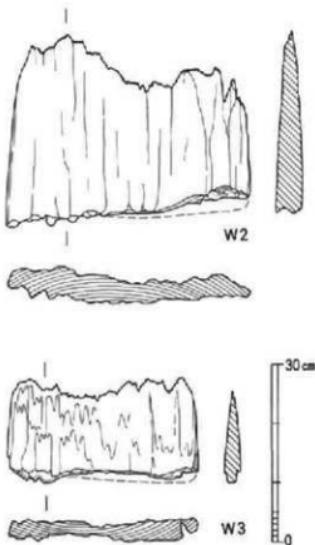
第25図 1号墓主体部

埋葬施設 墳丘中央部において木棺墓を1基検出した。

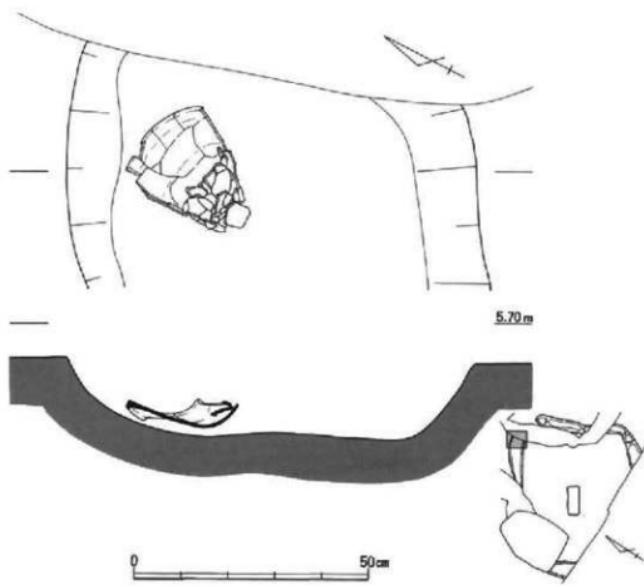
周溝との位置関係は調査区の制限や擾乱などのため明らかにはできないが、残存する状況から恐らく周溝墓のほぼ中央に位置すると推定できる。主体部である木棺は長軸の方向が北から約56° 東に振っており、周溝の北西辺、および南東辺に平行する。木棺の規模は内法で長さ139cm、幅38cm、深さ6cm、小口板の厚さは最大で4.6cm、長側板の厚さはその痕跡で測ると2cmであるが、本来はさらに厚かったものと想定される。掘り方は長さ167cm、幅63cmを測る。棺の大部分が削平されており、底部から約10cmのみ残存していた。

木棺は組合せ式箱形木棺で、両小口板を木目方向に地中に差し込み、それが長側板によって挟み込まれたものである。両小口板については、地中に差し込まれた部分のみ遺存しているが、両長側板については検出時において痕跡のみ確認できた。その痕跡は小口板の側面まで続いていることから、両長側板は小口板を挟み込んでいたことがわかる。小口板を差し込むために掘られた穴は底から平均約20cmの深さで、小口板の下側が木目に対して斜めに加工されているのに対応して斜めに掘られている。その位置関係は北東側の小口板では北側が深いのに対して、南西側の小口板では南側が深いという相違がある。小口板が差し込まれた後は第25図5層が埋め込まれて小口板の安定が図られている。

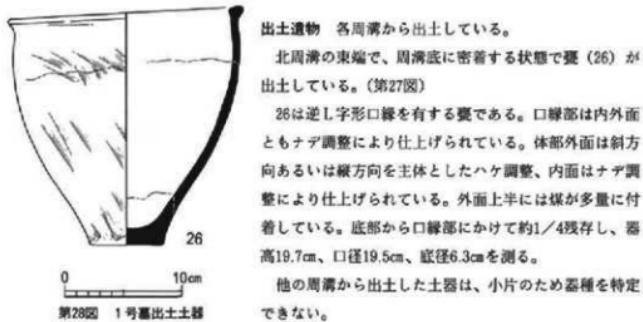
小口板は遺存状況が悪いため旧状は明らかではないが、現状では北東側（第26図-W2）が最大幅41.5cm、最大厚4.6cm、現存高32.3cm、南西側（第26図-W3）が最大幅32.5cm、最大厚3.7cm、現存高17.7cmを測る。いずれの面も加工痕等は不明であるが、両小口板とも木目に対して底が若干斜めに製材されており、両小口板とも木目の中心に向かって左側が下がっている。樹種はヒノキと同定された（詳細は第4章第2節を参照）。また、両小口板とも年輪年代の測定を行ったが、資料の制約のため明らかにすることできなかった。



第26図 1号墓 棺材



第27図 周溝内土器出土状況



第28図 1号墓出土土器

出土遺物 各周溝から出土している。

北周溝の東端で、周溝底に密着する状態で甕(26)が出土している。(第27図)

26は逆L字形口縁を有する甕である。口縁部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。体部外面は斜方向あるいは綫方向を主体としたハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。外面上半には煤が多量に付着している。底部から口縁部にかけて約1/4残存し、器高19.7cm、口径19.5cm、底径6.3cmを測る。

他の周溝から出土した土器は、小片のため器種を特定できない。

2. 2号墓

概要 調査区のはば中央部、南端に位置する。I区とII区の調査によって全体が明らかとなつた。1号墓の北東、8号墓の南、16号墓の西に位置し、西周溝が1号墓東周溝を切っている。他に南周溝がSK01を切っている。

周溝 4辺とも検出した。北東隅と南東隅の2箇所で周溝が途切れている。また、北西隅と南西隅においても、平面的に狭くなるとともに周溝の周溝底より顯著に浅くなる傾向があり、各周溝中央部が最も深くなっている。その標高は、北周溝で5.50m、東周溝で5.60m、南周溝で5.30m、西周溝で5.40mと、南周溝・西周溝が低くなっている。

北周溝・西周溝・南周溝の3辺については全体を検出した。それぞれ断面逆台形を呈し、

北周溝で検出幅1.6m、底部幅1.0m、深さ10cmを測り、西周溝で検出幅1.1m、底部幅30cm、深さ20cmを測り、南周溝で検出幅1.3m、底部幅60cm、深さ25cmを測る。

各周溝とも、内側のラインはほぼ直線的であるのに対し、外側のラインは緩やかな弧をなす傾向が認められる。

東周溝は、I区とII区の境にあたり、調査時の排水用の側溝とほぼ重複するため、良好な状態では検出できなかった。

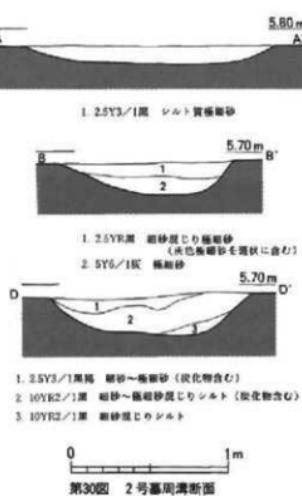
周溝内の埋土は、各周溝とともに黒色細砂ないしシルトが堆積していた。

この他、北西コーナーにおいて、周溝がある程度埋没した段階で掘られたと考えられる土壌（土壌1）を検出した。平面周囲長方形を呈し、その規模は85cm×45cmである。

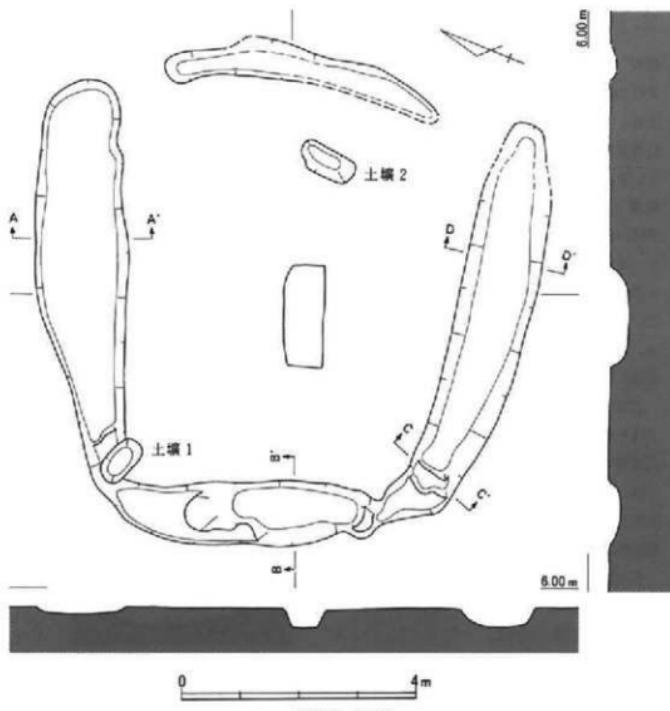
填丘 西周溝と東周溝はほぼ平行するが、こ



第29図 2号墓の位置



第30図 2号墓周溝断面



第31図 2号墓

の2辺に対して北周溝と南周溝は外側に開くようにのびている。このため、当周溝墓の平面形は台形に近い傾向にある。主軸方向は、主体部を基準にすると座標方向より 22° 振っている。南北方向で6.0m、その直交方向で7.0mを計る。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は、5.65mである。

埋葬施設 墳丘中央部で木棺墓を1基検出した。(第32図)

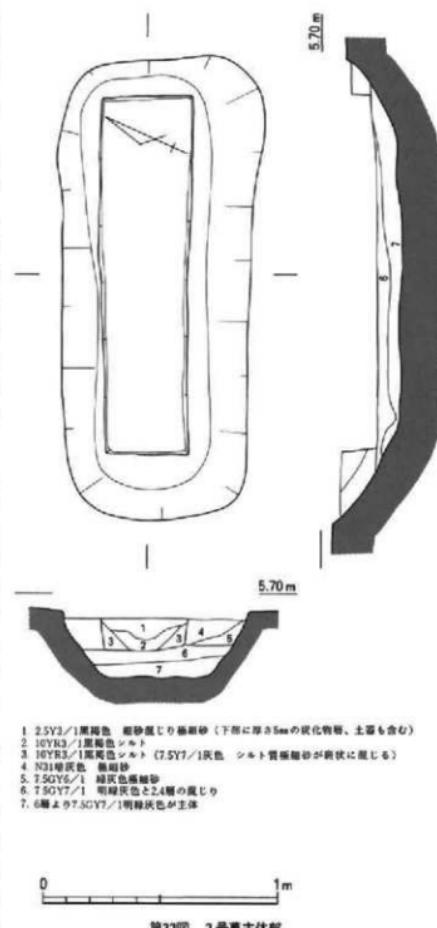
周溝墓のはば中央に位置し、長軸方向は北から 88° 東に振っており、周溝の北西辺、及び南東辺に平行する。木棺は棺材が残存していなかったが、土層の堆積状況によりその存在が想定

できた。その痕跡により、規模は長さ149cm、幅34cm、深さ13cmと推定できた。掘り方の規模は長さ195cm、幅81cm、深さ24cmを測る。

掘り方は東角がやや歪な隅円の長方形で、底は緩い船底状を呈し、その傾斜は小口側、長側側とも緩やかである。木棺は掘り方の方向とはほぼ一致しているが、やや北側に寄っているため棺と掘り方との間は南側の方が若干広い。掘り方の下側は上層からの染み込みがあったと思われ、明瞭でない。6層がそれに当たり、本来木棺を置く前に敷かれた層であるのか、單なる染み込みであるのか明確にできなかった。上層からの染み込みは図7層まで及んでいるが、これについては人為的な層ではなく、自然堆積層であるものと判断できた。木棺が置かれた後は4層・5層が裏込めとし

て入れられている。

出土遺物は木棺内から赤漆塗りの堅拂（W1）が出土した。棺内西側の底付近から出土しており、棺上ではなく棺内にあったもので、第4章第3節の脂肪酸分析にある「堅果植物」はこの樹である可能



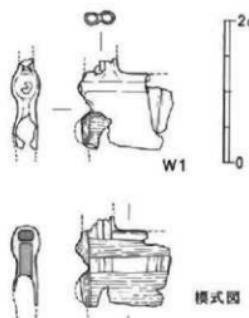
第32図 2号墓主体部

性がある。頭部に着装されていた可能性が高い。

この他、主体部と東周溝のほぼ中間部で土壌2を検出した。不定形な長楕円形を呈し、その規模は1m×50cmを測る。ただし深さは14cmと比較的浅い土壌である。土壌基等の可能性も考えられるが、断定はできない。



第33図 整櫛の名称



第34図 整櫛

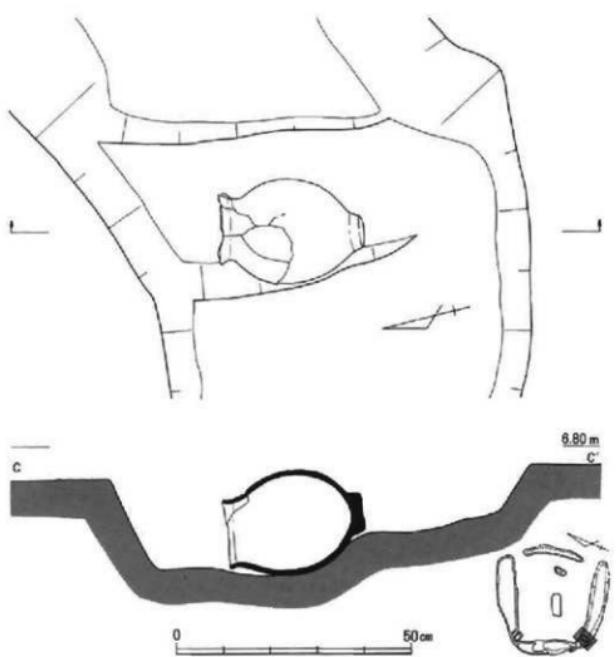
出土遺物 埋葬施設から整櫛と石器が、周溝内および土壌1より土器が出土している。

W1は赤漆塗りの結齒式整櫛である。基部の側面から把手部にかけてのみ残存しているため、全体の形態は不明である。破損部からの内部観察によると、黒漆が全面に存在することが窺え、表面の赤漆はその上に塗られたものであることが判る。

基部は横方向に走る上下2段の突帯からなる。上方の突帯は厚さ約4mmで丸く突出しているのに対し、下方の突帯は厚さ約3.5mmで若干膨らんでいるのみで平たい。側面方向では上方の突帯がほぼ本来の形状を留めており、約2mm突出している。破損部分から下方の突帯の内部構造が観察できるが、それによるとこの突帯は歯を束ねるために横方向の糸を側面において縦方向の糸によってまとめた部分であると推定される。上方の突帯については内部構造まで観察できないが、破損部分よりその断面が観察できる。それによると、基部内に通る歯の上方で横方向に通る断面長方形の痕跡があり、この横枠材によって基部の上端が抑えられたものと推定される。

把手部と、基部の上端部はほぼ直角に交わっており、側面に近い2本の歯は基部から把手部まで通っているように観察できる。

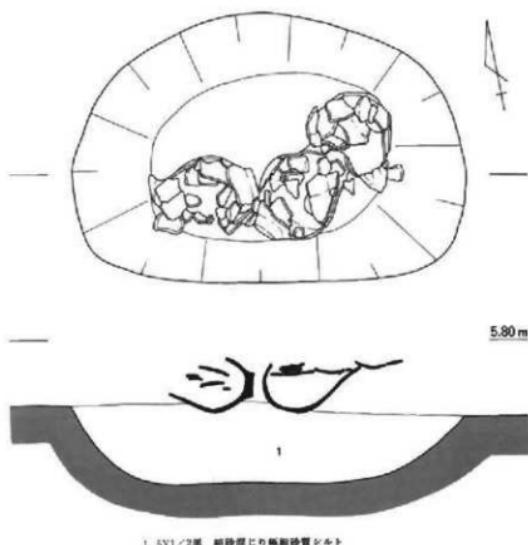
歯はすべて抜けているため詳細は不明であるが、痕跡から推定すると径約1.3mmで、現存部



第36図 周溝内土器出土状況

ではその抜け穴から4本が確認できる。そのうち、内側の2本は基部に対して斜めに傾いており、歯の全てが平行ではなかったことが判る。側面に近い2本の歯と内側の2本の歯の間には空間があるが、現状での外部観察によると漆が結まっており、歯は存在しなかったものと推定できる。

周溝内から出土した遺物では、南西コーナーより出土した30が特筆される。周溝底にあたかも横たえるかのように、口縁部を主体部の方に向けて置かれた状態(巻首図版3)で出土している。体部中央に最大径をもつ長脚気味の体部から頸部が短く直立気味に立ちあがり、口縁部をわずかに外反させている。全体的に磨滅が著しいため調整痕の観察は困難であるが、体部外面にヘラミガキあるいはヘラナデ調整の痕跡がわずかに認められる。他はナデ調整により仕上



1. SV1/2周 砂質混じり板面砂質シルト

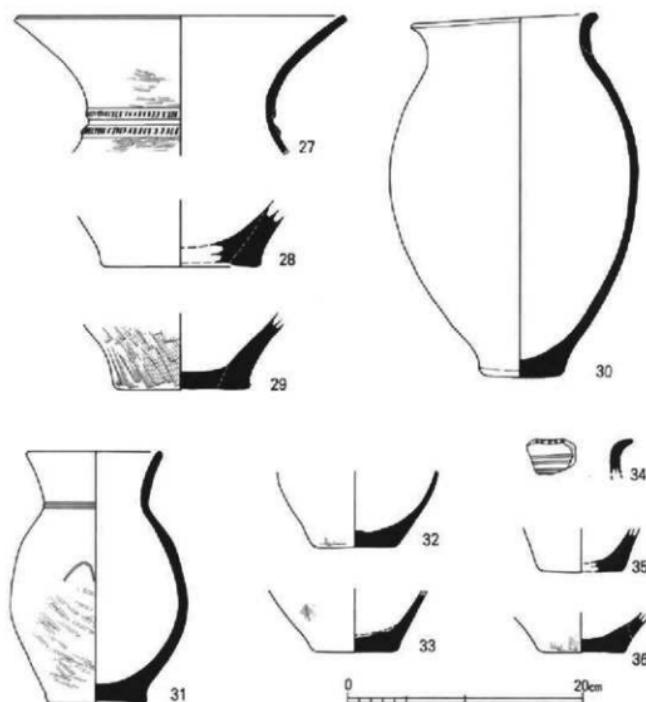
0 50cm

第36図 土器1出土状況

げられている。この土器は、一見したところ当遺跡出土の土器とは明確に異なるもので、色調も浅黄緑と他と異なる（巻首図版4）。これらの特徴から、この土器はいわゆる「擬朝鮮系無文土器」と判断できるのではないかと考えられる。詳しくは第5章第2節で検討する。ただし、胎土は砂粒を多く含み、他の土器とほぼ同様な特徴を示している。口径15.9cm、最大径21.2cm、底径7.1cm、器高30.8cmを測る。なお、三辻先生による分析では在地産との結果が得られている。また、清水氏による胎土分析でも他の土器と同じであるとの結果が得られている。

このほか周溝内からは炭化できたもので、壺口縁部（27）・壺底部（29）と壺の口縁部片（34）、そして底部（36）が出土している。

27は口縁部から頸部にかけて残存する広口壺である。頸部に2条の刻目突帯紋を貼付けてい



第37図 2号墓出土土器

る。内面の調整は磨滅が著しく観察できないが、外面はヨコ方向のヘラミガキによって仕上げられている。口径27.6cm、頸径15.6cm、残存高11.8cmを測る。

29は壺の底部である。外面は縦方向のハケ調整により、内面は板ナデ調整により仕上げられている。底径11.5cmを測る。

34はわずかに残存する口縁部片である。邊部に刻目が施されている。また頸部外面には4条+αのヘラ描沈線紋が施されている。

36はわずかに残存する底部片である。細片のため器種を特定できない。外面は縦方向のハケ

調整により仕上げられている。内面については磨滅が著しく、調整痕は観察できない。底径は7.3cmを測る。

この他固化できなかったものとして、生駒西麓窯の胎土を有する壺の体部片と、ヘラ描沈線による割り付け後貼付突帯を施した壺の体部片が出土している。

土壇1からは28・31～33・35の5個体分が出土している。このこれらの土器については、各土器がその場におかれた後その場で押しつぶされたような状態で出土している。(第35図)しかし、土器の劣化が著しかったため、土器取上げ後水洗した際に多くが損耗してしまった。

31は口縁部から底部まで残存する壺である。口縁部は直立気味であり、体部最大径は中位より下にあるなど、当該期に一般的な壺とは異なる特徴を示している。また、一見したところ胎土も他の土器と異なる。ただし、三辻先生による胎土分析では、在地窯との分析結果(第4章第1節)が得られている。頭部に2条+♂のヘラ描沈線紋が施され、体部上半部にもヘラ描による弧状の沈線がわずかに観察される。外面は、ヘラミガキによる仕上げがわずかに観察できるが、内面については磨滅が著しく観察できない。口径11.1cm、頸径8.8cm、最大径15.1cm、底径8.3cm、高21.3cmを測る。

32は、体部中位から底部にかけて残存する壺である。外面は縦方向のハケ調整により仕上げられているが、内面については観察できない。また、底部外面はヘラミガキにより仕上げられている。底径7.0cmを測る。

28は、わずかに残存する壺の底部片である。内外面とも調整痕等は観察できない。底径は13.5cmである。

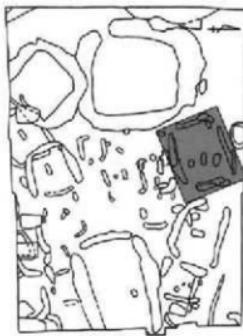
33は壺の底部と考えられる。外面は縦方向のハケ調整により仕上げられているが、内面は観察できない。底径6.6cmを測る。

35についても壺の底部と考えられる。内外面とも調整痕は観察できない。底径7.2cmを測る。

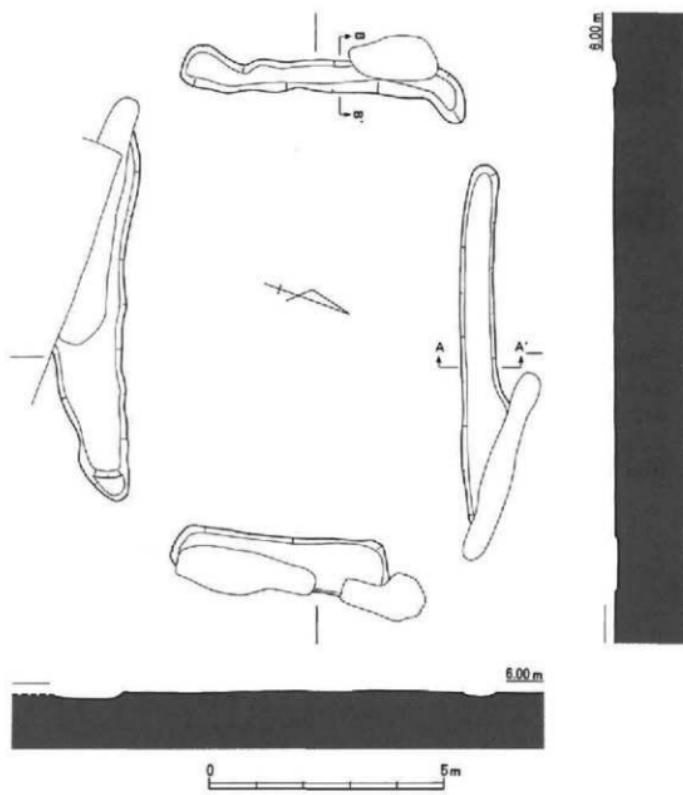
以上の他、主体部内からS5(第2図)の不定形石器(サヌカイト)が出土している。

3. 3号墓

概要 調査区中央、北端部に位置する。I区の調査によって全体が明らかとなった周溝墓である。5号墓の南、10号墓の北東、11号墓の西に位置する。4号墓とは同位置にて切り合い関係にあり、4号墓に切られている。4号墓とは墳丘の位置は基本的には同じである



第38図 3号墓の位置

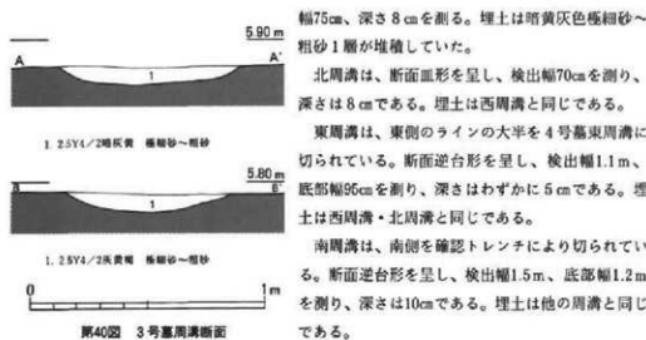


第39図 3号墓

が、主軸方向を時計回りに約20° 振る形で4辺の周溝がそれぞれ切られている。

周溝 4辺とも検出したが、連続せず4隅で途切れている。各周溝の平面形は、墳丘側はほぼ直線的であるのに対して、その反対側は一定していない。

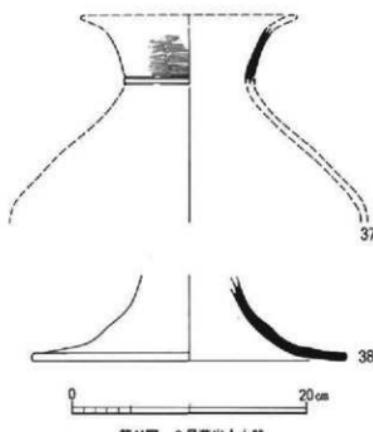
西周溝は北端部が墳丘側へ屈曲し、コーナーの一部を留めている。断面逆台形を呈し、検出



第40図 3号墓周溝断面

各周溝最深部の標高は、西周溝・北周溝・東周溝が5.70mであるのに対して、南周溝は5.60mとわずかに低くなっている。

墳丘 主軸方向をほぼ東西方向にとり、座標方向から約21°振っている。南北方向で7.5m、その直交方向で9.6mを測り、東西方向に長い長方形をなしている。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.80mである。



第41図 3号墓出土土器

埋葬施設 4号墓に切られていることもあり、木棺墓・土壤墓等は検出されなかった。

出土遺物 3号墓に伴う遺物は量的に少ない。全て周溝内から出土している。北周溝を除く各周溝から出土している。このなかで図化できたのは、東周溝出土の壺(37)と西周溝出土の38である。

37は壺の頸部の一節である。下端に削出し突起1条が残存している。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。

38は壺の口縁部である。外面は磨滅が著しく調査は不明であるが、内面はナデあるいはハケ調整により仕

上げられている。口縁部内面にわずかに煤の付着が認められる。

この他、図化できなかったが、南周溝で壺の体部片と底部が出土している。

4. 4号墓

概要 調査区中央、北端部に位置する。3号墓と同じ位置にあるが、3号墓とは切り合い関係にあり、周溝の主軸方向を約20° 進めて3号墓を切っている。

周溝 4辺とも検出したが、各周溝とも周溝の一部が部分的に小溝あるいは土壤の形で残存する程度である。

西周溝は、 $1.0 \times 1.9\text{m}$ の不定形な土壤である。断面里形をなし、深さは 6 cm である。溝は、検出幅 1.0 m を測り、深さは 10 cm である。

東周溝は、長さ 3.0 m の溝と、その北側の土壙を検出した。この土壙は壁形に屈曲し、コーナーをなす。コーナー部が最も深く 2段に掘り込まれており、深さは 14 cm である。

北周溝は断面逆台形を呈し、検出幅 60 cm を測り、深さは 10 cm である。

南周溝は、南側を確認調査により欠く。墳丘側のラインは直線的であるが、その反対側はゆるやかなカーブをなしている。検出幅は明らかにできないが、他の周溝よりは広い傾向にある。深さは 5 cm である。

墳丘 主軸方向はほぼ東西方向をなし、座標方向より約 1° 振っている。南北方向で 0.1 m、その直交方向で 11.4 m を測り、東西方向に長い長方形を呈する。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は 5.80 m である。

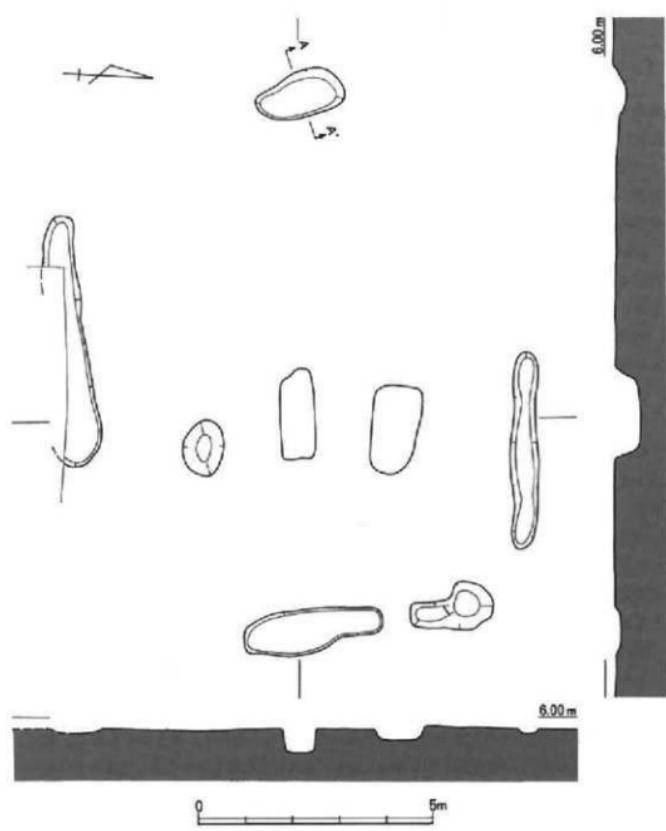
埋葬施設 木棺墓 2基（1号主体部・2号主体部）と土壤墓 1基（3号主体部）を検出した。

1号主体部

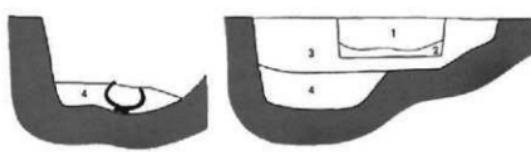
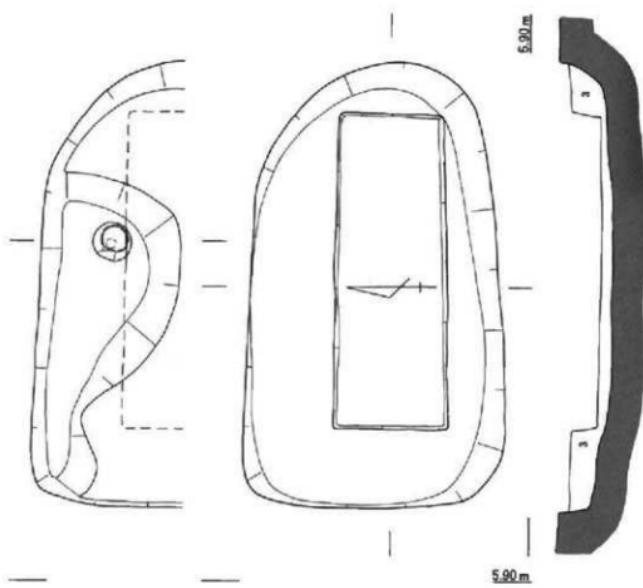
周溝に囲まれた範囲のやや東寄りに 1号主体部・2号主体部・3号主体部の 3基が並列しているが、その中で 1号主体部は最も北側に位置する。主体部である木棺は長軸の方向が北から約 90° 東に振っており、周溝の北辺及び南辺に平行する。木棺の棺材は遺存していなかったが、検出時における痕跡から推定すると、その規模は長さ 131 cm、幅 45 cm、深さ 16 cm を測る。掘り方の規模は長さ 188 cm、幅 106 cm、深さ 22 cm を測る。木棺は小口板を地中に差し込まれていない箱形の組合せ式木棺で、埋土は上下 2層に分かれれる。



第42図 4号墓の位置



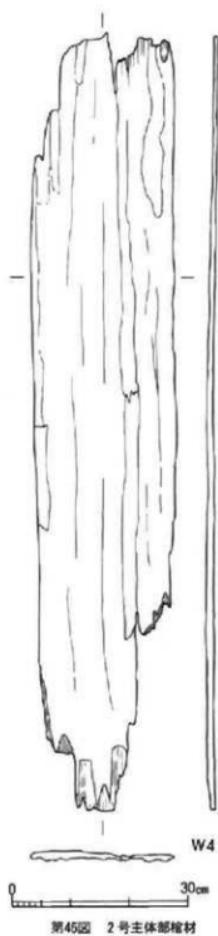
第43図 4号墓



1. N4／灰色 磨耗～極細砂
 2. N3／暗灰色 シルト質粘土質砂じり細砂
 3. 2.5Y4／1黄灰色 シルト質粗砂～の砂
 4. N3／暗灰色 シルト質粗砂

0 1m

第44図 1号主体部



第45図 2号主体部棺材

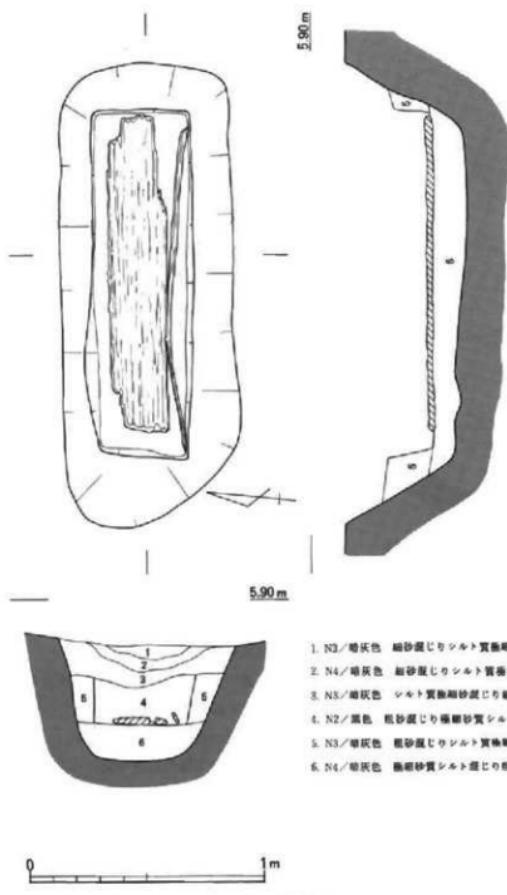
掘り方の平面形は長方形であるが、東側の隅が丸まっている。全体にやや歪な感がある。掘り方内の木棺の位置はやや南東に寄っており、北側に空間が多い。埋土は第44図3層であるが、理論的には木棺を安置する前に底に敷かれた層と木棺が置かれた後に充填された木棺の側面にある層との区別が可能であるが、現場では観察できなかった。おそらく同じ土を使用したために分離が困難であったものと推定される。

また、掘り方の下からは掘り方の北側長側辺に接して不定形の土壙が検出された。水位が遺構の時期より調査時の方が高くなつたためか湧き水が多く、土壤の検出にあたっても困難を極めた。そのため平面形がある程度歪になつた可能性も否定できない。この土壤が掘削された時期は木棺との切り合い関係から木棺が安置される以前であると判断できるが、同時であるのか、あるいは墓壙が掘削される以前から存在した土壤で、土壤が一度埋まつた後に無意識に墓壙が掘削されたのかは明らかにできない。しかし、墓壙と土壤の北辺が揃っていること、および墓壙以外ではこれだけ深く掘削された遺構は存在しないことから、墓壙を掘削するのと同時に掘削された可能性が高い。なお、この土壤内の東寄りからは完形の無頬窓(44)が1点、口縁部を上にしてほぼ正置され、底を土壤の底に密着させた状態で出土している。(図版10)

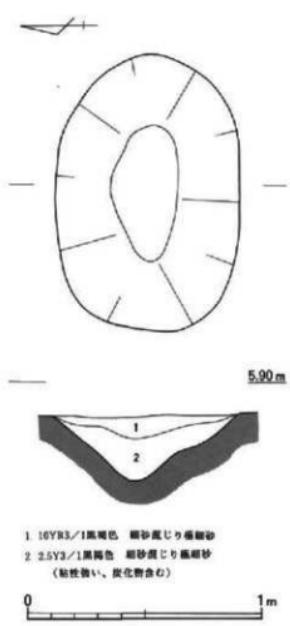
木棺内の脂肪酸分析の結果、ヒト遺体の埋葬であったことが判明した。(詳細は第4章第3節参照)

2号主体部

周溝に囲まれた範囲のやや東寄りに並列する1号主体部・2号主体部・3号主体部の3基の中で、中央に位置する。主体部である組合せ式箱形木棺は長軸の方向が北から約85°東に傾っており、周溝の北辺及び南辺に平行する。木棺の規模は木棺の痕跡から長さ148cm、幅44cm、深さ33cmと推定される。掘り方の規模は長さ197cm、幅74cm、深さ48cmを測る。



第46図 2号主体部



第47図 3号主体部

木棺は、底板（第45図-W4）と南側長側板の一部が遺存していたが、遺存状況は悪い。長側板は裏込めとして充填された埋土の重みにより内側に押し出されており、木棺の内側に向かって弓状に彫曲する。組合せ方は遺存が悪いため明確にできなかった。

底板（W4）は現状で長さ131cm、幅25cm、厚さ1.8cmを測るが、本来の面を残しているものはない。樹種はヒノキと同定された（詳細は第4章第2節を参照）。長側板はかなり遺存状況が悪いため写真、実測図共に掲載せず、樹種のみ同定を依頼し、その結果ヒノキと同定された（詳細は第4章第2節を参照）。

掘り方は平面形が歪な長方形を呈し、壁面は緩く傾斜し、底は比較的平らに仕上げている。埋土は第46図6層を、木棺を置く以前に敷き、木棺を置いた後に5層で周囲を充填している。木棺は3層で埋められるが、木棺によってできた空間のため全体に下方に座んでいる。1層・2層は埴丘の盛土の一部が落ち込んだ可能性もあるが、本来の木棺の高さが不明であるため、明確にできない。

脂肪酸分析の結果、ヒト遺体の埋葬であることが判明した（第4章第3節を参照）。

3号主体部

周溝に囲まれた範囲のやや東寄りに並列する3基の主体部の中で南端に位置する。平面形は長軸58cm、短軸43cmの橢円形を呈しており、底はすり鉢状で中央部が最も深く、27cmを測る。長軸は1号主体部、2号主体部と同じく周溝の北辺及び南辺に平行している。

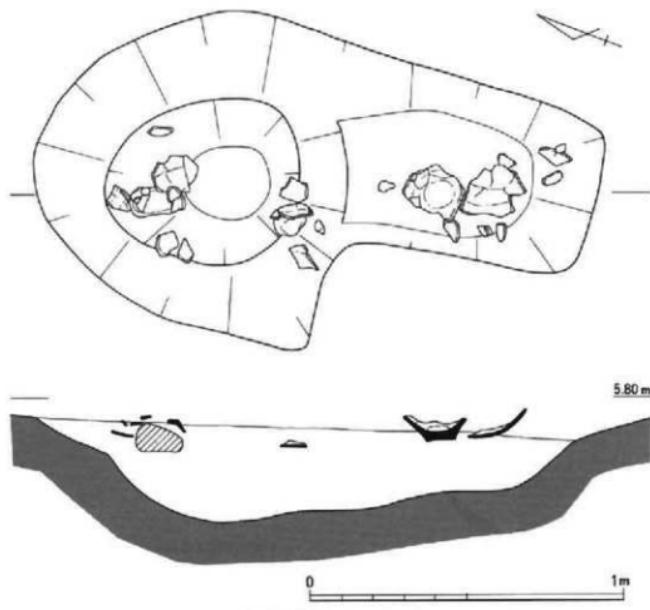
人体の埋葬された痕跡は確認できなかったが、埋土の下層に粘性の強い、炭化物を含む層があり、またその層について脂肪酸分析の結果、ヒト遺体の埋葬と判断されたため（詳細は第4章第3節を参照）、周溝墓に伴う土壌墓であると推定した。土器片が出土したが、小片であり、偶発的な混入に伴うものと判断できる。

出土遺物 各周溝内および各主体部から出土している。

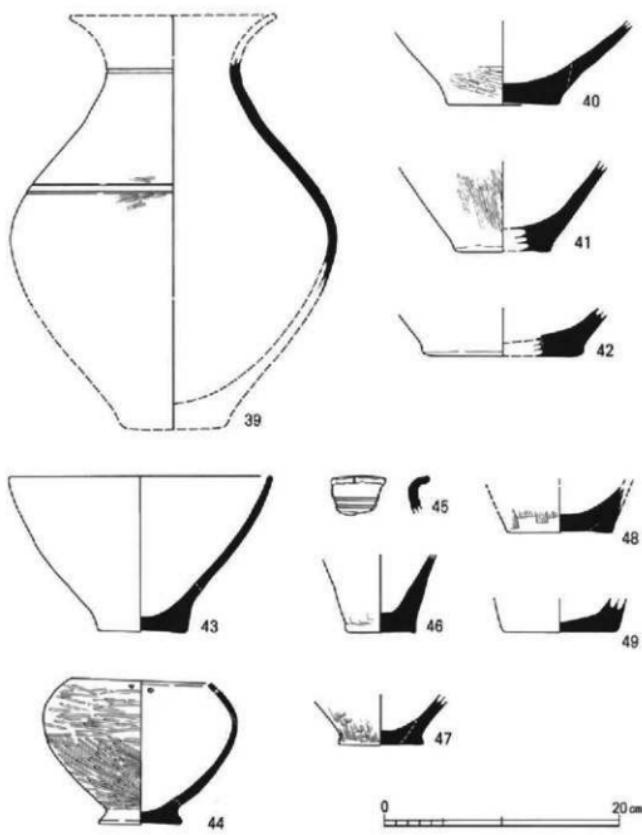
まず西周溝内からは、壺の底部と鉢が出土している。図化できたのは、ほぼ完形に近い鉢

(43) のみである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。外面とも磨滅しているため調整痕等の詳細な観察は困難であるが、両面ともナデ調整により仕上げられているようである。口径22.1cm、底径7.5cm、器高13.1cmを測る。

南周溝からは、壺と壺の底部が出土している。図化できたのは、42・46・47の3個体である。42は壺の底部である。底部から体部への変換部を指押さえにより整形している。底径は13.7cmである。46は壺の底部と考えられる。底部はナデ調整により仕上げられているが、他については磨滅のため観察できない。底径5.9cmを測る。47も底部であるが、器種を特定できない。外面を縱方向のハケ調整により仕上げている。また底部はへら削りにより仕上げられている。また底部端部を外方へつまみ出すように指押さえを施しているが、この特徴は44の無頸壺の底部



第48図 東周墳出土状況



第49图 4号墓出土土器

の造り方と類似する。底径は7.4cmである。

東周溝のうち、南側の溝からは壺の底部（48）が1個体出土している。外面を縦方向のハケ調整により、内面および底部をナゲ調整により仕上げている。底径は9.0cmである。

東周溝北東コーナーの土壤からは、壺と甕が数個体分出土している。39は、頸部から体部中位付近まで残存する壺である。体部中位よりやや上に削出し突帯を有し、頸部にヘラ描沈線紋が1条残存する。外面にヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。復元最大径は27.7cm、頸径は11.4cmである。40は壺の底部である。内面の調整は不明であるが、外面はヘラミガキにより仕上げられている。39と同一個体の可能性も考えられる。底径は9.5cmである。41も壺の底部である。内面をナゲ調整により、外面を縦方向のヘラミガキにより仕上げている。底径は8.2cmである。49は甕の底部と考えられる。内外面とも磨滅が著しく調整痕は観察できない。底径は9.6cmである。45は甕の口縁部である。口縁部は如意形を呈し、端部に刻目が施されている。頸部に2条のヘラ描沈線紋が認められる。

北周溝からは、壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。このなかで、壺の体部片に生駒西麓産の胎土を有するものが認められた。

主体部に伴う土器としては、1号主体部から44の無頸壺が出土している。口縁部の一端を欠くものの、ほぼ完存する土器である。上半に最大径をもち、底部は平底をなす。底部は他の壺や甕とは異なり、外側に踏ん張る特徴をもつ。口縁部には2孔一対の紐孔が2箇所に穿たれていて、口縁部から体部は全体的に器壁が薄く仕上げられ、内面をナゲ調整、外面をヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。また胎土についても当該期の土器と比べて大変精良で、2～3mm大の砂粒を殆ど含まない。口径12.0cm、最大径16.

4cm、底径6.8cm、器高12.3cmを測る。

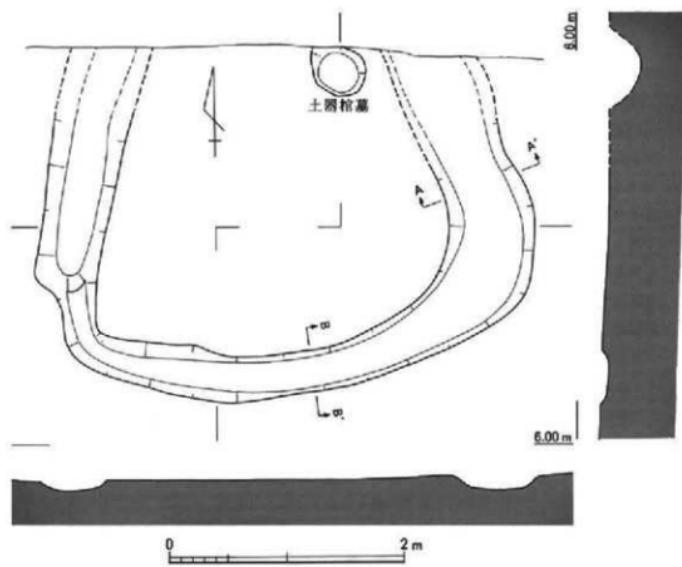
以上の他、東周溝の北東コーナーからS3（第164図）の楔形石器（サスカイト）が出土している。

5. 5号墓

概要 調査区内中央、北端部に位置する。一部が北側の調査区外までのびるため、検出できたのは全体の約3/4である。3号墓・4号墓の北側に位置する。4号墓北周溝の遺存状況が良好であったならば、5号墓と4号墓は切り合い関係にあったものと考えられる。ただし、その前後関係については明確にしえない。墳丘の主軸方向は、4号墓とほぼ同じである。

周溝 3辺を検出した。3辺は途切れることなく連続





第51図 5号墓



1. 7.5Y 2/1 売土 シルト質粗砂
2. 7.5Y 5/1 売土 シルト質中・粗砂
1. 2.5Y 5/1 売土 シルト質じり粗砂～細砂
0 50cm
第52図 5号墓周溝断面

しているが、南西コーナー付近は平面的に幅が狭くなっている。西周溝と東周溝は直線的であるが、南周溝は全体的に緩やかなカーブを描いている。

3辺とも断面逆台形を呈する。検出幅・深さは、西周溝で60cm・15cm、南周溝で45cm・10cm、東周溝で65cm・20cmである。埋土は東周溝で2層に分かれるが、いずれもシルト質砂で大差ない。

また、各周溝における最深部の標高は西周溝で5.60m、南周溝で5.75m、東周溝で5.60mを測り、南周溝が他の周溝より若干高い傾向にある。

墳丘 3辺ともその主軸方向を異にしているため、墳丘の平面形は台形を呈している。このため、主軸方向を明

確にし得ないが、ほぼ南北方向を指向する。東西方向で3.75mを測る。南北方向については、北側が未検出であるため明らかにし得ないが、検出した規模は2.7mである。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.71mである。

埋葬施設 木棺墓は検出できなかつたが、土器棺墓を1基検出した。

調査区内で確認できた周溝の中心より北東部の位置から検出された土器棺墓である。調査の進行上任意に設定した側溝から検出されたもので、本来の造構面からは大きく下がっており、土壤として平面で検出できたのは土壤の底付近のみである。

土器棺は広口壺（50—第54図）を利用している。口縁部の方向を北から西へ28°の方向に振っており、口縁部を若干上方に向いているが、ほぼ横位に寝かせている。

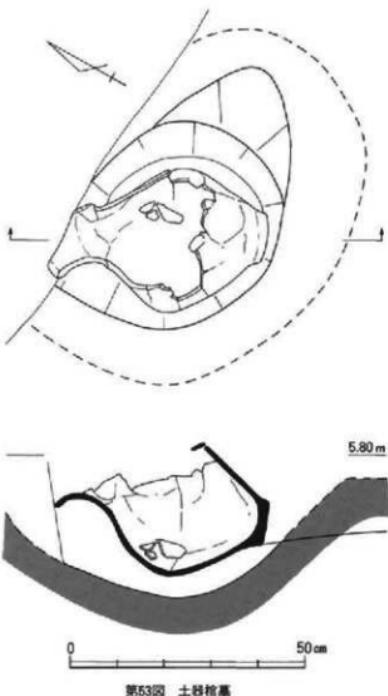
土壤は長軸を北から東に87°の方向に振っており、規模は長軸62cm、短軸40cm、深さは土器棺の状況から少なくとも40cmはあったものと推定される。

検出面での土器の長軸方向と土器棺の主軸方向とは異なっており、土壤長軸方向に対して土器棺主軸方向は北側に約65°振っている。埋土は、粘性の強い暗灰色シルト質細砂の1層である。

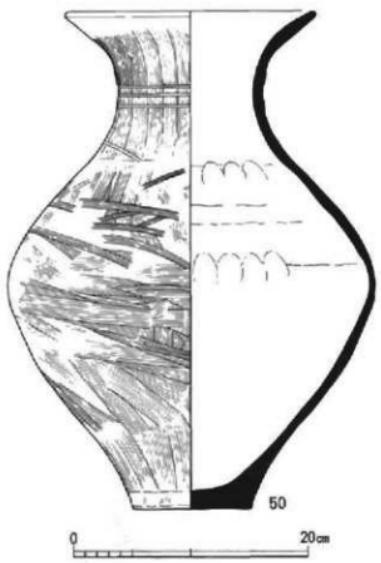
出土遺物 西周溝と土壤内から出土している。

西周溝から出土した土器は、周溝底に密着した状態で出土している。ただし、細片のため底部片と判断されるが、器種は特定できない。また、図化もできなかった。

土器棺に転用された土器（50）は、広口壺に分類される大型の壺である。体部中位まではほ



第53図 土器棺墓



第54図 土器館

ほぼ完存するが、体部中位から口縁部にかけては約1/2残存するのみである。体部から頸部までを縦方向、体部中位を横方向、中位以下を縦方向のハケ調整により仕上げている。そしてこのハケ調整の後、頸部に3条のヘラ描沈線紋が施されている。体部内面はナデ調整より仕上げられている。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。口径21.3cm、頸径12.4cm、体部最大径31.3cm、底径10.0cm、器高42.1cmを測る。

この他、土器館墓内よりS1(第164)の石鎧(サスカイト)が出土している。

6. 6号墓

概要 調査区のはば中央や北よりに位置する。I区の調査で全体を検出した。3号墓・4号墓の南側、7号墓の北側、12号墓の西側に位置する。7号墓と12号墓とはそれぞれ切り合い関係にあり、両墓を切っている。4号墓との切り合い関係については、両墓とも残存状況が良好ではないため明確にし得ない。

周溝 北東コーナー・南西コーナー・北西コーナーの3箇所のコーナーと、西周溝の一部と考えられる土壤を検出した。

北東コーナーは、鏡形に屈曲する溝で、埴丘側のラインはほぼ直角になっている。東周溝側のほうが一段(6cm)深くなっている。北周溝側は断面逆台形を呈し、検出幅1.75m、底部幅1.20m、深さ20cmを測る。東周溝側の深さは12cmである。

南西コーナーも鏡形に屈曲する溝である。ただし、北東コーナーと比べて直角ではなく、絞

角に屈曲している。南周溝側がよく残存し、西周溝側より一段(5cm)深くなっている。南周溝側は断面逆台形を呈し、検出幅65cm、底部幅20cm、深さ15cmを測る。

北西コーナーは、7号墓北周溝に大半を切られてい るため、西周溝及び北周溝の墳丘側のラインを検出したにとどまる。西周溝側の断面は逆台形を呈し、検出 幅80cm、底部幅40cm、深さ15cmを測る。埋土は3層か らなり、下層は自然堆積による黒褐色シルト質砂、中・ 上層は墳丘盛土の流れ込みによると考えられるシルト 混じり砂が堆積していた。

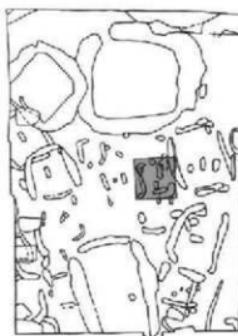
この他、北西コーナーと南西コーナーを結ぶ延長線上にある土壤についても、その位置関係から、西周溝の深い箇所が残存したものと判断した。ただし、この 土壤については、主軸方向が西周溝の方向と異なる点が 気になる。最も深い部分が残存したためと判断すれば問 題ないが、当周溝落とは無関係である可能性も否定しま せんことを明記しておく。平面形は隅丸方形を呈し、 その規模は1m×1.4mである。断面皿形を呈し、深さ は7cmである。埋土は北西コーナーの埋土下層と同じで ある。

墳丘 墳丘の主軸方向は、主体部の主軸を基準とするとほぼ東西方向を指向し、座標方向より 5°振っている。南北方向で5.4m、東西方向で6.8mと、東西方向に長い長方形をなす。ただ し、北東コーナーの北周溝側と北西コーナーの北周溝側の方向は一直線とはならず、全体的に 歪んでいる。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.76mである。

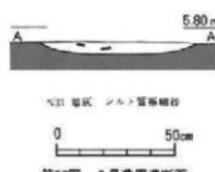
埋葬施設 墳丘中央部東側で木棺墓を検出した。

周溝の状況はあまり明瞭ではないが、鏡形に屈曲する部分を周溝のコーナーとすると主体部 の位置は周溝墓の中心からやや東に偏った場所にあたる。主体部である木棺は長軸の方向が北 から約85°東に振っており、周溝の北辺及び南辺に平行する。木棺の規模は内法で長さ105cm、 幅37cm、深さ5cmを測る。木棺材の厚さは痕跡で測ると小口板が2cm、長側板が2cmであるが、 本来はさらに厚かったものと想定される。掘り方は平面形が隅丸長方形で長さ125cm、幅60cm を測る。棺の大部分が削平されており、木棺底から約5cmのみ残存していた。

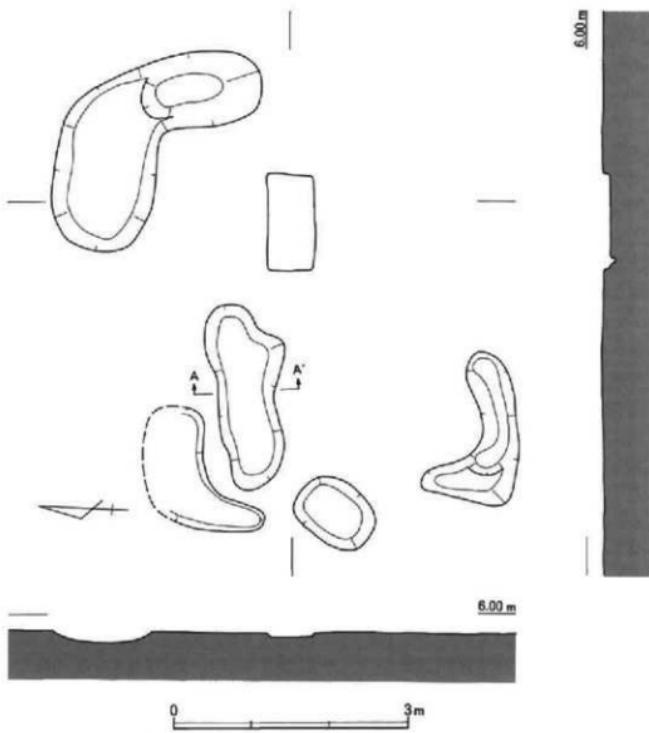
木棺は組合せ式箱形木棺である。いずれの棺材も遺存していなかったが、両長側板と西側小



第58図 6号墓の位置



第59図 6号墓周溝断面



第57図 6号墓

口板については検出時においてその痕跡のみ確認できた。小口穴は西側については確認できたものの、東側については確認できなかった。西側小口穴の深さは棺底から約8cmを測る。小口板が差し込まれた後は第58図6層を埋めることにより小口板の安定が図られ、その後に木棺の裏込めとして第58図3・5層が埋められている。

脂肪酸分析の結果、ヒト遺体の埋葬であることが判明した。(詳細は第4章第3節を参照)
この他、北西コーナー内側で、幅1m、検出長3.15m、深さ6cmの溝状の遺構(土壤1)を

検出した。断面彫形を呈し、埋土は暗灰色シルト質極細砂の1層のみである。当遺構より比較的多くの土器片が出土している。以上の特徴から、埋葬遺構になる可能性は少ないものと考えられる。

出土遺物 北西コーナー・南西コーナー・土壤1から出土している。

北西コーナーからは、壺の体部片が出土しているが、細片のため図化できなかった。南西コーナーからも土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土壤1からは比較的まとまって出土している。壺が大半を占める。図化できたのは51~57の7個体である。

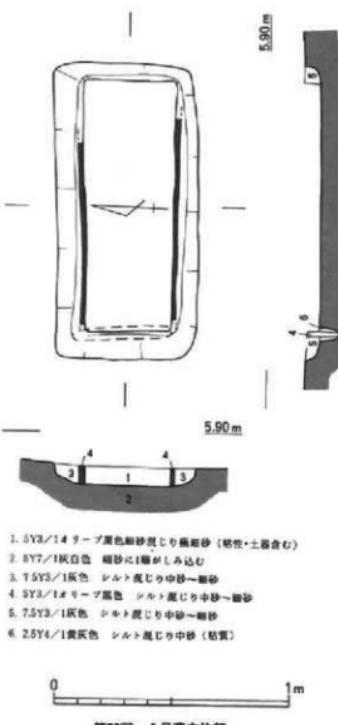
51は広口壺の口縁部である。外面を横方向の丁寧なヘラミガキ、口縁部内面および口縁端部をナデ調整により仕上げている。口径は20.6cmである。

52も広口壺の口縁部である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部に削り出し突帯を施し、突帯上に2条のヘラ描沈線紋が施されている。口径は16.7cmである。

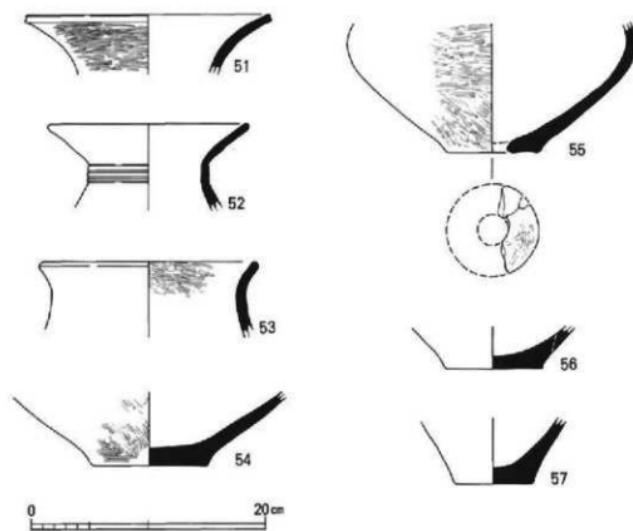
53は壺の口縁部である。51・52と比べて口縁部の傾きが少なく、直口壺に近い形態である。口縁部内面を横方向のヘラミガキ、頸部内面をナデおよび指押さえにより仕上げている。外面の調整痕については磨滅のため十分に観察できない。口径は17.9cmである。

54は壺の底部である。外面はハケ調整の後継方向のヘラミガキにより仕上げられている。また底部外面もヘラミガキにより仕上げられている。底径は10.2cmである。

55も壺の底部である。体部中位まで残存する。外面は上半を横、下半を斜方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面については観察できない。この土器は、底部を焼成前に穿孔さ



第58図 6号墓主体部



第59図 6号墓出土土器

れている。底径7.9cm、最大径24.8cmを測る。

56も壺の底部である。内外面とも磨滅のため調整は不明である。底径は8.4cmである。

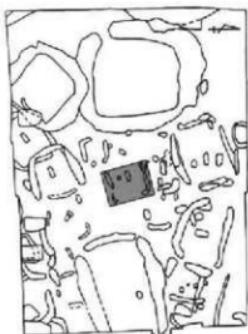
57は壺の底部と考えられる。内外面の調整は不明である。底径は6.5cmである。

この他、固化できなかった土器のなかに、いわゆる生駒西麓産の特徴を示す胎土をもつ土器片も出土している。

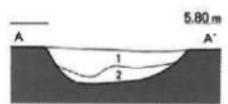
7. 7号墓

概要 調査区のはば中央に位置する。I区の調査で大半を検出していたが、一部II区の調査で明らかとなった。6号墓の南、8号墓の北東、12号墓の南西に位置し、北周溝の一部が6号墓南周溝に切られている。

周溝 北周溝と南周溝および東周溝の一部を検出した。



第60図 7号窓の位置



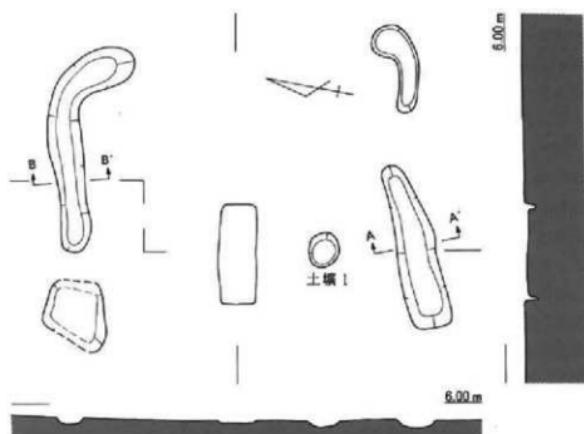
1. N21層 極細砂質シルト
2. 明輝灰 シルト混じり粗粒細砂質シルト



1. 淡灰 シルト質細砂質泥じり
底シルト質粗砂

0 50 cm

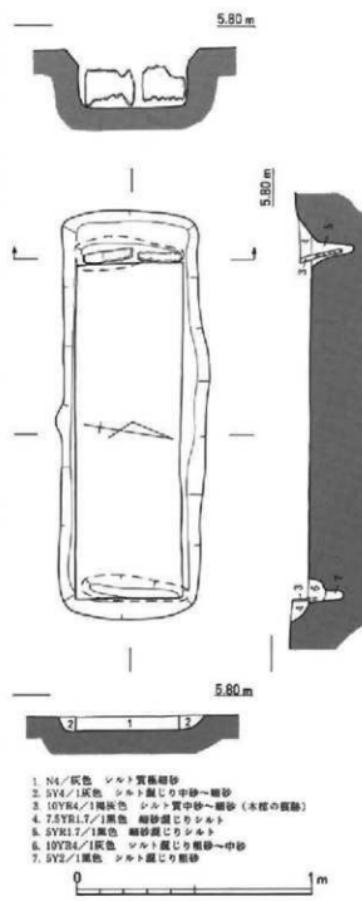
第61図 7号窓周溝断面



北周溝は、北東コーナーから鏡形に屈曲し西へのびる溝と、その西側に位置する土壤からなる。溝の幅は断面逆台形をなし、検出幅60cm、底部幅25cm、深さ15cmを測る。墳丘側の立ち上がりに比べてその反対側の方が急な傾向にある。埋土は2層からなり、上層が黒色極細砂質シルト、下層が明褐色シルト混じり黒色極細砂質シルトが堆積していた。特に下層については地山の土がブロック状に混ざっていることから、墳丘の盛土層が流れ込んだものと考えられる。

北周溝の一部をなすと考えられる土壤については、北東コーナーから伸びる溝の延長上にあるため、北周溝の深い箇所が土壤の形で残存したものと考えられる。ただし、当土壤は6号墓南西コーナーと位置的に重なり、この溝に切られているため、一部を検出したに過ぎない。平面は1m×1mの台形状を呈している。

南周溝は、南東コーナーをなす鏡形に屈曲する溝とその西側延長上にある溝からなる。コーナーをなす溝は幅40cmを測る。またその延長上にある溝は、断面皿形をなし、検出幅45cm、深さ12cmを測る。埋土は1層からなり、淡灰色シルト混じり灰色シルト質極細砂が堆積していた。この埋土は、北周溝の下層と対応するもので、墳丘の盛土が流れ込んだものと考えられる。



第63図 7号墓主体部

なお、北周溝と南周溝の最深部の標高はそれぞれ5.65m、5.55mと、南周溝の方がわずかに低くなっている。

墳丘 墳丘の主軸方向は、主体部を基準とするとほぼ東西方向を指向し、座標方向より約9°振っている。南北方向で5.6mを測る。東西方向については、西周溝が残存していないためその規模を明確にできないが、主体部の位置から判断して南北方向よりも長いものと考えられる。盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.70mである。

埋葬施設 墳丘中央部東側で木棺墓を1基検出した。

周溝との位置関係は、西周溝が不明であるため明確にはできないが、南北方向ではほぼ周溝の中心に位置する。主体部である木棺は長軸の方向が北から約81°東に振っており、北周溝の北辺及び南辺に平行する。木棺の規模は内法で長さ141cm、幅44cm、深さ6cm、棺材は西側小口板のみ残存しており、その厚さは最大で2.9cmを測るが、本来はさらに厚かったものと想定される。掘り方は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ173cm、幅63cmを測る。棺の大部分が削平されおり、底部から約6cmのみ残存していた。

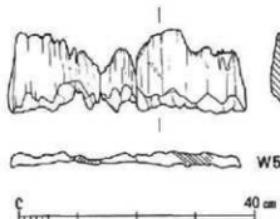
木棺は組合せ式箱形木棺で、兩小口板を木目方向に地中に差し込んだものである。西側小口板については、地中に差し込まれた部分のみ遺存していたが、東側小口板については検出時において痕跡のみ確認できた。小口穴の深さは、東側で15cm、西側で18cmを測る。西側小口板は遺存状態が悪いため2片に分かれているが、下部は残存状況から推定すると比較的直線的であったようである。

小口板が差し込まれた後は第63図5・6・7層が埋め込まれて小口板の安定が図られ、その後に2・4層が木棺の裏込めとして埋め込まれる。

残存した西側小口板（第64図-W5）は遺存状況が悪いため旧状は明らかではないが、現状では最大幅40.4cm、最大厚3cm、現存高14cmを測る。いずれの面も加工痕等は不明である。樹種はヒノキと同定された（詳細は第4章第2節を参照）。

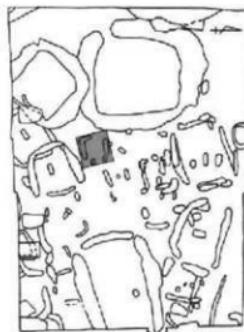
この他、主体部の南側、南周溝との中間部で平面円形の土壙（土壤1）を検出した。土器墓等の可能性も考えられるが、土器片がわずかに出土しただけである。規模は50cm×50cmで、深さは12cmである。

出土遺物 南周溝内からわずかに出土しているが、細片のため器種の特定も困難である。この他、南周溝よりS9（第165図）の磨製石斧（凝灰岩）が出土している。

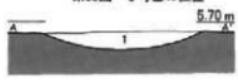


第64図 7号墓棺材

8. 8号墓



第65図 8号墓の位置



1. 10YR2/1黒 シルト質中・細砂

0 50cm

第66図 8号墓周溝断面

概要 調査区のはば中央部やや南側に位置する。1区の調査で明らかとなった周溝墓である。7号墓の南西、2号墓の北に位置するが、切り合い関係は認められない。

周溝 北周溝から東周溝にかけてL字形にのびる溝、西周溝の一部から南周溝にかけてL字形にのびる溝、そして東周溝の一部を検出した。各周溝とも他の周溝墓と比較して検出面からの深さが大変浅く、わずかに残存する程度である。埋土は各周溝とも黒色シルト質中・細砂の1層である。

北周溝は、断面逆台形を呈し、検出幅65cm、底部幅45cmを測り、深さは10cmである。

南周溝は、北周溝に比較して直線的である。特に填丘側のラインは直線的で、南西コーナーはほぼ直角になっている。断面皿形を呈し、検出幅70cmを測り、深さは15cmである。

東周溝は、周溝の最深部と考えられる土壤を検出したにとどまる。深さは10cmである。

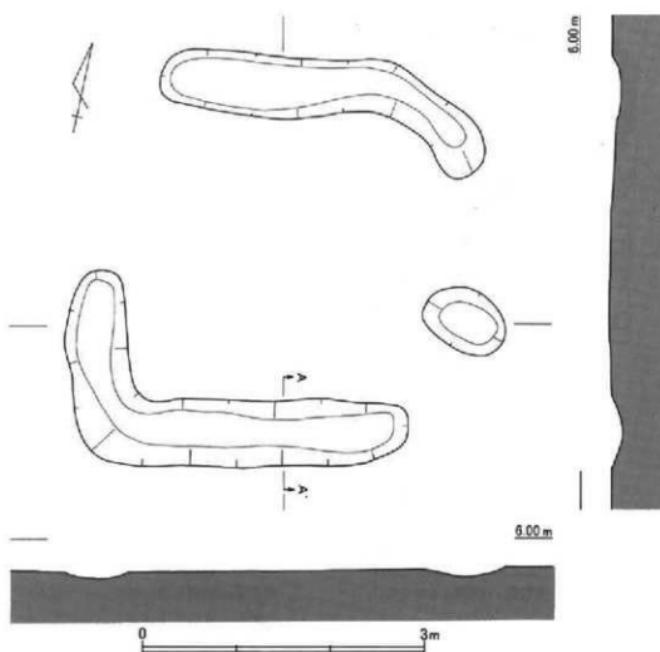
なお、北周溝と南周溝の最深部の標高はそれぞれ5.52m、5.55mとほぼ同じである。

墳丘 主軸方向は、南周溝を基準とするとほぼ南北方向を指向し、座標方向より約10°振っている。南北方向で3.3mを測る。その直交方向については、東周溝の痕跡と考えられる土壤を基準とすると3.5mとなり、東西方向にわずかに長い長方形となる。盛土は確認できなかった。

墳丘中央部における標高は5.64mである。

埋葬施設 なにも検出できなかった。

出土遺物 南周溝から土器片が出土しているが、器種・時期を特定できるものは出土していない。



第67図 8号墓

9. 9号墓

概要 調査区の南西部に位置する。I区の調査によって明らかとなった周溝墓である。南コーナーが調査区外にあたるほかは、ほぼ全体を検出した。1号墓の西、10号墓の南に位置し、両周溝墓を切っている。

周溝 4辺とも検出した。ただし、南コーナーが調査区外にあたるため、南西周溝と南東周溝については全体を検出できなかった。4辺は、南コーナーを除いては途切れることなく連続している。ただし、西コーナー及び東コーナーは平面的に幅が狭くなっている。特に西コーナーについては、底盤のレベルも著しく浅くなっている。

4辺とも墳丘側のラインは直線的であるが、その反対側のラインは緩やかな弧をなす傾向があり、そのラインは一定していない。また、周溝内埋土は各辺とも同じで、明褐色シルトを斑点状に含む黒褐色シルトが堆積していた。

南西周溝は2段に落ち込み、最深部の断面形は逆台形である。検出幅2.5m、深さ25cmを測る。北西周溝は断面皿形ないし逆台形を呈し、検出幅2.5m、深さ15cmを測る。北東周溝は断面皿形を呈し、検出幅3.0m、深さ25cmを測る。南東周溝は断面皿形を呈し、検出幅40cm~1.2m、深さ20~40cmと、南側ほど他の周溝より幅が極端に狭くなっている傾向にある。

各周溝の最深部の標高は、北西周溝で5.44m、南西周溝で5.30m、南東周溝で5.35m、北東周溝で5.40mで、南側ほど深くなる傾向にある。

墳丘 墳丘の主軸方向は、他の周溝墓とは大きく異なり、北西~南東方向を指向し、座標方向より約45°振っている。

北東~南西方向で8.8m、その直交方向で9.3mを測り、北西~南東方向にやや長い長方形をなす。特に、当周溝墓は周溝の墳丘側のラインが直線的で、互いに平行あるいは直交しているため、全体的に整った平面形をなしている。

なお盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.60mである。

埋葬施設 なにも検出できなかった。

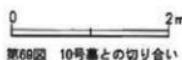
出土遺物 土器が北東周溝から北西



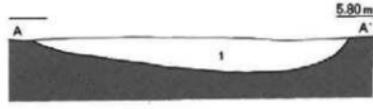
第68図 9号墓の位置



1. 2.5Y3/1黒褐 植物砂質シルト (9号墓周溝土)
2.N3/1灰シルト質粘土 (10号墓周溝土)



第69図 10号墓との切り合い

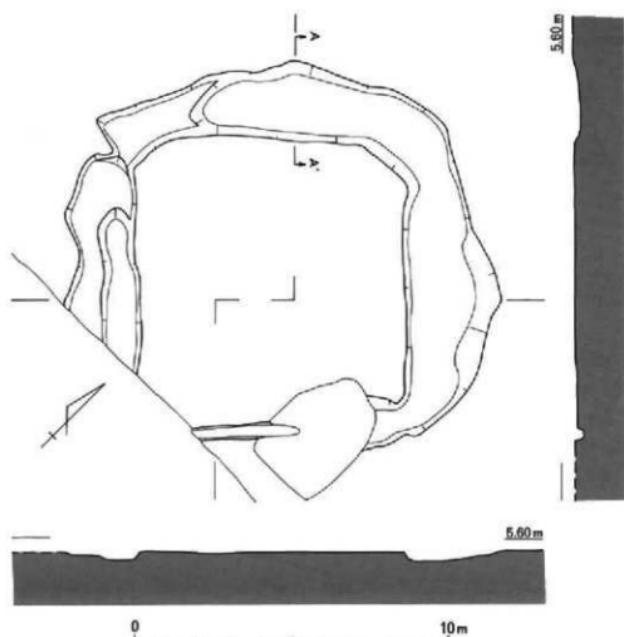


1. 2.5Y3/1黒褐 シルト (明褐色シルトを斑点状に含む)



第70図 9号墓周溝断面

周溝にかけて出土している。器種としては、壺・甕・底部が出土している。

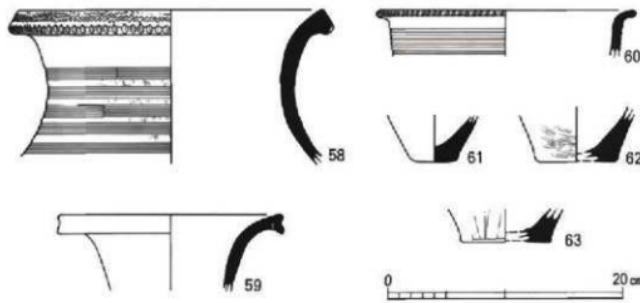


第71図 9号墓

58は広口壺の口頭部である。頭部から口縁部が外反気味に立ち上がり、端部を斜下方に拡張し、端面に3条の輪描波状紋を施している。また、下端部にも刻目を施している。頭部は縱方向のハケ調整により仕上げられ、6条からなる輪描直線紋が5帯認められる。内面はナデ調整により仕上げられている。口径25.8cm、頸径21.0cmを測る。

59は広口壺の口縁部である。口縁部下端は、斜下方につまみ出すような強いナデ調整により仕上げられている。また、下端部に刻目の痕跡が認められる。口径18.8cmを測る。

60は擾の口縁部である。口縁部は如意形をなし、端部に刻目を施している。また頭部には、縱方向のハケ調整の後5条のヘラ描沈線紋が施されている。外面全体に煤が付着している。口径21.2cmを測る。



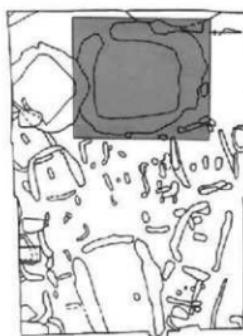
第72図 9号墓出土土器

61は底部である。体部の立ち上がりから、壺の底部の可能性が高い。内外面とも磨滅が著しく、調整痕は観察できない。底径は3.9cmである。

62も底部である。内面はナデ調整により、外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。外面を磨いていることから、壺の可能性も考えられる。底径は6.6cmである。

63も底部である。内面をナデ調整、外面を縦方向の板ナデあるいはヘラナデ調整により仕上げている。底径は7.6cmである。

10. 10号墓

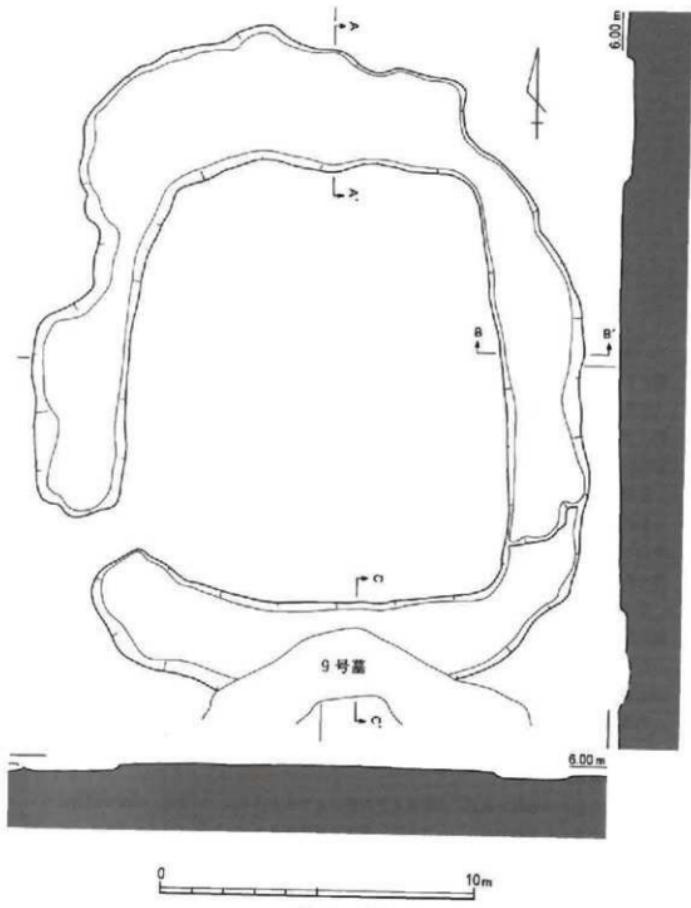


第73図 10号墓の位置

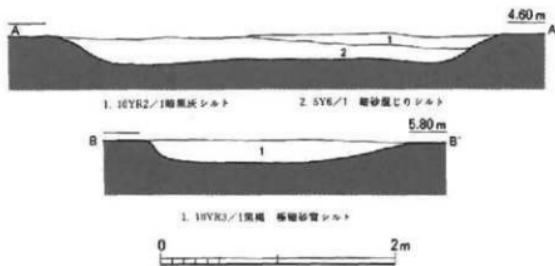
概要 調査区の西側に位置する。I区の調査で検出した周溝窓で、全体を検出することができた。9号墓の北、6～8号墓の西に位置する。南周溝が9号墓に切られている。(第69図)また、西周溝がS D01とほぼ平行し、肩部を接している。

周溝 4辺とも検出した。南西コーナーは途切れているが、他は連続している。ただし、北東コーナーと南西コーナーは平面的に異なる傾向が認められる。9号墓同様、4辺の周溝とも墳丘側のラインは直線的であるが、その反対側のラインは弧を描く傾向があり、そのラインは一定していない。

4辺とも断面は逆台形ないしそれに近い形態をなすが、墳丘側ほど立ち上がりが急になる傾向が認められ



第74圖 10號墓



第75図 10号墓周溝断面

る。埋土は2層からなる箇所も認められたが、基本的には灰色～黒褐色砂質シルト層1層が堆積していた。

西周溝は、検出幅3.1m、底部幅2.5m、深さ20cmを測る。北周溝は、検出幅4.2m、底部幅3.6m、深さ25cmを測る。東周溝は、検出幅2.7m、底部幅2.1m、深さ20cmを測る。南周溝は、検出幅3.0m、深さ25cmを測る。

各周溝最深部の標高は、西周溝で5.53m、北周溝で5.60m、東周溝で5.55m、南周溝で5.50mを測り、南側ほどわずかに低くなる傾向にある。墳丘の主軸方向は、南北方向を指向する。南北方向で14m、東西方向で12.3mを測り、南北方向にやや長い長方形をなす。南周溝・東周溝を基準とすると、座標方向より約3°振っている。

なお、盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.86mである。

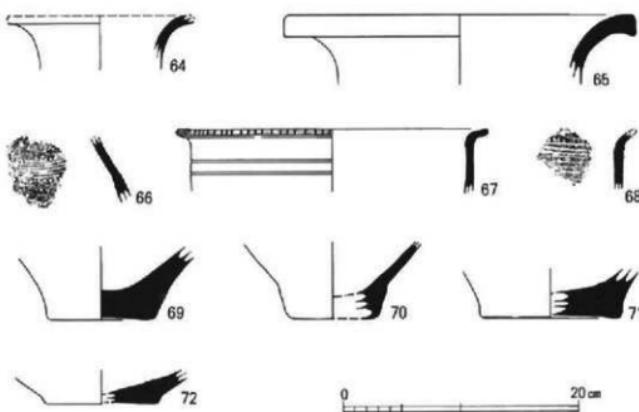
埋葬施設 全く検出できなかった。本来は、墳丘の規模から判断して、複数の埋葬施設が存在したものと考えられる。

出土遺物 各周溝から出土している。

西周溝からは壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

北周溝からは壺・甕・底部が出土している。このなかで図化できたのは、64・67・68・70の4個体である。

64は広口壺の口縁部である。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面の調整については磨滅が著しく観察できない。70と同一個体の可能性もある。口径は15.6cmである。67は底部である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。底径は9.2cmである。68は甕の口縁部である。口縁部は如意形をなすが、端部を欠いている。頸部に7条のヘラ描沈線紋が施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。70は底部である。外面は指揮さえにより仕



第76図 10号墓出土土器

上げられているが、内面の調整痕は磨滅が著しく観察できない。底径は7.3cmである。

東周溝からは、壺と甕と底部片が出土している。このなかで、図化できたのは65と66の壺に限られる。

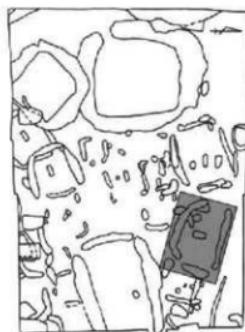
65は広口壺の口縁部である。口縁端部を拡張し、外端面をもつ。内外面とも調整痕は観察できない。口径は29cmである。66は壺の体部上半の小片である。5条のヘラ描沈線紋が施され、その上段と下段に竹管紋が列状に施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。

南周溝からは壺・甕そして底部が出土している。このなかで図化できたのは、67・71・72の甕と底部に限られる。

67は甕の口縁部である。口縁部は如意形をなし、端部に刻目が施されている。また、頭部にはナデ調整後2条のヘラ描沈線紋が施されている。内面の調整痕は観察できない。口径は26cmである。71は底部である。調整痕は内外面とも磨滅が顕著なため観察できない。底径は11.8cmである。72も底部である。体部の立ち上がり角から判断して、壺の底部と考えられる。内外面とも調整方法は不明である。底径は9.5cmである。

以上の他、西周溝からS8(第165図)の石底丁未製品(粘板岩)が出土している。また、南周溝からはS11(第165図)の分割跡(凝灰岩)が出土している。

11. 11号墓

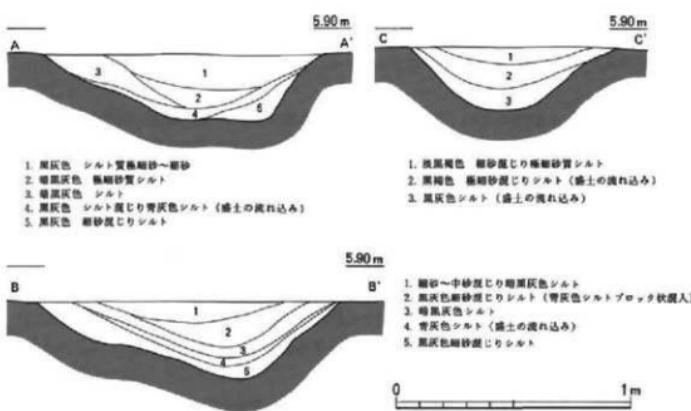


第77図 11号墓の位置

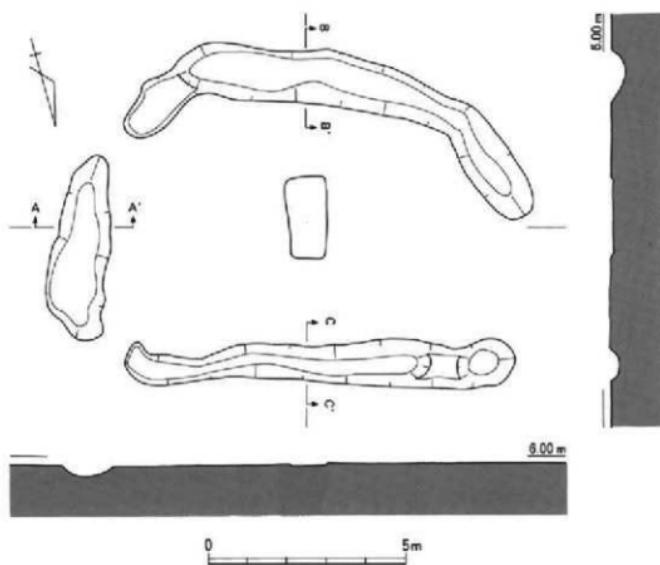
概要 調査区の北東部に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓で、ほぼ完全な形で検出することができた。3・4号墓の東、12号墓の北東、14号墓の西にそれぞれ位置し、14号墓とは当周溝墓の東周溝を共有している。この他、SK02・SK04・SK05と切り合ひ関係にあり、これらの土壤を切っている。

周溝 西側を除く3辺を検出した。ただし、3辺は連続せず途切れています。

北周溝はほぼ直線的であるが、両端部の墳丘側のラインは墳丘側に鈍角に屈曲する傾向が認められ、コーナーの一部をなしている。なお、西端部は土壤状に深くなっている。検出面からの深さは30cmを測り、その標高は5.44mである。この土壤状の落ち込みの東側が若干浅くなるが、それ以東は当周溝中央部を中心に深くなる傾向にある。中心部における断面形は逆台形をなし、検出幅85cmを測り、深さは27cmである。埋土は3層からなり、下層は自然



第78図 11号墓周溝断面

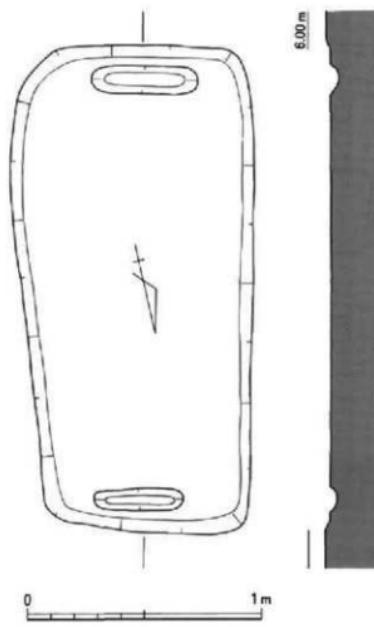


第79図 11号墓

堆積と考えられる黒灰色シルト、中層は埴丘盛土の流れ込みと考えられる黒褐色極細砂混じりシルト、上層は自然堆積と考えられる淡黒褐色細砂混じり極細砂質シルトが堆積していた。

東周溝は、埴丘側が直線的であるのに対して、その反対側は弧状をなす。中央部が最も深くなる傾向にあり、その断面形は逆台形をなす。検出幅1.2m、底部幅40cmを測り、深さは27cmである。埋土は5層からなるが、埋没状況は北周溝とほぼ同じである。まず、自然堆積の黒灰色細砂混じりシルトが堆積し、次に埴丘盛土が流れ込んだ黒灰色シルト混じり青灰色シルトが堆積し、最後にその上層は自然堆積によって埋没している。

南周溝は、北周溝とはその方向を若干違えている。また、当周溝も埴丘側のラインが直線的であるのに対して、その反対側のラインはやや弧状をなす。さらに東端と西端がそれぞれ埴丘側に純角に屈曲しており、コーナーを形成している。東側コーナーは浅くなる傾向にあるが、西側コーナーは逆に土壠状に一段深くなっている。当周溝中央部における断面形はやや壺な逆台形を呈し、検出幅1.25m、深さ35cmを測る。埋土は、北周溝・東周溝の堆積状況とはほぼ同じ



第80図 11号墓主体部

検出面における規模は、主軸方向で2.05m、その直交方向で1mを測る。墓壙底の標高は5.80mである。

墓壙内は木棺を埋葬したようで、墓壙の短辺近くでその方向に平行する小口穴を2箇所確認した。その規模は、北側で45cm×12cm、南側で40cm×10cmを測り、墓壙底からの深さはそれぞれ3cmである。また、小口穴間の距離は1.7mである。

なお、棺材・副葬品等は全く残存していない。

出土遺物 各周溝から出土している。特に南周溝からまとまって出土している。

南周溝からは、73～75・77・78の壺の口縁部・体部・底部片が出土している。

73は広口壺の口縁部である。磨滅が著しいため、内外面とも調整痕は観察できない。口径は19.1cmである。74は壺の底部である。この土器についても磨滅が著しいため、内外面の調整痕

である。

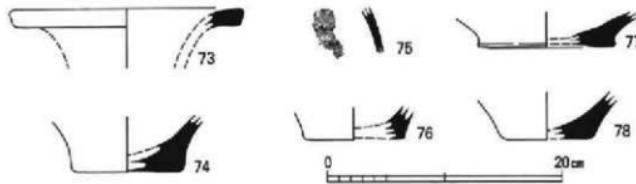
各周溝最深部の標高は、北周溝で5.43m、東周溝で5.50m、南周溝で5.47mを測り、顕著な差は認められない。

墳丘 主軸方向は、主体部を基準とするとほぼ南北方向を指向し、座標方向より約15°振っている。南北方向で4.6mを測る。東西方向については、西周溝がないため明確にできないが、約6.8mとなり、東西方向に長い傾向にある。そして、南西及び南東コーナーが純角に屈曲しているため、全体的に墳丘の平面形が台形をなしている。

なお、盛土は確認できなかった。

墳丘中央部における標高は5.83mである。

埋葬施設 墳丘中央部で1基検出した。ただし大半はすでに削平されており、墓壙の底部をわずかに検出したにとどまる。検出面からの深さは約3cmである。南北方向を主軸とし、



第81図 11号墓出土土器

は観察できない。色調・胎土の特徴から判断して、73と同一個体の可能性が考えられる。底径は9.8cmである。75は壺の体部である。外面に縦方向のハケ調整後、7条の櫛状波状紋2帯と同じく7条の櫛状直線紋1帯が施されている。内面の調整痕は観察できない。77は壺の底部と考えられる。内面はナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。底径は11.5cmである。78も底盤であるが、器種を特定できない。内外面とも調整痕は観察できない。底径は8.0cmである。

東周溝からは、76の底部が出土している。器種は特定できない。内外面とも調整痕は観察できない。底径は8.6cmである。

北周溝からは、壺が出土しているが、小片のため同定できなかった。

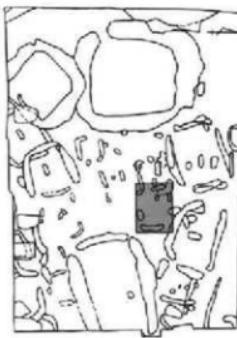
この他、南周溝からS7（第164図）の不定形石器（サスカイト）が出土している。

12. 12号墓

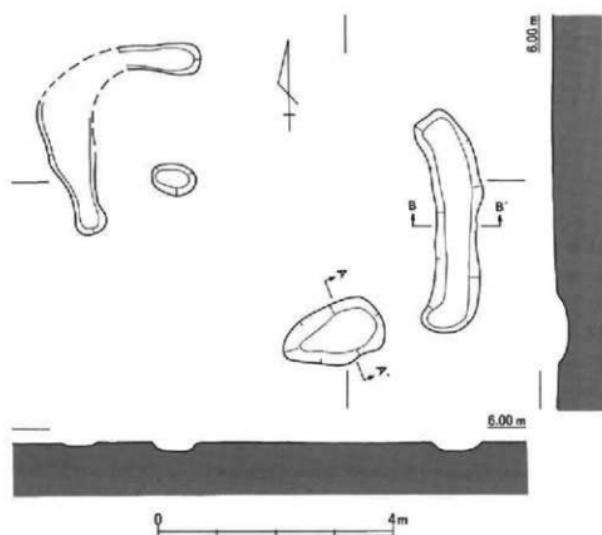
概要 調査区のはば中央部や東よりに位置する。I区とII区の2次にわたる調査で明らかとなった周溝墓である。このため、両調査の結果をもとに図面上で復元して明らかとなった。6号墓の東、11号墓の南西に位置する。6号墓とは切り合い関係にあり、6号墓に切られている。

周溝 北西コーナーを中心とした北周溝と西周溝および東周溝、そして南周溝の一部と考えられる土塙を検出した。

北西コーナーは、6号墓北東コーナーに切られており、これに続く北周溝と西周溝の一部が残存するのみである。南周溝とも埴丘側のラインは直線的であるが、反対側は弧状をなす傾向にある。北周溝は、断面U字



第82図 12号墓の位置



第83図 12号墓

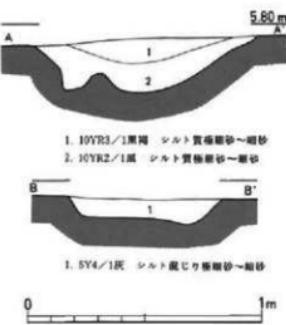
形をなし、検出幅55cm、深さ16cmを測る。

東周溝は、墳丘側のラインが北端と南端で墳丘側へ屈曲する傾向が認められる。周溝中央部における断面形は逆台形をなし、検出幅65cm、底部幅45cm、深さ10cmを測る。埋土は灰色シルト混じり極細砂～細砂の1層が堆積していた。

南周溝の一部と考えられる土壤は南東コーナー付近で検出した。南東コーナーの西側延長上にあるため、周溝の一部と考えた。ただし、当土壤の主軸方向が想定される南周溝の方向とは若干異なることから、断定はできない。平面形はやや不整

形気味の橢円形を呈し、その規模は1.8m×1m

である。断面逆台形を呈し、深さは約25cmである。



第84図 12号墓周溝断面

埋土は、黒褐色シルト質極細砂～細砂と黒色シルト質極細砂の2層からなるが、基本的にはほぼ同質の層である。

各周溝最深部の標高は、北周溝で5.67m、東周溝で5.64m、南周溝で5.52mを測り、南側が若干低くなっている。

墳丘 主軸方向はほぼ東西方向を指向し、東周溝を基準とするとほぼ座標方向である。東西方向で6mを測る。南北方向については、北周溝の一部と南周溝の一部の土壤を基準とすると約4mとなる。したがって、東西方向にやや長い長方形となる。

なお、盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.80mである。

埋葬施設 確実に埋葬施設と指摘できるものは全く検出できなかった。ただし、西周溝の東側約1mの位置で、50cm×80cmの梢円形を呈する土壤を検出した。この土壤内からは土器等の遺物は全く出土しなかったが、土壌墓等の可能性を完全に否定することはできない。

出土遺物 東周溝と南周溝から土器片が出土している。いずれも小片のため、図化はもちろんのこと器種の特定もできなかった。

13. 13号墓

概要 調査区の北東部に位置する。II区の調査で検出した周溝墓である。

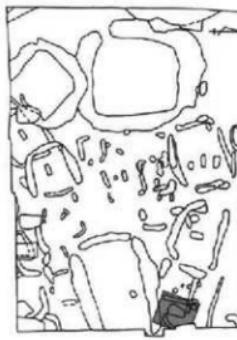
北東部の一部は調査区外にのび、全体は検出できなかった。14号墓の東、15号墓の北東に位置し、14号墓とは西周溝を共有している。

なお、当遺構については、周溝を形成する溝の位置関係などから、確実に周溝墓と断定することは困難である。ここでは、周溝墓の可能性のある遺構として報告していくことにする。

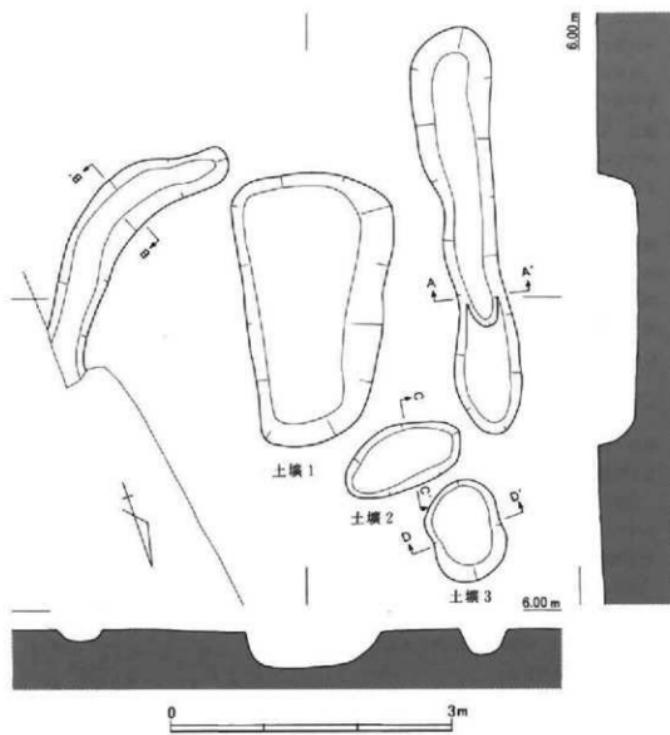
周溝 西周溝と南東コーナーを検出した。

西周溝は南側に1段に落ち込んでいる。周溝中央部における断面形は逆台形をなし、検出面における幅60cm、底部の幅20cm、深さ30cmを測る。埋土は3層からなるが、いずれもシルト質極細砂～細砂からなり、基本的にほぼ同質である。また、当周溝のほぼ中央部の埋土下層からは、極微量の朱が出土している。

南東部コーナーは、明確に屈曲するものではなく、東周溝から南周溝にかけて緩やかなカーブをなしている。当周溝は墳丘側へ2段に落ち込む。その断面形は、上段が逆台形、下段がU



第85図 13号墓の位置



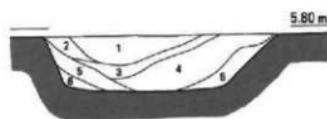
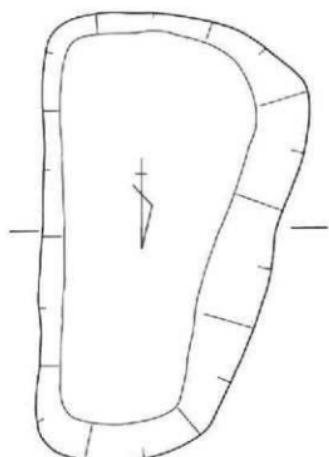
第90図 13号墓

字形をなし、検出幅60cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂～細砂と灰色シルト質極細砂の2層からなる。

この他、後述する土壇3についても、その位置から判断して西周溝の一部あるいは北西コーナーの一部となる可能性が考えられる。

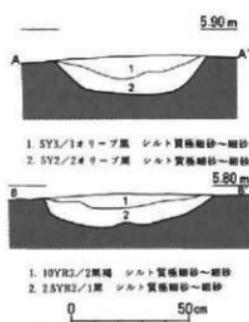
各周溝最深部の標高は、東周溝で5.56m、西周溝で5.47mを測り、西側が低くなっている。

墳丘 南東コーナーにおいて推定される南周溝の延長線上と西周溝の南端とは全く一致しない。



1. 2SY3/1奥端 シルト質粘細砂～粗砂
2. 2SY3/1奥端 シルト質粘細砂～粗砂
3. N2底 粘細砂底じりシルト(状含む)
4. SY2/1底 粘細砂～粗砂底じりシルト
5. SY4/1底 シルト質粘細砂～中砂
6. 2SY2/1奥端 シルト質粘細砂～中砂

第87図 13号墓 土塁 1



第88図 13号墓開溝断面



1. 2SY3/1奥端 シルト質粘細砂～粗砂
2. SY4/1底 シルト質粘細砂



1. SY3/1奥端 シルト質粘細砂～粗砂
2. SY2/2奥端 シルト質粘細砂～粗砂
3. 10YR3/1奥端 シルト質粘細砂～粗砂

第89図 土塁 2・土塁 3断面

さらに、北周溝は未検出である。このため、当墳丘の主軸方向・形状・規模を明確にすることはできない。

主軸方向については、上記の理由から明確にしがたいが、墳丘内で検出した土壤の主軸方向および西周溝の方向がほぼ一致するため、これを基準にするとほぼ南北方向となり、座標方向より約15°振っている。墳丘の規模は、東西方向で4mを測る。その直交方向は北周溝を検出していないため明確にできないが、土塚3をその一部とみなすと約3.5~4mとなる。したがって、墳丘の形状は、ほぼ方形に近いものか、南北に長い長方形となる。

なお、盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.80mである。

埋葬施設 西周溝と東周溝のほぼ中間部やや西寄りで長方形の土壤（土塚1）を検出した。主軸方向で2.8m、その直交方向で1.5mを測り、南側ほど幅が広くなっている。断面逆台形をなし、深さは35cmである。断面の土層観察において、木棺の痕跡は全く確認できなかった。埋土は6層からなるが、シルト質砂とシルトの互層となっており、いずれも自然堆積による層である。特に、中層の黒色板細砂混じりシルト層においては炭片が多く含まれていた。

当遺構については、他の埋葬施設と比較して規模が大きいこと、木棺等の痕跡が認められないことから、直ちに埋葬施設と判断することはできない。脂肪酸分析の結果ではヒト遺体の埋葬と判断された。

この他土塚1の北側で土塚2を検出した。平面梢円形を呈し、その規模は1.3m×60cmである。断面逆台形をなし、深さは15cmである。当遺構については、埋葬施設であるかどうかを判断することは困難である。

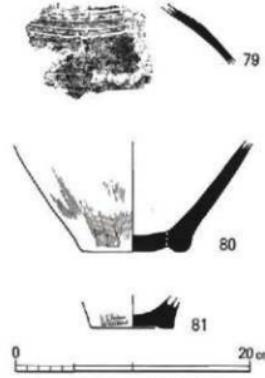
また、土塚2の北側で土塚3を検出した。1m×75cmの梢円形をなし、断面逆台形をなす。深さは13cmである。当遺構についても、埋葬施設であるかどうかの判断はできない。先述したように、西周溝あるいは北西コーナーの一部の可能性も考えられる。

出土遺物 西周溝と土塚1から出土している。

西周溝からは79の盃が出土している。79は肩部の小片である。削り出し突起が施されているよう上部に段が認められ、その突起上に4条+αのヘラ描沈線紋が施されている。内面の調整は不明であるが、外側は全体的にヘラミガキによって仕上げられている。

他に西周溝からは小片が出土しているが、図化はもちろんのこと、器種の特定もできない。

土塚1からは、80と81の底部が出土している。80は、



第90図 13号墓出土土器

壇の底部と考えられる。内面の調整は不明であるが、外面は縦方向のハケ調整によって仕上げられている。また、底部はナデ調整と指ナデ調整によって仕上げられている。底径は9.4cmである。81は壇の底部と考えられる。内面の調整は不明であるが、外面は縦方向のハケ調整、底部はナデ調整によって仕上げられている。底径は7.1cmである。

14. 14号墓

概要 調査区の北東部に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓で、ほぼ全体を検出した。11号墓の東、13号墓の西、15号墓の北に位置する。11号墓とは西周溝を、13号墓とは東周溝をそれぞれ共有している。15号墓とは、本来は切り合い関係にあったものと考えられるが、両周溝とも底部のみしか残存していないため、平面的には確認できなかった。

周溝 北周溝を除く3辺を検出した。各周溝は連続せず途切れている。

東周溝は、13号墓の西周溝として報告したものである。当墓の周溝としてみると、埴丘側のラインはほぼ直線的である。

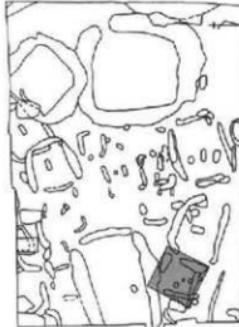
南周溝は、確認調査で上部が削平されたため、平面的には歪んだ形状をなす。東側約1/2を欠く。埴丘側のラインはほぼ直線的であるが、その反対側は一定していない。また、西端部の埴丘側のラインはわずかに北側に屈曲する傾向が認められ、コーナーの一部をなしている。断面逆台形をなし、検出幅1.5m、底部幅1.2mを割り、深さは30cmである。

西周溝も、11号墓東周溝として報告したものである。当周溝については、11号墓を中心にみると、当埴丘側のラインは歪んでいるようであるが、当周溝と特に南周溝との関係を中心みると、ほぼ直線的である。

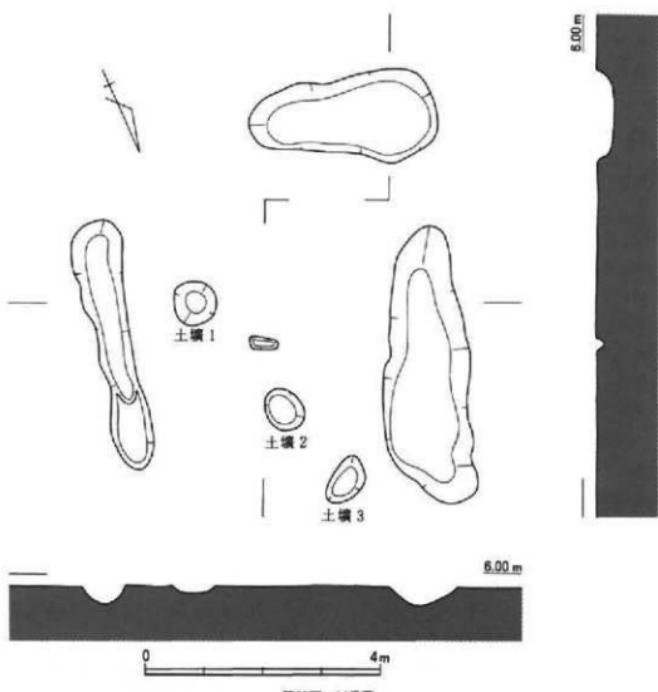
各周溝最深部の標高は、東周溝で5.47m、西周溝で5.50m、南周溝で5.53mを測り、ほぼ同じである。

埴丘 主軸方向はほぼ南北方向を指向し、南周溝および西周溝を基準とすると座標方向より約30°振っている。

当埴丘については、北周溝を検出できなかったため、全体の形状・規模を明確にできない。ただし、東西方向が5.5mであるのに對して、南周溝から西周溝の北端部にかけての距離が5.8mであることから、南北方向に長い長方形をなすものと推定される。



第91図 14号墓の位置



第92図 14号墓

なお、盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.75mである。

埋葬施設 明確な埋葬施設は確認できなかった。ただし、墳丘中央部において、 $50\text{cm} \times 20\text{cm}$ の長方形を呈する遺構を検出した。検出面からの深さは13cmである。墳丘の主軸線上にあることから、木棺墓の小口穴の可能性が考えられる。規模についても、1号墓等で検出した小口穴とはほぼ同規模である。もしこれが小口穴となると、1穴しか検出できなかったことから、6号墓と同タイプの木棺墓と考えられる。

この他、埋葬施設とは断定できないが、土壤1・土壤2・土壤3の土壤3基を検出した。

土壤1は、径70cmの円形の土壤である。東周溝の西約80cmに位置する。深さは10cmとわずか

である。埋土内より土器片が出土している。

土壤2は、60cm×80cmの楕円形を呈する。小口穴の北約70cmに位置する。深さは13cmである。埋土内からは土器の小片が出土している。

土壤3は、80cm×60cmの楕円形を呈する。土壤2の北西約1mに位置する。深さは8cmである。埋土内からは何も出土していない。

出土遺物 東周溝と土壤1・土壤2から出土している。このなかで図化できたのは、13号墓と共有する東周溝から出土した79の壺のみである。詳細については13号墓で報告している。土壤1からは壺の小片が出土している。2条のヘラ彫沈線紋が認められる。土壤2から出土した土器については、小片のため器種の特定も困難である。

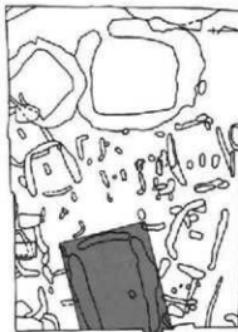
15. 15号墓

概要 調査区の東部に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓で、東周溝部分が調査区外にあり、全体は検出できなかった。14号墓の南、17号墓・18号墓の北に位置する。17号墓・18号墓とは南周溝において共有もしくは切り合い関係にあるが、その関係を明確にすることはできなかった。

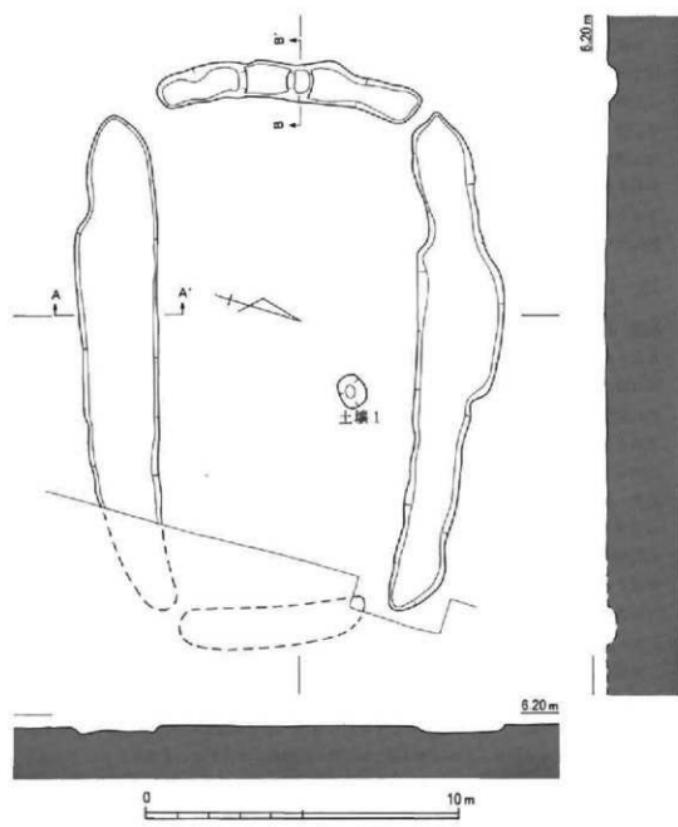
周溝 東周溝を除く3辺を検出した。ただし、北周溝の東端を確認するため、一部調査区を拡張した結果、北周溝の東端部を確認するとともに、東周溝の一部も確認することができた。未検出の南東コーナーを除く各周溝はいずれも連続せず、各コーナーにおいて途切れている。

南周溝は、東端部が調査区外にのびるため、全体を検出することができなかった。埴丘側のラインは直線的であるが、反対側はわずかに弧状をなす傾向にある。特に西端部から中央部にかけての周溝幅が急に広くなっている。これは南周溝と18号墓の北周溝が平行している箇所において両者を区別できずに1つの溝として検出したことによるものである。ただし、当周溝については周溝中央部にわずかに土手状の高まりが認められ、これを境に15号墓と18号墓を区別することができる。ただし、断面観察（第95図）によると、両周溝の埋土は全く同じであり、両周溝間の切り合い関係は認められない。むしろ、両溝がほぼ同時に埋没したように理解できる。断面逆台形を呈し、土手のレベルにおける幅1.15m、底部幅95cmを測り、深さは10cmである。

西周溝は、全体的に弧状をなす傾向にあるが、周溝中央部の埴丘側はほぼ直線的である。周

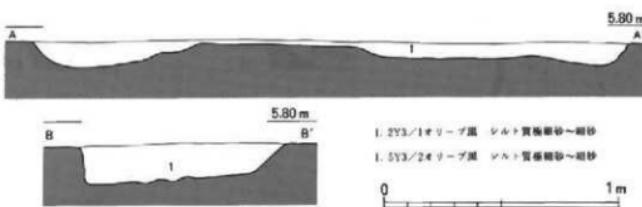


第93図 15号墓の位置



第94図 15号墳

溝底のレベルは一定しておらず、明確な段差が認められる。中央部が最も深くなつており、両端部も土壤状に落ち込んでいる。中央部における断面は逆台形を呈し、検出面における幅90cm、底部幅70cmを測り、深さは15cmである。また、墳丘側の立ち上がりがその反対側に対して極端



第95図 15号墓周溝断面

に急な傾向にある。埋土は、南周溝と全く同じである。

北周溝は、南周溝とほぼ同様な平面形をなす。墳丘側のラインは直線的であるのに対して、その反対側は弧をなす傾向にある。中央部付近で、南周溝のように急に幅が広くなるところがあるが、断面観察において他の存在を想定させるものは認められない。断面逆台形をなし、検出幅2.8m、底部幅2.3mを測り、深さは20cmである。埋土は、南周溝・西周溝と全く同じである。

各周溝最深部の標高は、北周溝で5.61m、西周溝で5.50m、南周溝で5.64mを測り、西側が低くなっている。ただし、西周溝の標高は極端に浅くなった所のものであり、この箇所を除くと3辺ともほぼ同じである。

墳丘 主軸方向はほぼ東西方向を指向し、座標方向より 20° 振っている。南北方向で8.5mを測り、東西方向で約16mと復元され、東西方向に長い長方形を呈する。

なお、盛土は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.77mである。

埋葬施設 明確な埋葬施設は確認できなかった。

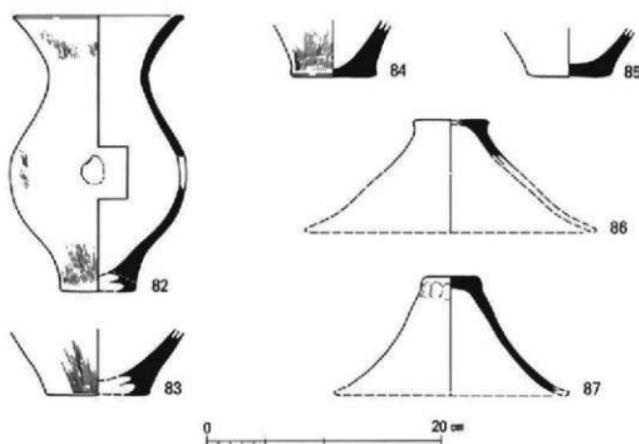
ただし、墳丘中央部北周溝近くで、1m×85cmの楕円形の土壤（土壤1）を検出した。深さ20cmを測る。遺物等は全く出土していない。

出土遺物 南周溝・西周溝・北周溝の各周溝内から出土している。特に北周溝からまとまって出土している。

南周溝からは、壺の体部片等がわずかに出土している。器種を特定できない小片のなかに、ヘラ描沈線紋が認められるものも出土している。

西周溝からは、86の蓋が出土している。天井部のみが残存する小片で、内外面の調整痕については磨滅が著しいため観察できない。他に器種は特定できないが、ヘラ描沈線紋を有する小片も出土している。

北周溝からは、壺・甕・蓋が出土している。82は完形に復元できる壺である。体部中央に焼成後の穿孔が認められる。底部から頸部にかけて、外面は縱方向のハケ調整により、内面はナ

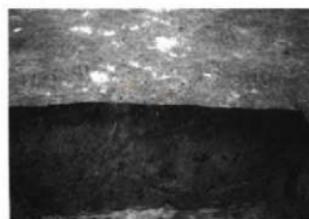


第96図 15号墓出土土器

ナゲ調整により仕上げられている。また口縁部は外外面とも横方向のナゲ調整により仕上げられている。口径14.6cm、体部最大径15.0cm、底径6.3cm、器高23.3cmを測る。83は蓋と考えられる底部片である。外表面を横方向のハケ調整により、内面をナゲ調整により仕上げている。底径は8.8cmである。84は蓋と考えられる底部片で、外表面を横方向のハケ調整により、内面をナゲ調整により仕上げている。底部もナゲ調整により仕上げられている。底径は7.4cmである。85も蓋と考えられる底部片である。外表面はナゲ調整により仕上げられているが、内面については底盤が顯著なため観察できない。底径は6.9cmである。87は蓋である。口縁端部を欠くが、ほぼ完形に復元できる。天井部付近はナゲ調整と指押さえにより仕上げられているが、他の調整痕は観察できない。天井部径は4.6cmを測り、器高は9.7cmと復元される。

その他、北周溝からS10（第165図）の磨石が出土している。石材名は不明である。

その他 当墳丘上面において、ほぼ東西方向に走る噴砂を検出した（第97図）。長さ約2mに及ぶものである。



第97図 噴砂

16. 16号墓

概要 調査区の中央部南側や東よりに位置する。I区とII区の調査で明らかとなった周溝墓で、ほぼ全体を検出することができた。2号墓の東、17号墓の西、22号墓の北西に位置する。22号墓とは切り合い関係にあり、22号墓を切っている。

周溝 南周溝及び西周溝と北東コーナーを検出した。また、周溝の痕跡と考えられる土壠状の落ち込みを北周溝の位置で検出した。さらに、2号墓の東周溝についても、共有関係にあり当周溝墓の西周溝となる可能性が考えられる。

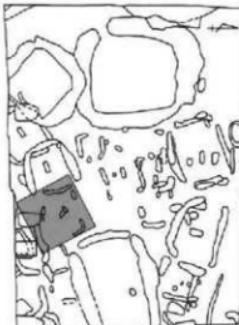
南周溝は、第1次確認調査で確認した溝に続くものである。この溝はこの確認調査のトレンチの位置より西側では検出できなかった。逆に東端は、埴丘側のラインが埴丘側にわずかに屈曲する傾向にあり、コーナーの一部をなしている。そして、この箇所が当周溝のなかで最も深くなっている。周溝中央部における断面は深いU形を呈し、検出幅97cmを測り、深さは25cmである。埋土は3層に分けられるが、大きくシルト質砂からなる上層と砂質シルトからなる中・下層とに分けられる。

北東コーナーは、基本的には鍵形をなすが、より細かく見ると2段にわたって屈曲している。断面逆台形ないしU字形を呈するが、検出幅は南周溝に比べて極端に狭く、40cmにすぎない。深さは10cmである。

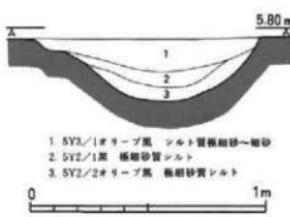
土壠状の落ち込みについては、西周溝の北端と北東コーナーからのびる北周溝の一部を結ぶ延長線上にあたることから、北周溝の一部と判断した。断面U形をなし、検出幅60cmを測り、深さは4cmとわずかである。

なお、西周溝については、その形状から判断して2号墓の東周溝であることは間違いない。しかし、先述したように、当溝の北端が北東コーナーの北周溝の延長線上にあることから、共有関係にある可能性が高いものと考えられる。

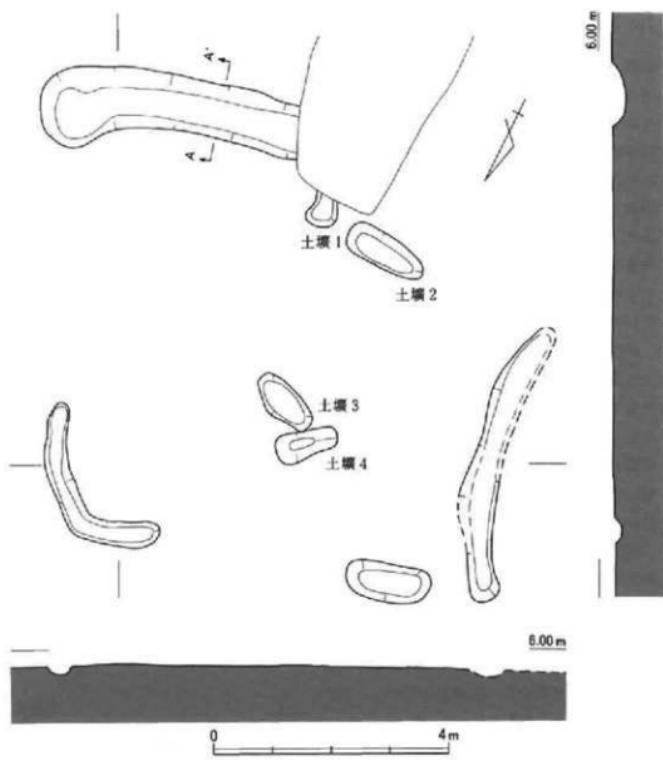
各周溝最深部の標高は、南周溝で5.51m、北周溝で5.59m、北東コーナーで5.58mを測り、南側



第38図 16号墓の位置



第39図 16号墓周溝断面



第100図 16号墓

に低くなる傾向にある。

墳丘 南周溝と他の周溝の規模が異なること、及び北東コーナーからびる東周溝と南周溝が直交しないこと等から、全体的に重な形状をなす。このため、当周溝墓の主軸方向についても明確にできない。ただし、周溝の残存が最も良好な南周溝を基準とすると、主軸方向はほぼ南北方向を指向し、座標方向より約15° 振っている。南北方向で6.8mを測り、東西方向で7.0m

を測る。

なお、盛土は確認できなかった。

墳丘中央部における標高は5.62mである。

埋葬施設 明確な埋葬施設は確認できなかった。

ただし、南周溝西端部付近で土壤1と土壤2を、墳丘中央部よりやや北周溝よりで土壤3と土壤4を検出した。

土壤1は、第1次確認調査のため全体の形状・規模を明確にし得ない。

土壤2は平面梢円形をなし、その規模は1.45m×55cmである。土壤3も

平面梢円形をなし、その規模は1.2m×60cmである。そして土壤4は長方形気味の梢円形を呈し、その規模は1.1m×40cmである。

これらの土壤のなかで、土壤4からは板状の木製品が出土している。この土壤の規模等から判断して、小口穴の可能性も考えられる。しかし、当土壤の主軸方向と当周溝墓の主軸方向が明確に異なることから、その可能性は低いものと考えられる。また、土壤2と土壤3についても、両土壤とも主軸方向をほぼ同じくしていることから、小口穴の可能性も考えられる。しかし、両土壤から推定される木棺の主軸方向と当周溝墓の主軸方向とが明らかに異なることと、両土壤間の距離が3mもあることから、上記の可能性はないものと判断される。

出土遺物 南周溝と北東コーナーおよび土壤2・土壤3・土壤4から出土している。

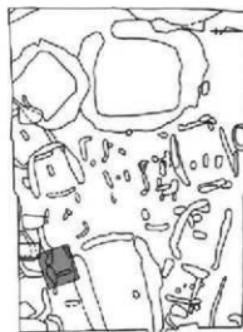
南周溝からは、89の壺の底部が出土している。内面をナデ調整により、外面を縦方向のハケ調整により仕上げている。底部もナデ調整により仕上げられている。底径は6.6cmである。

北東コーナーからは小片が出土しているが、器種を特定できない。

土壤2からも小片が出土しているが、器種を特定できない。土壤3からは、壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。土壤4からは、壺の底部(88)が出土している。体部中位付近まで残存する比較的大型の破片である。体部内面はナデ調整により、外面は下半を縦方向、上半を左上がり方向のハケ調整により仕上げられている。底部内面はユビ押さえにより仕上げられている。底径は9.6cmである。

以上の他、土壤2からS4(第164図)の楔形石器(サヌカイト)が出土している。

17. 17号墓



第102図 17号墓の位置

概要 調査区の南東部に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓である。15号墓の両西、16号墓の南東、18号墓の西、22号墓の北に位置する。18号墓とは切り合い関係にあり、18号墓を切っている。15号墓とは、先述した(79頁)ように共有関係にあるものと考えられる。この他、位置関係から判断して22号墓と切り合い関係にあるが、周溝の一部しか残存しないため、その前後関係については明確にしない。

周溝 南周溝と北周溝を検出した。

南周溝は東側の一帯を検出したにとどまる。2段に掘り込まれており、西端部が最も深くなっている。深さは36cmである。断面形は、上段が逆台形を、下段がU字形をなす。埋土は、上段がシルト質砂で下段が砂質シルトである。

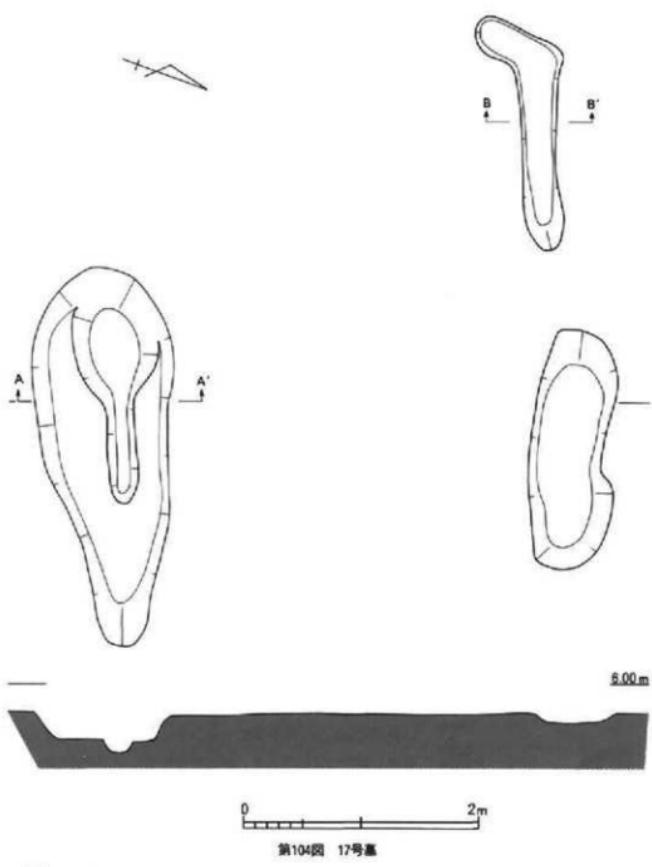
北周溝は、中央部で途切れている。西側の溝は西端で南側へ屈曲しており、北西コーナーをなす。断面U字形をなし、検出幅30cm、深さ13cmを測る。東側の溝は、断面逆台形をなし、検出幅は60cmを割り、西側の溝より明らかに規模が大きい。深さは8cmである。このように、北周溝をなす2本の溝は、その規模が明確に異なる。しかし、墳丘側のラインについてはほぼ直線的である。

各周溝最深部の標高は、南周溝で5.40m、北周溝で5.65mを測り、北周溝の方が低くなっている。

墳丘 主軸方向は、北周溝を基準とするとはば東西方向を指向し、座標方向より約20°振っている。墳丘の規模については、西周溝と東周溝が残存していないため、東西方向については明確にできない。ただし、北周溝西端の屈曲部を基準にして同周溝東端までの距離を測ると4.3mとなり、南北方向が3.5mであることから、東西方向に長い長方形を呈すること



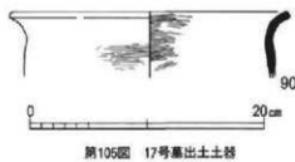
第103図 17号墓周溝断面



第104図 17号墓

は間違いない。

なお、盛土層は確認できなかった。また、墳丘中央部における標高は5.74mである。

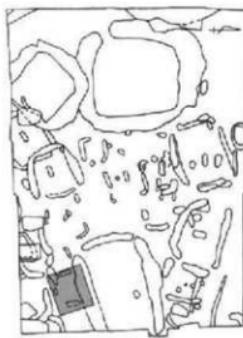


第105図 17号墓出土土器

埋葬施設 何も確認できなかった。また、土壤等も確認できなかった。

出土遺物 南周溝から90の甕が出土している。口縁部は指押さえとナデ調整により成形され、如意形を呈する。頸部以下は内外面とも横方向主体のヘラミガキによって仕上げられている。

18. 18号墓



第106図 18号墓の位置

概要 調査区の南東部に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓である。各周溝相互の位置関係が揃っていないが、1基の周溝墓と判断した。15号墓の南、17号墓の東、20号墓の北に位置する。確実に切り合い関係が認められるのは17号墓とで、17号墓に切られている。また15号墓との関係については、先述したとおり(79頁)である。

周溝 西周溝と北周溝および東周溝の3辺と南周溝の一部を検出した。西周溝から南周溝にかけては連続するが、西周溝と北周溝、北周溝と東周溝は連続しない。

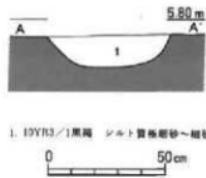
西周溝は、南端部で南西コーナーをなす。南西コーナーは、直角ではなく鈍角に屈曲している。周溝中央部における断面は逆台形をなし、検出幅53cm、底部の幅30cm、深さは13cmを測る。埋土はシルト質粘細砂～細砂の1層である。

北周溝は、15号墓南周溝と平行して検出した溝である。埴丘側のラインは直線的であるが、反対側のラインは一定していない。また、西端部において埴丘側のラインが外側へ屈曲している。

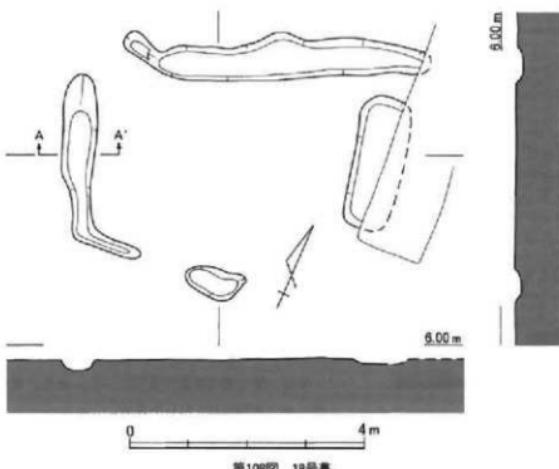
断面逆台形を呈し、検出幅55cm、底部幅35cmを測り、深さは10cmである。

東周溝は、東半部を確認トレントにより切られているため、全体の規模は不明である。断面逆台形をなすと考えられ、深さは6cmにすぎない。

南周溝は、周溝最深部の残存と考えられる土壤状の遺構を検出した。1m×50cmを測るが、その平面は不定形である。深さは10cmである。



第107図 18号墓周溝断面



第108図 18号墓

各周溝最深部の標高は、西周溝で5.60m、北周溝で5.60m、東周溝で5.70m、南周溝で5.70mを測り、西周溝と北周溝が若干低くなっている。

墳丘 墳丘の主軸方向は、西周溝と北周溝の墳丘側のラインを基準とするとほぼ東西方向を指向し、座標方向より約18°振っている。墳丘の規模は、南北方向で3.4mを測る。これに対して東西方向については、西周溝と東周溝間を基準とすると4.6m、北周溝の東端部を基準とすると5.7mとなる。いずれにしても東西方向に長い長方形をなしている。

なお、盛土層は確認できなかった。墳丘中央部における標高は5.74mである。

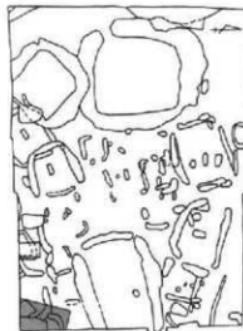
埋葬施設 明確な埋葬施設は確認できなかった。また、土壙等も確認できなかった。

出土遺物 当周溝墓に伴う土器は1点も出土していない。

19. 19号墓

概要 調査区の南東隅に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓である。北周溝については、他の周溝と同様の平面形をなすが、西周溝から南周溝にかけての溝は、かなり不定形である。また、埋土も明らかに異なる。したがって、19号墓と呼称しているものが、本当に周溝墓であるのかについては断定できない。

周溝墓の1/2以上は調査区の南側及び東側へのびるため、検出できたのは全体の約1/3であ



第109図 19号墓の位置

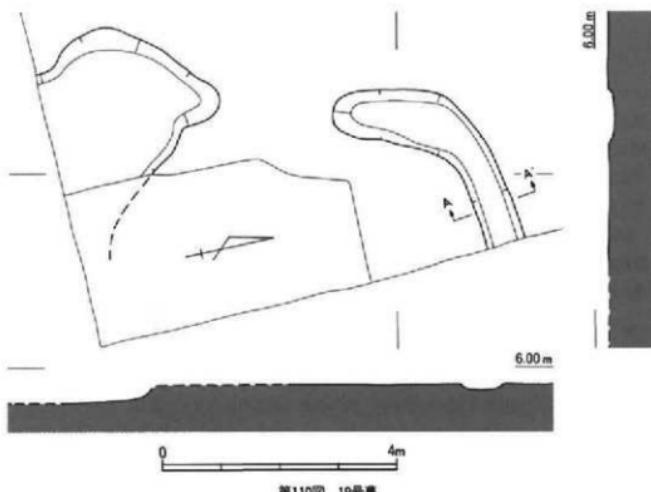
る。15号墓の南、20号墓の東に位置する。20号墓とは切り合い関係にあり、20号墓を切っている。

周溝 北周溝と南西コーナーを検出した。

北周溝は、西端部で南側へ屈曲しコーナーをなす。断面逆台形をなし、検出幅77cm、底部の幅65cmを測り、深さは10cmである。断面の立ち上がりは、墳丘側の方が緩やかな傾向にある。

南西コーナーは、不整形な平面形をなす。また、断面は逆台形をなすが、検出幅2.5m、深さ32cmと、北周溝に比べて大規模である。また、埋土も黒灰色シルトと青灰色極細砂質シルトの互層となっており、北周溝とは大きく異なる。どちらかといえば11号墓の周溝埋土に近い特徴を示している。

なお、盛土層は確認できなかった。また、墳丘中央部における標高は5.74mである。



第110図 19号墓

墳丘 平面形がかなり歪んでいるため、主軸方向を明確にしえない。ただし、北周溝を基準とすると、ほぼ南北方向を指向し、座標方向より約10° 傾っている。当周溝墓の大半が調査区外にあたるため、規模を明確にしえない。検出した規模は、南北方向で6.5m、東西方向で3.5mである。

埋葬施設 明確な埋葬施設は確認できなかった。また、土壌等も確認できなかった。

出土遺物 各周溝からわずかに出土している。

北周溝からは壺の体部片が出土している。8条のヘラ描沈線紋が認められる。

南西コーナーからは、91の底部片が出土している。内面をナデ

調整により、外面をハケあるいは板ナデ調整により仕上げている。 第111図 19号墓周溝断面
底径は7.2cmである。この他、3条+αのヘラ描沈線紋をもつ小片が出土している。

20. 20号墓

概要 調査区の南東隅に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓である。南側が調査区外までのびるため、検出できたのは全体の約1/2である。18号墓の南、19号墓の西、21号墓および22号墓の東に位置する。19号墓および22号墓と切り合い関係にあり、両周溝墓に切られている。

周溝 南周溝を除く3辺を検出した。北周溝と東周溝は連続するが、北周溝と西周溝は連続しない。

西周溝は22号墓東周溝に切られているため、検出できたのはその一部に限られる。断面逆台形をなし、検出幅70cmを測る。深さ8cmと大変浅い周溝である。

北周溝と東周溝とは連続する溝で、純角に屈曲して

いる。北周溝の西端は土壤状に深くなっている。深さ

は20cmである。周溝中央部において断面逆台形をなし、検出幅85cm、底部幅60cmを測り、深さは9cmである。

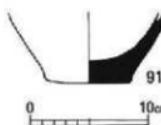
西周溝・北周溝・東周溝それぞれの最深部の標高は、5.65m、5.73m、5.70mである。



L. 2.5Y3./1葉背 シルト質粘細砂

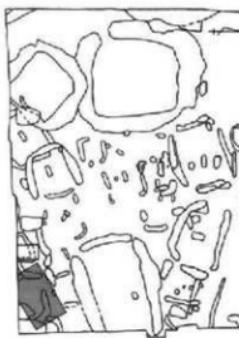
0 50 cm

第111図 19号墓周溝断面

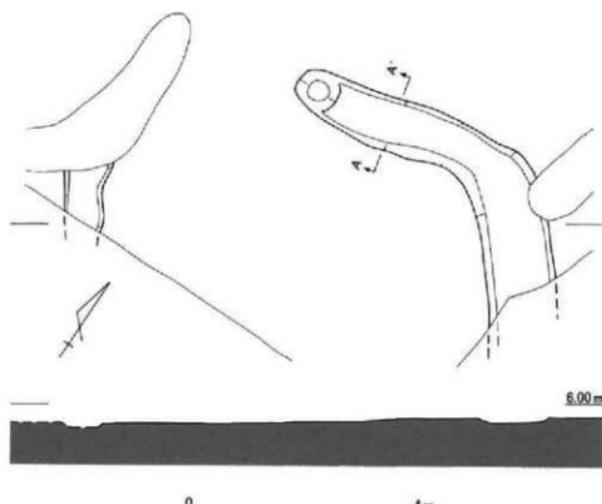


0 10cm

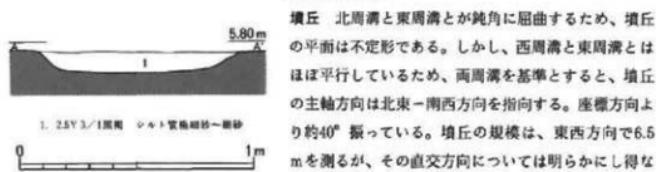
第112図 19号墓出土土器



第113図 20号墓の位置



第114図 20号墓



第115図 20号墓周溝断面

墳丘 北周溝と東周溝とが鈍角に屈曲するため、墳丘の平面は不定形である。しかし、西周溝と東周溝とはほぼ平行しているため、両周溝を基準とすると、墳丘の主軸方向は北東—南西方向を指向する。座標方向より約40°振っている。墳丘の規模は、東西方向で6.5mを測るが、その直交方向については明らかにし得ない。

墳丘中央部における標高は5.75mである。

埋葬施設 明確な埋葬施設は検出できなかった。

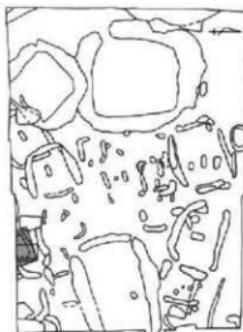
出土遺物 北東コーナーでわずかに出土しているが、小片のため器種を特定できない。

21. 21号墓

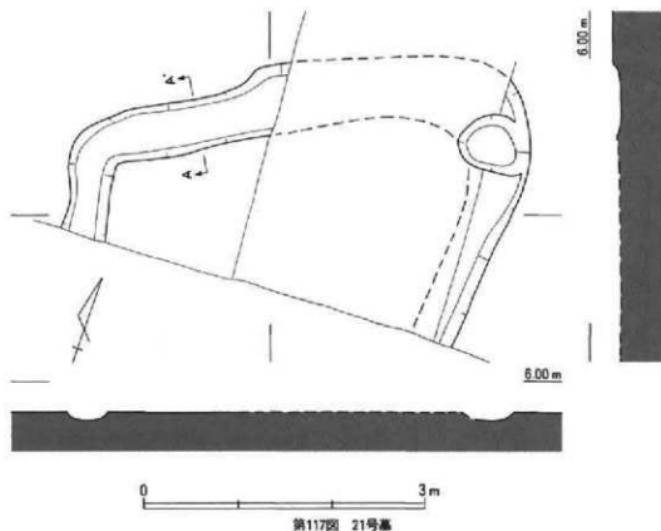
概要 調査区の南東部南隅に位置する。II区の調査で明らかとなった周溝墓である。南側が調査区外までのびるため、検出できたのは全体の約1/2に限られる。16号墓の南、20号墓および22号墓の西に位置する。22号墓とは切り合い関係にあり、東周溝が22号墓を切っている。

周溝 南周溝を除く3辺を検出した。一部第1次確認調査のトレンチと重複する箇所も認められるが、検出した3辺は連続するものと考えられる。

西周溝は、大半が調査区外にのびるため北側の一部を検出したにすぎない。墳丘側のラインは直線的である。断面逆台形をなし、検出幅40cm、深さ8cmを測る。



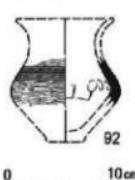
第116図 21号墓の位置



第117図 21号墓



第118図 21号墓周溝断面



第119図 21号墓出土土器 墓葬施設 何も検出できなかった。

出土遺物 東周溝北端部の土壤状に落ち込んだ地点から、72の壺の体部片が1点出土している。小型壺の体部片で、体部中位にあるものである。上半部に4条のヘラ描沈線紋が施されている。外面は横方向のヘラミガキにより、内面はナデ調整により仕上げられている。体部の最大径は9.4cmと復元される。

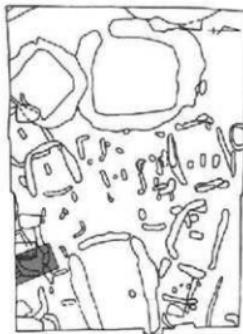
この他、北東コーナーの土壤状に落ち込んだ所から、S 2（第164図）の楔形石器（サヌカイト）が出土している。

22. 22号墓

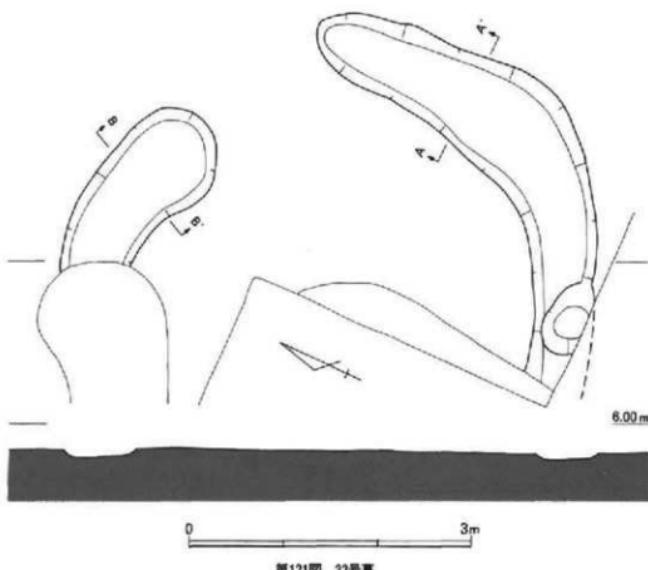
概要 調査区の南東部南隅に位置する。II区の調査で明らかとなつた周溝墓である。南側が調査区外にのびるため、検出できたのは全体の約1/2である。

16号墓の南東、17号墓の南、20号墓の西、21号墓の東に位置する。16号墓・20号墓・21号墓と切り合い關係にあり、20号墓を切り、逆に16号墓と21号墓に切られている。

周溝 西周溝を除く3辺を検出した。東周溝から南周溝にかけては連続するが、東周溝と北周溝とは連続しない。



第120図 22号墓の位置



第121図 22号墓

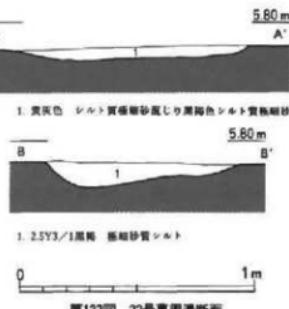
ない。

北周溝は、西側を16号墓南周溝に切られているため検出できたのは東半部に限られる。断面凹形をなし、検出面幅95cm、深さ5cmを測る。

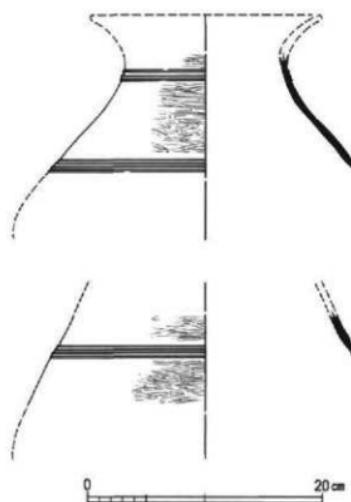
東周溝と南周溝は連続する溝である。南周溝において、土壤状に1段落ち込んでいる。周溝底からの深さは30cmである。周溝断面は歪んだ凹形をなし、検出幅80cm、深さ10cmを測る。

北周溝・東周溝・南周溝それぞれ最深部の標高は、5.66m、5.65m、5.60mで、わずかではあるが南側ほど低くなっている。

填丘 検出した3辺の周溝の方向が、互いに平



第122図 22号墓周溝断面



第123図 22号墓出土土器

の上側に2条の、体部はその下側に3条のヘラ描沈線紋がほどこされている。また、外面は横方向のヘラミガキによって仕上げられている。頭径は13.8cmと復元される。

94は体部上半部にあたる上器片である。肩部附近に段が認められ、その下側に3条のヘラ描沈線紋が施されている。93同様、外面は横方向のヘラミガキによって仕上げられている。

第3節 溝

1. S D O 1

10号墓の西に位置し、10号墓西周溝の肩と接している。検出できたのは弧状をなす東側の肩部のみで、当遺構の大半は調査区外にあたる。このため、当遺構の規模・断面形等は明らかにできないが、断面形は逆台形をなすものと考えられる。深さは20cmである。埋土は、東側に隣接する10号墓とほぼ同じ黒灰色砂混じりシルトが堆積していた。

当遺構から出土した土器はわずかで、図化できたのは、95の壺の底部である。95は底部の約

行ないしその直交方向にない。このため、当墳丘の主軸方向を明確にすることは困難であるが、おむね南北方向を指向している。ちなみに、南周溝を基準とすると、約65°座標方向より振っている。墳丘の規模は南北方向で4.4mを測るが、東西方向については明らかにできない。

墳丘中央部における標高は、5.70mである。

埋葬施設 何も確認できなかった。

出土遺物 南周溝から、壺の体部片が2片(93・94)出土している。

93は頸部から体部上半にかけて残存する。頸部と残存する下端部に段が認められ、頸部はそ

1/6しか残存しない小片である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。底径は16.2cmを測る。この他、蓋の体部片が出土している。胎土が生駒西龍窯の特徴を示すものである。

なお当遺構については、10号墓と掘り方を接していること、他の周溝墓の周溝と規模・埋土・方向等が類似していることなどから、周溝の一部である可能性が十分考えられる。

2. SD02

調査区の南西隅で検出した。北西-南東方向に主軸をとる溝で、検出した長さは最もよく残存する北東側で約5.3mである。断面逆台形を呈し、検出幅1.5mを測り、深さは27cmである。埋土は、黒灰色シルト1層が堆積していた。

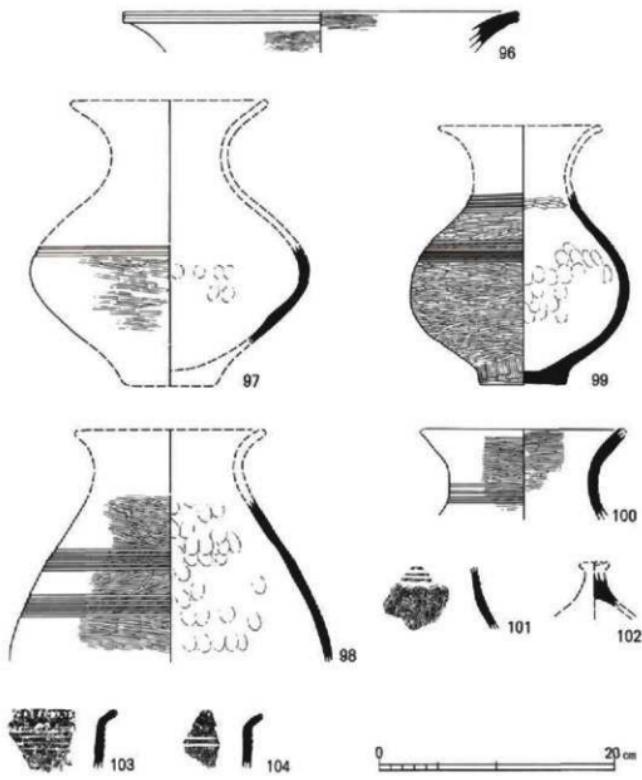
当遺構からは比較的まとまって土器が出土している。器種としては、壺・甕・蓋・底部・輪車があげられる。

まず壺としては、96~101の6個体を図化することができた。96は、広口壺の口縁部である。内外面を横方向の丁寧なヘラミガキで仕上げ、端部にはヘラ描沈線紋が1条施されている。口径は33.3cmである。97は体部片で、中位から下半にかけて残存する。外面は横方向のヘラミガキで、内面はナデおよび指押さえにより仕上げられている。外面には、残存する土器片の最上位に2条のヘラ描沈線紋が施されている。98も体部片で、上半部が残存する。外面は横方向を主体とした丁寧なヘラミガキ、内面はナデおよび指押さえにより仕上げられている。また、外面には5条からなるヘラ描沈線紋が2帯認められる。99は、頸部以下がほぼ完存する。体部外面は縦方向を主体とするハケ調整後横方向を主体とする丁寧なヘラミガキにより、内面はナデおよび指押さえにより仕上げられている。また、頸部外面と体部中位よりやや上位にヘラ描沈線紋が施されている。頸部の沈線については6条残存するが、その上部が欠損しているためさらに本数は多いものと考えられる。体部の沈線は7条からなる。体部最大径18.6cm、底径7.2cmを測る。100は広口壺で、口縁部から頸部にかけて残存する。口頸部内外面とも横方向を主体とした丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。頸部外面には4条のヘラ描沈線紋が施されている。沈線の間隔は一定していない。口径16.6cmを測る。101は頸部から肩部にかけて残存する壺の小片である。内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられている。頸部外面に3条の削り出し突帯が残存する。最上段にある突帯の一部から上を欠損しているため、突帯の条数は3条以上の可能性がある。また肩部外面には、縦方向のヘラ描沈線紋が4条施されている。小片のためその全容は明らかにできない。

甕は103・104の2個体が出土している。103は口縁部から頸部にかけて残存する小片である。

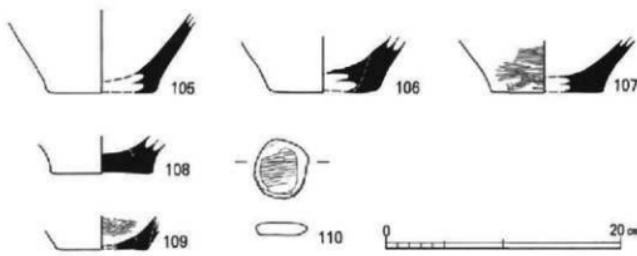


第124図 SD01出土土器



第126図 SD02出土土器(1)

口縁部は如意形を呈し、内外面ともナテ調整および指押さえにより仕上げられている。口縁底部には刻目が施されている。頸部は内面を横方向のハケ調整により、外面をナテ調整により仕



第126図 SD02出土土器(2)

上げられている。頸部外面には4条のヘラ描沈線紋が施されている。また外面には煤が付着している。104も103と同様の小片である。口縁部は如意形を呈し、内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、端部には刻目が施されている。頸部は内面をナデ調整、外面を縦方向のハケ調整により仕上げられている。また外面には2条のヘラ描沈線紋が施されている。さらに外面には煤の付着が認められる。

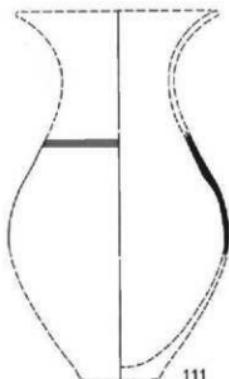
蓋は102の1個体のみである。つまみの部分から体部にかけてがわずかに残存する小片である。外面はナデ調整により仕上げられているが、内面については観察できない。当該期の蓋としては小型に分類されるものである。

底部は105～109の5個体が出土している。105・106については、いずれも内面をナデ調整により仕上げられているが、外面の調整は観察できない。底径はそれぞれ6.7cm・4.7cmである。器種は特定できない。107は内面の調整は不明である。外面は縦方向のハケ調整後、横方向のヘラミガキによって仕上げられている。底径は9.5cmである。外面をヘラミガキによって仕上げていることから壺の可能性が高い。108は内外面ともナデ調整により仕上げられている。底径は8.7cmである。109は内面をヘラミガキにより仕上げられている。外面の調整は観察できない。また、底部の器壁が大変薄くなっていることから、欠損する中心部付近を穿孔していた可能性も考えられる。内面にヘラミガキを施していることから、鉢の可能性も考えられる。底径は7.7cmである。

紡錘車は110の1個体である。4.7cm×5.1cmの不整円形を呈する。一方の面にヘラミガキが認められることから、壺の体部を転用したものと考えられる。

以上のように、当遺構からは、検出した範囲がわずかであるにもかかわらず、他の遺構特に周溝に比べて多くの土器が出土している。また、当遺構は周溝墓とは若干距離をおいた位置にある。以上のことから、周溝の一部になる可能性は少ないものと考えられる。

3. SD 03



調査区北東部で検出した。II区の調査で明らかとなつた遺構である。南北方向から東西方向に鋭形に屈曲する溝で、東端は調査区外にのびる。断面逆台形をなし、検出幅1m、深さ10cmを測る。

当遺構からは111の底と112の底部片が出土している。111は体部中位から両部にかけて残存する小片である。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面については観察できない。残存する最上部には6条のヘラ描沈線紋が施されている。112は器種を特定できない。内面はナデ調整により仕上げられているが、外面については観察できない。底径は5.6cmである。

当遺構については、その平面形・規模・出土土器から判断して周溝墓の一部である可能性が高いものと考えられる。ただし、当遺構の南側では対応する溝を検出できなかった。

4. SD 04

SD 03の南側で検出した。ほぼ東西方向にのび、東端は調査区外までのびる。検出した長さは約8.5mを測る。断面皿形を呈し、検出幅50cm、深さ8cmを測る。

当遺構からは土器の小片が出土しているが、図化はも

ちろん、器種の特定もできない。

第4節 土壙

1. SK 01

調査区中央南端で検出した。I区の調査で検出した遺構である。2号墓と切り合い関係にあり、南周溝に切られている。平面橢円形をなし、主軸方向を南西-北東方向にとり、その規模は2.0m×1.1mである。断面は深い皿形をなし、深さは22cmである。埋土は黒色シルト質砂が堆積していた。当遺構内からは土器が出土しているが、いずれも小片で図化および器種の特定は困難である。

当遺構については土壙墓の可能性も考えられるが、調査では明確にできなかった。

2. SK02

調査区中央やや北側で検出した。II区の調査で検出した土器である。11号周溝墓と切り合い関係にあり、南周溝に切られている。このため、検出できたのは全体の約1/3に限られる。平面形は隅丸長方形と推定される。ほぼ南北方向に主軸をとり、座標方向より約10°振っている。主軸方向における規模は11号塞南周溝に切られているため明らかにできないが、2.5mを検出している。その直交方向は1.5mである。断面逆台形をなし、深さは27cmである。埋土は黒褐色砂混じりシルトと灰色シルト質砂が4層にわたって堆積していた。このなかで、下から2層目の灰色シルト質砂は地山が流れ込んだ層で、他の3層は自然堆積による層である。



113



114

第128図 SK02出土土器

遺構内からは土器が若干出土している。図化できたのは113の壺と114の底部である。113は壺の体部上半と推定される小片である。外面には7条からなる櫛描直線紋と同じく7条からなる櫛描波状紋が交互に施されている。両者は同じ櫛原体を使用したものと考えられる。114は器種を特定できない。外面はヘラミガキにより、内面はナデ調整および指押さえにより仕上げられている。底径は6.1cmである。

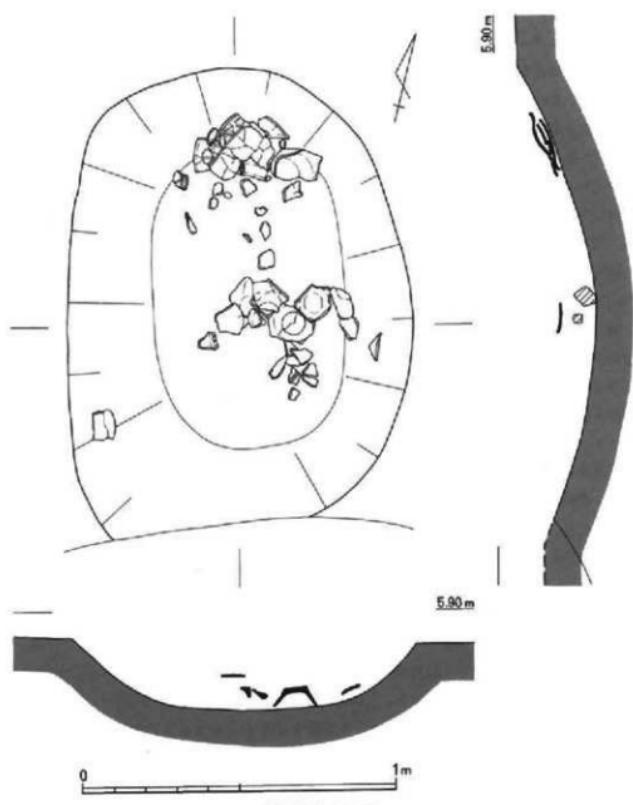
本遺構については、検出当初、その平面形および規模から木棺墓の可能性が考えられた。しかし、遺構内の堆積状況・土器の出土状況等から判断して、その可能性は少ないものと判断した。ただし、土壤墓の可能性は否定しきれない。脂肪酸分析によると、ヒト遺体の埋葬であるという結果がでている。

3. SK03

調査区中央やや北側で検出した。II区の調査で検出した遺構である。SK02の東に位置し、SK04に切られている。平面は長椭円形を呈し、主軸方向をSK02と同じくほぼ南北方向にとる。座標方向より約20°振っている。主軸方向における規模は、SK04に切られているため明確にできないが、1.45mを検出している。その直交方向は1.1mである。断面逆台形をなし、深さは23cmである。当遺構内からは比較的まとまって土器が出土している。その出土状況は、特に壺を中心に、土壤底に押し潰されたようである。器種としては壺・壺・底部が出土している。

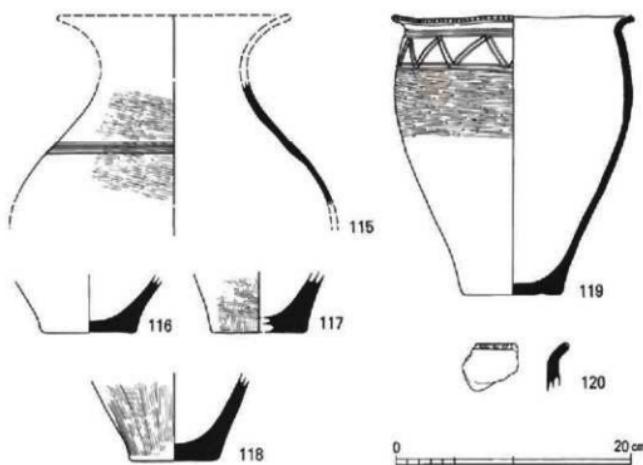
壺で図化できたのは115の1個体のみである。頭部から体部中位にかけての小片である。内面はナデ調整および指押さえにより、外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられ、肩部に削り出し突帯が施されている。突帯の比率はわずかで、2条のヘラ描沈線紋が施されている。

壺としては119と129の2個体を図化した。119はほぼ完存する個体である。口縁部は如意形



第129図 SK03

を呈し、横ナデ調整により仕上げられている。端部には刻目が施されている。体部上半は横方向のヘラミガキによって仕上げられている。また頭部には、2条の平行するヘラ描沈線紋が2段にわたって施され、その間に同じく2条のヘラ描による山形紋が施されている。下半の調整方法については、磨滅が著しく観察できない。体部内面はナデおよび指押さえにより仕上げら



第130図 SK 03出土土器

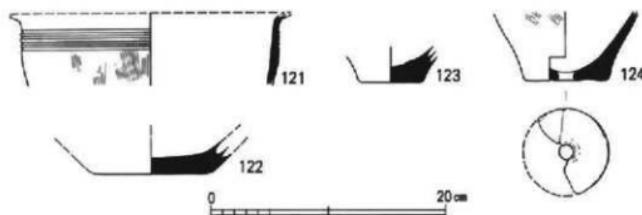
れている。口径19.8cm、頸径18.3cm、体部最大径20.0cm、底径8.4cm、器高13.7cmを測る。120は口縁部の小片である。如意形を呈し、端部に刻目が施されている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

底部で固化できたのは、116～118の3個体である。116は、外面を縦方向のハケ調整により、内面をナデ調整により仕上げられている。底径は17.8cmである。117は、外面を縦方向のハケ調整の後、横方向のヘラミガキによって仕上げられている。ヘラミガキは部分的なものである。底径は8.1cmを測る。118は、外面を縦方向のハケ調整により、内面をナデ調整により仕上げられている。底径は7.6cmである。

以上のように、当遺構については、平面形・断面形・規模・土器の出土状況などから判断して、埋葬遺構の可能性は少ないものと考えられる。

4. SK 04

調査区中央やや北寄りで検出した。II区の調査で明らかとなった遺構である。11号周溝墓及びSK 03と切り合い関係にあり、11号周溝墓南周溝に切られ、SK 03を切っている。11号墓周溝に切られているため全体の規模は明らかにできないが、検出した長さは2.4mである。断面



第131図 SK 04出土土器

逆台形を呈し、検出幅90cm、深さ10cmを測る。

当遺構からは壺・甕・底部が出土している。壺は、いずれも小片のため図化できなかった。指頭圧痕紋凸帯を貼付けた頸部片が出土している。

甕は、図化できたのは121の1個体のみである。口縁部は端部を欠くが、如意形を呈する。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられ、頸部下に4条のヘラ彫沈線紋が施されている。内面の調整痕は観察できない。口径24.0cmと復元される。この他、ヘラ彫沈線紋を有する小片も出土している。

底部として図化できたのは122～124の3個体である。122は甕の底部と考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。底径は9.5cmである。123は甕の底部と考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。底径は5.6cmである。124は器種を特定できない。内面はナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。底部中央部に焼成前の穿孔が認められる。径は1.2cmである。底径は7.2cmである。

当遺構については、その平面形から判断して周溝の一部の可能性も考えられる。しかし、当遺構に対応する溝を検出できなかった。

5. SK 05

SK 04の南側に位置する。11号周溝墓と切り合い関係にあり、南周溝に切られている。平面格円形を呈し、ほぼ南北方向に主軸をとる。当遺構の北側が11号墓に切られているためその規模を明確にできないが、2.1m検出している。その直交方向は1.3mである。断面逆台形ないし箱形をなし、深さは40cmである。埋土は自然地盤と考えられるシルト質砂が3層にわたって堆積しており、中層より上には炭の混入が認められた。

当遺構内からは、ヘラ彫沈線紋を施した小片が1点出土している。

本遺構についても、平面形・規模等から当初は埋葬施設ではないかと考えたが、埋土から判断して、木棺墓でないことは確かである。ただ、土壤墓の可能性については否定しきれない。

第4章 自然科学的分析の結果

第1節 東武庫遺跡出土弥生土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

(1) はじめに

弥生土器を焼成した窯跡は残っていないので、須恵器のようにして産地問題を取り上げることはできない。しかし、素材粘土の特徴は須恵器と同様に、K、Ca、Rb、Sr、因子を中心表示される。したがって、これらの因子を使って、同じ粘土を素材とした土器かどうか判断はできる。例えば、ここに鑿痕があるとしよう。通常、上盤と下盤がセットになって埋葬されている。この上盤と下盤の素材粘土が同じであるかどうかは元素分析によって確かめることができる。もし、同じなら、同じところで製作された可能性が高くなる¹⁾。あるいはまた、いまここに、地元産の土器形式をもつ弥生土器と外部地域の土器形式をもつ弥生土器が同じ遺跡から出土したとしよう。元素分析の結果、同じ胎土であることが判明したとすると、人が移動して来て、地元で外部地域の土器形式をもつ土器を製作した可能性が出てくる。もし、このようなデータが各地の遺跡で確認されると、土器形式だけで直接、土器の伝播・流通を考えることは困難となる。実はこのような例があちこちで報告されており、弥生土器の胎土分析も必要であることが改めて認識され始めている現況である。

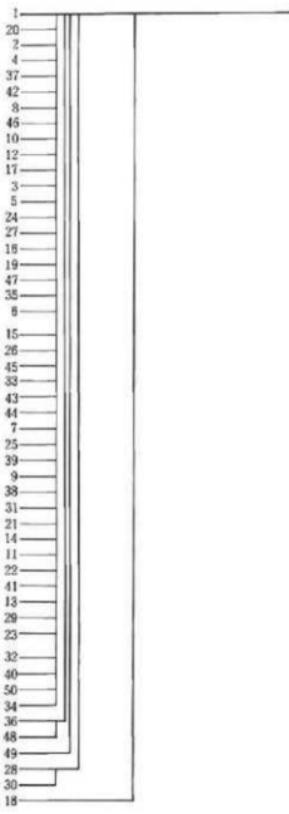
東武庫遺跡から出土した弥生土器に混じって、土器形式からみて無文土器とみられる土器が出土した。果たして、胎土からみて、1点の無文土器は東武庫遺跡の弥生土器とは異なるといえるかどうかという観点から蛍光X線分析が行われた。本報告ではその結果について報告する。

(2) 分析結果

土器試料の処理法と分析法は従来通りである。

分析値は第3表にまとめられている。全分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度によって標準化された値で表示されている。

はじめに、東武庫遺跡および、同時期の近辺の遺跡である上ノ島遺跡から出土した弥生土器を



元素分析のデータから分類することを試みた。K、Ca、Rb、Srの4因子を使って、群平均法でクラスター分析した結果を第132図に示す。この図を見る限り、区切り方は難しい。あえて区切るとすれば、34と36の間で区切ることができる。仮にここで区切ると、1～34までの大部分の試料がK、Ca、Rb、Srの4因子からみて類似した胎土をもつということになる。No36、No48、No49、No28、No30、No18の6点のみが異質の胎土である。

ここで、Rb-Sr分布図上でクラスター分析の結果を確かめてみよう。第133図には東武庫遺跡出土弥生土器のRb-Sr分布図を示す。大部分の試料を包含するようにして、東武庫領域を描いてある。勿論、定性的な意味しかもたない領域であるが、他の領域と比較する上には十分役に立つ。クラスター分析の結果からも予想されるように、大部分の試料が東武庫領域に分布する。領域をずれたNo18、No48、No49の3点はいずれも、クラスター分析で異質の胎土と判断されたものである。また、縁、鉢、壺、の器種による胎土の偏りもないことがわかる。このように、東武庫遺跡出土弥生土器の大半が東武庫領域に分布したということは、これらは東武庫遺跡内、あるいは、その近辺で作られた弥生土器であることを示唆する。そうすると、土器形式からみて無文土器とみられるNo1の1点の土器の胎土も東武庫的であり、朝鮮半島から輸入された土器ではないことを示している。

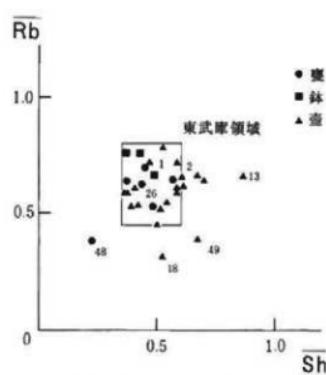
第134図には、上ノ島遺跡出土弥生土器のRb-Sr分布図を示す。比較のために、東武庫領域も示してある。大半の試料は東武庫領域に分布する。東武庫領域を大きくずれたNo28、No30、No36の3点はクラスター分析でも異質の胎土と判断されたものである。

第132図 クラスター分析の結果
(K、Ca、Rb、Sr 因子を使用)

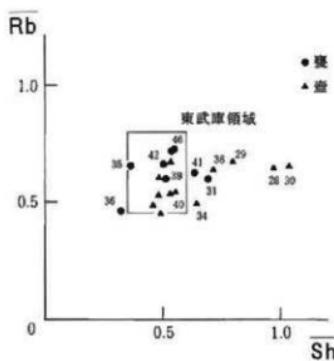
第133図と第134図を比較すると、上ノ島遺跡の弥生土器は東武庫領域の右半分側に少し偏って分布しているように見える。この程度の分析試料から速断はできないが、もし、この偏りが本当であるとすると、上ノ島遺跡の弥生土器は東武庫遺跡の弥生土器に比べて、Ca量とSr量がやや多い傾向があることになり、東武庫遺跡と上ノ島遺跡ではそれぞれ、別々に弥生土器を作成し、消費していったという推定もでてくる。弥生土器の生産体系については目下のところ、定説はないが、筆者はこれまでの分析データから、各遺跡ごとに土器をつくっていたのではないかという考え方をもっている。今回の分析結果も、この考え方の根にはば沿ったものである。そして、クラスター分析で異質の胎土をもつと判断された土器が遺跡外から搬入されたものである可能性をもつ。

なお、Fe、Na因子については第3表からもわかるように、東武庫遺跡の弥生土器と上ノ島遺跡の弥生土器では有意な差異は認められなかったので、データ解析には使用しなかった。

弥生土器の胎土研究は須恵器や埴輪ほどに進んでいない。生産地である窯跡が残っていないという点にその主たる原因はあるが、それでも、「弥生土器の生産体形はどのようなものであったか」という問い合わせに答えるような形で胎土分析が進み始めている。今後のデータの集積に期待がかかる。



第133図 東武庫遺跡出土弥生土器
のRb-Sr分布図



第134図 上ノ島遺跡出土弥生土器
のRb-Sr分布図

第3表 分析値

試料名	遺跡名	器種	報告No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
1 東武庫	壺	3 0 (2次)	0.537	0.222	1.69	0.546	0.565	0.347	重・堅物部無又上層	
2 東武庫	壺	5 0 (2次)	0.513	0.193	0.775	0.558	0.601	0.184	密	
3 東武庫	壺	3 1 (2次)	0.459	0.186	1.67	0.631	0.337	0.156	粗・白色粒多	
4 東武庫	壺	9 9 (2次)	0.507	0.257	1.07	0.719	0.579	0.191		
5 東武庫	壺	1 1 (2次)	0.485	0.161	1.24	0.625	0.493	0.169	粗・白色粒多	
6 東武庫	壺	8 2 (2次)	0.465	0.201	2.21	0.539	0.417	0.135	密	
7 東武庫	鉢	4 3 (2次)	0.698	0.218	1.14	0.756	0.357	0.339		
8 東武庫	壺	3 9 (2次)	0.607	0.231	1.19	0.720	0.464	0.267		
9 東武庫	壺	3 7 (2次)	0.525	0.327	1.22	0.665	0.668	0.312		
10 東武庫	壺	5 4 (2次)	0.621	0.282	1.30	0.787	0.516	0.316		
11 東武庫	壺	5 1 (2次)	0.472	0.338	1.15	0.588	0.589	0.342		
12 東武庫	鉢	1 0 9 (2次)	0.531	0.204	1.25	0.765	0.421	0.150	やや粗・白色粒	
13 東武庫	壺	9 8 (2次)	0.485	0.294	1.12	0.658	0.863	0.189		
14 東武庫	壺	9 7 (2次)	0.474	0.242	1.38	0.643	0.700	0.139		
15 東武庫	壺	2 2 (2次)	0.368	0.244	1.69	0.520	0.513	0.134	やや粗	
16 東武庫	底部	1 7 (2次)	0.582	0.223	1.99	0.530	0.386	0.198		
17 東武庫	壺	1 2 (2次)	0.537	0.227	1.64	0.706	0.482	0.222		
18 東武庫	底部	8 0 (2次)	0.314	1.19	2.63	0.318	0.520	0.315	やや粗	
19 東武庫	壺	7 9 (2次)	0.372	0.284	2.46	0.614	0.404	0.318		
20 東武庫	底部	8 8 (2次)	0.561	0.254	1.17	0.658	0.597	0.268		
21 東武庫	壺	9 3 (2次)	0.543	0.312	1.93	0.619	0.607	0.271		
22 東武庫	底部	1 1 8 (2次)	0.446	0.349	1.70	0.614	0.584	0.248	やや粗・白色粒少	
23 東武庫	壺	1 1 5 (2次)	0.543	0.342	1.28	0.454	0.504	0.288		
24 東武庫	壺	1 1 9 (2次)	0.537	0.124	1.04	0.641	0.374	0.176	やや粗	
25 東武庫	鉢	1 1 2 (2次)	0.697	0.281	1.49	0.565	0.476	0.238		
26 東武庫	壺	1 2 1 (2次)	0.495	0.248	2.89	0.526	0.477	0.217	やや粗	
27 東武庫	壺	9 6 (2次)	0.546	0.143	1.83	0.588	0.357	0.172		
28 上ノ島	壺	2	0.573	0.355	0.795	0.650	0.972	0.215		
29 上ノ島	壺	3	0.521	0.306	0.739	0.575	0.792	0.200		
30 上ノ島	壺	6	0.481	0.435	1.09	0.548	1.04	0.175		
31 上ノ島	壺	9	0.519	0.335	0.815	0.603	0.690	0.145		
32 上ノ島	壺	3 3	0.570	0.366	1.35	0.483	0.494	0.201		
33 上ノ島	壺	3 8	0.417	0.267	0.637	0.492	0.461	0.220		
34 上ノ島	壺	3 9	0.516	0.413	2.17	0.491	0.636	0.260		
35 上ノ島	壺	4 2	0.636	0.265	0.752	0.561	0.362	0.217		
36 上ノ島	壺	4 4	0.525	0.195	0.784	0.456	0.319	0.184		
37 上ノ島	底底部	4 7	0.539	0.224	0.685	0.582	0.528	0.221		
38 上ノ島	底底部	5 1	0.517	0.294	0.900	0.643	0.710	0.249		
39 上ノ島	壺	5 4	0.709	0.244	1.81	0.599	0.510	0.389		
40 上ノ島	壺	5 8	0.567	0.350	2.43	0.538	0.547	0.172		
41 上ノ島	壺	6 8	0.460	0.284	1.62	0.527	0.621	0.176		
42 上ノ島	壺	6 9	0.538	0.209	0.632	0.672	0.504	0.174		
43 上ノ島	底底部	7 7	0.464	0.258	0.822	0.608	0.482	0.156		
44 上ノ島	底底部	7 8	0.487	0.199	1.08	0.540	0.525	0.179		
45 上ノ島	底底部	8 6	0.444	0.253	1.01	0.535	0.475	0.167		
46 上ノ島	底底部	9 2	0.603	0.215	0.583	0.727	0.537	0.195		
47 東武庫	壺	1 (1次)	0.564	0.262	2.43	0.595	0.370	0.282		
48 東武庫	壺	4 (1次)	0.471	0.313	0.978	0.383	0.217	0.159		
49 東武庫	底底部	8 (1次)	0.386	0.525	2.39	0.292	0.668	0.293		
5 0 東武庫	底底部	9 (1次)	0.498	0.402	2.19	0.351	0.542	0.236		

* 東武庫遺跡出土試料については、第1次全面調査と第2次全面調査の両調査に伴う試料を分析した。このため、報告名の右横に「(第1次)」「(第2次)」と明示した。

※第1次調査の報告は、兵庫県教育委員会『東武庫遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第84冊)1991による。第2次調査の報告は、本報告にて使用したものである。

*上ノ島遺跡の試料は、兵庫県教育委員会『上ノ島遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第105冊)1992に報告されたもので、報告名も当該報告書による。

第2節 東武庫遺跡出土木棺の樹種

第4章 第2節、第3節は
公開していません

第5章 遺物のまとめ

第1節 弥生土器

1. はじめに

I区とII区の調査で、遺構内および包含層から出土している。しかし、全体的にその出土量は多いとはいえない。また、口縁部から底部まで残存するものはわずかで、全体的に土器の遺存状況も良好とはいえない。器種としては、壺・甕・鉢・蓋・底部および擬朝鮮系無文土器が出土している。時期についても、おおむね弥生時代前期前半から中期初頭に位置付けられるものである。これらの中で主な遺物の出土位置をまとめたのが、第15図と第16図である。

本節では、検出した個々の周溝墓の時期の確定および各周溝墓間の前後関係の明確化を前提として、土器をより詳しく検討していくことにする。このため、周溝墓に伴う土器を中心に検討していくことにする。なかでも、出土量が多く、編年基準が確立している壺形土器を中心に検討していくことにしたい。そして、甕形土器については、壺形土器の検討結果に対応させる作業を中心に行っていくことにする。

なお、ここで時期を検討していくにあたって、特に前期の土器について、基準とする時期設定について説明しておく。当該期の土器については、佐原編年⁽¹⁾・井藤編年⁽²⁾・森田編年⁽³⁾等多くの編年案がある。しかし、これらの土器編年についてその当否を論ずる力量は報告者にはない。ただし、どの編年案においても、基本的な変化の方向性についてはほぼ一致している。よって、本節においては、上記の土器編年に共通する変化をもとに、本節の目的を達成するに最低必要な便宜的な段階設定を行いたい。

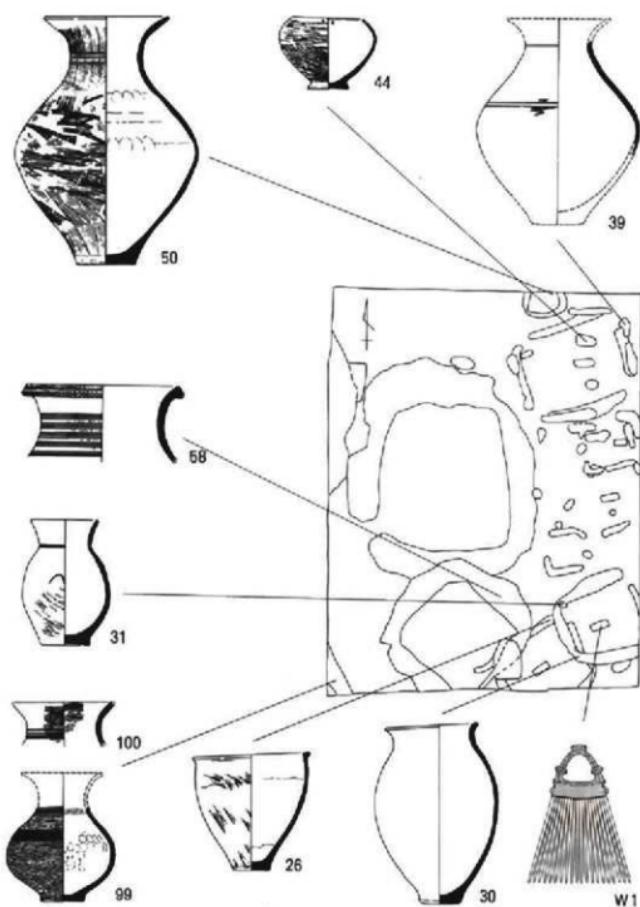
まず第1段階として、頸部と体部に段を用いる段階である。第2段階として、削り出し突帯が出現し、ヘラ描沈線紋が盛行する段階である。最後に、ヘラ描沈線紋や貼付け突帯が多条化する第3段階である。最後に、中期初頭として第4段階を設定する。各段階のなかで、その新古関係が明確な場合は、その傾向を「古相」「新相」と明記することにする。

なお、擬朝鮮系無文土器については、次節で検討することにする。

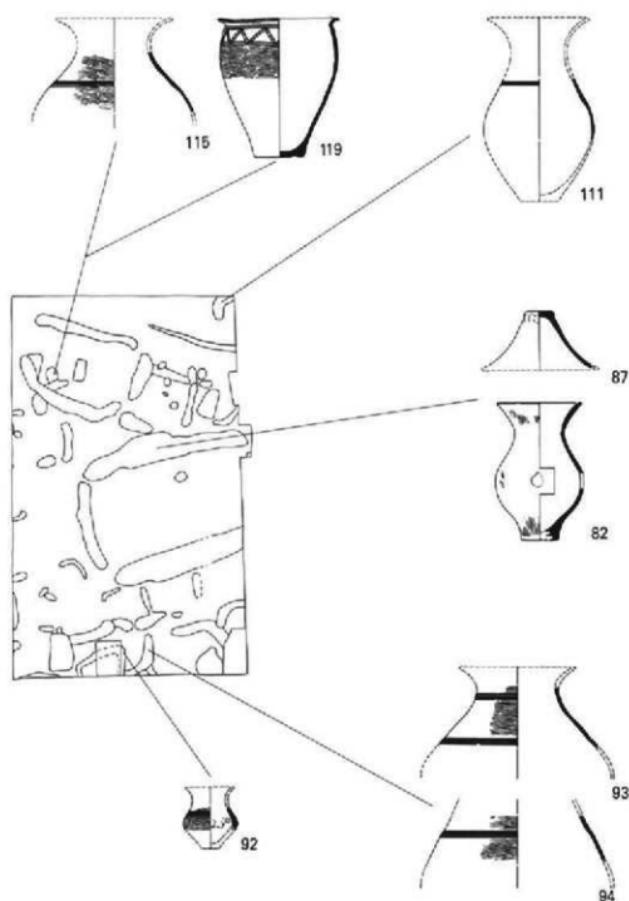
2. 時期の検討

(1) 壺形土器 (第155図)

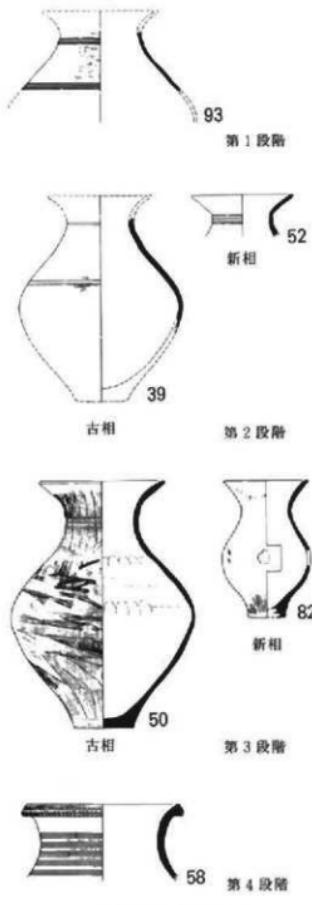
第1段階 当段階に位置付けられる壺は、22号墓出土の94が該当する。体部上半にわずかな段が認められ、その下側に3条のヘラ描沈線紋が施されている。また、94と同じ周溝から出土し



第153图 I区主要遗物出土位置



第154图 II区主要遗物出土位置



第165図 盆形土器の変遷

ている93についても、下端を欠損するが94と同タイプの段となる可能性が高い。また、頸部には削出突帯Ⅱ種少条が施されている。

第2段階 当段階に位置付けられる壺としては、3号墓出土の37、4号墓出土の39、6号墓出土の52、13号墓出土の79、SK03出土の115があげられる。

これらの土器のなかで、37・39は削出突帯Ⅰ種に、他は削出突帯Ⅱ種に分類される。さらに、後者の削出突帯Ⅱ種については、52の少条のものと、79と115の多条のものとに分類できる。削出突帯は、傾向としてⅠ種→Ⅱ種少条→Ⅱ種多条と変化することから判断して、37・39→52→115と3段階に細分が可能である。

この他、21号墓の92についても、体部中位のみの残存で、削出突帯が施されているのかどうか判断できないが、その形態及び少条のヘラ描沈線紋からみて、当該期に位置付けられるのではないかと考えられる。ただし、古相か新相かについては特定できない。

第3段階 2号墓出土の27・31、5号墓出土の50、10号墓出土の66、15号墓出土の82、SD01出土の97~100、SD03出土の111が挙げられる。これらの土器は、多条化傾向が認められる97~100とそれ以外の土器とに分けることができる。そして、後者に対して前者の土器がより古い傾向にあるものと理解できる。

また、82については佐原氏のb形態に分類されるもので、佐原氏・森田氏の編年によると、前期でも最も新しい段階に出現するとされている。よって、82については、第3段階のなかでも新しい時期に位置付けられる。

第4段階 当段階に位置付けられる壺として、9号墓出土の58、11号墓出土の73・75があげられる。これらの土器は、いずれも小片であることから、より細かく分けることは困難である。中期初頭に位置付けたい。

最後に44の無頸壺について検討を加えてみたい。この土器は、第2段階の広口壺を伴う4号墓の1号主体部の下層から出土している。したがって、上記の出土状況から判断すると、第2段階ないしそれより古い時期に位置付けられる。

ところで、当タイプの土器については、出土例は多いとは言えず、その時期設定は困難である。加えて、44のように底部から口縁部まで完存するものは少ない。森田氏は、ヘラ描沈線紋が多条化する段階、つまり第3段階に出現するとされているが、当遺跡出土資料の出土状況から判断すると、第3段階まで下げることは困難である。

そこで、他の遺跡における無頸壺の類例を検討してみたい。当遺跡周辺では、田能遺跡⁽⁴⁾・勝部遺跡⁽⁵⁾等で、さらに河内の龜井遺跡⁽⁶⁾・美園遺跡⁽⁷⁾等で出土している。しかし、これらの遺跡出土の無頸壺は底部から口縁部まで残存するものはほとんどなく、この土器そのものの時期を特定することは困難である。類例を瀬戸内地方に求めると、備前の百間川沢田遺跡⁽⁸⁾から口縁部から底部まで残存する無頸壺が出土している。この他、備後の大宮遺跡⁽⁹⁾からも、同様の無頸壺が出土している。これらの資料は、底部の形態は東武庫遺跡出土資料と異なるが、いずれも第2段階に位置付けられている。したがって、44の時期についても、第2段階まで遡る可能性が考えられ、出土状況を重視して、第2段階に位置付けたい。

（2）變形土器

上記で検討した変形土器と共に伴する變形土器については、各遺構単位に共伴する変形土器の示す時期に対応させたい。ここでは、単独で出土した變形土器、あるいは良好な共伴資料を伴わない變形土器を対象に検討することにする。対象となるのは、1号墓出土の26と17号墓出土の90である。

まず26について検討したい。この土器は、口縁部の形態がいわゆる逆L字形を呈するものであるが、口径に対して器高が低い点において、他の同タイプの土器とは特徴を異にする。口縁部が逆L字形を呈する壺は、秋山浩三がすでに「瀬戸内型壺」として分類している⁽¹⁰⁾もので、備前・讃岐地方を中心とした瀬戸内地方を中心に分布することが明らかにされている。そしてこのタイプの土器は一般には前期でも最終段階に出現するもので、わずかにその前段階に出現している可能性があると指摘されている。

以上のことから、26についても、形態的特徴を若干異にするものの、第3段階に位置付けたい。

次に90についてであるが、ヘラ描沈線紋等が認められないため時期を特定できない。ただし、

第II様式においても認められる型式であることから、前期のなかでも最新段階に位置付けられるのではないかと考えられる。

(3) 小結

以上の検討結果から、確実に時期を特定できる資料は以下のようにまとめることができる。

第1段階（第I様式）

22号墓出土土器

第2段階（第I様式）

（古）3号墓出土土器・4号墓出土土器

（新）6号墓出土土器・13号墓出土土器・SK03出土土器

第3段階（第I様式）

（古）1号墓出土土器・2号墓出土土器・5号墓出土土器・10号墓出土土器・21号墓出土土器・SD03出土土器

（新）15号墓出土土器・17号墓出土土器・SD01出土土器

第4段階（第II様式）

9号墓出土土器・11号墓出土土器

以上のように、周溝墓を中心とした東武庫遺跡出土資料は大きく4段階に細分できることになった。そこで、これらの各段階の具体的な時期について検討していくことにする。

まず第1段階についてであるが、類例としては奈良遺跡溝28出土資料⁵⁹（当該報告書図版75-8）に認められる。しかし、当該遺構の時期については、より新しい傾向の土器を含むため、特定はできない。ただし、93・94のような段については、森田編年における摂津I-2様式の基準資料とされている東奈良遺跡溝27出土資料⁶⁰（当該報告書図版72-4）にも認められる。よって、当段階に対応するものと考えたい。さらに、井藤編年のI-a段階からI-b段階にあたるものと考えられる。

次に第2段階であるが、削出突帯I種と削出突帯II種が共存し、かつ削出突帯II種については少条と多条が認められる時期である。

古相の37については東奈良遺跡溝25中層出土資料⁶¹に、39については同じく東奈良遺跡G-4-G地区方形周溝墓群古相資料⁶²にそれぞれ類例が認められ、いずれも森田編年においては摂津I-2様式に位置付けられている。そしてこれは、佐原編年における中段階、井藤編年におけるI-b段階にあたるものと考えられる。

次に新相の52についても93・94同様、東奈良遺跡溝27出土資料（当該報告書図版73-24）に類例が認められ、森田編年においては摂津I-2様式に位置付けられている。ただし93・94より新しい傾向にあり、井藤編年のI-C段階にあたるものと考えられる。

以上のことから、第2段階は佐原編年の中段階あるいは森田編年の摂津I-2段階にあたり、そのなかでも古相については、井藤編年のI-b段階に、新相については井藤編年のI-C段階にあたるものと考えられる。

次に第3段階についてであるが、壺・甕とともにヘラ描沈線紋の多条化傾向が認められるが、十数条というような顯著なものは認められない。以上のことから、古相・新相とともに佐原編年の新段階、井藤編年のII-a段階、森田編年の摂津I-3様式に対応するものと考えられる。よって、当遺跡においては、前期の最新段階（井藤編年のII-b、森田編年の摂津I-4様式）に対応する土器の出土は認められない。可能性としては、17号墓出土の90が考えられる。

最後に第4段階についてであるが、以下の2点から第II様式の最も古い段階に位置付けられるものと考えられる。①68に類似するタイプが田能遺跡4調査区土壤1出土資料に認められ、森田編年においては摂津II-1様式に位置付けられている。②9号墓において第I様式第3段階の土器と共伴している、の2点である。以上の検討結果をまとめたのが第8表である。

第8表 前期弥生土器編年対照表

東武鹿遺跡	佐原編年	井藤編年	森田編年
第1段階	古段階	I-a~b	摂津I-2
第2段階	古	I-b	
	新	I-c	
第3段階	古		摂津I-3
	新	II-a	
+		II-b	摂津I-4

3. 土器の胎土について

(1) 胎土分析について

当遺跡出土の土器の胎土分析については、30の無文土器ではないかという土器を主な対象とし、搬入されたものか在地産かどうかの確認を主眼とした。このため、奈良教育大学の三辻利一先生と京都大学の清水芳裕先生に、それぞれ別の方法による分析を依頼した。三辻先生は蛍光X線による胎土中の粘土の元素を、清水先生は胎土中の岩石鉱物をそれぞれ分析対象とした。このため、特に清水先生に分析していただいた資料は、全て三辻先生による分析資料と重複するものである。

(2) 蛍光X線による胎土分析結果

三辻先生には、今回報告する土器の他に、第1次全面調査において出土した弥生時代前期の土器および上ノ島遺跡出土の同時期の土器についても分析していただいた。その分析結果については玉稿をいただき、第4章1節にまとめてある。それによると、30についても、他の土器の胎土と比較して差が認められないという結論に達している。

(3) 岩石鉱物分析による分析結果

清水先生からはコメントのみいただいているので、このコメントを紹介したい。なお、分析資料は、2号墓出土の無文土器と考えられる壺(30)・壺(31)、5号墓出土の壺(50)、15号墓出土の壺(82)、包含層出土の壺(11)の5点である。コメントは以下の通りである。

A. 材質の特徴

岩石および鉱物以外のそれをとりまく材質については、次のような差がみられる。30・50・82は全体に緻密な粘土は少なく、石英・長石類の微細片を多量に含むシルト質と表現すべきような材質である(Ⅰ)。この面からこの3点に対する31・11についての特徴をあげると、31は緻密な粘土質の材質を多く含み(Ⅱ)、この粘土の酸化鉄のために、多少色調にも影響があるものと考えられる。11は31と比較すると、粘土の緻密さの点では劣るが、全体に均質な材質をもつ。

B. 含有岩石鉱物の特徴(第156図)

①胎土の中で占める岩石鉱物の大半は、5点に共通して石英と長石である(Ⅲ・Ⅳ)。その中には少量の黒雲母をともなって、未分解の深成岩の岩片の状態を示すものも少数見られる(Ⅴ)。

②岩石鉱物の種類については、5点に共通して強い深成岩の要素がみられるほか、少量の砂岩(Ⅵ・Ⅶ)と泥岩(Ⅷ)を含む。

③そのほか、33・11・82にはそれぞれ長径約0.05cmあるいはそれ以下の細粒の角閃石がみられる。

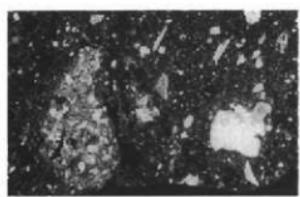
④以上のはかに土器の材料を採取した地域の特徴を具体的に示す岩石鉱物が含まれていない。

①～④にあげた特徴は、この地域を含めて非常に多くの地域に共通する要素であるため、これら5点の土器が同一の地域で製作されたものであるか、あるいはいずれかが異なる地域のものであるかについて、結論づけるだけの情報はえられていない。

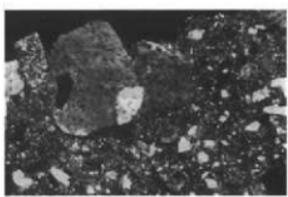
(4) 小結

以上、2つ観点からの分析結果において、少なくとも30の無文土器ではないかと考えられた土器については、胎土的特徴からは他の土器との差は認められないことが明らかとなったものと考えられる。

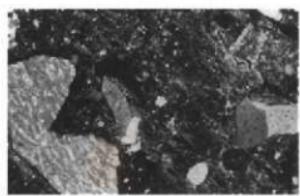
この他、上記の分析の対象とはしなかったが、肉眼観察の結果では生駒西麓産と判断される土器片が、小片ではあるが出土していることを明記しておく。器種等は特定できないが、壺の可能性が高い。出土遺構は、2号墓、4号壺、6号墓とSD01である。



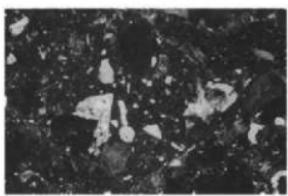
I. シルト質の素地 (82)



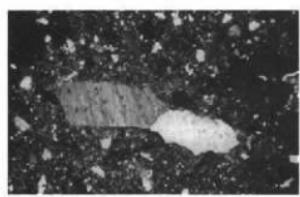
V. 深成岩の岩片 (30)



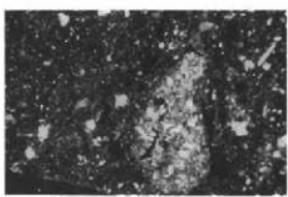
II. 細密な素地 (31)



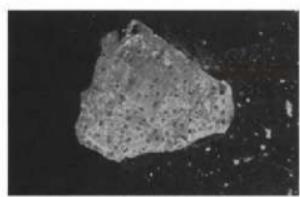
VI. 砂岩 (31)



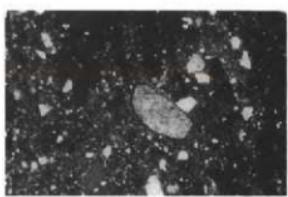
III. 石英 (右) とバーサイト構造のカリ長石 (左) (82)



VII. 砂岩 (82)



IV. バーサイト構造のカリ長石 (11)



VIII. 花岩 (30)

第156図 須波鏡写真 ($\times 18$)

4.まとめにかえて

最後に、東武庫遺跡出土の土器の特徴について若干の検討を行いたい。

(1) 供獻土器について

まず、当遺跡出土の土器の中で包含層出土土器以外は、周溝墓に伴うものである。つまり、棺に転用された土器以外は周溝墓に供獻された土器と考えられる。そこで、このような観点から、当遺跡出土の土器を見てみたい。

岩松保氏は、周溝内の供獻土器の出土状況について、①完形に近い形で押し潰されてまとまって出土する「完形」タイプ、②破砕された状態で細片で出土する「破砕」タイプの2タイプが認められ、後者のタイプには埋葬遺構との関係が深い、と指摘している⁶⁶。

「完形」タイプとしては、2号墓に伴う無文土器と考えられる壺(30)、2号墓土壙1に伴う壺(31)、15号墓に伴う壺(82)が挙げられる。この他、取り上げ段階まで完形であったと確認された、2号墓土壙1に伴う壺(32・33)、11号墓に伴う壺(64・70)についても当タイプに分類されるものと考えられる。さらに、完形ではないが1号墓に伴う壺(26)についても、当タイプの可能性が考えられる。

さらに、当タイプの土器のなかには、一般的に底部・体部などに穿孔したものや口縁部を打ち欠いたものも少なからず認められる。しかし、当遺跡においては口縁部を打ち欠いたものは認められない。体部に穿孔を施したものは、15号墓出土の82が該当する。底部を穿孔したものは、周溝内からは出土していないが、6号墓土壙1から出土した55の壺に認められる。また、包含層出土ではあるが、甕の底部(21)に穿孔が認められる。この土器についても、本来は周溝に供獻されたものと考えられる。

「破砕」タイプについては、4号墓南周溝が該当するのではないかと考えられる。

以上のように、当遺跡出土の土器の中に、明らかに供獻されたと考えられる土器が比較的多く認められる。出土土器のなかで壺形土器が圧倒的に多いことも、このためと考えられる。

(2) 地域性について

次に、当遺跡が所在する西摂平野及びその周辺地域の当該期の遺跡出土資料との比較を行い、当遺跡出土土器の特徴について検討したい。当遺跡周辺、特に当遺跡が位置する西摂平野において、当該期(弥生前期)の遺跡としては、上ノ島遺跡⁶⁷・田能遺跡・勝部遺跡・北青木遺跡⁶⁸・本山遺跡⁶⁹等が知られている。(第157図)なお、本遺跡の資料は周溝墓に伴う資料を中心であるため、集落跡出土の他資料とは単純に比較できるものでないことを前提としていることを断っておく。

口縁部が逆し字形をなすいわゆる「瀬戸内型甕」については、秋山氏によって分析がなされている。これによると、上ノ島遺跡においては7.5%、田能遺跡においては3.6~7.1%、勝部



1. 雷井遺跡（神戸市） 7. 北裏遺跡（尼崎市） 13. 猪名川床道跡（尼崎市）
 2. 本山遺跡（神戸市） 8. 東武庫遺跡（尼崎市） 14. 菅田西遺跡（尼崎市）
 3. 北青木遺跡（神戸市） 9. 上ノ島遺跡（尼崎市） 15. 稲部遺跡（豊中市）
 4. 本庄村遺跡（神戸市） 10. 葦山・庄下川遺跡（尼崎市） 16. 利倉遺跡（豊中市）
 5. 越水山遺跡（西宮市） 11. 大阪空港B遺跡（豊中市） 17. 垂水遺跡（豊中市）
 6. 甲羅園遺跡（西宮市） 12. 田能遺跡（尼崎市）

第157図 西摂平野の主要な前期弥生遺跡

遺跡においては9.4%といずれも10%未満である。このように、西摂地域は10%前後の比率で存在が認められる分布圏Bに含まれるなかで、本遺跡においては、26の1点のみの出土であり、その比率が当該地域のなかでは少ない。

次に119の認められる山形紋についてであるが、上記の3遺跡においても出土している。しかも、その比率は各遺跡においてはわずかである。本遺跡においても119の1点のみであり、特徴を同じくするものである。

この他、2で検討した44のようなタイプの無頭壺は、本遺跡以外では出土は認められない。したがって、当資料の示す特徴が個体差によるものなのか等については、明確にできない。

他の壺についても、当地域の資料と比較して大きく特徴が異なるものは認められない。

以上のことから、本遺跡出土資料については、同じ西摂地域およびその周辺に位置する遺跡出土資料と比較して、大きく特徴を異にするものではないといえよう。

[註]

- (1) 佐原 真「山城における弥生式文化の成立」『史林』50-5 1967 以下、佐原氏の説は当文による。
- (2) 井藤曉子「近畿」『弥生土器』I 1963
- (3) 森田克行「攝津地域」『弥生土器の様式と編年－近畿篇II』1990 以下、森田氏の説は当文による。
- (4) 福井英治『田能遺跡発掘調査報告書』(尼崎市文化財調査報告第15集) 尼崎市教育委員会 1982 以下、当遺跡に関する引用は当書による。
- (5) 藤井直正他『勝部遺跡』豊中市教育委員会 1972
- (6) 広瀬和雄他『龜井（その2） 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター 1986
- (7) 渡辺昌宏・井藤曉子他『美園 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター 1985
- (8) 正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』(正岡睦夫・松本岩雄編) 1992
- (9) 伊藤 実「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』(正岡睦夫・松本岩雄編) 1992
- (10) 秋山浩三「弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と古傳」『吉備の考古学的研究』1992 以下、秋山氏の説は当文による。
- (11) 奥井哲秀他『東奈良 発掘調査概報』東奈良遺跡調査会 1981
- (12) 註11による。
- (13) 註11による。
- (14) 註3による。
- (15) 岩松 保「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班－埋蔵文化財研究会15周年記念論文集－』埋蔵文化財研究会 1992
- (16) 村川行弘『尼崎市上ノ島遺跡』(尼崎市文化財調査報告 第8集) 尼崎市教育委員会 1973
大平 茂『尼崎市上ノ島遺跡』(兵庫県文化財調査報告 第105冊) 兵庫県教育委員会 1992
- (17) 山下史朗『北青木遺跡』(兵庫県文化財調査報告 第36冊) 兵庫県教育委員会 1986
- (18) 南 博史他『神戸市東灘区 本山遺跡発掘調査報告書』財團法人 古代學協会 1984

第2節 摳朝鮮系無文土器⁽¹⁾

1. はじめに

前節で記述したとおり、東武庫遺跡から出土した土器は弥生時代前期に属するものがほとんどであったが、そのなかで2号墓に供献された状態で出土した壺形土器（第36図-30、以下、「30」と略す）は、発掘調査時から弥生時代前期には一般的ではない「変わった雰囲気のある土器」として異色を放っていた。その後、例言に記した多くの方々のご教示により、この土器が朝鮮半島で出土する「無文土器」との関係で理解できる可能性がでてきた。

本節では、この土器がもつ属性についてできるだけ詳細に触れたのち、この種の土器がどのような位置を占めているのか、その諸関係を検討することとする。

2. 東武庫遺跡およびその周辺での位置づけ

（1）土器をとりまく環境（出土状況と時期）

東武庫遺跡はこれまで述べてきたように弥生時代前期から中期初頭の方形周溝墓群であり、30も2号墓に供献された形で出土した。その状況は、周溝の南西隅の溝底を若干窪ませ、そのままにはば横位に置き、口縁部を周溝墓の中心、すなわち埋葬施設に向けた状態であった。他の周溝墓からも溝内に供献された土器が出土しているが、本来は完形であったと思われる状況で出土したものもあり、その意味ではそれらの土器と扱われ方に違いはない。

次に周溝墓との時期差であるが、周溝と30には埋土の切り合いが認められず、周溝の掘削の後、ほぼ時間的に差がなく土器が置かれたものと考えられる。一方、同じ2号墓の北西隅に認められた土壤1は周溝墓の隅に位置している点で、あくまでも周溝墓としての意識があった段階、すなわち溝が完全に埋没する以前に掘り込まれたものと理解できるが、土壤と周溝墓との間に切り合い関係があり、土壤は周溝と同時に掘削されたものではなく、周溝がある程度埋まってから掘り込まれている。この点において30とは異なる。

2号墓で検出された唯一の主体部からは、水銀矢が塗られた漆塗りの櫛が副葬、あるいは被葬者に装着された状況で出土しており、他の周溝墓の主体部からは遺物が何ら出土していないことを考えると、被葬者間に何らかの違いがあった可能性がある。脂肪酸分析の結果、2号墓の主体部からはヒト遺体と堅果植物の脂肪の分布が確認された。

次に、東武庫遺跡から出土した土器の中で30がどのように位置づけられるのかを検討する。まず、編年的位置づけであるが、2号墓から出土した土器は27~36があり、それらは前節で述べているように全体的には第I様式に位置づけられるものと考えられる。さらに、これらの土器は出土状況により3つのグループに分けることができる。すなわち、破片の状態で周溝から

出土した土器(27・29・34・36)、周溝に供獻された土器(30)、そして周溝がある程度埋まつた段階で掘削された土壤1に置かれた土器(28・31~33・35)である。当然これらのグループは上記の時期を大きく逸脱するものではなく、互いに近い時期を示すと考えられるが、厳密には周溝の掘削→30の供獻→周溝埋土の堆積と土器の流入→土壤1の掘削と土器の供獻→(溝の完全埋没)という一連の時間的経過に対応しているものと考えられ、そこには若干の時間差が存在するものと考えられる。周溝から出土した遺物は溝の掘削から溝の埋没までいずれの時期にも該当する危険性があるので除外すれば、30は土壤1出土土器より古い段階に供獻されたことが明らかである。

また、2号墓は1号墓を切って、すなわち検出したレベルでは1号墓が完全に埋没した後に2号墓が造営されているため、2号墓出土遺物は1号墓出土遺物より新しいとすることができる。1号墓から出土した遺物は少ないが、いわゆる逆し字形の壺(26)が周溝端に横位に供獻された状態で出土しており、この土器が示す時期よりは2号墓は新しいと位置づけることができる。

以上をまとめると、大きな時間差が存在するものとして1号墓と2号墓という順があり、若干の時期差が存在するものとして2号墓の各遺構間での前後関係がある。これらを整理し、第9表に示した。これを段階に置き換えると、1号墓から出土した26の位置づけが困難であるために上限が確定できないが、前節で検討したように第3段階古相とする。そして2号墓の周溝埋土、及び土壤1が同じく第3段階古相に位置づけされることから、遺構で確認できた前後差は土器の段階を越えるような時間の幅は存在せず、短期間のうちに行われたことがわかる。よって、30は第3段階古相に位置づけるのがもっとも妥当であろう。

(2) 土器に対する検討

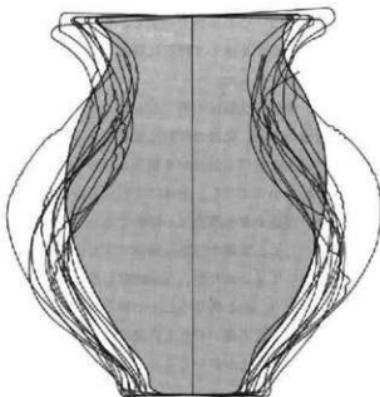
次に、調査時において感覚的に「異質」と感じたことをできるだけ客観的に示すために、30が東武庫遺跡の中でどの程度異質であるのかを他の壺形土器と比較検討することで明らかにする。以下、形態、製作技法(成形・調整・焼成)、色調、胎土に分けて記す。

形態

30が壺であるのか、壺であるのかは形態では明らかにできないが、2次焼成を受けていないこと、および弥生時代前期の壺形土器とは大きく異なることから、今回は壺形土器と比較することとする。実測図からも明らかなように、胴部最大径の位置、胴部の張り方、頸部のくびれ

第9表 編年組合表

1号墓	2号墓			
	供獻	周溝埋土	土壤1	
26	30	27・29・34・36	28・31~33・35	



第158図 形態比較図

方、口縁部の開き方など、他の一般的な壺形土器との違いは顕著である。この状況を図に示したのが第158図である。この図は東武庫遺跡出土の他の壺形土器（図の黒線）を、縮尺を無視して30（図の網部）の高さに統一して重ねたものである。しかし、全体的な傾向を把握には当遺跡のみでは資料不足であるため、当遺跡から南東約1kmに位置し、第I様式新段階を中心とした土器が多量に出土し、この地域での一般的傾向を示すのに適していると考えられる尼崎市上ノ島遺跡出土の土器¹¹⁾についても参考として同図に重ねた（図の黒線）。この図から、全体的な形態の特徴として、①高さに比べて口径、底部径が小さい ②胴部最大径がやや上方に位置する ③胴部の張りが小さい ④頸部のくびれが小さい ⑤口縁部が短く外反する、などが挙げられよう。このような特徴を有する土器は周辺地域には一般的に認められない。もっとも全体的な形態は特徴的であるが、口縁部、胴部、あるいは底部だけを見ると特徴のない形であり、部分のみでは特徴が読みにくいことも事実であるが、いずれにしても明らかに類似するものは認められない。

焼成

これについては土器焼成時に残された黒斑の状況から検討する。事実報告では実測図に黒斑の状況を示していないので、第159図に他の壺形土器（31・50・99）とともに図示した。図の網のかかった部分は観察が可能な部分で、その内濃い網のかかった部分は黒斑を表し、白い部分は欠損もしくは剥離などして、観察が不可能な部分である。最も左側の図に大きな黒斑が正

面にくるように置き、右側に頭に展開した。まず30であるが、黒斑の認められる範囲は胸部最大径付近から底部にかけてで、一つ一つの黒斑が明瞭で、それそれに小さくまとまっている。黒斑は全部で3箇所あり、小さいものを除く2箇所は前後に對になって胸部上半と下半に分かれている。底には黒斑は認められなかった。

50は欠損、及び剥落が多く、全体の状態は不明であるが、大きな黒斑が頸部を除いて上方に延びているのが判る。底は磨滅のため、黒斑の有無は確認できない。99は頸部以下の残存である。底部から胸部最大径部付近まで延びる黒斑が2箇所に認められるものの、底を含めて全てつながっており、黒斑は斑点状というよりも、全体にまわっている状態である。31は残存状況が悪く、詳細は不明であるが、確認できる黒斑は1箇所であり、底部付近から胸部上方まで延びている。底については磨滅のため、黒斑の有無は確認できない。

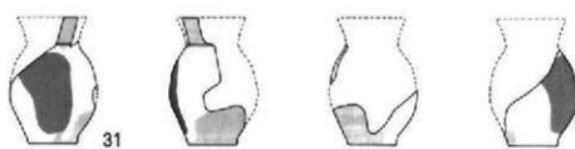
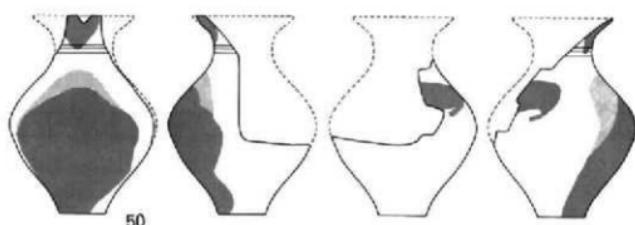
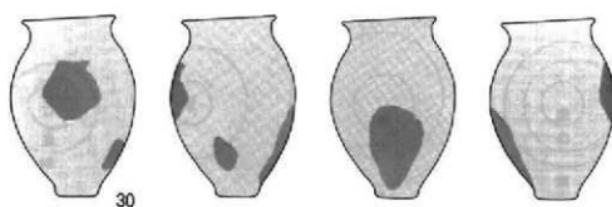
以上のように黒斑の状況についてまとめたが、今回観察した土器を見る限りでは、30についてのみ黒斑が小さくまとまっており、他と異なることが明らかになった。しかし、この黒斑が焼成時についたものであり、焼成方法の違いをある程度反映していると考えられるものの、個体差が大きく、偶発性に左右されることが多いことから、今回はあくまでも指摘するにとどめたい。

色 調

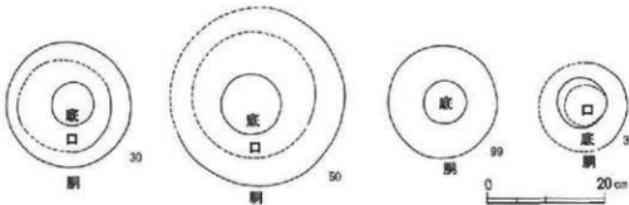
色調は胎土と同じで、化粧土や彩色など意図的に色をつけたもの以外は焼成の状況によって決められる。その点で、30は巻首図版4でも判るように他の土器と比較して赤味が強く、特徴的である。色調が特徴的であることは、焼成において他と異なる条件があったためであり、上記の黒斑の状況に対応しているのかもしれない。

製作技法（成形・調整・焼成）

30の特徴を捉えるために、焼成の項で比較した土器と同じ造形土器（31・50・99）と比較する。まず成形、調整の特徴であるが、30は器表面が磨滅しているために詳細は不明で、最終的な仕上げ調整のヘラミガキかヘラナデのような調整の痕跡が僅かに認められる程度であり、他の土器と同じである。そして、粘土の継ぎ目が内外面ともほとんど消されていることから、比較的丁寧な調整であったことが窺える。頸部と胸部の境で一部粘土の継ぎ目が認められ、その状況から外傾接合と推定できる。粘土紐（帯）の幅や胸部での接合方法は不明である。底部から胸部を積み上げる際の接合は粘土の継ぎ目からは明らかにできないが、底部が小さく突出し、内面底が丸くなっていることから、円板状にした底部の上に粘土帯を巻き上げた可能性が高く、底部の外側に胸部となる粘土帯を積み上げたものではないと思われる。後者の方法で製作されている土器に80があるが、胎土分析ではこの80の方が異質であるという結果が導かれている（詳細は第4章第1節）。



第159図 開士士器黒斑位置図



第160図 関係土器平面図

成形方法については中國聰氏⁽¹⁾が行った方法を採用する。氏は弥生時代前期後葉から中期後葉の板付IIb式から須玖II式古段階と、それに併行する無文土器（後期無文土器）について考察しているが、その中で弥生土器と無文土器の差異として、回転台を使用したかどうかに焦点を当てている。そして、弥生土器の口縁部の平面形態はひずみが小さく、ほぼ正円を呈することなどから、製作にあたり回転台が使用された可能性が高いとし、口縁部の平面形態がひずみのある不整円形を呈する無文土器と区別できるとした。そして、それを表現する具体的な方法として、口縁部の平面形を図示した。そこで今回は、氏と同様の視点に立ち、比較的残りのよい30・31・50・99に対して口縁部の平面形態（外形線）を図示し、それ以外に胸部最大部、底部の平面形態（外形線）を図示して、平面形態がどの程度いびつであるかだけではなく、それぞれ各部位の中心がどの様な位置関係にあるかを図示する方法を採用した（第160図）。これを見ると、30の平面形態はやや歪であるものの、凹凸がなく、全体に滑らかであるといえる。また、口縁部の中心は、底部、胸部最大部の中心と若干のずれがあるが、ほぼ同じである。この状況は30以外の土器についてもほぼ同じであり、特に特別な状況は認められない。よって、これらの壺形土器は、同様の成形方法により製作されたことがわかる。

胎 土

今回は三辻利一氏に蛍光X線分析を、また清水芳裕氏に胎土中の岩石鉱物についての観点から分析をして頂いた（詳細は第4章第1節、第5章第1節）。その結果、岩石鉱物からは製作地を結論づける情報が得られなかったが、蛍光X線分析からは30の胎土と他の弥生土器の胎土と差がないことが明らかとなり、遺跡周辺から採掘された粘土を使用した可能性が高いことが判明した。

これまで、当該期において朝鮮半島産の土器であるか弥生土器であるかを問題にした胎土分析の例は、蛍光X線分析を行ったものに福岡県三国の鼻遺跡⁽²⁾、横隈鍋倉遺跡⁽³⁾、岩石鉱物による分析を行ったものに島根県西川津遺跡⁽⁴⁾などが挙げられる。三国の鼻遺跡での分析では、朝鮮系無文土器と弥生土器は同一地域の粘土を素材にして作ったと判定されたが、それが

まったく同じ場所で採集された粘土を使用しているかどうか、朝鮮系無文土器が朝鮮半島産であるのかどうかという点については、現状では判断できないという結論になっている。横隈鍋倉遺跡での分析では、試料のういくつかが、他の場所からの搬入の可能性があると指摘されたが、その土器は朝鮮系無文土器に限らず、弥生土器も含まれている。横隈鍋倉遺跡でも朝鮮系無文土器の产地は不明という結論になっている。西川津遺跡では擬朝鮮系無文土器と弥生土器を分析した結果、製作地を遺跡周辺に求める結果となっている。

このように擬朝鮮系無文土器は、その概念規定からすれば当然のことであるが、製作地が他の土器と同じく遺跡周辺に求められ、東武庫遺跡例についても同様であった。

(3) 小 結

以上、30の土器について検討してきたが、形態以外に他と区別できる特異性を示すような状況は特に認められず、唯一焼成において他と若干異なる状況が窺えたものの、それがどの程度の意味を持つかは不明である。しかし、形態の特異性は特筆すべきであり、製作が丁寧で整っていることからもわかるように、単なる偶発的な個体差によるものではなく、30が周辺地域にはない社会的伝統をもった者により製作されたものとすることができる。そして、胎土分析の結果が示しているように、土器が動いて搬入されたのではなく、他の集団から製作者が動き、東武庫遺跡の集団内で製作したことを物語っている。

それでは、このような形態をもった土器がどのような集団において一般的に製作されており、どのように分布しているのかを検討し、その位置づけを行う。

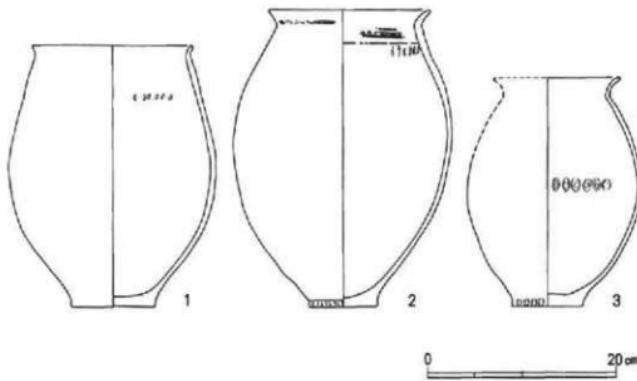
3. 無文土器との関係

30のような形態は上記したように周辺地域では一般的に認められない。その状況は西日本に範囲を広げても同様であるため、国外へ目を向けると、形態だけを見れば大韓民国忠清南道扶餘郡草村面松菊里遺跡¹³⁾を標識遺跡とする「松菊里式土器」に類似している（第161図）。松菊里式土器とは、短く外反する口縁部と、横に緩やかに張った胴体部、そして中程から再び下に狭まり、胴部に比して小さな底部をもつことを特徴とする無文土器である。

この松菊里式土器と30を比較すると、30の方が、底径が小さく、底部から胴部へ緩やかに彎曲し、胴部がやや長いという違いがある。しかし、前項で比較した弥生時代前期の土器よりは近い。よって、以下に松菊里式土器を中心に比較し、検討することとする。

まず、松菊里式土器が弥生土器との時期に併行するのか、その編年的位置づけであるが、以下に諸氏の論を略述する。

藤口健二氏は松菊里式土器を欣岩里（I～III）式と粘土帶土器（I～III）式の間に位置づけ、さらにI～IIIの3式に細分した¹⁴⁾。その特徴は松菊里I式が「口縁部は緩やかに短く外



第161図 松菊里式土器（松菊里遺跡出土、再トレース）

反し、下腹部はすばり気味である」とし、松菊里Ⅲ式が「I式より縁口縁の外反度は強くなり、下腹部は外へ強出し気味である」とし、松菊里Ⅲ式が「口縁部は発達して大きく外反する」とされた。そこで示されている編年表の一郎を抜き出したのが第161図で、1がI式、2がII式、3がIII式である。東武庫遺跡出土の30は口縁部の形態が上方に延びたのちに屈曲・外反しており、口縁部が発達した状況であるので、Ⅲ式に近い。

この松菊里Ⅲ式とそれ以後の粘土帶I式との関係は明らかではないが、氏は全羅南道飛鶴面新昌里遺跡⁽³⁾17号甕棺例からみて松菊里Ⅲ式は粘土帶I式と併行し、地域的には粘土帶II式時期までその系譜の土器が残存した可能性を指摘している。これら無文土器と弥生土器の併行関係については松菊里I・II式が「網文晩期末（夜臼式）から弥生前期前半のうちと文化内容が対応する」とし、「南部地域の無文土器とその文化が介在する点を考慮に入れても、実年代の隔たりは100年を大きく越えるものではなかったと推定」した。また、粘土帶II式は「弥生前期後半（あるいは前半、I期）から中期前半（II期）」とされた。しかし、氏が行った松菊里式土器の細分については武末純一氏から問題を指摘されている⁽⁴⁾。武末氏は松菊里式土器を構成した要素の一部が次の時期まで残っていくことは十分考えられるとしながら、松菊里Ⅲ式には粘土帶I式・II式土器の影響が認められないことから、松菊里遺跡出土品は粘土帶土器より先行するとし、むしろ新昌里17号甕棺例を松菊里式期まで通らせる可能性を指摘した。

田崎博之氏は福岡県有田七田前遺跡、岡山県百間川沢田遺跡から出土した土器が松菊里式土器に関係があるとして捉えられている⁽⁵⁾。

片岡宏二氏は、無文土器から弥生時代の実年代を検討する中で、無文土器と弥生土器の併行関係について検討している²⁰。氏は無文土器を前・中・後の3期に分け、中期については、欣岩里の新しい段階を含まず、松菊里遺跡を中心として、断面円形口縁の甕が出現する直前の段階とした。そして、この中期無文土器と共に伴する土器は縄文晩期から板付II式古段階までとした。

武末純一氏は九州の弥生土器と韓国との無文土器を比較し、その併行関係について検討した²¹。無文土器については、様式から様式への移行過程は不明な部分が多いとした上で前・中・後の3期に分け、前期を欣岩里遺跡、玉石里遺跡を標識として欣岩里式とし、中期を松菊里遺跡を標識として松菊里式とし、後期を水石里遺跡、豺島遺跡を標識として前半を水石里式、後半を豺島式とした。そして、土器以外にも文化的な内容から松菊里式土器に併行する日本の土器を夜臼式から板付II式までとした。

以上のように、無文土器の大きな流れとして欣岩里式、松菊里式、粘土帯土器の順になることについては問題はないが、それぞれが重なる部分については明らかになっていない。特に今回問題となる松菊里式と粘土帯土器との関係についても橋口氏と武末氏の見解の相違に現れているように、新昌里道路17号櫻棺例を松菊里式土器と粘土帯土器の共存する時期にするのか、あるいは遺跡自体の時期を遡らせて17号櫻棺を松菊里式土器の時期とし、あくまでも松菊里式土器と粘土帯土器を前後の関係にするのかによって松菊里式土器の幅が変わることとなる。

一方、松菊里式土器と併行する弥生土器については、およそ縄文晩期（夜臼式期）から弥生前期前半（板付IIa～b）であることがほぼ共通している。もっとも、松菊里式土器の要素が粘土帯土器まで続くとすれば、若干時期が下がり、弥生前期後半にかかる可能性が残る。

再び、東武庫遺跡出土の30に戻ると、前述の通り時期的には第3段階であり、およそ板付IIc式に併行する。そうすると、松菊里式土器に併行すると考えられている板付IIb式より遡ることとなり、松菊里式土器との関係は薄くなるが、30が遺跡周辺の胎土を使用して製作されたことからも明らかなように、朝鮮系無文土器の影響を受けた何代か後の土器であれば、直接的ではないにしろ影響があった可能性を否定するほど大きな年代のずれはない。さらに朝鮮半島南部を含めて、松菊里式土器が粘土帯土器にどの程度残ったかが判明すれば、両者の関係はより近づくであろう。

4. 日本で出土した松菊里式系土器

ここでは、日本国内で出土した松菊里式系土器²²の様相についてまとめることとする。しかし、ここで困難な点は、特徴的である粘土帯土器とは異なり、松菊里式土器には顕著な特徴が存在しないことである。今回出土した30についても完形で出土したために全体的な形態からその特殊性が明らかにできたが、口縁部のみ、あるいは胴部、底部のみの破片で出土した場合、

他の弥生土器と明確に区別することは困難である。このような形態的条件の制約のために粘土帯土器に比較して松菊里式土器はその出土例が確認されにくいことも事実であり、そのためには朝鮮系無文土器の研究は後期段階、すなわち粘土帯土器段階のものが多かった。もちろん、列島内に持ち込まれた、あるいは列島内で製作された本来の個体自体が少なかったためとも考えられるが、それ以上に破片では「目にとまりにくい」ことも類例が少ない原因であろう。

このような条件下にあるため、現在の状況では論を展開するには甚だ問題があり、ここでは取り敢えず筆者が知り得た範囲で、松菊里式土器の現状をまとめておく。

第10表は、これまでに松菊里式土器と関係があると指摘されている土器についてまとめたものである。この表には、これまで取り上げられている土器をできるだけ多く載せる目的を以てし、朝鮮系無文土器であるのか、又は朝鮮系無文土器であるのか、あるいは全く関係がないのかについての筆者の意見は入っていない。よって「松菊里式系」と渾然と呼称する。

この表により、松菊里式系土器が分布するのは岐阜県可児市の北浦遺跡を東端とし、ほぼ九州北部と瀬戸内海沿岸に散在して分布していることが判る（第162図）。また、粘土帯土器のように九州に集中する状況も現時点では認められず、むしろ全体に散在しているようである。共存する土器の年代は绳文晩期から弥生前期にかけてであり、大きくは前項に矛盾するものではない。しかし、第Ⅱ様式に下る可能性のあるものがあり、直接的な影響が認めにくいものもある。前述したように単に偶然形態が似たと考えられるものもあるため、これ以上の言及は避けておく。

5. おわりに

東武庫遺跡出土30について、一般的に認められる土器と比較しながらできるだけ詳細に検討し、特異性を指摘した。そしてその特異性は松菊里式土器の影響によるものと考え、これまでの研究の成果に導かれながらその関係の可能性について検討した。しかし、粘土帯土器のような特徴的なものとは異なり、松菊里式土器は特徴が明瞭でないため、結論的には明らかにすることはできなかった。

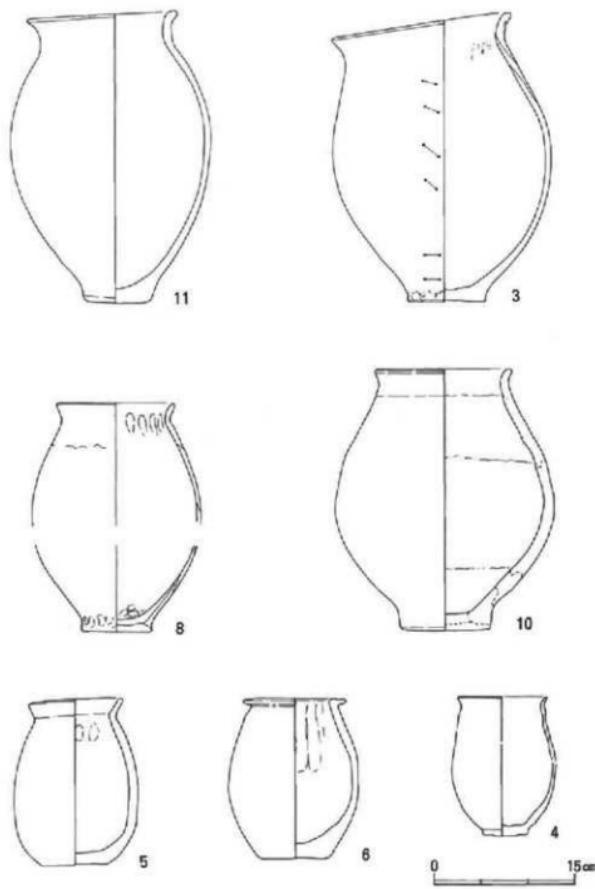
また、日本国内においては松菊里式土器の影響を受けた土器が出土した例が少なく、朝鮮系無文土器の研究は粘土帯土器段階のものが多かったこともその原因にある。今後、朝鮮半島、特に南部地域での様相が明らかになるに合わせて、国内での影響を明らかにする必要があろう。



第162図 松菊里式系土器出土地分布図（番号は第10表に対応）

第10表 松菊里式系土器出土遺跡地名表（片岡宏二氏の教示に基づく）

番	遺跡名	所在地	共伴土器の時期	参考文献	備考
1	有田七田前遺跡	福岡県福岡市	夜臼式	(15)	小型
2	隈西小田遺跡	福岡県筑紫野市	(中期初頭)	(16)	大型
3	津古土取遺跡	福岡県小郡市	板付II	(17)	大型
4	北久米遺跡	愛媛県松山市	弥生前期？	(18)	小型
5	矢ノ塚遺跡	香川県善通寺市	弥生中期？	(19)	小型
6	一の谷遺跡	香川県善通寺市	(弥生前期)	(20)	小型
7	南方釜田遺跡	岡山県岡山市	-	(21)	小型
8	津島遺跡	岡山県岡山市	弥生前期前半	(22)	大型
9	百間川沢田遺跡	岡山県岡山市	沢田式	(23)	
10	本山遺跡	兵庫県神戸市	第II様式	(24)	大型
11	東武庫遺跡	兵庫県尼崎市	第3段階	(25)	大型
12	平等坊岩室遺跡	奈良県天理市	第II様式以前	(26)	大型
13	北浦遺跡	岐阜県可児市	(绳文晚期)	(27)	大型



第163図 松葉里式系土器実測図（番号は第10表に対応、再トレス）

(註)

(1) 今回出土した30について「擬朝鮮系無文土器」と呼称した。このような朝鮮半島と何らかの関係がある土器の用語については片岡宏二氏によって概念規定されており、今回は氏の概念規定に従った。氏は「朝鮮系無文土器」とは

- ① 形態的・技術的に朝鮮半島で無文土器と呼ばれる一群の土器と製作技術上差のない土器が、
- ② 摂入品として持ち込まれたり、あるいはそれを製作する技術を持った人によってその地で作られるなどして、
- ③ 本来、その土器文化が主体となるべく朝鮮半島およびその周辺以外の場所で発見された土器。

と定義しており、また「擬朝鮮系無文土器」については

- ① 主に朝鮮系無文土器の製作者、あるいはその子孫などが多いとは思うが、それに限らず土器製作者によって、
- ② 朝鮮半島の無文土器、あるいは先の朝鮮系無文土器の技術的影響を受けて作られたもの、明らかに本来の無文土器とは異なった土器。

と定義している。

今回出土した30は本節でも述べるように、確実に朝鮮系無文土器であるとは断定できなかった。しかし、「明らかに」本来の無文土器と異なっているともできず、判断に迷ったが、今回はとりあえず「擬朝鮮系無文土器」としておく。もっとも、今後周辺地域での類例が増加し、且つ朝鮮半島、特に南部地域における中期から後期無文土器へと変化する過渡期での様相が明らかになった後に、「擬」のない「朝鮮系無文土器」と変更できる可能性があることを付け足しておく。

片岡宏二「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代朝鮮と日本』 1990

- (2) 村川行弘『尼崎市上ノ島遺跡』(尼崎市文化財調査報告 第8集) 尼崎市教育委員会
1973
- 大平 茂『尼崎市上ノ島遺跡』(兵庫県文化財調査報告書 第105冊) 兵庫県教育委員会
1992
- (3) 中園 聰『折衷土器の製作者—韓国勤島遺跡における旁生土器と無文土器の折衷を事例として—』『史源』第130輯 九州大学文学部 1993
- (4) 三辻利一「無文土器と旁生土器の胎土分析」『三国の鼻遺跡Ⅲ』(小郡市文化財調査報告書 第43集) 小郡市教育委員会
- (5) 三辻利一「横隈鍋倉遺跡出土朝鮮系無文土器、および旁生土器の蛍光X線分析」『横隈鍋倉遺跡』(小郡市文化財調査報告書第26集) 小郡市教育委員会 1985

- (6) 清水芳裕「西川津遺跡出土弥生土器の胎土」『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』1989
- (7) 垣 仁求他『松菊里I』（國立博物館古墳調査報告 第十一種）國立中央博物館 1979
- (8) 藤口健二「朝鮮系無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究』3 1986
- (9) 金 元龍『新昌里斐棺墓地』ソウル大学校 考古人類学叢刊 1964
- (10) 武末純一「弥生土器と無文土器・三韓土器－併行関係を中心にして－」『土器からみた日韓交渉』1991
- (11) 田崎博之「弥生土器の起源」「論争 学説 日本の考古学』4. 弥生時代 1986
- (12) 片岡宏二「無文土器からみた弥生時代実年代論」「考古学ジャーナル』325 1990
- (13) 註10による
- (14) 松菊里式土器の影響を直接的、間接的を問わず受けている土器を仮りに「松菊里式系土器」とする。特に今回は可能性のある土器すべてについて扱うため、その概念は広く使用し、可能性として朝鮮系無文土器を含むものである。
- (15) 山崎純男他『福岡市有田七田前遺跡－有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集）1983
- (16) 球磨野市教育委員会草場啓一氏のご教示による。記して感謝致します。
- (17) 片岡宏二『みくに野第2土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書－13－』津古土取遺跡』第4分冊（小都市文化財調査報告書第59集）小都市教育委員会 1990
- (18) 正岡謙夫「松山市出土の松菊里系土器」「遺跡』第34号 1993
- (19) 真鍋昌宏他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会 1987
- (20) 西岡達哉『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊一の谷遺跡群』香川県教育委員会 1990
- (21) 小田富士雄・韓 炳三編『日韓交渉の考古学』1991 図版29
- (22) 高橋 勝「農耕社会の誕生」『岡山県史』第一巻 原始・古代 I 岡山県史編纂委員会 1991
- (23) 註(11)による。
- 平井 勝「百間川沢田遺跡3」（岡山県埋蔵文化財調査報告84）岡山県教育委員会 1993
- (24) 南 博史『本山遺跡発掘調査報告書』財團法人 古代學協會 1984
- (25) 本書
- (26) 天理市教育委員会青木勘時氏のご教示による。記して感謝致します。
- (27) 小都市教育委員会片岡宏二氏のご教示による。記して感謝致します。

第3節 石器

東武庫遺跡の今回の調査で出土した石器は約40点である。これらの石器はほとんどが弥生時代前期～中期初頭に属するもので、県内では資料の蓄積の少ない当該期の石器研究の上で貴重である。しかしながら、定型的な石器が少なく石器形態・組成などを分類整理するには不十分である。ここでは定型的な石器を中心に22点を図示している(第164図～第167図)。図示した以外では剥片・輕石などがある。記述は、1. 造構から出土した石器(弥生時代前期・中期初頭)、2. 包含層などから出土した石器(弥生時代前期～中期初頭および時期不明)の順に行う。器種・法量・石材・出土造構とその時期などは第11表にまとめて示す。

1. 造構から出土した石器(S 1～S 11)

S 1は石鎚である。下半部を欠損するため基部形状は不明である。

S 2～S 4は楔形石器である。3点とも上下方向に相対する剥離痕が認められる。S 3は剥離がほとんど進行しておらず素材剥片の形状をよくとどめている。S 2・S 4では側面に剪断面が認められ、特にS 4では縱方向に半歳されたようになっている。

S 5・S 7は不定形石器である。S 5は剥離軸方向に割れた横長剥片の腹面側末端部に1回の剥離痕が認められる。石核とも考えられるが剥離された剥片が小さいことから不定形石器に含めた。S 7は厚みのある剥片の上下両端を折断し、一側縁に両面側から抉り入状の二次加工を施したものである。もう一側縁にも両面に階段状の二次加工が認められる。

S 6は厚みのある横長剥片である。背面および打面は自然面で覆われ、末端はヒンジフラッチャーとなっているためかなりぎんぐりとした剥片である。

S 8は磨製石庖丁である。穿孔は完了しているが、欠損と表面の風化が著しく、背側の一部に本米の外形ラインを残すのみである。表裏の約1/3に受熱による赤変が認められる。

S 9は磨製石斧の基部と考えられるものである。全面に擦痕が良く残り、端部付近ではわずかに縁を形成する。両側面および上端面には敲打痕が残されている。

S 10は磨石の破片である。断面の約1/4を残すのみである。

S 11は灰白色の凝灰岩製の分割理で、背面は自然面で覆われ、下半部は折れている。石材から判断して、磨製石斧頭の製作段階で生じたものと推定される。

2. 包含層などから出土した石器(S 12～S 22)

S 12は石鎚である。抉りの浅い凹基式石鎚で体部が長くやや厚みがある。

S 14は石錐である。縦長剥片の末端部に小さく錐部を作りだし、体部にも平坦な剥離で整形が加えられている。錐部先端は使用によって磨滅している。S 13は細身の有茎式石錐状を呈するが、右側面に折断面を残したまま表面の整形を行っていることから石錐とした。

第11表 出土石器一覧表

No.	器種	出土遺構	法面				石材	時期
			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
S.1	石鏡	5号墓墓道	13.0	10.5	2.9	6.4	サヌカイト	弥生時代初期(第3段階)
S.2	鏡形石器	21号墓墓道	21.5	21.2	8.2	3.2	サヌカイト	弥生時代前期(第3段階)
S.3	鏡形石器	4号墓墓道	29.6	20.6	10.2	5.2	サヌカイト	弥生時代前期(第2段階)
S.4	鏡形石器	15号墓土塁2	35.6	14.1	10.5	5.5	サヌカイト	弥生時代前期(第3段階)
S.5	不定形石器	2号墓主体部	43.6	28.6	9.6	8.6	サヌカイト	弥生時代前期(第3段階)
S.6	刮片	5号墓土塁	79.3	26.8	16.0	31.9	サヌカイト	弥生時代前期(第3段階)
S.7	不定形石器	11号墓墓道	52.3	26.6	12.0	21.4	サヌカイト	弥生時代中期(第4段階)
S.8	磨製石斧	19号墓墓道	122.8	72.0	8.6	79.2	粘板岩	弥生時代前期(第3段階)
S.9	磨製石斧	7号墓墓道	43.2	39.8	23.0	42.3	麻績約?	弥生時代前期(第2段階)
S.10	研石	15号墓墓道	73.5	48.0	35.5	169.1		弥生時代前期(第3段階)
S.11	分割器	16号墓墓道	70.4	60.2	27.2	116.1	麻紙?	弥生時代前期(第3段階)
S.12	石鏡	遺物検出部	29.7	18.5	5.5	1.3	サヌカイト	弥生時代後期～中朝初期
S.13	石鏡	遺物検出部	39.8	9.6	6.4	2.3	サヌカイト	弥生時代後期～中朝初期
S.14	石鏡	包含層	40.0	14.5	9.5	6.2	サヌカイト	弥生時代後期～中朝初期
S.15	刮削器	包含層	43.6	24.1	11.4	8.2	サヌカイト	弥生時代後期～中朝初期
S.16	刮削器	包含層	56.2	48.5	10.5	22.4	サヌカイト	弥生時代後期～中朝初期
S.17	石核	研土	34.0	30.3	22.5	26.8	チャート	
S.18	大型研刃石斧	包含層	131.9	66.6	46.1	638.3	閃綠岩?	弥生時代前期～中朝初期
S.19	死刑の刮片	包含層	69.2	79.3	9.5	52.1	粘板岩	弥生時代前期～中朝初期
S.20	磨製石刀	包含層	63.8	43.2	13.4	98.3		弥生時代前期～中朝初期
S.21	磨製石刀	包含層	86.8	50.6	11.3	57.7		弥生時代前期～中朝初期
S.22	打製石刀?	包含層	61.8	46.3	12.1	31.2	珪化木	弥生時代前期～中朝初期

右材料は担当者の経験的判断による。

S.15・S.16は削器である。S.15は橢長剝片の形状を生かし、平坦な剥離で円弧状の刃部を形成している。S.16は板状剝片の3側面を折断し、残り1側縁に両面から平坦な二次加工を施し刃部としている。刃部の剥離面は風化により稜が不明瞭である。

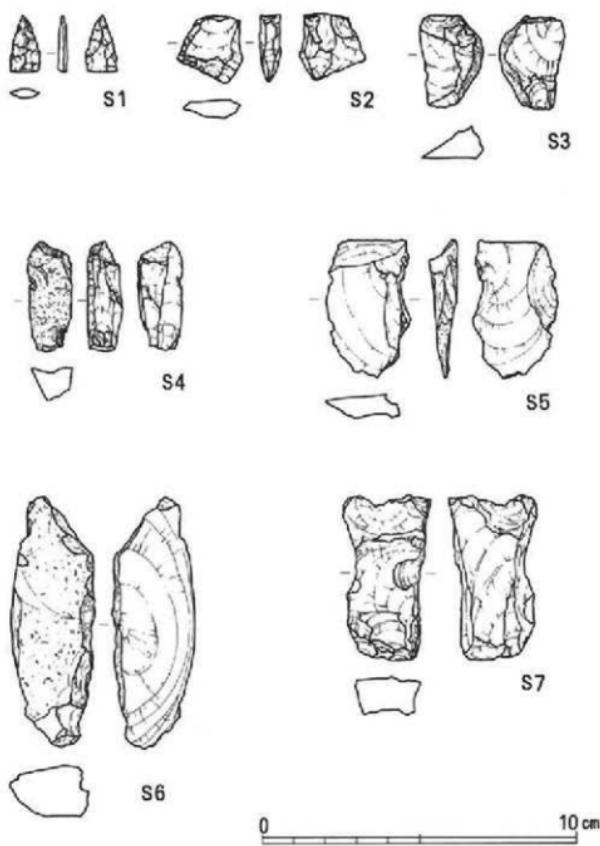
S.17はチャート製の小型の亜角礫を素材とした石核である。平坦な自然面を打面として、寸又まりの縦長剝片を剥離している。打面は基本的に上下両方向に設けられているが、下方の打面からの剥離は階段状剥離となって良好な剥片は得られていない。また、これと直交する方向からも自然面を打面として剥離が行われている。この様な石核は弥生時代のものとしてはあまり例を見ない。

S.18は大型研刃石斧である。刃部付近に最大幅をもち、基部にかけてやや細くなる。基部手前の側面は敲打によって浅く窪められている。風化のためか表面全体が荒れており、刃部と側面の一部以外には研磨痕は認められない。

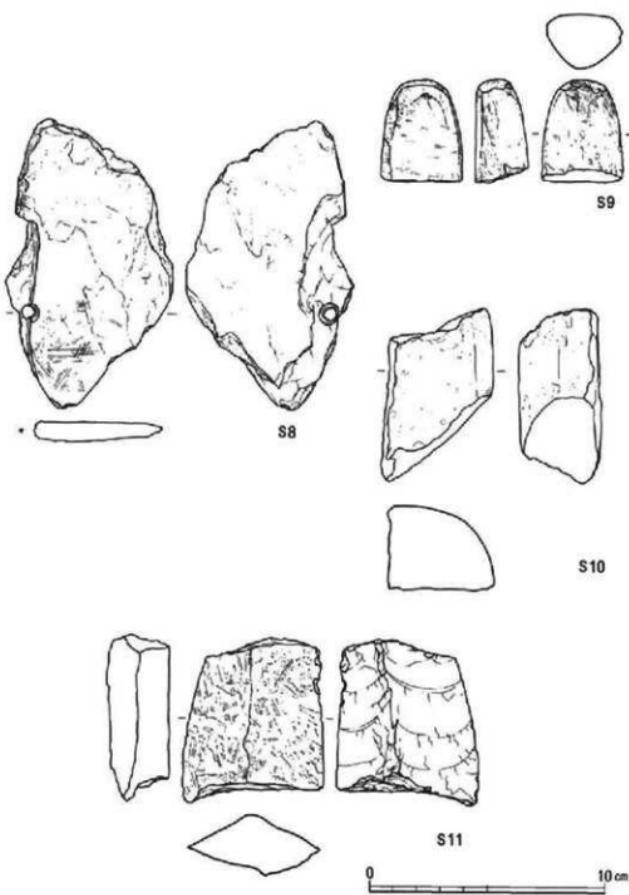
S.19は粘板岩製の荒割り剥片で、部分的に整形加工と研磨が施されている。石材から判断して磨製石庖丁か偏平片刃石斧の製作に伴うものであろう。

S.20・S.21は磨製石庖丁である。S.20は楕円形態となろうが、S.21は椭円形態あるいは直線刃半月形態となろう。

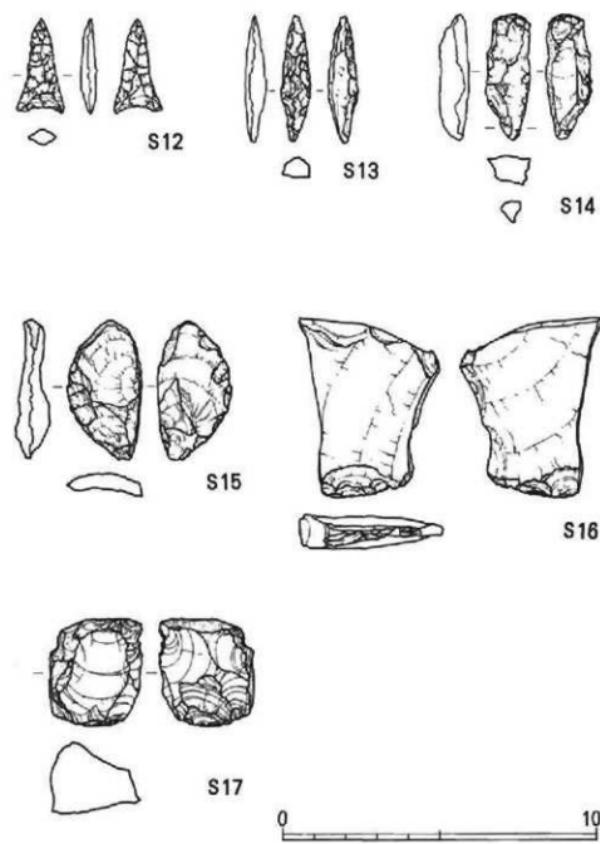
S.22は珪化木の板状材を素材として一緒に挟りを入れている。刃部は石材が層状に剥離する性質を持つことから剥離痕が捉えにくいか、一側縁に刃部を意識したと考えられる剥離痕が認められる。形態的に打製石庖丁に類似するが、サヌカイトを素材として備讃瀬戸地域に分布の中心を持つ打製石庖丁とどのような関係をもつかは今後の研究を待ちたい。



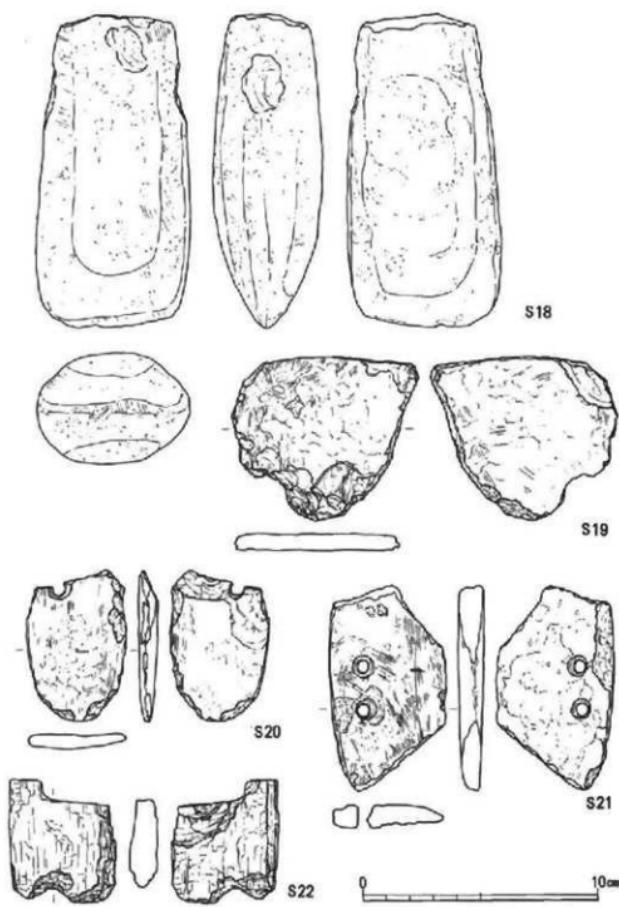
第164図 出土石器（1）



第165圖 出土石器（2）



第166图 出土石器(3)



第167圖 出土石器（4）

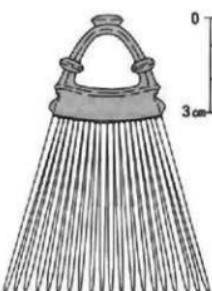
第4節 硬 櫛

今回出土した櫛は、赤漆塗り結歯式堅櫛である。出土位置は2号墓の埋葬施設である木棺で、棺内の西侧から出土した。棺内での出土位置は、脂肪酸分析の結果からは明らかにできなかったが、おそらく頭部に着装されていたものと推測できる。堅櫛の時期は、2号墓の周溝から出土した土器から判断して弥生時代前期に属する。

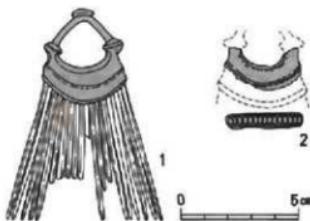
残存状況は良好でないが、第168図にその一案を提示した。今回は復元の基本として、弥生時代前期に属する三重県納所遺跡出土例⁽¹⁾（第169図-1）を参考にした。しかし、今回出土した櫛とは若干の違いがある。それは、東武庫遺跡例では把手部が2本で構成され、その2本が基部から歯部まで通っていることで、今回の復元案は、把手部と基部の接続を直線的にした。また、把手部と基部が直交に近いため、復元案では基部の上端を直線的にした。把手部の形態については納所遺跡例をそのまま参考にし、瘤状の小さい突起についても、數、大きさ、形、位置、いずれも変えていない。基部の幅、歯部の長さ、歯の本数についても同様である。

しかし、この復元案には問題点が残されている。それは事実報告で述べたように、確認されている4本の歯の痕跡のうち外側の2本と内側の2本の間には歯の痕跡がなく、歯が密に詰まつた状態ではなかったことである。さらに歯の痕跡により、内側の歯ほど基部に対して外側に向かって開いており、忠実に復元すると中心部が歯の抜けた状態になってしまうことである。このように遺物の残存状況に忠実ではないが、敢えて納所遺跡例に近づけて復元した。

さて、弥生時代の櫛については木下尚子氏⁽²⁾、工楽普通氏⁽³⁾によりまとめられているが、それによると前期から中期初頭の櫛は第12表の遺跡で出土している。そのうち、納所遺跡⁽¹⁾（第169図-1）、奈良県唐古遺跡⁽⁴⁾（第169図-2）、大阪府瓜生堂遺跡⁽⁵⁾、兵庫県玉津田中遺跡⁽⁶⁾の4例はいずれも同形・同大に復元でき、同一の製作所の作品で



第168図 東武庫遺跡出土櫛復元案



第169図 弥生時代前期の櫛

ある可能性が指摘されており⁽¹⁾、前述の復元案が正しければ東武庫遺跡出土例もこれに該当すると考えられる。これらは、近畿地方を中心に出土している。

また、主体部から出土し、着装、あるいは副葬されていたと考えられる例は、中期後半の吉武遺跡⁽²⁾、後期の東奈良遺跡⁽³⁾があり、特に東奈良遺跡例では頭髪への着装が確認されている。埋葬施設は吉武遺跡が壇棺、東奈良遺跡が木棺である。今回の出土によって埋葬に伴う例は前期の段階まで遡ることが確認された。

第12表 掘出土地名表（弥生時代前期から中期初頭）

	遺 跡 名	参考文献		遺 跡 名	参考文献
1	納所遺跡（三重県）	（7）	6	東武庫遺跡（兵庫県）	（本書）
2	唐古遺跡（奈良県）	（5）	7	西川津遺跡（島根県）	（7）
3	瓜生堂遺跡（大阪府）	（3）	8	タテチヨウ遺跡（島根県）	（8）
4	安満遺跡（大阪府）	（6）	9	里田原遺跡（長崎県）	（9）
5	玉津田中遺跡（兵庫県）	（3）			

（註）

- （1）伊藤久嗣他『納所遺跡—遺構と遺物—』（三重県埋蔵文化財調査報告35-1）1980
- （2）木下尚子「装身具」『弥生文化の研究』8 1987
- （3）工楽普通「漆工技術」『弥生文化の研究』6 1986
- （4）上原真人他『木器集成図録近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所 1993
- （5）末永雅雄他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝國大学文学部考古学研究報告第16冊
京都帝國大学 1943
前掲書（4）と同じ
- （6）原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻 本編I 1977
- （7）内田律雄『朝霧川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV（海崎地区2）』
島根県教育委員会 1988
- 内田律雄『朝霧川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』
島根県教育委員会 1989
- （8）柳浦俊一他「タテチヨウ遺跡発掘調査略報」『季刊文化財』第62号 島根県文化財愛護
協会誌 1989
- （9）長崎県教育委員会『里田原遺跡略報II』（文化財調査報告書第18集）1974

第6章 遺構のまとめ

第1節 周溝墓

(1) はじめに

I区とII区の調査で検出した計22基の方形周溝墓をまとめたのが、第13表である。

第13表 周溝墓一覧表

周溝墓番	時期	埴丘規模	主軸角	埋葬施設	備考・その他
1号墓	前期(第3段階)	7.8 m × 6.3m	34°	木棺墓(1基)	南側1/4未検出
2号墓	前期(第3段階)	6.0 m × 7.0m	22°	木棺墓(1基)	樹齢年系陶文土器・埴生量 櫛出土
3号墓	前期(第2段階)	7.5 m × 9.6m	21°	未検出	
4号墓	前期(第2段階)	9.1 m × 11.4m	1°	木棺墓(3基)・土壤墓(1基)	1号主体部下層から無頭遺
5号墓	前期(第3段階)	3.7 m × 2.7m	0°	土器群(1基)	北側1/4未検出
6号墓	前期(第2段階)	5.4 m × 6.8m	5°	木棺墓(1基)	
7号墓	前期(第2段階)	5.6 m ×	9°	木棺墓(1基)	
8号墓	前期	3.3 m × 3.5m	10°	未検出	
9号墓	中期(第4段階)	8.8 m × 9.3m	45°	未検出	南コーナー未検出
10号墓	前期(第3段階)	14.0 m × 12.3m	3°	未検出	
11号墓	中期(第4段階)	4.6 m × 6.8m	15°	木棺墓(1基)	
12号墓	前期(第2段階)	6.0 m × 4.0m	0°	未検出	
13号墓	中期(第4段階)	4.6 m ×	15°	未検出	西面溝内から朱を検出
14号墓	中期(第4段階)	8.5 m × 5.8m	30°	木棺墓(1基-小口穴のみ)	
15号墓	前期(第3段階)	8.5 m × 16.0m	20°	未検出	墳丘上面で噴砂確認
16号墓	前期(第3段階)	6.8 m × 7.0m	15°	未検出	
17号墓	前期(第3段階)	4.3 m × 3.5m	20°	未検出	
18号墓	前期(第3段階)	3.4 m × 5.7m	18°	未検出	
19号墓	前期(第3段階)	6.5 m × 3.5m	10°	未検出	全体の約1/3を検出
20号墓	前期(第1段階)	6.5 m ×	40°	未検出	東武跡遺跡最古の周溝墓
21号墓	前期(第3段階)	3.8 m ×	60°	未検出	全体の約1/2を検出
22号墓	前期(第1段階)	4.4 m ×	65°	未検出	全体の約1/2を検出

※埴丘規模の下線付数字は、全体が未検出のもので検出した規模を表す。

第4章でも検討したように、当遺跡で検出した周溝墓群は、ほぼ弥生時代前期前半～中期初頭に位置付けられる。特に古い段階の周溝墓については、全国で検出された周溝墓の中でも最も古い時期に位置付けられる。したがって、出現期の周溝墓の特徴を検討していく上で、当遺跡の周溝墓群は良好な資料といえる。そこで、本節では上記の検討を主眼とし、その前提として周溝墓築造順序の確定を行うこととする。そして、この分析結果をもとに、畿内を中心に検出されている中期の周溝墓との比較において、本遺跡の周溝墓群の特徴を明らかにしていくことにしたい。

（2）築造順序について

1. 周溝墓相互の前後関係について

第5章第1節における周溝墓に伴う土器の分析において、大まかな段階設定をおこない、土器からみた前後関係を明らかにしてきた。そこで、本節では、上記の分析結果をもとに、周溝墓相互の切り合い関係及び周溝の共有関係等を加味して検討を加えていくこととする。

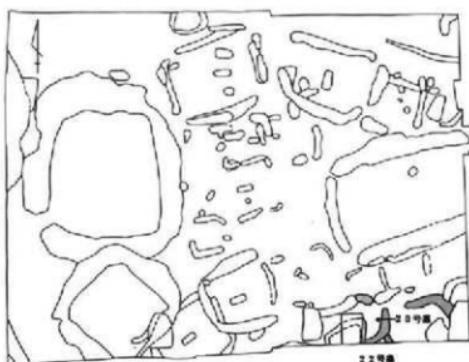
第1段階 土器から判断して当該期に位置付けられるのは22号墓の1基のみである。しかし、東側に位置する20号墓は22号墓に切られている。したがって、20号墓は22号墓より古く位置付けられ、今回検出した周溝墓群のなかで最古に位置付けられる。また、この20号墓を19号墓が切っている。しかし、19号墓からは8条あるいは3条+αのヘラ描沈線紋を施した小片が出土していることから、第3段階の古相に位置付けられる。よって、20号墓から連続するものではない。

第2段階 まず当段階の古相についてであるが、土器からは3号墓と4号墓が該当する。しかし、両周溝墓間にには切り合い関係が認められ、4号墓が3号墓を切っており、3号墓→4号墓の関係が成立立つ。

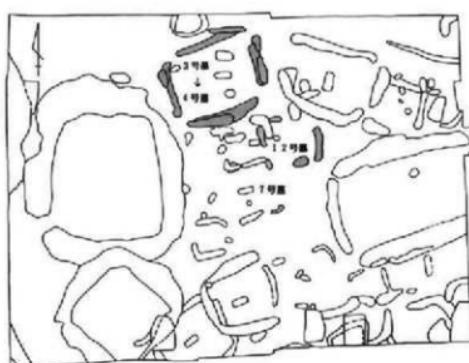
次に新相については、6号墓と13号墓の2基である。このなかで、13号墓は14号墓と周溝を共有している。したがって、13号墓と14号墓はほぼ同じ時期に位置付けられる。

また、6号墓は7号墓と12号墓を切っている。よって、7号墓と12号墓については6号墓より古く位置付けられる。両周溝墓とも、周溝内から土器の小片がわずかに出土している程度で、時期を特定する判断材料に欠く。ただし、7号墓については、後述するように6号墓と主軸方向がほぼ同じである。このことから、7号墓と6号墓とは時期的に連続するのではないかと考えられる。よって、第2段階の古相に位置付けたい。

次に12号墓についてであるが、平面的位置から判断すると、7号墓と切り合い関係にあるようであるが、調査では明らかにできなかった。ただし、主軸方向については、7号墓とほぼ同じであることから、7号墓と時期的に大差ないのでないかと考えられる。よって、第2段階の古相に位置付けたい。

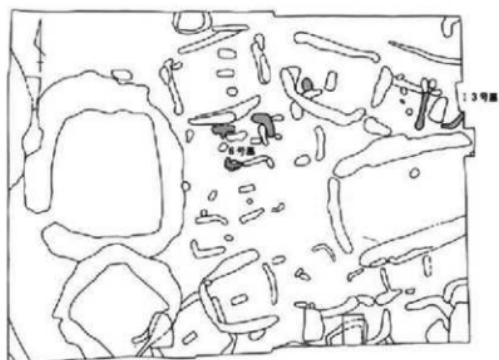


第 1 段 階

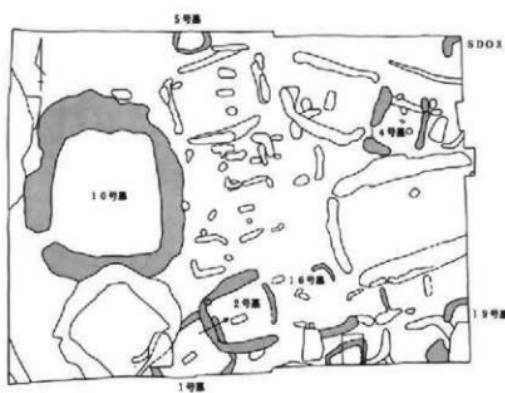


第 2 段 階 (古 相)

第170図 周溝墓の掘造過程 (1)

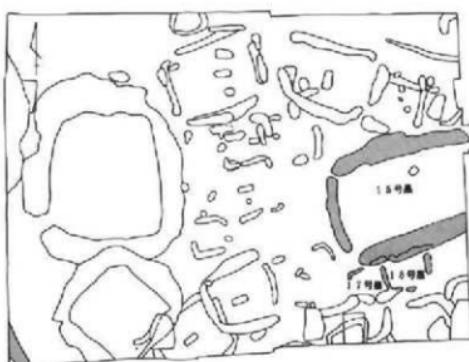


第2段階（新相）

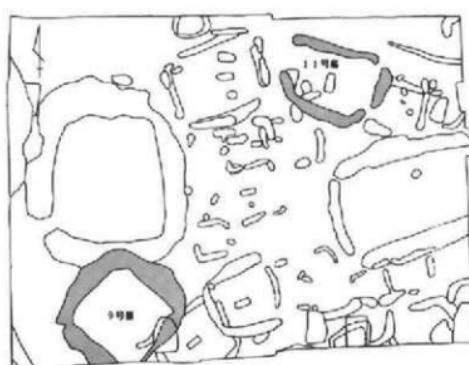


第3段階（古相）

第171図 岩湧基の發達過程（2）



第3段階（新相）



第4段階

第172図 周溝蟲の發達過程（3）

第3段階 まず古相についてであるが、1号墓・2号墓・5号墓・10号墓・16号墓が明らかとなっている。加えて、第1段階での検討結果から、19号墓についても当段階に位置付けられる。このなかで、1号墓と2号墓については、後者が前者を切っているため、1号墓→2号墓の関係を明らかにすることができる。この他16号墓については、西周溝が2号墓の東周溝を共有している可能性が考えられる。16号墓と17号墓については、周溝検出時には切り合い関係は認められなかったが、相互の位置関係から判断して、本来は切り合い関係があったものと想定される。

次に新相についてであるが、17号墓と15号墓の2基である。15号墓と南側に隣接する18号墓とは、周溝断面の観察結果から判断して同時に埋没した、つまり同時に機能していたものと判断した（79頁）。よって、当段階は15号墓と18号墓の2基が存在したものと判断できる。

17号墓は、17号墓が18号墓を切っていることから18号墓→17号墓の関係が成立立つ。

第4段階 9号墓・11号墓の2基が明らかとなっている。

2. 周溝墓群のグループ化

前項で、各周溝墓の段階設定をおこなった。次に、各段階を通して個々の周溝墓が相互の関係を無視して個別に築造されていったのかについて、検討を加えてみたい。そこで本項では各周溝墓の平面的位置及びその主軸方向に着目し、分析を行ってみた。その結果、22基の方形周溝墓群はいくつかのグループに分類することができた（第173図）。

まず一つのグループとして指摘できるのは、1号墓・2号墓・15号墓・16号墓・17号墓・18号墓の一群である。（Aグループ）これらの周溝墓はほぼ列状に並んでいる。座標北と主軸方向との差は15°から34°の範囲に集中している。

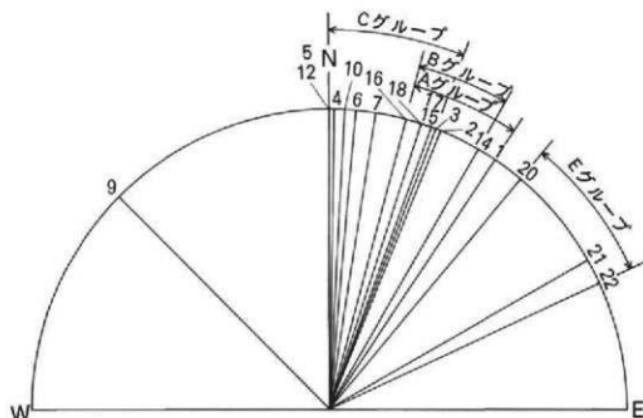
次に一つのグループとして指摘できるのは、調査区北東部に位置する11号墓・13号墓・14号墓の3基からなる一群である。（Bグループ）座標北と主軸方向との差は15°から30°の範囲に集中している。Aグループ同様、列状に並んでいる。

次に指摘できるのは、調査区中央部の3号墓・4号墓・5号墓・6号墓・7号墓・8号墓・12号墓の7基からなる一群である。（Cグループ）座標北と主軸方向との差は0°から21°の範囲に集中している。

次に、19号墓・20号墓・21号墓・22号墓の4基についても、一つのグループとして把握することができる。（Dグループ）座標北と主軸方向との差は約40°～65°の範囲に集中している。

最後に、1基のみであるが9号墓を、他のどのグループにも属さない1つのグループ（Eグループ）として把握したい。主軸方向が他と大きく異なり、周囲にそれに近いものが認められないためである。

以上から、当遺跡で検出された22基の方形周溝墓群は、A～Eの5グループに分けることが



第173図 周溝墓の主軸方向

できる。各周溝墓は、無秩序に築造されたのではなく、一定の関係のもとに築かれたものと考えられる。

3. 小結

以上1と2で分析した結果をもとに、当周溝墓群の形成過程について検討してみたい。
Aグループ 本グループにおいては、1号墓から15号墓への流れが読み取れる。このなかで16号墓については、1においては2号墓と同時期と判断したが、上記の流れを重視すると、2号墓→16号墓の関係が成り立つのではないかと考えられる。よって、1号墓→2号墓→16号墓→15号墓と順次築造されていったのではないかと考えられる。また、1で検討した前後関係より、18号墓→17号墓の前後関係が認められることから、上記の流れの後半にこの両墓の築造が行われたものと考えられる。特に18号墓と15号墓は時期的に平行することから、15号墓の後に17号墓が築かれたものと考えられる。以上から、18号墓→17号墓については、別のグループになる可能性が考えられる。その一方で、調査の限界から15号墓の東側に継続する周溝墓があるかどうか明らかにしないが、もしあるとすると、15号墓→17号墓は15号墓→東側の周溝墓の傍流ともみることもできる。

Bグループ まず13号墓→11号墓の関係が考えられる。一方、14号墓は13号墓と11号墓の中間に位置し、平面的には両墓と周溝を共有する形になっていることから、ほぼ同時期と考えた。しかし、13号墓→11号墓の流れを重視すると、13号墓→14号墓→11号墓の関係が成り立つのではないかと考えられる。しかし、上記の関係からは14号墓の時期は特定できない。ただし、平面的な位置関係から、15号墓とは同時期とは考えられない。したがって、第3段階の新相よりは古く位置付けられる。上記の関係から第3段階古相を中心とする時期を考えたい。

Cグループ 6号墓を中心にみると、7号墓→6号墓・12号墓→6号墓・4号墓→6号墓の関係が考えられる。この他、4号墓と5号墓については4号墓→5号墓との関係が考えられる。ただし、1における分析結果から、5号墓の築造は6号墓の築造よりも新しく、第3段階新相に位置付けられる。また、墳丘の規模においても明確な差が認められる。したがって、4号墓→5号墓の流れは、4号墓→6号墓の流れに対してあくまでも傍流的なものと考えたい。

なお、8号墓については、その平面的位置および主軸方向から当グループに含まれることはほぼまちがいない。ただし、他の周溝墓との切り合いがなく土器が出土していないため、当グループ内における時期的位置付け等は明確にできない。

この他10号墓については、その平面的位置およびCグループと主軸方向が比較的近いこと、出土土器からみた前後関係などから判断して、当グループに属する可能性が高いと考えられる。その場合、6号墓→10号墓の関係が成り立つ。

Dグループ まず20号墓→22号墓の関係は明確である。次に切り合い関係から22号墓→21号墓の関係が考えられる。21号墓は第2段階に位置付けられており、上記の関係と矛盾しない。この他、20号墓は19号墓に切られている。20号墓→19号墓の関係が考えられるが、19号墓は第3段階であることから、やや時期差がある。また、築造方向が20号墓→22号墓→21号墓とは逆になる。よって、ここでは20号墓→19号墓の関係の可能性の指摘にとどめておきたい。

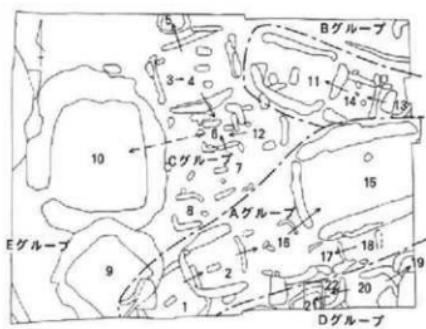
Eグループ 9号墓については、当墓の時期・平面的位置・主軸方向から判断して、A～Dグループの何れにも属さない、つまり別のグループ（Eグループ）に属するものと考えた。ただし、今回の調査で検出した周溝墓には同じグループに属するものは認められない。

以上、当周溝墓群は大きく5グループからなり、Eグループを除く各グループ内において順次築造されていったことが明らかとなった。そして、これまでの検討結果をまとめたのが、第14表である。

ところで、第14表をみると大きな特徴が認められる。それは、各グループごとに時期的な集中が認められる点である。つまり、Aグループは第3段階に、Bグループは第2段階から第4段階にかけて、Cグループは第2段階を中心に第3段階古相まで、Dグループは第1段階を中心に一部第3段階古相まで、Eグループは第4段階に、それぞれ時期的な偏りが認められる。このようすを全体としてみると、造墓の開始が異なり、Dグループ→Cグループ→Bグループ

第14表 周溝墓群の形成過程

グループ名	第1段階	第2段階		第3段階		第4段階
		古相	新相	古相	新相	
A				1 → 2 → 16 → 15 ↓ 18 → 17		
B				13 → 14 → 11		
C			7 12 3 → 4 → 6 → 10 ↓ 5			
D	20 → 22	→ 21		→ 19		
E						9



第174図 周溝墓群の構造

→Aグループ→Eグループの順になる。ただし、連続するグループ間ではある程度の時期的な重複は認められる。

このように見えてくると、Dグループにおいて19号墓のみが他の周溝墓と時期的に離れている点について、19号墓自体の時期の特定があいまいなこともあるが、19号墓が別のグループに含まれる可能性も考えられる。その場合はA～E以外のグループが考えられる。ただし、今回の調査ではこの当否についてはこれ以上述べることはできない。

以上から、当方形周溝墓群は、一見したところ多くの周溝墓がほぼ同時期に平行して存在していたかのように見える。しかし実際には一時期に1基あるいは多くて数基が造墓されていたに過ぎないといえる。

方形周溝墓については、家族墓との解釈が今日では一般的である。そして、岸本氏⁽¹⁾をはじめとした諸説は、各グループ（群）単位に各有力家族が順次墳丘墓を築造していくものと解釈している。また、各群から分岐したものは、主系列の家族から分離したものとしている。このような解釈を前提とすると、当方形周溝墓群について以下のように解釈できるのではないかと考えられる。

各グループを別の有力家族と考えると、結果として少なくとも5つの有力家族が東武庫遺跡に墓域形成を行った。つまり、東武庫集落に伴う墓域において方形周溝墓を築造できる家族は極めて限定されていた、というものである。

ただし、今回の調査は東武庫集落の墓域の一部を調査したに過ぎない。したがって、この考えの当否について結論付けることはできない。

（3）前期の周溝墓の特徴について

1. 中期の周溝墓との比較

畿内における弥生中期以降の周溝墓については、藤沢真依氏⁽¹⁾・岸本一宏氏によって一定の成果が得られている。この成果との比較を通じて、弥生前期の周溝墓の特徴をまとめてみたい。なお、本項における検討対象地域は畿内およびその周辺部に限定したい。

①平面形について

藤沢氏によると、中期のものは長方形が多いとされている。

当周溝墓群においても、正方形のものではなく、全てが長方形をなしている。また、整った長方形をなさず、台形に近い形態のものも認められる。

このような状況は、すでに報告されている前期の方形周溝墓である、東奈良遺跡⁽¹⁾・池上遺跡⁽¹⁾・多遺跡⁽¹⁾例においても同様の特徴が認められる。

②埋葬主体数について

藤沢氏によると、中期においては2基の木棺埋葬を基本としながらも単数埋葬も存在したとされている。また岸本氏も、畿内前期～中期では複数埋葬が大半を占め単独埋葬は少ないとされている。

しかし、東武庫遺跡においては、同一墳丘において複数埋葬が認められるのは2基の木棺墓と1基の土壙墓からなる4号墓のみである。他の1号墓・2号墓・6号墓・7号墓については、1基木棺墓からなっている。これらの周溝墓は、木棺墓が墳丘のほぼ中心部にあることから、築造当初から単数埋葬を意識していたものと考えられる。一方、10号墓・15号墓のように平面的規模が木棺墓を検出した周溝墓より明らかに大きなものについては、複数の埋葬主体の存在が予想される。

したがって、単数埋葬と複数埋葬が併存していたことは確実である。ちなみに第170図においても、単数埋葬の7号墓と複数埋葬の4号墓がほぼ同時期に存在したとされている。しかし、2基の木棺埋葬を基本としたとまでは本例をもっては言い切れない。

③埋葬主体の位置について

藤沢氏によると、複数埋葬については、第Ⅲ様式において、方形周溝墓の中心に埋葬主体が位置しないものから位置するものの変化があるとされている。これに対して単数埋葬のものについては、いずれも中心にあるが、主軸方向は墳丘の長軸方向に平行する。

特に単数埋葬については、これまで前期まで遡る資料がなかったため、その特徴を明らかにはできなかった。当遺跡で確認した単数埋葬の周溝墓については、全て埋葬主体は墳丘の中心部にある。しかし、主軸方向については、11号墓は周溝墓の長軸方向に直交するのに対して、他の周溝墓は長軸方向に平行する。ただし、11号墓については中期初頭に位置付けられている。

以上から、前期段階から、長軸方向に平行する埋葬主体を有する単数埋葬が存在することが明らかとなった。また、中期初頭ではあるが、長軸方向に直交する埋葬主体の存在についても明らかとなった。この他、複数埋葬についてであるが、該当するのは当周溝墓群では4号墓のみであるが、埋葬主体が中心にあるとは言いがたい。したがって、藤沢氏の研究段階では第Ⅲ様式以前の例は明らかとなっていなかったが、今回の調査によって、このような前期まで遡る例の存在が明らかとなった。

④群構成について

岸本氏は方形周溝墓群の群集構造の分析を行い、市松状の群集と列状をなす群集状況の2者がみられるとしている。特に前者の群集例については、Ⅲ様式以降に限られている。

当遺跡においては、A～Eの5グループからなることが明らかとなった。各グループの群構造をみると、Aグループ・Bグループ・Dグループは列状をなしている。これに対してCグループは、明確な列状をなさず、1グループのみであるが市松状に近い群構造をなしている。この

ように、岸本氏が分析の対象とした周溝墓群例においては、遺跡ごとに列状もしくは市松状と二者択一的であった。しかし、本遺跡においては、両群集構造が認められる。ただし、このような例は、中期の例ではあるが、近江の服部遺跡の周溝墓群の分析⁽⁴⁾においても明らかとなっている。

ところで、(2)において、第170図をもとに1つの解釈を考えた。この解釈に基づくと、各グループを構成した家族が異なるため、その結果として、その群構造が異なるとの解釈ができる。このことは、各家族ごとに異なる群構造を形成することになり、この違いの前提として出自等の違いも考える必要がある。そのひとつとして、第3段階に築造を開始するAグループに属する1号墓からは「瀬戸内型壺」が、2号墓からは擬朝鮮系無紋土器と赤漆塗り豎樽が出土しているように、他のグループとは異なり外的要素特に西側からの要素が顕著である。このとともに、上記の解釈を支持しているように考えられる。

2. 他の諸問題

以上の検討した点に以外に、当周溝墓群について気づいた点について、述べておきたい。

⑤規模について

当遺跡で検出した22基の周溝墓は、先述したように平面形も異なるが、その規模においても顕著なバリエーションが認められる。第13表の墳丘規模から単純に計算した基底部の面積を比較すると、8号墓の11.5m²から15号墓の136.0m²、10号墓の172.7m²と、かなりの差が認められる。また、各グループごとにみても、Cグループの8号墓と10号墓、Aグループの16号墓の47.6m²と15号墓の136.0m²、というように顕著な差が認められる。

このような特徴は、他の前期の資料についてはまとまって検出された例がないため検討できない。しかし、Ⅲ様式の安満遺跡⁽⁵⁾・宮之前遺跡⁽⁶⁾などにおいても認められる。したがって、これまで中期初頭の資料で認められていた墳丘規模の顕著なバリエーションが、前期においても認められる、つまり前期まで遡ることが明らかとなった。

⑥墳丘の盛土と埋葬施設について

一般に、円形周溝墓を含めた周溝墓については、周溝を掘削するとともに墳丘を盛り上げることが明らかとなっている。これに代表されるのが、瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓⁽⁷⁾である。当該遺跡の報告によると、木棺を主体とする埋葬施設は墳丘を約1.2m盛り上げた段階で墓壙を掘削し、木棺を埋葬している。盛土が比較的厚いため、墓壙底は旧地表面には達していない。つまり、盛土層が残存していないと埋葬施設は検出できることになる。そこで、東武庫遺跡について、上記の墳丘の盛土と埋葬施設との関係について検討してみたい。

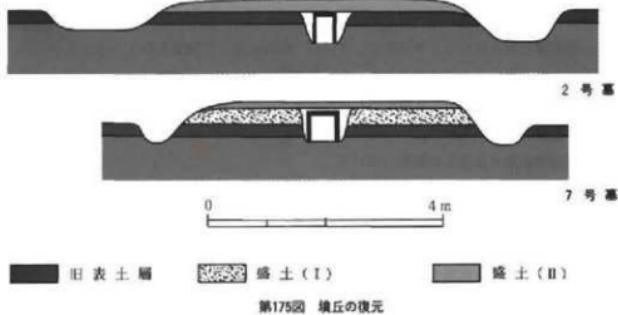
東武庫遺跡で検出した周溝墓22基全てにおいて、墳丘の盛土を確認することはできなかった(第3章第2節)。11号墓周溝内の堆積土に、墳丘の盛土が流れ込んだと考えられる層が認めら

れたのが、盛土の存在を示すわずかな調査成果といえる。

その一方で、6基の周溝墓で木棺墓を主体とする埋葬施設を7基検出している（次節参照）。各墓壙とも、墳丘の盛土がなかったため、墳丘検出面でその掘り方を確認している。検出面からの深さは、11号墓の3cmから4号墓2号主体部の48cmと差異が認められる。埋葬施設を検出した墳丘面（I層上面—第3章第1節）と旧表土層（II層）との関係についてであるが、第3章第1節でも検討したように、遺構検出の技術的な問題から、墳丘はII層まであったものと考えられる。そして、II層は平均して約20cmの厚さが認められたことから、旧表土面は検出面より約20cm高かったものと考えられる。

ところで、一般に木棺墓については、棺そのものの深さは良好に残存する例から、約50cmと推定されている⁹⁰。そこで、この数値から意識的に掘削した旧表土層（II層）の厚さ20cmと、そのレベル（検出した墳丘面）からの墓壙の深さを引いた値が、旧表土面から上に出た埋葬施設の高さとなる。そしてこの高さは、高いもので11号墓の37cm、低いもので4号墓2号主体部の-18cmとなる。マイナスとなった4号墓2号主体部例については、盛土をする以前に墓壙が掘り込まれた可能性も考えられる。盛土がされたとしてもわずかである。他の埋葬施設については、10cm前後のものが多い。

さらに、周溝墓に埋葬した際に、木棺を墳丘上に露出させたままであったとは考え難い。よって、上記の数値は最低必要とする盛土の厚さといえる。厳密には、この数値よりは厚かったものと考えられる。以上から、11号墓を例にとると、上記の計算では旧地表面から37cmであることになるから、盛土の厚さは約50cm前後になるのではないかと考えられる。したがって、東武庫遺跡で埋葬施設を検出した周溝墓の盛土は、瓜生堂遺跡例に代表される中期以降の周溝墓と比較して少なかったものと考えられる。以上をまとめたのが第175図である。



第175図 墳丘の復元

一方で、埋葬施設を検出できなかった周溝墓も存在する。墳丘面検出レベルにおいて大差が認められなく、旧表土層（Ⅱ層）の厚さも大差ないものと考えられる。したがって、これららの周溝墓については、墓壙底が盛土内で収まつたか、旧表土層まで掘り込んだとしても旧表土層内（Ⅱ層）にとどまつたものと考えられる。仮に前者を例に計算すると、盛土は少なくとも50cm以上は必要となる。ここで、瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓の墳丘斜度及び当遺跡で複数埋葬が確認された4号墓例を考慮に入れると、少なくとも4号墓より墳丘の平面規模が小さいものについては、より多くの盛土を考えることは困難である。逆に、10号墓・15号墓のように墳丘の規模が大きなものについては、より多くの盛土が考えられる。ただし、単数埋葬か複数埋葬かを判断できないため、この高さを復元することは困難である。

以上の検討結果から、当遺跡で検出した周溝墓の大半は、その盛土の厚さは中期以降の例と比べて、厚くはなかったのではないかと考えられる。

東武庫遺跡で認められた特徴については、他に前期の周溝墓で良好な埋葬施設を検出した例が認められないため、当該期の周溝墓に一般的であったのかどうかについては断定できない。ただし、円形周溝墓ではあるが吉備の百間川沢田遺跡例において、小口穴が旧表土層下の墳丘面で検出されている。この例も、墳丘の盛土層が厚くなかった一例とみることができよう。

⑤いわゆる陸橋部と平面形について

周溝の途切れ方を基準にした平面形についてである。特に、3号墓等に代表されるように、周溝の四隅が途切れ陸橋部のようになっていることから、山中遺跡などに代表されるいわゆる「東日本形方形周溝墓」¹⁰⁰ではないかとも考えられた。しかし、①当遺跡で検出した周溝墓の周溝は、検出面から10cm前後が大半と極めて浅いものであり、3号墓についても同様である、②一瀬氏が指摘している¹⁰¹ように、墳丘構築上の特徴として四隅が浅くなる傾向にある、などの点を考え合わせると、周溝底部が検出面から浅いほど陸橋部となりやすくなる。当遺跡の周溝墓群に認められた陸橋部的なものは、本来意味するところの陸橋部とは言い切れない。これは、当遺跡に限られたことではなく、すでに一瀬氏によって指摘されていることである。

したがって、当遺跡の周溝墓群をもって、陸橋部云々といった問題について検討することは困難といえよう。ましてや、周溝の切れ方による平面形の分類についても、当遺跡の周溝墓群については有効とはいえない。

⑥周溝墓群の立地・集落との関係について

当周溝墓群の立地については、第1章第1節で述べたように、東武庫集落が立地する微高地のなかでも南東側の後背湿地へ落ちかかった位置であること明らかとなっている。つまり、集落に近接する南東側に東武庫集落の墓域が形成されたようである。このような特徴は、一瀬氏によって、河内平野に代表される沖積地においては一般的であると指摘されている。よって、このような集落と墓域との関係が、前期まで遡ることが明らかとなったといえよう。

さらに、微地形的視野から見た墓域の立地等についての分析は、中期ではあるが玉津田中遺跡等でもなされている。この他、時期は離れるが、庄内期の深江北町遺跡⁶⁶においてもこのような立地が報告されている。

⑨初期周溝墓の分布について

今回の調査で検出した20号墓が弥生時代前期前半（第1段階）に位置付けられ、今まで報告された方形周溝墓のなは最も古く位置付けられる。また、20号墓に続く22号墓がこの次に位置付けられる。当遺跡に続く資料としては、東奈良遺跡G-4-G地区方形周溝墓⁶⁷が該当し、東武庫遺跡の第2段階に相当するものと考えられる。さらに、これに続く例として、当遺跡第3段階に対応する時期と考えられる池上遺跡・多遺跡があげられる。また、亀井遺跡⁶⁸例が第3段階と第4段階の中間に位置付けられるのではないかと考えられる。

中期初頭（第Ⅰ様式）の調査例としては、神足遺跡⁶⁹・南柴塚遺跡⁷⁰・安瀬遺跡・東奈良遺跡・鬼虎川遺跡⁷¹・宮之前遺跡・北裏遺跡⁷²などで報告されている。

畿内周辺部では、淡路の武山遺跡⁷³・但馬の駄坂・舟尾遺跡群⁷⁴において第Ⅱ様式の方形周溝墓が検出されている。

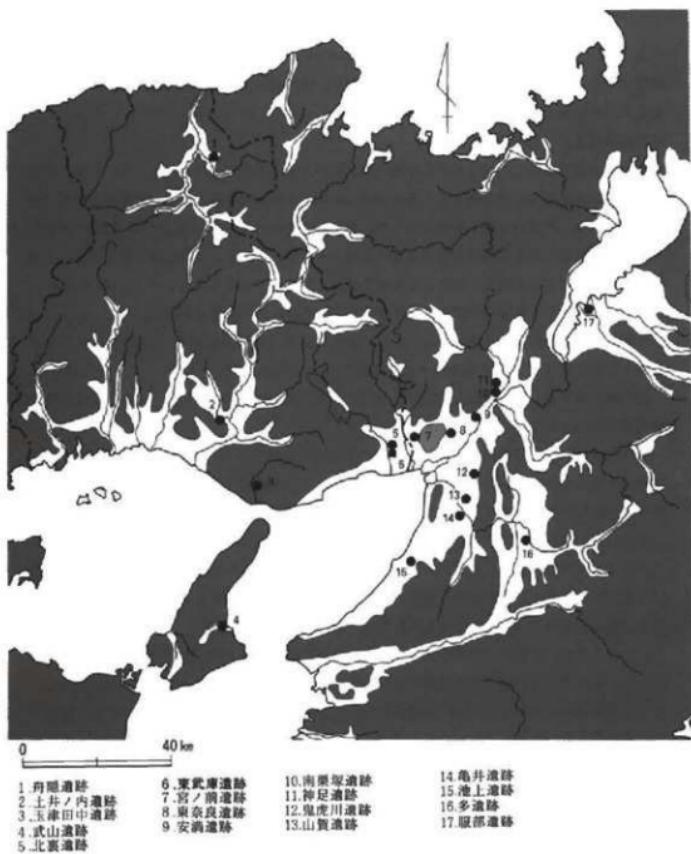
畿内以外では、北部九州の東小田峰遺跡⁷⁵が最古に位置付けられ、東武庫遺跡の第1段階に相当するものと考えられる。他に、伊勢湾沿岸の山中遺跡⁷⁶で明らかとなっており、前期でも最も新しい時期つまり第3段階と第4段階の中間に時期に対応するものと考えられる。

なお、方形ではないが円形周溝墓が吉備の百間川沢田遺跡⁷⁷で2基検出されている。そのうちの1基（円形周溝2）では、小口穴ではないかと考えられる小穴が検出されている。時期は百間川前期IIつまり前期中葉と報告されており、東武庫遺跡の第2段階から第3段階の時期にはほぼ対応するのではないかと考えられる。

以上のように、前期から中期初頭（Ⅱ様式）の方形周溝墓は、北部九州の東小田峰遺跡例を除くと、ほぼ畿内を中心とする地域に分布の偏りが認められる。また、木棺墓についても次節での分析結果からみると、同様の傾向が認められる。しかし、この状況をもって直ちに畿内に方形周溝墓の起源があると判断することは、現段階ではできない。先述したように、1号墓から出土した「瀬戸内型鏡」、2号墓から出土した擬朝鮮系無文土器などに西側からの動きが認められることも考慮に入れる必要があると考えられる。

⑩周溝墓の被葬者について

周溝墓に埋葬された被葬者を考えるヒントとして、2号墓木棺内から出土した赤漆塗綾襷がある。前期の赤漆塗綾襷の出土例は、第5章第4節でも検討したように、東武庫遺跡例を入れて9遺跡9例に限られ、その分布も畿内および畿内周辺部に過半数が集中する。工楽善通氏によると、銅鏡等と同様、どこか1ヶ所の漆工房で作られ、特定の入手経路を通じて、各地へ運ばれたのではないかとされている⁷⁸。これから判断すると、2号墓の被葬者は、集団あるいは



第178図 繼内およびその周辺の主要初期周溝墓の分布

は地域のなかでも限られた人物と考えられる。当墓の周溝内から擬朝鮮系無文土器が出土していることも、上記のことと無関係ではないと考えられる。

以上から、弥生時代前期においてすでに、集落内あるいは地域内における階層差が顕在化

してきていること示すものといえよう。したがって、⑨では西側からの動きが認められることも考慮に入れる必要があると述べたが、前期の赤塗塗締櫛の出土地域と⑨で検討した初期周溝墓の分布とは全く無関係ではないのではないかと考えたい。

(4)まとめ

以上、①～⑩の10項目について検討を加えてきた。この結果、東武庫遺跡の方形周溝墓群は、これまで前期まで遡る良好な周溝墓群の調査例を欠いていたため不明確であった諸問題を解決するにあたって一定の成果を提出することができた。以下、上記の検討を通じて明らかとなっただ東武庫遺跡を中心とする前期の周溝墓の特徴について列記しておきたい。

- ①周溝墓は弥生時代前期前半まで遡る。
- ②平面形は長方形を呈するものが多く、その形態も一定していない。
- ③墳丘の盛土は、中期以降の周溝墓と比較して、厚く盛らない傾向にある。
- ④埋葬主体数は、単数埋葬と複数埋葬が併存している。どちらが多いかについては、今回の調査例からは明確にできない。
- ⑤埋葬主体は、単数埋葬については墳丘の中央部に長軸方向に平行させている。1基ではあるが、長軸方向に直交させる例(11号墓)も認められる。複数埋葬については、唯一複数埋葬を確認した4号墓については、中心にはない。
- ⑥数基を単位とした群構造をなし、そのなかで順次墳丘が築造されていっている。その構造は、列状をなすものと市松状をなすものの両タイプが認められる。
- ⑦墳丘の規模にはかなりのバリエーションが認められる。

(註)

- (1) 岸木一宏「畿内弥生社会構造に関する一考察—方形周溝型墳丘墓の構造検討を中心として—」『横田健一先生古希記念文化史論叢 上』1987 以下岸木氏の説は当文による。
- (2) 藤沢真依「近畿地方の方形周溝墓—その基本型と展開—」『横田健一先生古希記念文化史論叢 上』1987 以下藤沢氏の説は当文による。
- (3) 東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡第7回現地説明会資料(G-4-G・K地区)』1977
- (4) 第2阪和国道内遺跡調査会『昭和46年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4 1971
- (5) 寺沢 薫『多遺跡 第11次発掘調査報告書』
- (6) 大橋信弥・山崎秀二『服部遺跡の方形周溝墓をめぐる問題』『服部遺跡発掘調査報告書 II—滋賀県守山市服部町所在—』守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1985
- (7) 森田克行他『安瀬遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—』(高槻市文化財調査報告書 第10冊) 高槻市教育委員会 1977

- (8) 宮之前遺跡調査会『宮之前遺跡発掘調査概報』1970
- (9) 今村道雄「第2・9号方形周溝墓の調査」『瓜生堂遺跡』瓜生堂遺跡調査会 1981
- (10) 前掲(9)
- (11) 服部信博「墓制」『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集) 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1992
- (12) 一瀬和夫「方形周溝墓・方形台状墓 そして古墳-方形周溝墓の埴丘立面性を中心として-」『末永先生米寿記念献呈論文集 乾』1985 以下一瀬氏の説は当文による。
- (13) 山下史朗他『深江北町遺跡 県営深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(兵庫県文化財調査報告 第54冊) 兵庫県教育委員会 1988
- (14) 森田克行『攝津地域』『弥生土器の様式と編年 近畿編』1990
東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡第7回現地説明会資料(G-4-G・K地区)』1977
- (15) 広瀬和夫他『龜井(その2) 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター 1986
- (16) 山本輝雄・久保哲『長岡京市文化財調査報告書 第5冊』長岡京市教育委員会 1980
- (17) 岩崎誠他『長岡京跡右京第39次(7ANQM K地区)調査概要』『長岡京市文化財調査報告書 第11冊』長岡京市教育委員会 1983
- (18) 上野利明『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』財団法人 東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987
- (19) 尼崎市教育委員会 福井英治氏の教示による。
- (20) 田辺昭三他『武山遺跡発掘調査報告』岡本市教育委員会 1975
- (21) 濱戸谷晴『駄馬・舟脛遺跡群-民間宅地造成工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告-』豊岡市教育委員会 1989
- (22) 柳田康雄『集団墓地から王墓へ』『発掘が語る日本史 6-九州・沖縄編』 1986
- (23) 服部信博他『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集) 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1992
- (24) 平井勝他『百間川沢田遺跡3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 84) 1993
- (25) 工業普通「木工と漆」『季刊 考古学』第47号 1994

第2節 埋葬施設

1. はじめに

今回確認できた埋葬施設は方形周溝墓の主体部である木棺、壺棺、土壙墓の3種である（第15表）。しかし、周溝だけが確認され、主体部を明らかにできなかったものも多く（22基中15基）、盛土・旧地表が削平されている可能性を考慮すると、さらに多くの主体部が想定でき、今回の成果はあくまでも遺存した一部であることに留意する必要がある。例えば、周溝系の中心部のみに主体部が確認されたものでも、中心主体を深く埋葬し、それ以外を浅く埋葬していたとすれば、削平後は結果的に中心主体のみ残ることになってしまい、あたかも一周溝墓に中心埋葬の一主体部しかなかったかのようになってしまう。

このような危険性を含んでいることを承知した上で、今回検出できた主体部に限るという前提条件があるが、敢えてその様相についてまとめ、検討を試みる。

なお、時期の比定については第5章第1節の「弥生土器」の項にある「段階」を使用することとする。

以下、木棺、壺棺、土壙墓に分け、それぞれについて述べた後に、全体の状況についてまとめる。

第15表 主体部一覧表

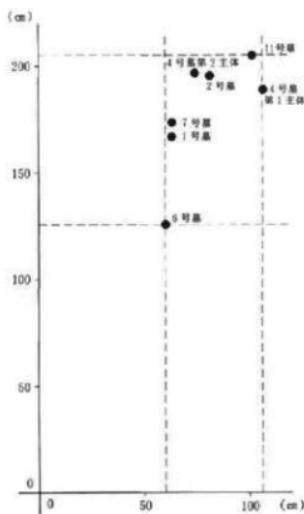
種類	主體部名	第182図での記号	数	比率%
木棺	I型 1号墓・7号墓・11号墓	黒	3	43
	II型 2号墓・4号墓1号主体部・4号墓2号主体部	斜線	3	43 78
	I + II型 6号墓	網格子	1	14
壺棺	5号墓	◎	1	11
土壙墓	4号墓3号主体部	空白	1	11
合計			9	100

2. 木棺

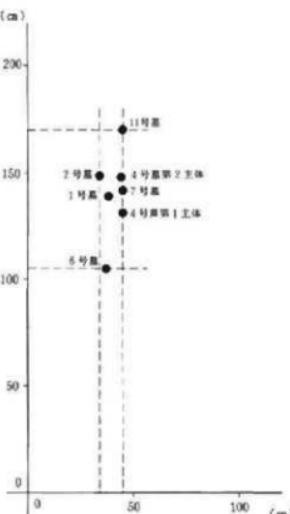
今回検出された木棺は、第17表のように第2段階から第4段階までの7基である。いずれも削平のため、底に近い部分しか残っておらず、遺存状況は悪い。これらの木棺の構造については後に詳細に検討するが、すべて組合せ式箱形木棺であるとすれば、福永伸哉氏による分類⁽⁴⁾のI型・II型と、今回新たにその両形態の特徴をもつ木棺（仮にI+II型とする）が確認できた。規模は掘り方の長さが125~205cm、幅が60~106cm、木棺は内法での長さが105~170cm、幅が34~44cmであり、棺の長さの差が64cmと大きいのに対し、幅は10cmと小さい。これらを表にしたのが第16表で、それをグラフにしてまとめたのが第177・178図である。

第16表 木棺一覧表

墳墓番号	種類	方位	規模() 内は内法			所属群	段階	備考
			長さ	幅	深さ			
1号墓	I型	56°	167 (139)	63 (38)	10 (6)	A	3	小口板残る(2枚ともヒノキ)
2号墓	II型	68°	195 (149)	81 (34)	24 (13)	A	3	生駒西麓産の土器出土
4号墓	1号主体部	II型	90°	188 (131)	106 (45)	22 (16)	C	2
	2号主体部	II型	85°	197 (148)	74 (44)	48 (33)	C	2
6号墓	I+II型	85°	125 (105)	60 (37)	5 (5)	C	2	土壤1から生駒西麓産の土器出土
7号墓	I型	81°	173 (141)	63 (44)	6 (6)	C	2	小口板残る(確認できた1枚はヒノキ)
11号墓	I型	13°	205 (170)	100 (45)	3 (-)	B	4	



第177図 木棺模型(振り方)

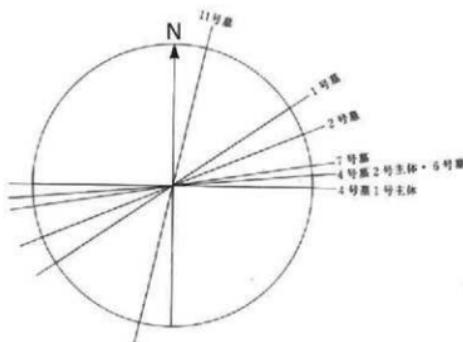


第178図 木棺模型(棺内法)

また、周溝墓上部からの深さは削平のため不明であるが、少なくとも検出面からの深さは、全体的にみてⅠ型、Ⅰ+Ⅱ型が浅く、Ⅱ型は深いという特徴がある。

次に方向であるが、第179図に示したように、11号墓が北から13°西に振り南北に近い方向であるが、それ以外は東西方向に近い向きであり、北から東へ向かって56°～90°の間に収まっている。この方向は周溝墓の方向とほぼ同じであり、結局木棺の方向は全体の枠組みによって決められた周溝墓の方向と同じであるといえる。そして周溝墓が方位によってグルーピングでるので、木棺についても同じようにグルーピングでよう。また、主体部の方向を大きく異にする11号墓とそのグループは、他の周溝墓と一線を画することができるのかもしれない。

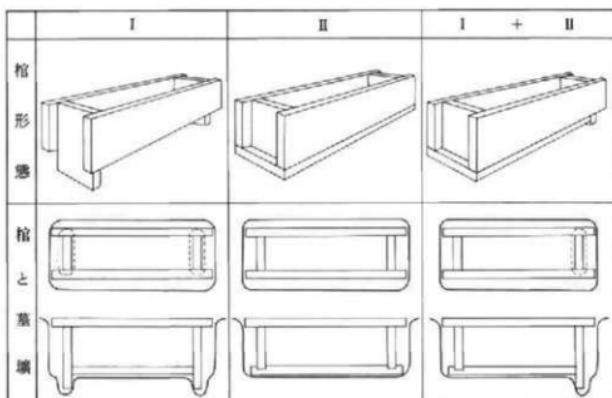
さらに今回は主体部内を対象として脂肪酸分析を行った（詳細は第4章第2節）。その結果、すべての主体部には、ヒト遺体が埋葬されていると判断された。頭位については、いずれの主体部も確定することができなかったが、2号墓の主体部については、櫛の出土位置から判断すると、西側が頭位であったと推定される。この方向は2号墓周溝にある陸橋部の反対方向である。



第170図 主体部の方位

遺存した木棺材の樹種は全てヒノキであることが判明した。木棺が遺存していたのは1号墓、4号墓2号主体部、7号墓で、木棺形態はそれぞれI型、II型、I型であり、木棺形態に關係なくヒノキが使用されていたことになる。樹種同定についての詳細は第4章第1節にあるが、これまでに兵庫県下における弥生時代の木棺に対する樹種の同定は、玉津田中遺跡、田能遺跡、および今回の東武庫遺跡において行われている。その中で、最も多い樹種はコウヤマキの64例で、それ以下はあまり変わりがなく、ヒノキが今回を含めると6例、カヤが4例、クスノキが3例、モミが2例であり、ヒノキは少数である。やや範囲を広げても、例えば瓜生堂遺跡ではコウヤマキが27例で、ヒノキが3例、山賀遺跡ではコウヤマキが18例で、ヒノキが11例⁽¹⁾というように、ヒノキが出土した遺跡でもコウヤマキが一般的に使用されており、ヒノキはその中の少数として存在している。しかし、東武庫遺跡ではヒノキのみで、他の遺跡と異なっている。

さて、管見では畿内とその周辺部における弥生時代前期の方形周溝墓は、第1様式中段階まで遡る大阪府東奈良遺跡⁽²⁾をはじめ、新段階の大坂府池上遺跡⁽³⁾、龜井遺跡⁽⁴⁾、愛知県山中遺跡⁽⁵⁾などが知られているが、主体部が確認され、それが木棺であると確認されている例は少なく、その様相は不明と言わざるを得ない。このような状況ではあるが、弥生時代全般の木棺墓について見れば、これまでに福永伸哉氏によって整理・考察されているため⁽⁶⁾、ここでは氏の分類に従いながら当遺跡での状況についてまとめ、氏と同一の觀点に立ち、その意味づけを考えることとする。



第180図 組合せ式箱形木棺の形態

福永氏は組合せ式箱形木棺をI型木棺・II型木棺・I+II型木棺の3種に分類している。これらうち東武庫遺跡ではI型木棺・II型木棺の2つの型の存在が明らかであるが、さらに6号墓木棺においてI型とII型の形態を同時に持つ形態（今回は一応I+II型と表す）の木棺が確認できた（第180図）。これまで福永氏がI型をさらに細分した形態（底板の両短辺側に外接する位置に通常の長方形の小口板を立てるものと、底板の両短辺部分を「コ」の字形に切り取って、そこに「T」字形に加工した小口板を組み合わせた形態）については、大阪府小曾根遺跡において認められるように同一木棺に両形態が存在することが明らかとなっているが、さらにI型とII型という大分類についても同時に両型の特徴を備えている木棺が存在することが推定できるようになった。14号墓についても一方の小口穴のみ確認され、この形態の木棺である可能性が高いが、削平が著しく詳細が不明であるため、ここでは一応除外して考える。

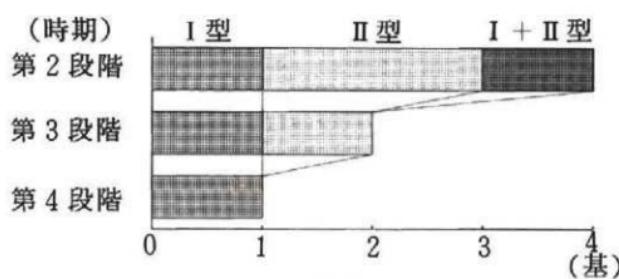
これらの木棺形態の比率であるが、遺跡全体でみると第15表に示したようにI型とII型がそれぞれ43%、I+II型は14%となり、特定の木棺形態に集中する状況は看守できない。そこで、この木棺形態の分類を利用しながら、時期、グループ、方向、規模などの視点から検討を加える。

まず時期別であるが、今回検出された木棺は弥生時代前期～中期初頭（第2段階～第4段階）のものであるが、その中でも出土土器によりさらに細分すると第17表のようになる。

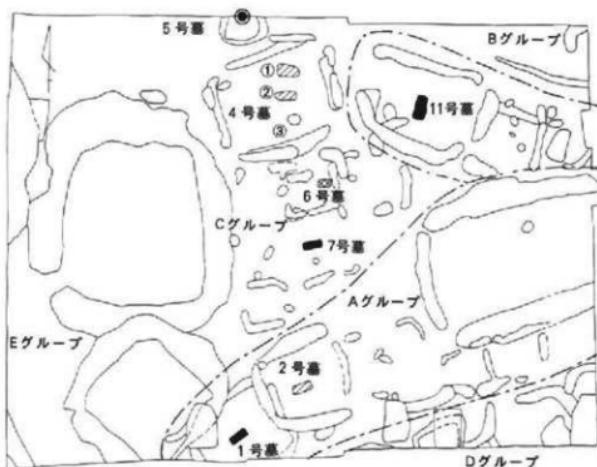
この状況をみると、前期第2段階ではII型が50%とやや多く、第3段階ではI型と同じにな

第17表 木棺形態の変遷

時 期	墳墓名と木棺の形態	比率()内は基数		
		I型	II型	I+II型
前期	第2段階 4号墓(II+II)、6号墓(I+II) 7号墓(I)	25% (1)	50% (2)	25% (1)
	第3段階 1号墓(I)、2号墓(II)	50% (1)	50% (1)	0% (0)
中期	第4段階 11号墓(I)	100% (1)	0% (0)	0% (0)



り、第4段階ではI型のみになるという変遷が追え、II型から順にI型へと変化するよう窺える。しかし、第2段階からすでにI型も存在し、その基数は第4段階まで1基であること、さらに同じ第2段階とした6号墓と7号墓の切り合い関係からI型がI+II型に先行し、同様に第3段階とした1号墓と2号墓の切り合い関係からI型木棺がII型木棺に先行していることから、それぞれの木棺の形態差は単に時期差によるものではないと考えられる。もっとも、段階と段階の間でゆっくりと変化し、各段階の中での短い前後関係は問題とならないかもしれないが、今回の調査結果ではそれ以上は追求できない。ただし、兵庫県神戸市に所在する楠・荒



第182図 墓葬遺跡分布図

田町遺跡⁽¹⁷⁾では、前期および中期前半まではⅠ型で、中期中頃にはⅡ型が出現し、普遍化したことが明らかとなっており、東武庫遺跡での状況と逆行することから、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅰ+Ⅱ型の木棺形態は単なる時期的な問題ではなく、あくまでもその遺跡の中での状況を示しているに過ぎないとする方が妥当であろう。これは福永氏の論の追認である。

次に、方形周溝墓のグループングを木棺にも適用し、木棺形態の分布状況を第182図に示した。これを見ると、1・2号墓（Aグループ）と4・6・7号墓（Cグループ）のそれぞれにおいて異なる木棺形態が存在しており、また、数量的に問題を含むが、いずれも特定の木棺形態に集中していないようである（第18表）。ただし、4号墓において同一区画内に同じⅡ型の木棺が2基使用されていることには注目すべきであろう。

グループごとの時期別変化を見ると（第18表）、木棺の確認された周溝墓の時期がグループごとに異なり、また数量的にもさらに問題を含むようになるが、AグループとCグループに認められるようにⅠ型からⅡ型、あるいはⅠ型からⅠ+Ⅱ型と、いずれもⅠ型から変化していることが窺える。Bグループについては11号墓のほか、13号墓、14号墓があるが、11号墓以外の主体部が不明であるため、明らかではない。また、Cグループの4号墓のように時期的な位置

第18表 木棺形態のグループ別比率と変化

グループ名 (墳墓名)	基数(比率)			時期別の変化		
	I	II	I+II	第2段階	第3段階	第4段階
Aグループ (1・2)	1(50)	1(50)	0(0)		I→II	
Bグループ (11)	1(100)	0(0)	0(0)			I
Cグループ (4・6・7)	1(25)	2(50)	1(25)	I→I+II II→		

づけが困難なII型の木棺が存在しており、この状況も明らかとは言い難い。

福永氏は、弥生時代の西日本の木棺墓遺跡にはI型主流タイプとII型主流タイプの二者が存在し、いくつかの遺跡ではいずれかの木棺形態が主流となり、その中に混じって他形態の木棺が少数存在することを指摘している。そして、それは「棺の型式が集團ごとに慣習的に決められ」ており、「他集團出身者は、埋葬時に出自の違いが意識され、出身集團に通有の型式の木棺を使用することによってそれが表される」とことを明らかにしている。東武庫遺跡では、主流派、少數派と分けることが不可能であったが、いずれにしても当地域における弥生時代前期の段階には既に両形態の木棺が混在していることは明らかであり、集團ごとに木棺形態が決められていたのであれば当該期以前に通る木棺が存在していることを推測させるものである。

木棺の系譜について福永氏は、「木棺墓は弥生時代開始期に、稲作農耕文化の一要素として渡来者集團によって朝鮮半島からわが国にもたらされた」とし、棺型式の違いは「朝鮮半島において既に型式の異なる木棺として存在していた」とした。さらに、「巨視的にみれば畿内のII型、北部九州のI型というようにある程度広い地域において主流派となる木棺型式が決まっている」という点は、それぞれの相型をもたらした渡来者集團の西日本における定着地を示唆している」とした。これらの成果を木棺形態が混在している東武庫遺跡に当てはめれば、畿内における弥生時代前期第2段階には、一墓域内という小地域にも多元的な系譜があり、主流となる木棺形態が決められていなかったか、あるいは主流派と少數派が顕著な差にならないほど活発な往来、他集團出身者が多かったためとするとことができるのであろうか。

さらに福永氏は供獻土器に含まれる他地方産の土器は「他地方の人間が何らかの形で葬儀に参加していたことを示している」として棺形態以外に供獻土器からも他集團の出身地を推定で

きるとされている。これを東武庫遺跡出土の土器にあてはめると、胎土分析からも指摘されているようにそのほとんどが在地産の土器であるが、搬入された可能性があるものとして生駒西麓産の小片と、在地には一般的でない第37図-30の土器（第5章第2節で検討）が挙げられる。

生駒西麓産の土器は2号墓、4号墓、6号墓土壙1、SD01から出土している。破片のみの出土であるので詳細は明らかにしないが、2号墓はII型、4号墓はII型、6号墓はI+II型であり、6号墓においてI+II型という特殊な木棺形態が存在するものの、少なくともI型以外の木棺を採用している周溝墓に生駒西麓産の土器が出土している。よって前述の福永氏の考察から、このI型が東武庫遺跡本来の木棺形態であり、それ以外の木棺形態は生駒西麓産の土器を使用している地域のものである可能性が高い。そのように考えると、I型とII型が時期別に分けることができなかったのは、他地域からの出身者が時期的に集中することなく周溝墓に葬られたことを表し、継続した往来があったことを示していると言える。また、30の土器が無文土器の影響を受けているとすれば、半島の人間（半島の人間と関係する人間）が直接にしろ間接にしろ関与していることとなり、畿内における方形周溝墓、あるいは木棺墓の起源とも重なって重要な位置を占めることとなる。

最後に主体部に関係すると思われる遺物の出土状況について若干検討する。該当する遺物および遺構は、櫛（W1）が棺内から出土した2号墓の主体部と、無頸壺（44）が棺の下に置かれていた4号墓1号主体部である。

弥生時代の櫛については木下尚子氏によりまとめられ、10例が挙げられているが⁽³⁾、それによると埋葬施設の中から出土したものは中期後半の福岡県福岡市吉武遺跡群の櫛柄、後期の大坂府茨木市東奈良遺跡の方形周溝墓木棺の2例のみであるという。今回の調査によってそれが前期まで遡ることが明らかとなり、新たな1例を加えたことになる。

次に2号墓の主体部下に置かれていた無頸壺について出土状況を中心に検討する。詳細な状況は事実報告に譲るが、木棺の掘り方が土器の置かれていた土壤を完全に切っているために、木棺を意識しておられたものか、あるいは木棺が置かれる前にそれを意識せずに土壤が掘られたものかは明らかにできない。しかし、単なる土壤としては他の土壤に較べて深いこと、木棺の掘り方と土壤の北辺が揃っていることから木棺の掘り方と土壤の掘削は同時に行われていた可能性が高いと考えられる。よって、ここでは埋葬施設に伴い土器の供獻が行われている他の遺跡と比較して検討することとする。弥生時代の葬送儀礼と土器の関係については、河内地域を中心とした畿内の事例を使用して大庭重信氏によりまとめられているが⁽⁴⁾、その中でも今回直接に関係するのは墓域内からの土器の出土状況である。そこでは大阪府東大阪市鬼虎川遺跡⁽⁵⁾、大阪市城山遺跡⁽⁶⁾、八尾市恩智遺跡⁽⁷⁾の3遺跡が紹介されている。鬼虎川遺跡付近では畿内第IV様式の壺が土壤基の底に接し、高さは頸蓋骨より低い位置に置かれていた。城山遺跡では17号方形周溝墓の4号主体部の木棺直下から完形の壺が出土し、恩智遺跡木棺墓から

は底板の下から壺、甕、鉢など7点の土器と、木製の箋の身が出土した。これらはいずれも弥生時代中期の資料であるが、東武庫遺跡ではその起源が前期まで遡る可能性を明らかにした。そして、河内地域での中期の資料はいずれも木棺振り方、あるいは土壙の底に直接置いてあり、土器を置くために別に掘られた埋納壙は存在していない。一方、東武庫例では木棺の振り方を掘削した後さらに土器を置くための土壙を掘削しており、中期の例とは異なっている。このような木棺振り方の下に埋納壙を掘って遺物を埋納した例は、著名なものでは大韓民国慶尚南道義昌郡茶戸里遺跡⁽¹³⁾で認められる。茶戸里遺跡ではこの遺物埋納壙を副葬坑と呼び、1・2・11号墳で検出されているが、そのうち1号墳からは竹籠に入って、武器類（漆鞘銅劍・漆鞘鐵劍・木製劍把附鐵劍・漆鞘鐵製環頭刀子・銅鉗・鉄鉗など）、利器類（鍛造鐵斧・木柄附鎌形鉄器）、装身具（星雲鏡・青銅帶鉤・無銘文銅環・銅環）、その他（五朱錢・小銅鐸・漆器）などの豊富な遺物が出土している。東武庫遺跡からはこのような豊富な遺物は出土していないが、木棺の埋納に先立つ何らかの儀礼としての位置づけは同様であろう。茶戸里遺跡の時期であるが、星雲鏡、五朱錢などの青銅器類が出土し、土器は後期無文土器と古式の瓦質土器が出土していることから、東武庫遺跡より後出していることは明らかである。しかしながら、現在の資料のみで直ちに起源論へ展開せずに、木棺の始まりを朝鮮半島に求めるのと同じようにこの種の埋葬儀礼も同様に半島に求め、そして半島では茶戸里遺跡のような副葬坑へと変遷・発展したとするのが妥当であろう。

3. 土器館

比較的規模が小さく歪な5号墓において、方形周溝墓の主体部として土器館が使用されているのが確認できた。時期は前期第3段階であり、同一時期に築造された周溝墓は1・2・10・14・15・16・17・18・19号墓がある。すぐ南側に隣接する3・4号墓はすでに前段階に築造されており、それを意識して築造された可能性があるが、北側が調査区外で不明であるため明確にできない。しかし、西側には空間があることは明らかで、同時期に築造された10号墓にではなく3・4号墓に近接させたのは何らかの意味があったのかもしれない。

土器を埋葬用の棺として転用したものは縄文時代から存在するが、畿内の弥生時代では大阪府長原遺跡⁽¹⁴⁾が最も古い一例として挙げられる。長原遺跡では縄文晩期末の櫛棺墓群の中に弥生時代前期古段階の壺を使用したものが1基検出されている。それ以降、各地でも土器棺が認められるようになるが、方形周溝墓の主体部として使用されたものは、前期では東奈良遺跡⁽¹⁵⁾が挙げられる。東奈良遺跡の土器棺は周溝墓内にあるものの中心埋葬ではなく、その点で東武庫遺跡の土器棺と同じである。前期の方形周溝墓群が明確に確認できた東奈良遺跡と東武庫遺跡の両遺跡において土器棺が方形周溝墓の主体部として使用されているという事実は、それが前期の段階からすでに周溝墓の主体部として定着していたことを物語っている。

4. 土壙墓

方形周溝墓の主体部としては4号墓3号主体部があるが、周溝墓の区画以外にも土壙がいくつか有り、それらの幾つかが土壙墓である可能性もある。4号墓3号主体部については脂肪酸分析の結果（詳細は第4章第2節）により明らかであるが、他の20基近い土壙については不明であると言わざるを得ない。4号墓が築造されたのは前期第2段階であり、東武庫遺跡では埋葬施設が確認された中で一番古い一群であるが、その当初から木棺と並列して土壙墓が存在することは注目すべき点であろう。

また、4号墓の各主体部は、1号主体部がⅡ型木棺で木棺に先立つ儀礼の存在が窺えるものであり、2号主体部が通有のⅠ型木棺で、そして3号主体部が土壙墓であるといったように多様性が認めらる。これに5号墓の土器棺を加えると、近接する4・5号墓の2基のみで、今回確認された全ての埋葬施設である木棺、土器棺、土壙墓の3種が集まっていることになる。

5. まとめ

以上、東武庫遺跡の埋葬施設について木棺、土器棺、土壙墓に分け、それぞれに検討してきたが、最後にこれらを総合してまとめておく。

これまで述べてきたように東武庫遺跡の埋葬施設はいずれも弥生時代前期から中期初頭におさまるものであり、当遺跡での状況はこれまで不明確であった畿内における出現期の方形周溝墓の主体部に対する一つの具体例として位置づけることが可能である。

当遺跡では中期以降にも一般的に存続する方形周溝墓の埋葬施設、すなわち木棺、土器棺、土壙墓が認められ、また、周溝墓内の埋葬施設の基數についてもほとんどが中心の1基のみであるが、4号墓のように土壙墓と木棺を含む3基が認められるといったように、前期第3段階には埋葬施設の種類、周溝墓内の埋葬施設の基數において、すでに多くのパターンが存在するという点に注目することができる。それは木棺形態についても言えることであるが、この状況を定型化していない状態と捉えるのか、あるいは導入元で定型化していたものが、短期間に多元的に伝播したと捉えるのかは、今後の国内、及び朝鮮半島での様相が明らかになって後に再検討すべき問題であると考える。

〔註〕

- (1) 島地 謙・伊藤隆夫編『日本の遺跡出土木製品総覧』1988
- (2) 奥井哲秀他『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』 東奈良遺跡調査会 1981
- (3) 第2版和国道内遺跡調査会『昭和46年度第2版和国道内遺跡発掘調査報告書』4 1971
- (4) 広瀬和雄・石神 怡『亀井（その2）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
1986

- (5) 服部信博『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集) (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1992
- (6) 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 1985
福永伸哉「木棺墓」『弥生文化の研究』8 1987
- (7) 丸山 澄『備・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980
- (8) 木下尚子「装身具」『弥生文化の研究』8 1987
- (9) 大庭重信「弥生時代の葬送儀礼と土器」『侍兼山論叢』第26号史学篇 1992
- (10) 上野利明他『鬼虎川遺跡12次発掘調査報告』(財) 東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987
- (11) 杉本二郎他『城山(その1) -近畿自動車同天理~次田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1996
- (12) 田代克己他『恩智遺跡!』瓜生堂遺跡調査会 1960
- (13) 季 健茂「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告」『考古學誌』第1輯 韓國考古美術研究所 1989
- (14) 松尾信裕他『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ』大阪市文化財協会 1983
- (15) 埋蔵文化財研究会『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』第11回埋蔵文化財研究会 1982

第7章 総括

第1節 東武庫遺跡の歴史

1.はじめに

第1章で述べたが、当遺跡は武庫川の形成した完新世段丘Ⅰ面・埋没扁状地帯（自然堤防帶）・埋没自然堤防上に立地している。ところで、平成元年度に当遺跡の第1次全面調査が行われる以前は、上記の立地条件のもと、つまり一見したところ武庫川の氾濫原と見られる武庫川下流域においては遺跡は存在しないという、ある種の“定説”的なものがあった。

したがって、第1次調査を含めた東武庫遺跡の調査は、弥生時代前期の方形周溝墓群の発見もさることながら、上記の定説を覆す上でも大いに意義のあることといえる。そこで、このような立地条件における遺跡の形成過程を、当遺跡の調査の成果を踏まえてまとめてみたい。

なお、地形環境の変化については、高橋 学氏の調査時における現地観察の際のコメントをもとにしていることを明記しておく。

2. 東武庫遺跡の形成過程（第183図）

I : 銚文時代後期以前

中州（扁状地帯）が形成される。当遺跡では、弥生時代前期の方形周溝墓群の調査終了後、この中州を覆い自然堤防を形成している砂層を約2m掘削した。しかし、中州の上面の一部を確認するにとどまり、その時期を特定することはできなかった。

高橋氏によると、大阪湾沿岸の同様な立地条件にある遺跡では、当該期の中州が確認されている。このため、当遺跡においても、ほぼこの時期に形成されたのではないかと考えられる。

II : 銚文晚期

自然堤防が形成される。この自然堤防を形成する砂層を掘削したが、時期を特定できるような成果は得られなかった。

III : 弥生時代前期～中期

後背湿地が形成される。この後、後背湿地の水田化および方形周溝墓群の形成が行われる。しかし、第3章第1節でも述べたが、後背湿地の水田化が先か、あるいは方形周溝墓群の形成が先かは、調査区周囲壁面の断面観察では明らかにできなかった。いずれにしても、方形

周溝墓群の形成終了後も、後背湿地の拡大とともに水田化が継続したようである。

IV：弥生時代中期後半

武庫川による段丘化にともない、当地が完新世段丘Ⅰ面となる。

V：弥生時代中期後半～古墳時代後期

前段階の段丘化以降、地形環境が長期にわたって安定し、水田が形成される。弥生時代中期後半以降の遺構・遺物については、今までの調査では明らかとなっていない。よって、当該期の集落の中心は低位段丘上に立地する武庫庄遺跡にあったものと考えられる。古墳時代後期においては当遺跡においても遺物の出土がみられ、付近に集落等の存在が推定される。

VI：奈良～平安時代

前代の地形環境の安定を前提に、条里型水田が形成される。当遺跡周辺に復元される武庫郡条里あるいは川辺郡条里は、この時期に形成されたものと考えられる。また、第1次全面調査においては、当該期の掘立柱建物が1棟検出されている。この他、同調査において、わずかではあるが平安時代を通じての遺物の出土が認められることから、近くに集落ないし莊園関係の建物があったものと考えられている。

VII：平安時代後半

段丘化にともない、武庫川を中心に完新世段丘Ⅱ面が形成される。

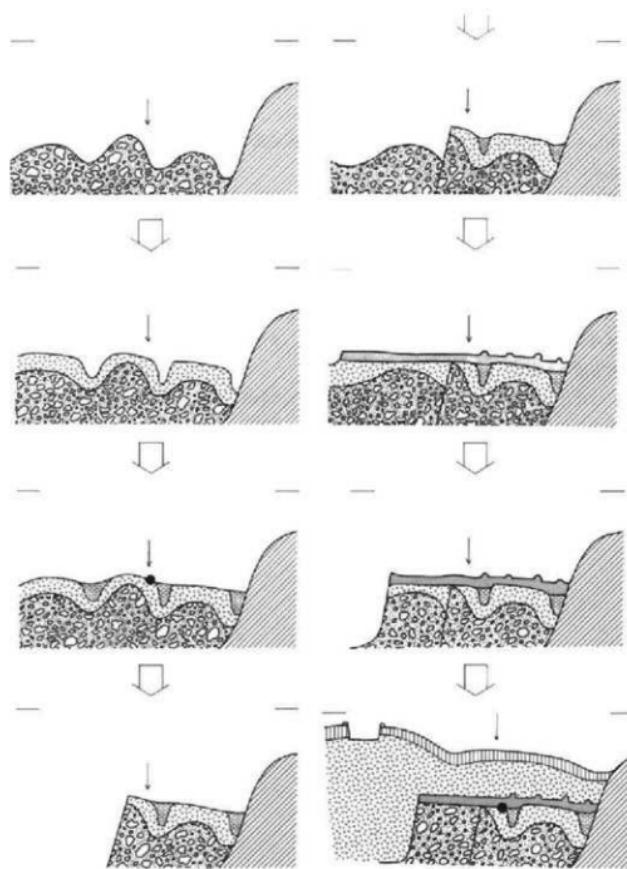
VIII：鎌倉時代以降

武庫川の洪水に伴い段丘面上に大規模自然堤防帯が形成されていく。この結果、武庫川が天井川化していく。なお、第3章第1節でいうV樋が当該期の洪水砂に対応するものと考えられ、この洪水砂によって当遺跡も埋没し、現地形面が形成されたものと考えられる。

3.まとめ

以上の分析から、武庫川とその東側の低位段丘（伊丹台地）に挟まれた武庫川下流域は、大きく現氾濫原面と完新世段丘Ⅰ面とに分類できる。前者においては、可能性としては中世以降の遺跡が考えられるが、武庫川の及ぼす激しい洪水のためその可能性は少ないものと考えられる。後者については、現地表面分析では前者との区別が困難なため、一見したところ、前者と同様に判断しがちであるが、遺跡が埋没している可能性は十分考えられる。少なくとも、今回の調査で明らかとなった方形周溝墓群の母体となる集落が付近に存在することはまちがいないものと考えられる。

今後、多くの地点における試掘調査の成果と微地形分析が、埋没地形の分析に対して大いに有効であるといえる。なお、今回は武庫川左岸を中心分解したが、西宮市域にあたる右岸についても同様の立地条件が存在するものと考えられる。



第183図 東武庫遺跡の形成過程

第2節 調査の成果

最後に、今回の調査で明らかとなったことをまとめておく。

- ①東武庫遺跡は、西摂平野中央部やや西側の武庫川下流域左岸に位置し、完新世段丘1面・埋没扇状地帯・埋没自然堤防上に立地する。以前は、上記の立地条件においては遺跡は存在しないものと考えられていなかったことから、今回の調査自体が意味のあることであったといえる。
- ②調査で明らかとなった遺構は、方形周溝墓22基、土壙、溝である。これらの遺構の時期は、弥生時代前期前半から中期初頭に限定される。
- ③方形周溝墓のうち、5基の周溝墓から6基の木棺墓を検出した。この他、土器棺墓1基・土壙墓1基を検出した。
- ④遺物は、主に周溝内から土器が出土している。土器は、壺・甕・蓋等の各器種の他に、2号墓周溝内から擬朝鮮系無文土器が出土している。さらに、小片ではあるが生駒西麓産の土器片も認められる。

また、2号墓の木棺内から赤漆塗巻拂が出土している。他に、石器が22点出土している。

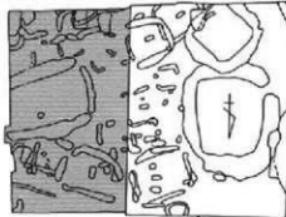
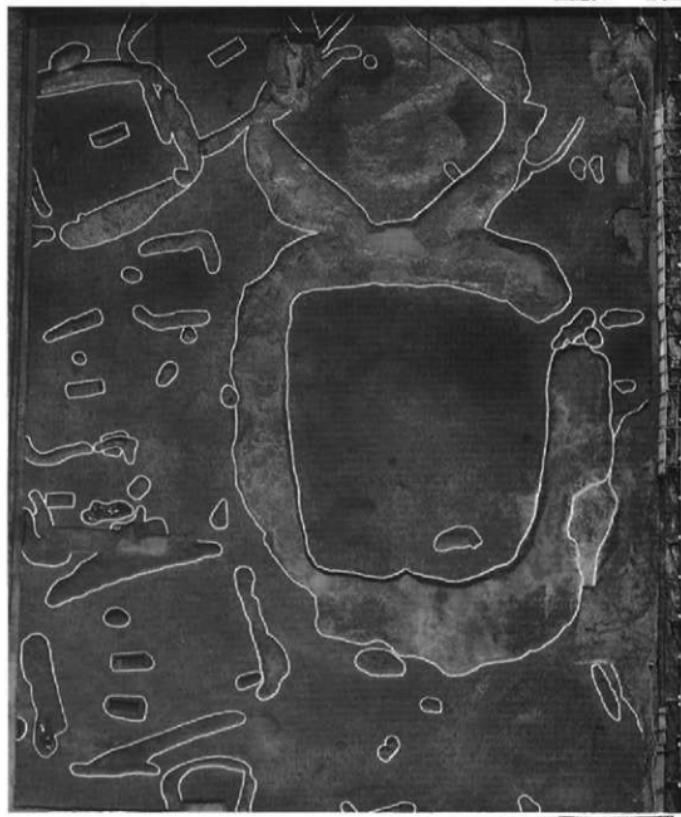
- ⑤出土した土器から判断して、20号墓・22号墓は、全国的にみてこれまで報告されている方形周溝墓のなかで最古に位置付けることができる。また、これに続く前期の周溝墓を含めて、まとまって見つかったことから、初期の方形周溝墓のあり方等を検討する上で、良好な資料といえる。

図 版

図版 1 東武庫遺跡



1. 這景

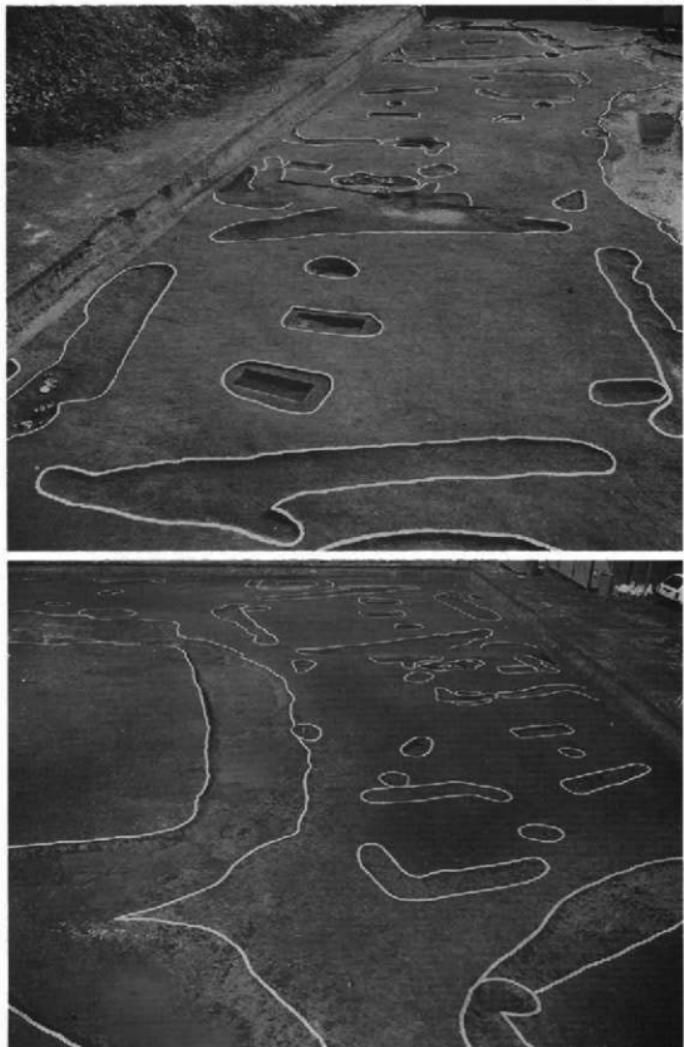


1. 全景(北から)

図版3 I区

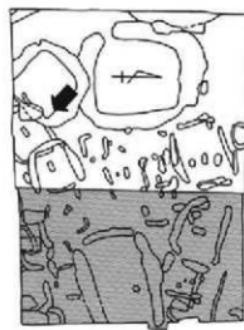


1. 全景(南から) 2. 全景(北から)

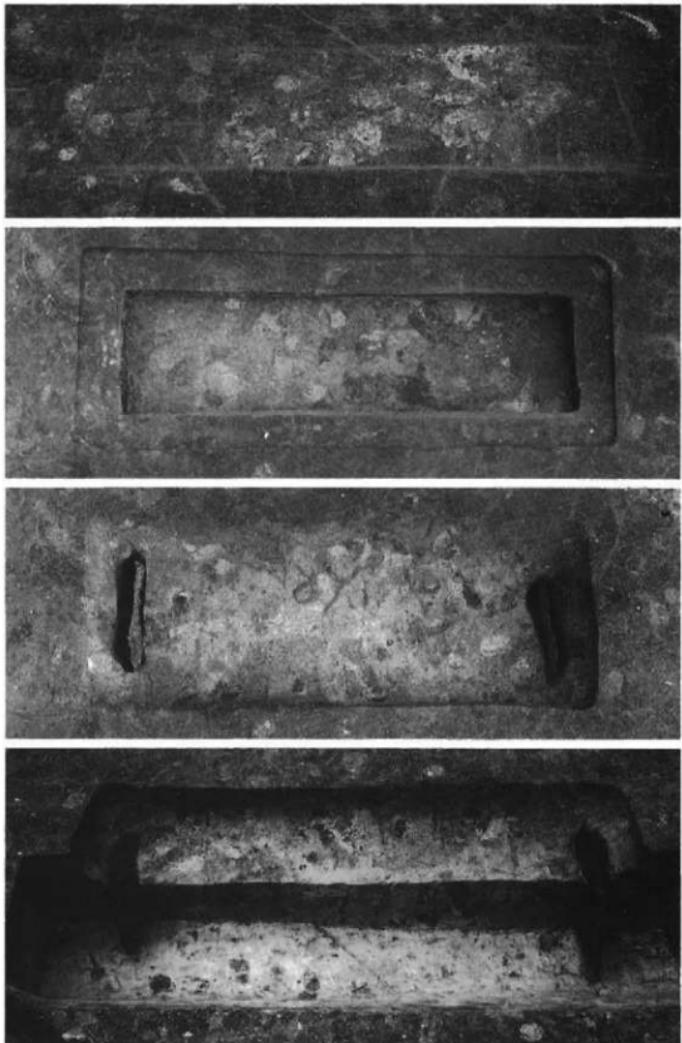


1. 全景(北から) 2. 全景(南西から)

図版 5 1号墓



1. 全景（北西から） 2. 周溝内土器出土状況

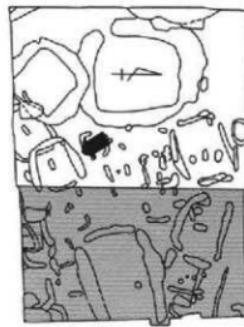


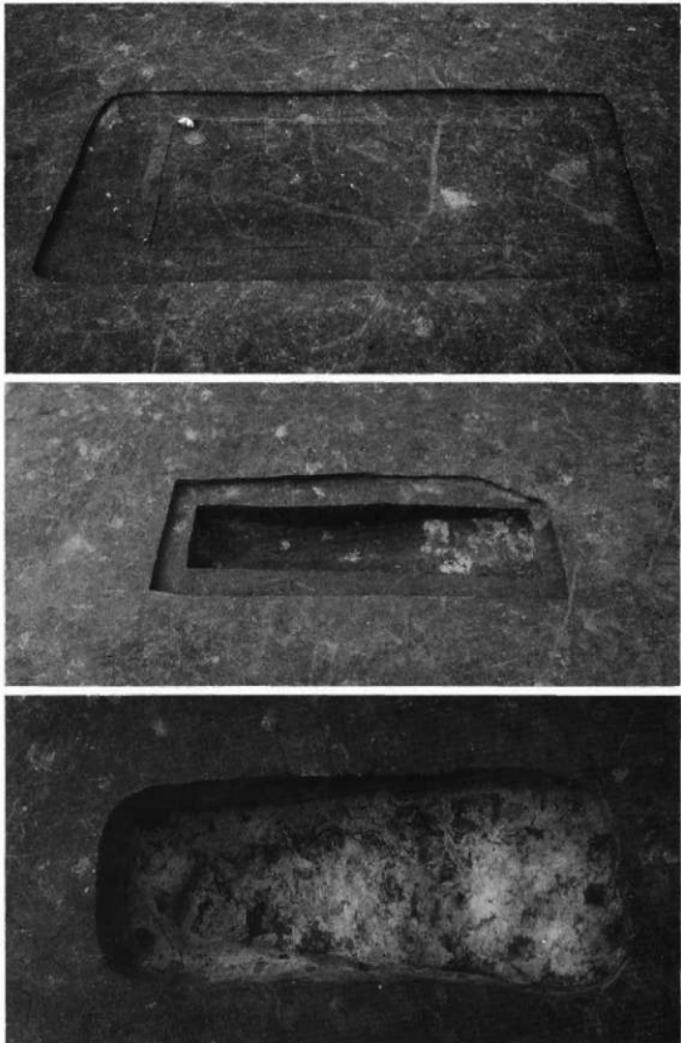
1. 主体部 罩跡状況 2. 主体部 棺核出状況 3. 主体部 小口板 4. 主体部 小口穴断面

図版7 2号墓



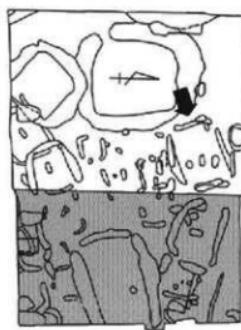
1. 全景（北から） 2. 土壙1土器出土状況



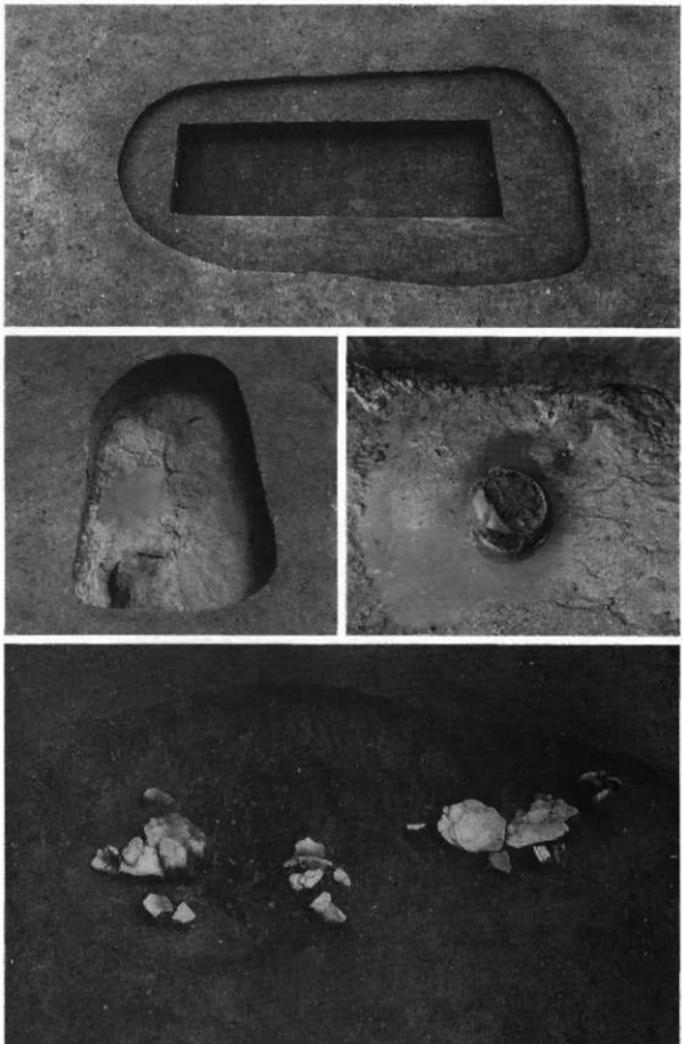


1. 主体部確認状況 2. 主体部 棺板突出状況 3. 主体部 墓壙検出状況

图版9 4号墓

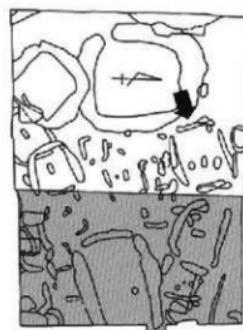


1. 全景（西から） 2. 2号主体部（西から）

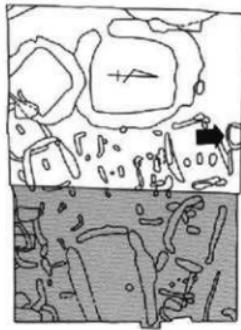


1. 1号主体部（北から） 2. 1号主体部（西から） 3. 1号主体部土器出土状況
4. 東周溝内土器出土状況

図版11 3号墓

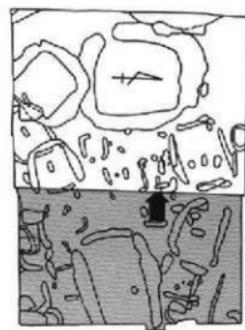


1. 全景（南西から） 2. 北側溝断面（東から）

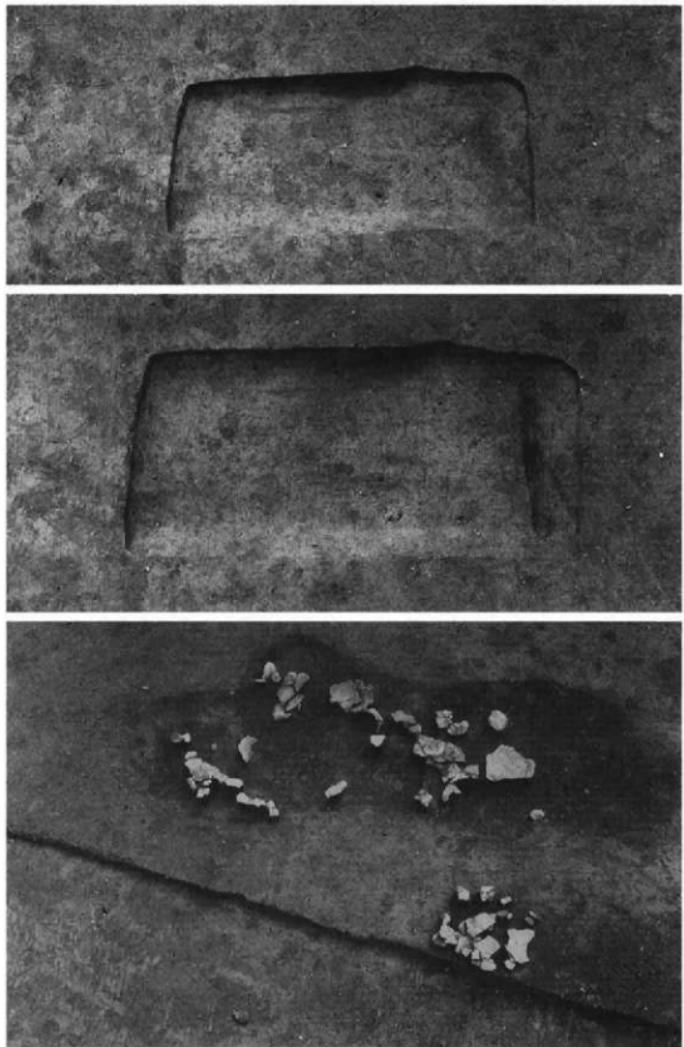


1. 全景（南から） 2. 主体部（南から）

図版13 6号墓

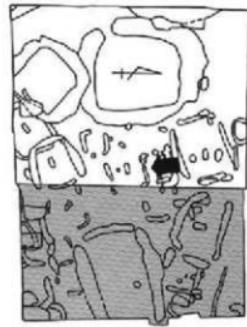
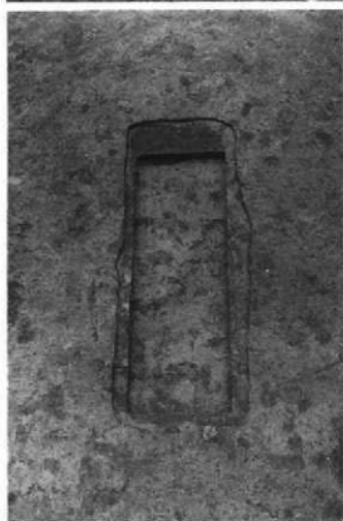
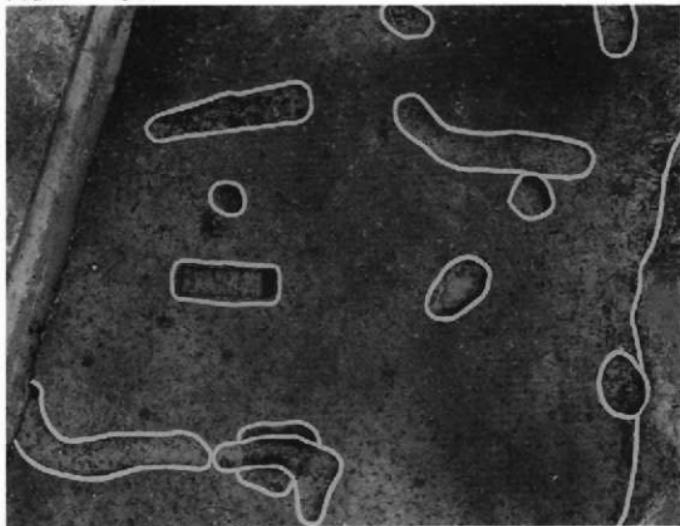


1. 全景(東から) 3. 主体部(東から)

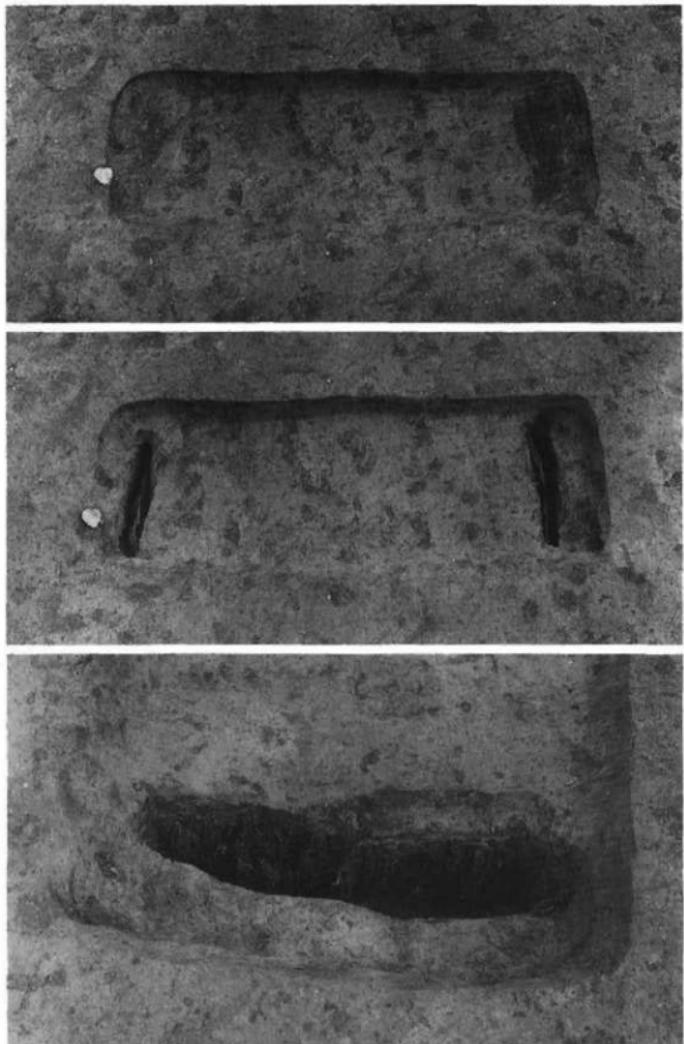


1. 主体部（北から） 2. 主体部 小口穴 3. 土壙1（南から）

圖版15 7号墓

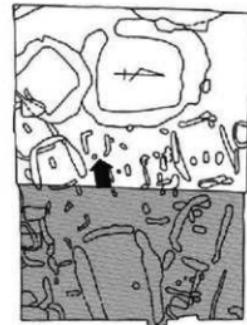


1. 全景（北から） 2. 主体部（東から）

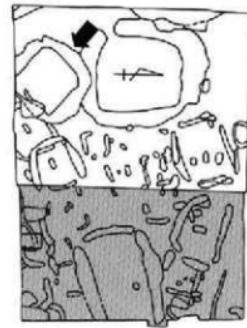


1. 主体部 小口穴確認状況 2. 主体部 小口穴検出状況 3. 主体部 小口穴

图版17号 8号墓

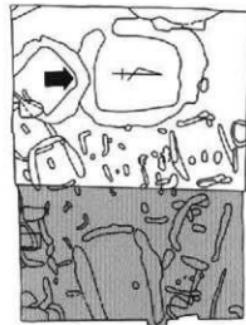


1. 全景（東から）

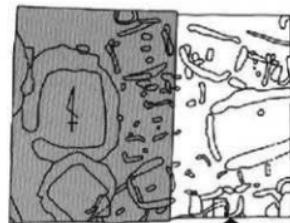


1. 全景（北西から）

図版19 10号墓



1. 全景(南から)



1. 全景(南から)

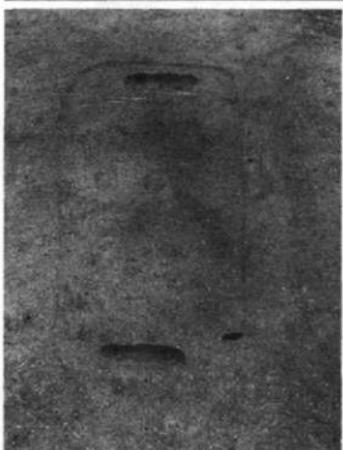
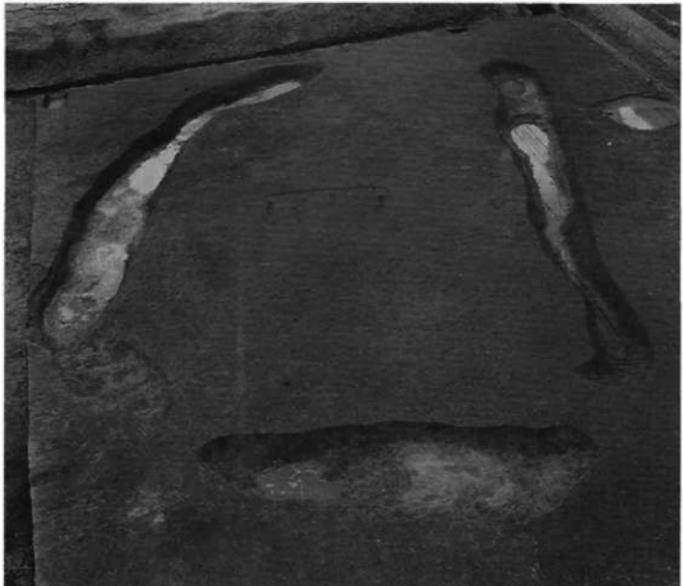


1. 全景（南から） 2. 全景（東から）

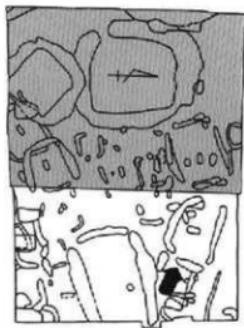


1. 全景（北東から） 2. 全景（北西から）

図版23 11号墓



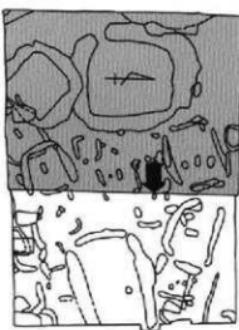
1. 全景（東から） 2. 主体部（南から）





1. 南周溝内土器出土状況 2. 南周溝断面（北から） 3. 東周溝断面（東から）

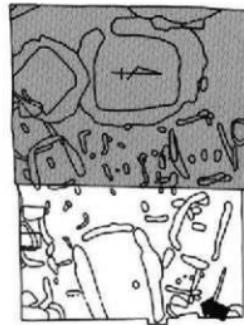
図版25 12号墓



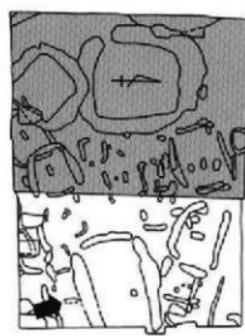
1. 全景（西から） 2. 南周溝断面



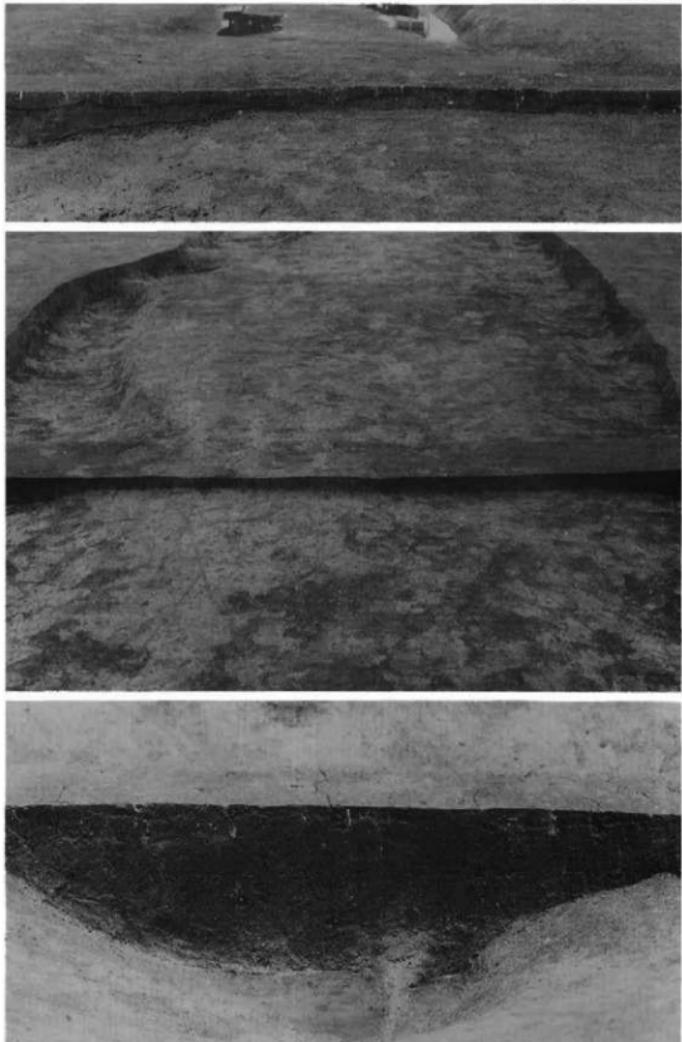
1. 全景（北から） 2. 土壇 1（北から）



图版27 15号墓



1. 全景（南東から） 2. 北周溝内土器出土状況

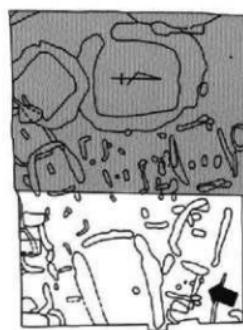


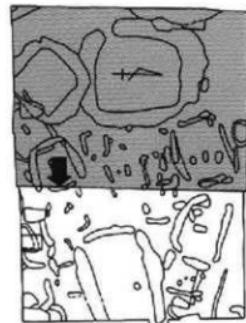
1. 北周溝断面（東から） 2. 南周溝断面（東から） 3. 西周溝断面（南から）

図版29 14号墓



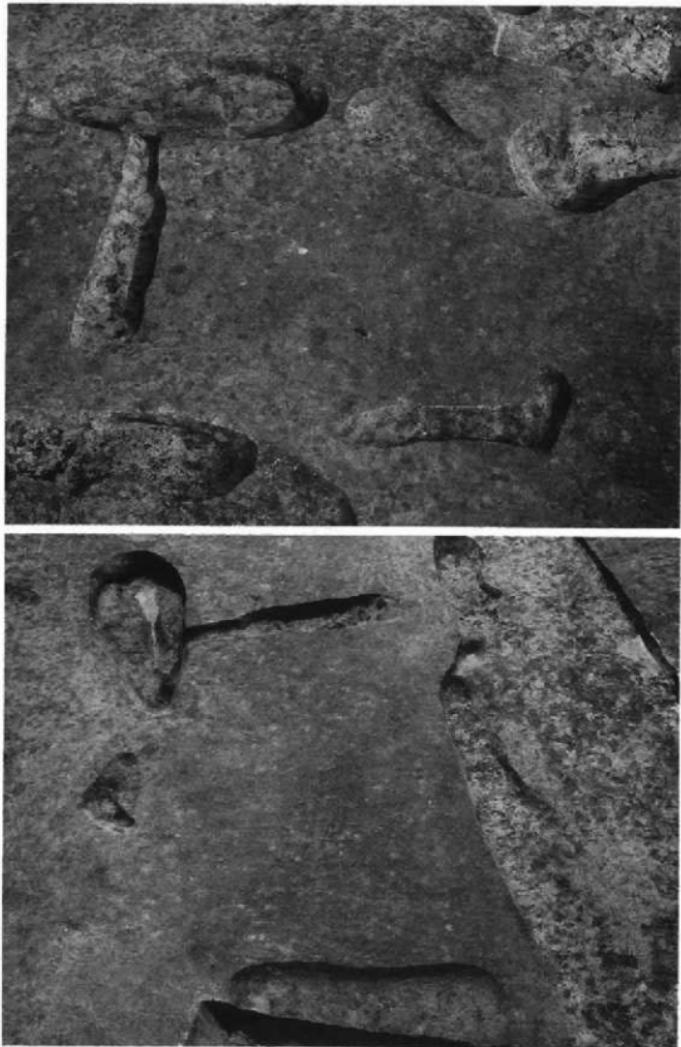
1. 全景（北から） 2. 土壌 1（北西から）





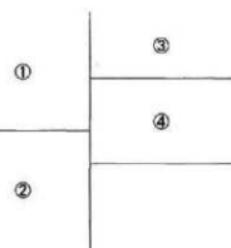
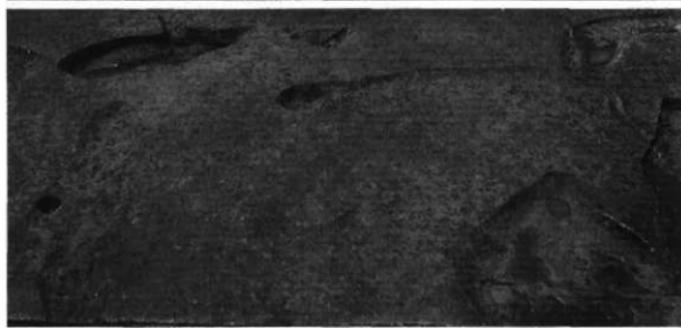
1. 全景（西から）

図版31 17号墓・18号墓

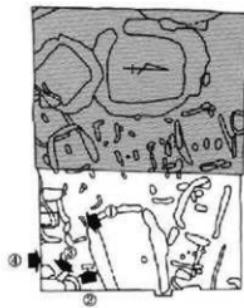


1. 17号墓全景〔北から〕 2. 18号墓全景〔東から〕

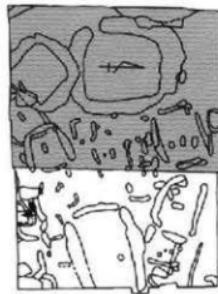
図版32 19号墓・20号墓



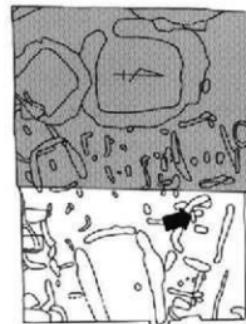
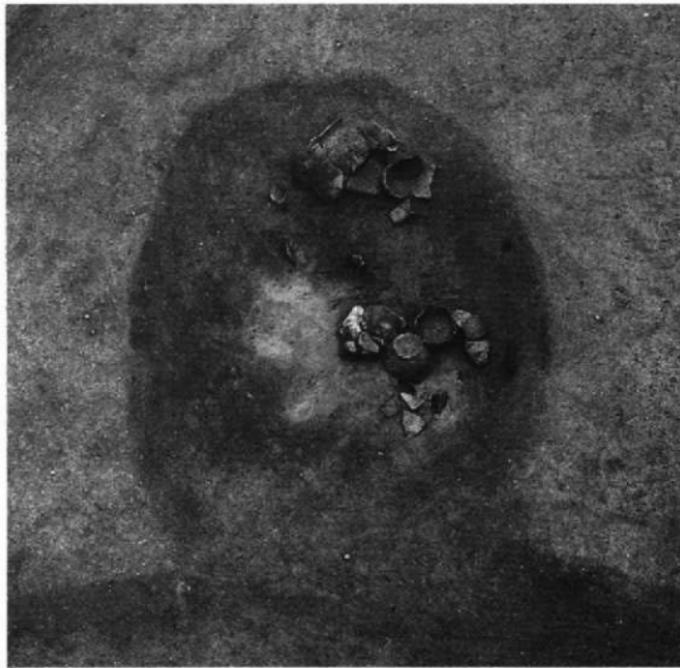
1. 19号墓全景（北西から） 2. 20号墓全景（南から）



図版33 21号墓・22号墓

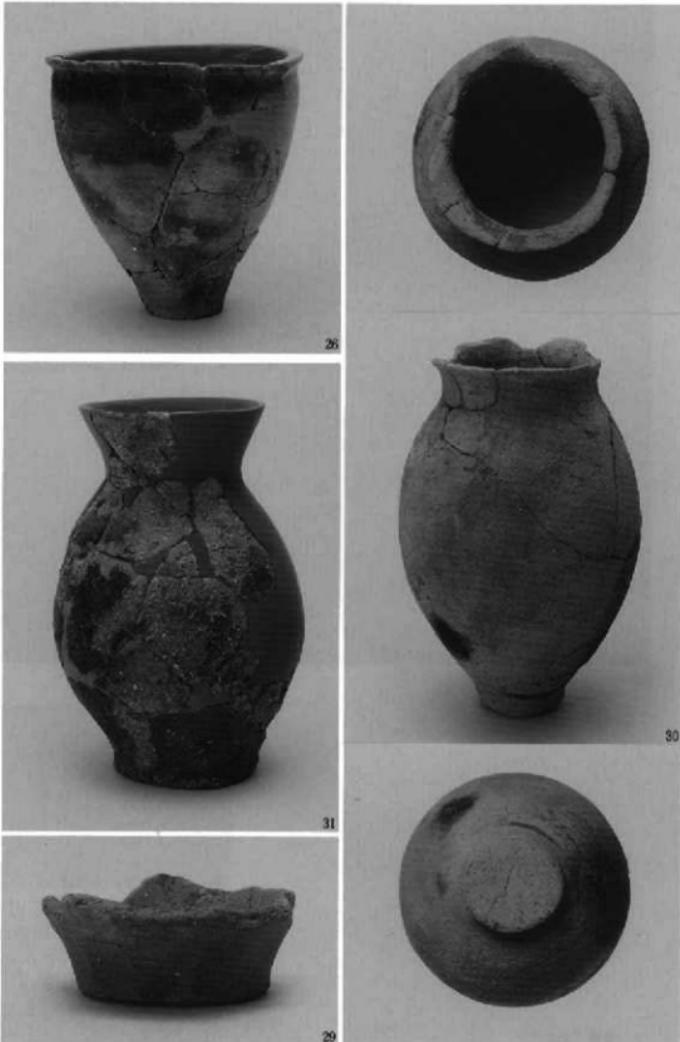


1. 21号墓全景（北西から） 2. 22号墓全景（西から）

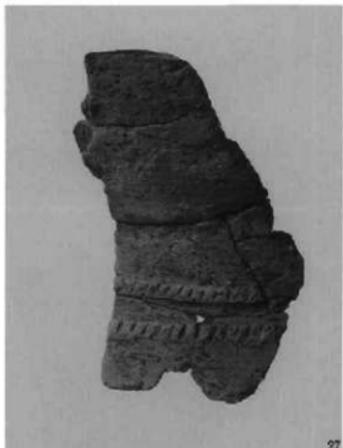


1. 全景（南から）

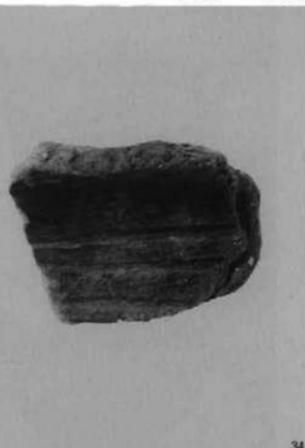
圖版35 遺物



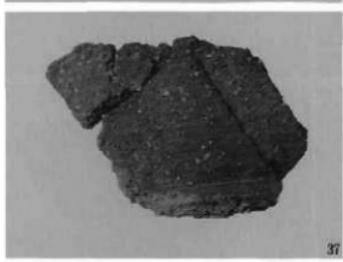
1号墓出土遺物（26） 2号墓出土遺物（29~31）



27



34



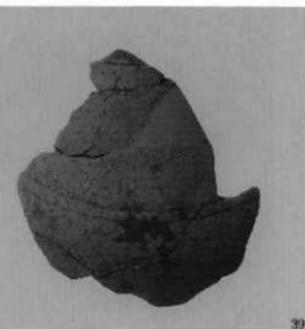
37



38



44



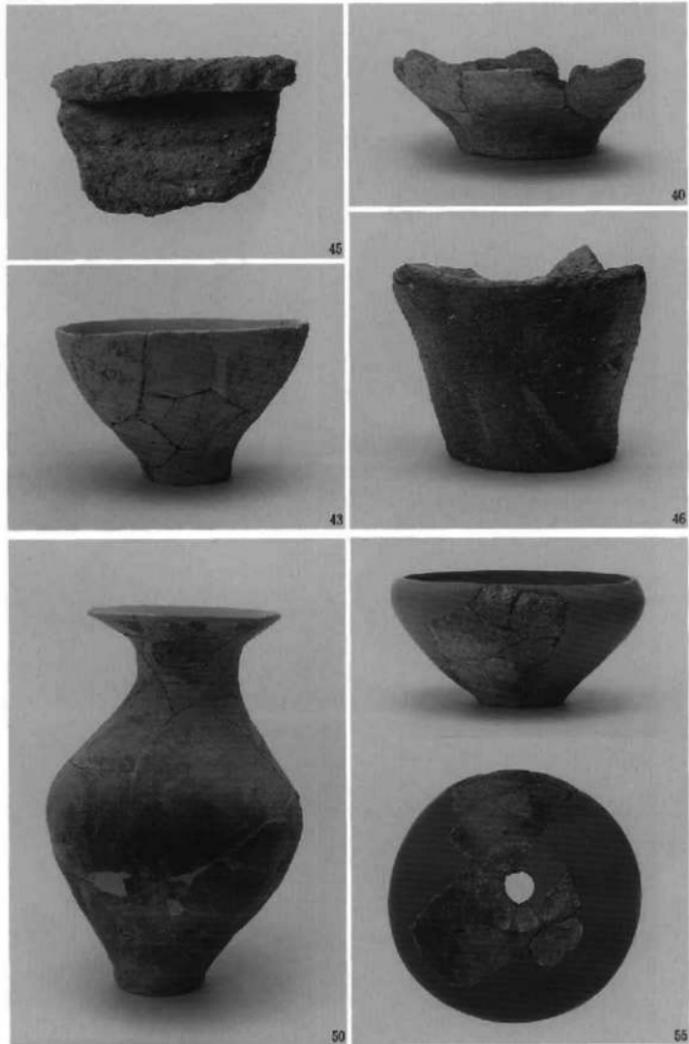
39

2号墓出土遺物 (27・34)

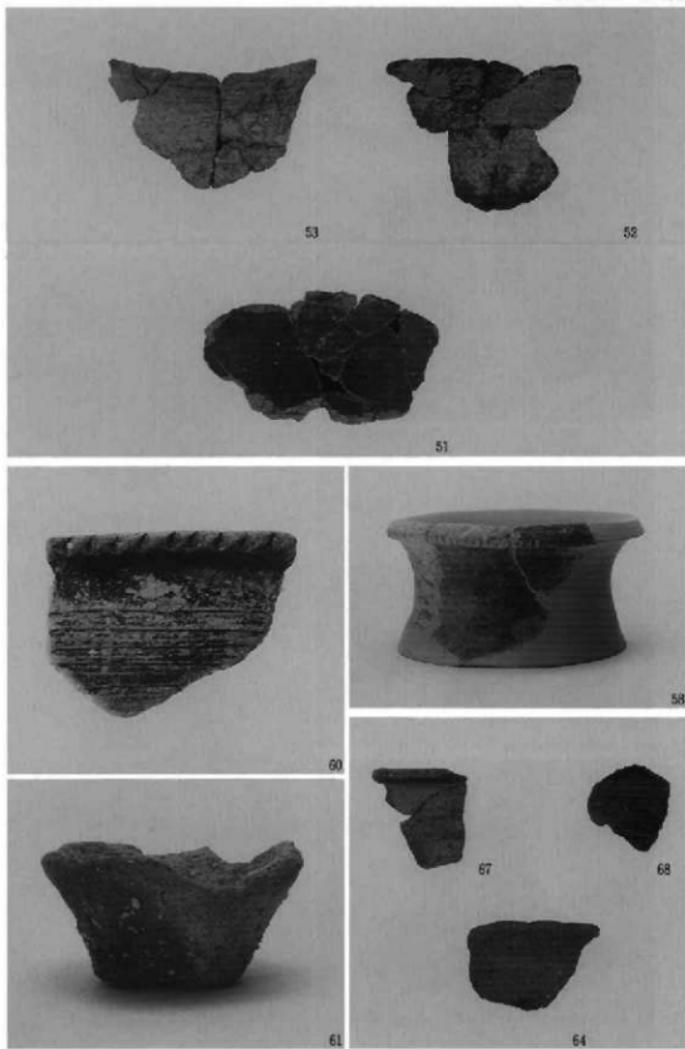
3号墓出土遺物 (37・38)

4号墓出土遺物 (39・44)

圖版37 遺物

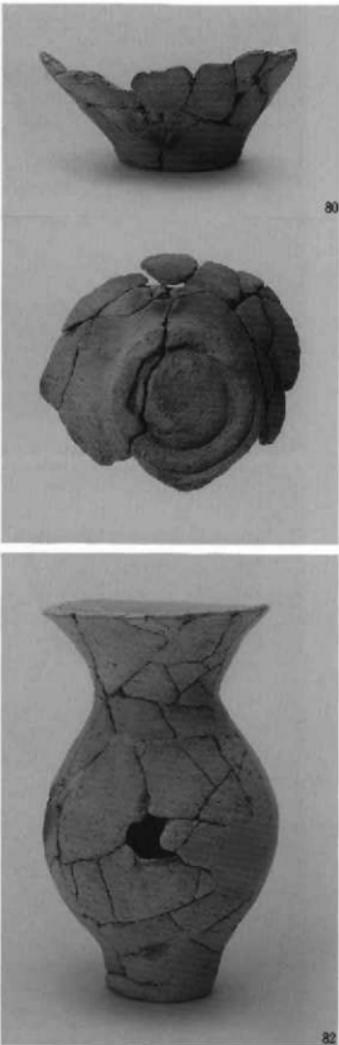
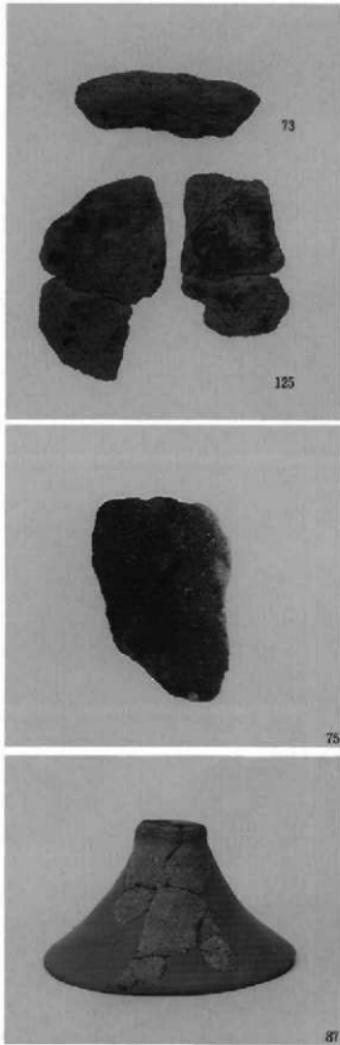


4号墓出土遺物（40・43・45・46） 5号墓出土遺物（50） 6号墓出土遺物（55）



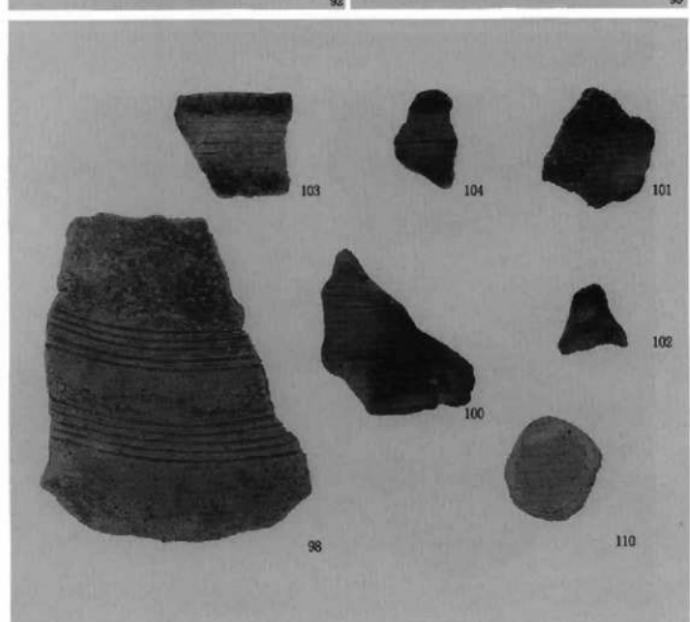
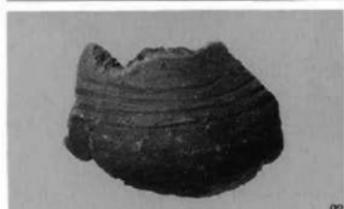
6号墓出土遺物 (51~53) 9号墓出土遺物 (58・60・61) 10号墓出土遺物 (64・67・68)

图版39 遗物



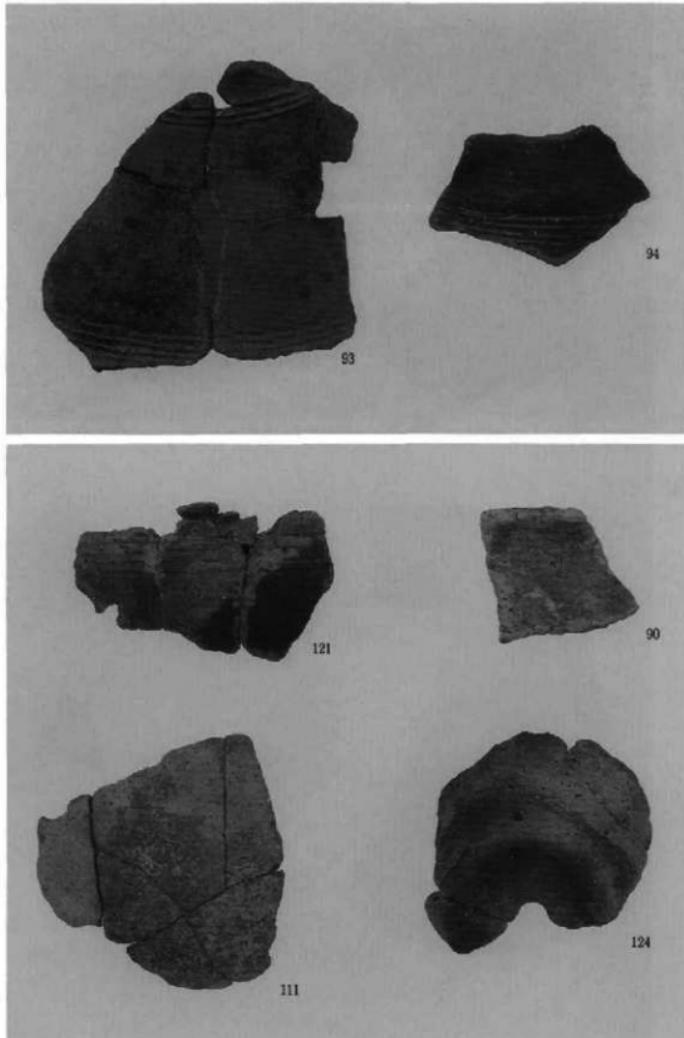
11号墓出土遗物（73·76·125） 13号墓出土遗物（80） 15号墓出土遗物（82·87）

図版40 遺物



16号墓出土遺物（88） 21号墓出土遺物（92） SD 02出土遺物（98～104・110）

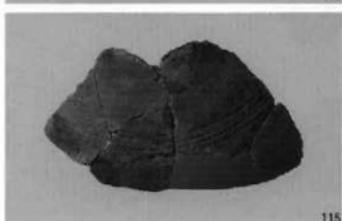
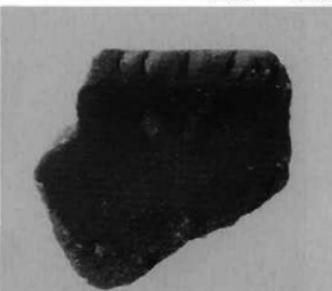
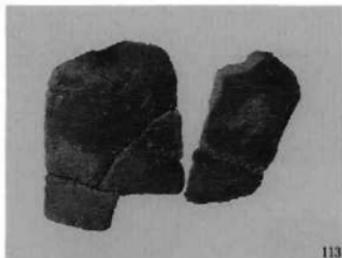
圖版41 遺物



22号墓出土遺物（93・94） 17号墓出土遺物（90） SK04出土遺物（121・124）

SD 03出土遺物（111）

図版42 遺物

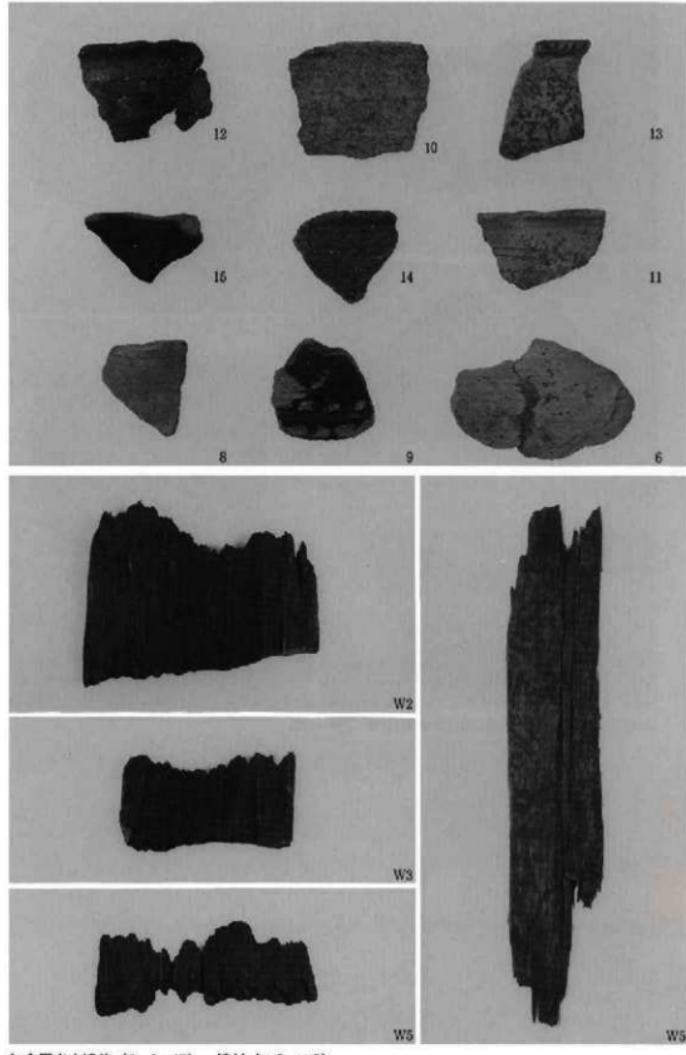


118

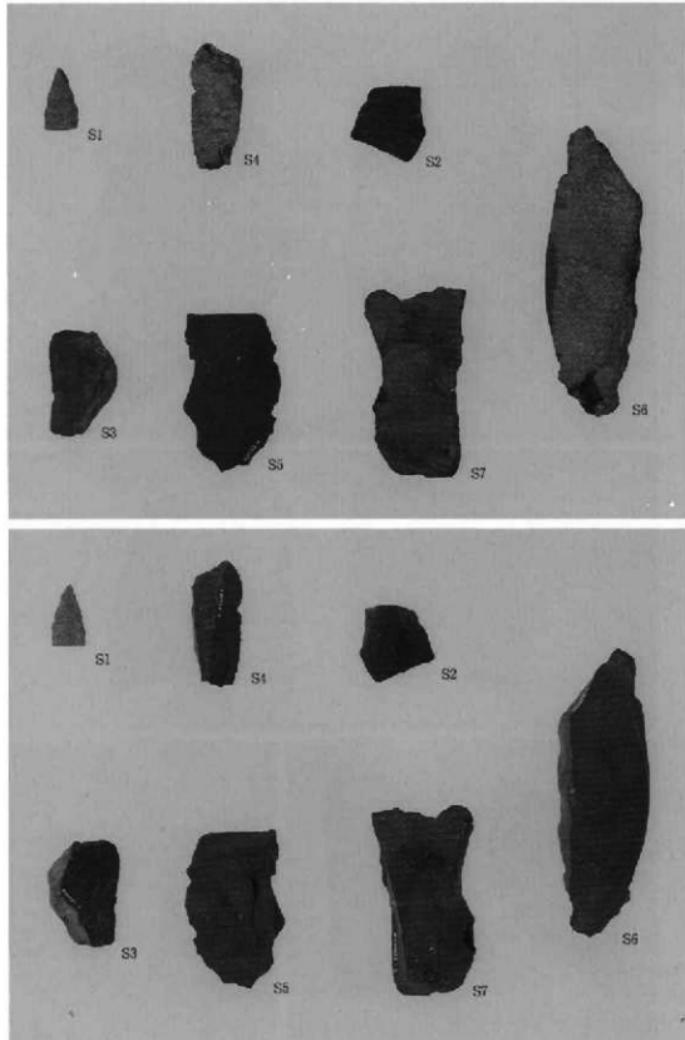


SK02出土遺物 (113) SK03出土遺物 (115・118~120)

図版43 遺物

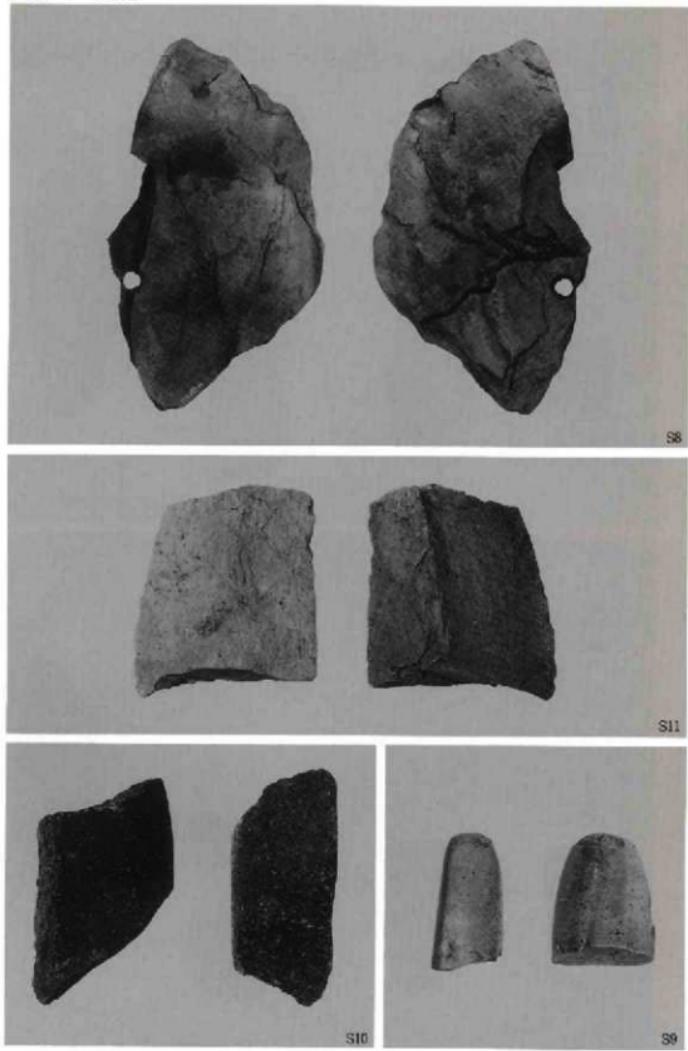


包含層出土遺物（6・8～15） 棺材（W2～W5）



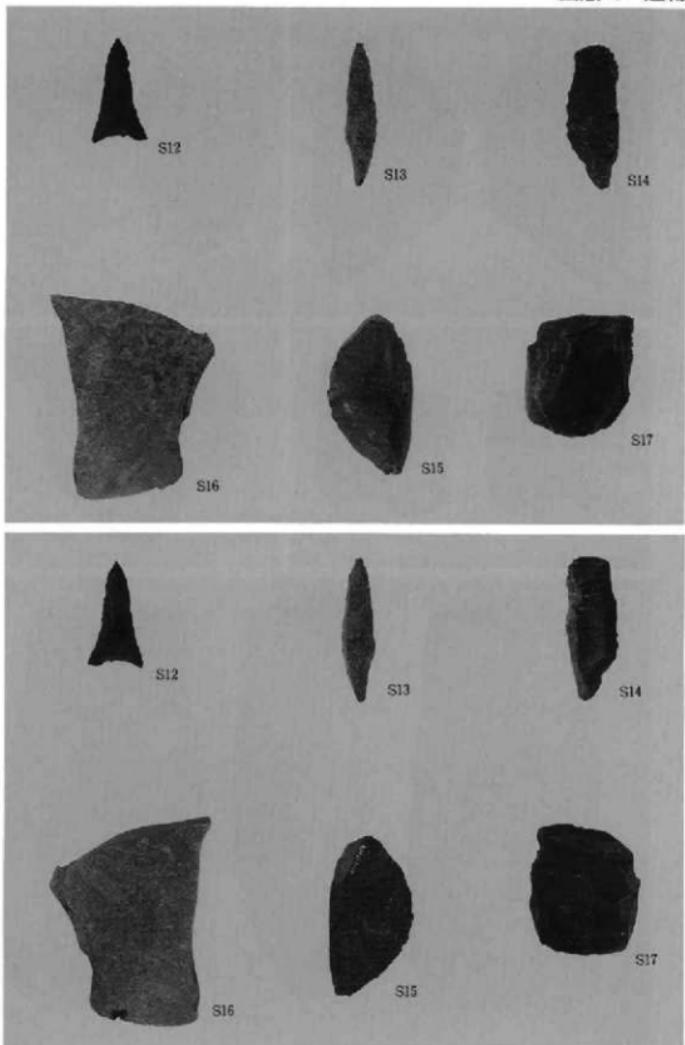
石器(1)

图版45 遗物



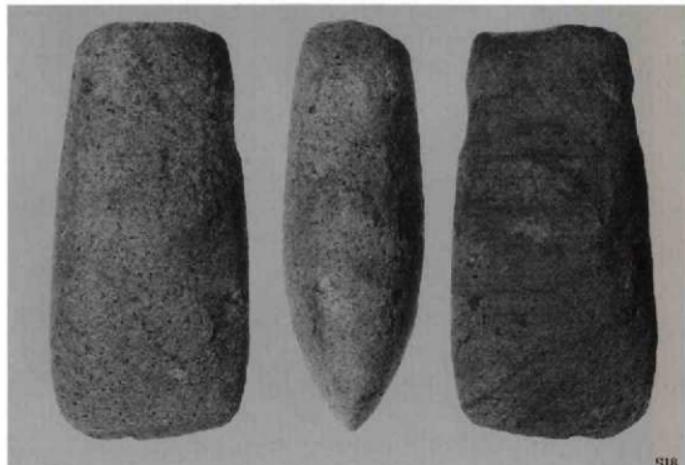
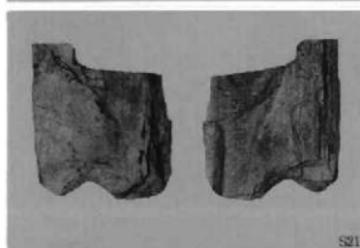
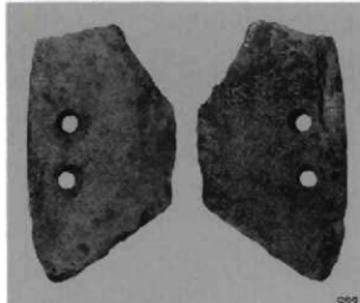
石器(2)

図版46 遺物



石器(3)

圖版47 遺物



石器(4)

兵庫県文化財調査報告 第160冊

尼崎市

東武庫遺跡

尼崎武庫元町团地建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社 精文舎



